

夜明け前

第一部上

島崎藤村



序の章

一

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨そばづたいに行く崖がけの道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道かいどうはこの深い森林地帯を貫いていた。

東ざかいの桜沢から、西の十曲峠じつきよくとうげまで、木曾十一宿しゆくはこの街道に添うて、二十二里余にわたる長い谿谷けいこくの間に散在していた。道路の位置も幾たびか改まったもので、古道はいつのまにか深い山間やまあいに埋うずもれた。名高い棧かけはしも、蔦つたのかずらを頼みにしたような危あぶない場処ではなくなつて、徳川時代の末にはすでに渡ること

のできる橋であつた。新規に新規にとできた道はだんだん谷の
下の方の位置へと降つて来た。道の狭いところには、木を伐つ
て並べ、藤ふじづるでからめ、それで街道の狭いのを補つた。長い
間にこの木曾路に起こつて来た変化は、いくらかずつでも嶮けんそ岨
な山坂の多いところを歩きよくした。そのかわり、大雨ごとに
やつて来る河水の氾濫はんらんが旅行を困難にする。そのたびに旅人は
最もよ寄り最寄りの宿場に逗留とらうゆうして、道路の開通を待つこともめず
らしくない。

この街道の変遷は幾世紀にわたる封建時代の発達をも、その制
度組織の用心深さをも語っていた。鉄砲を改め女を改めるほど
旅行者の取り締まりを嚴重にした時代に、これほどよい要害の地
勢もないからである。この谿谷けいこくの最も深いところには木曾福島きそふくしま
の関所も隠れていた。

東山道とうざんどうとも言い、木曾街道六十九次つぎとも言った駅路の一部がここだ。この道は東は板橋いたばしを経て江戸に続き、西は天津おおつを経て京都にまで続いて行っている。東海道方面を回らないほどの旅人は、否いやでも応おうでもこの道を踏まねばならぬ。一里ごとに塚つかを築き、榎えのきを植えて、里程を知るたよりとした昔は、旅人はいずれも道中記をふところにして、宿場から宿場へとかかりながら、この街道筋を往来した。

馬籠まじめは木曾十一宿の一つで、この長い谿谷の尽きたところにある。西よりする木曾路の最初の入り口にあたる。そこは美濃境みのざかいにも近い。美濃方面から十曲峠に添うて、曲がりくねった山坂をよじ登って来るものは、高い峠の上の位置にこの宿しゆくを見つけ。街道の両側には一段ずつ石垣いしがきを築いてその上に民家を建てたようなところで、風雪をしのぐための石を載せた板屋根がそ

の左右に並んでいる。宿場らしい高札こうざつの立つところを中心に、
本陣ほんじん、問屋といや、年寄としより、伝馬役てんまやく、定歩行役じようほこうやく、水役みずやく、七里役しちりやく（飛脚）な
どより成る百軒ばかりの家々が主な部分おもで、まだそのほかに宿
内の控えとなつてゐる小名こなの家数を加えると六十軒ばかりの民
家を数える。荒町あらまち、みつや、横手よこて、中のかや、岩田いわた、峠とうげなどの
部落がそれだ。その宿はずれでは狸たぬきの膏藥こうやくを売る。名物栗くりこ
わめしの看板を軒に掛けて、往來の客を待つ御休処おやすみどころもある。山
の中とは言いながら、広い空は恵那山えなさんのふもとの方にひらけて、
美濃の平野を望むことのできるような位置にもある。なんとな
く西の空気も通かよつて来るようなところだ。
本陣の当主吉左衛門きちざえもんと、年寄役の金兵衛きんべえとはこの村に生まれ
た。吉左衛門は青山の家をつぎ、金兵衛は、小竹の家をついだ。
この人たちが宿役人として、駅路一切の世話に慣れたころは、

二人ともすでに五十の坂を越していた。吉左衛門五十五歳、金兵衛の方は五十七歳にもなった。これは当時としてめずらしいことでもない。吉左衛門の父にあたる先代の半六などは六十六歳まで宿役人を勤めた。それから家督を譲つて、ようやく隠居したくらいの人だ。吉左衛門にはすでに半蔵はんぞうという跡継ぎがある。しかし家督を譲つて隠居しようなどとは考えていない。福島の役所からでもその沙汰さたがあつて、いよいよ引退の時期が来るまでは、まだまだ勤められるだけ勤めようとしている。金兵衛とても、この人に負けてはいなかつた。

二

山里へは春の来ることもおそい。毎年旧暦の三月に、恵え那山な

脈の雪も溶けはじめるところになると、にわかには人の往来も多い。
 なかつがわ
 中津川の商人は奥筋おくすじ（三留野みどの、上松あげまつ、福島から奈良井ならい辺までを
 さす）への諸勘定かんじようを兼ねて、ぽつぽつ隣の国から登つて来る。
 いな
 伊那の谷の方からは飯田いいたの在のものが祭礼の衣裳いしやうなどを借りに
 やつて来る。太神楽だいかぐらもはいり込む。伊勢いせへ、津島へ、金毘羅こんびらへ、
 あるいは善光寺への参詣さんけいもそのころから始まつて、それらの団
 体をつくつて通る旅人の群れの動きがこの街道に活気をそそぎ
 入れる。

西の領地よりする参観さんかん交代こうたいの大小の諸大名、日光への例幣使れいへいし、
 大坂おさかの奉行ぶぎようや御加番衆おかばんしゆうなどはここを通行した。吉左衛門きちざゑもんなり金
 兵衛へいゑなりは他の宿役人を誘い合わせ、羽織はおりに無刀、扇子せんすをさし
 て、西の宿境しゆくぎさかいまでそれらの一行をうやうやしく出迎える。そし
 て東は陣場じんばか、峠の上まで見送る。宿から宿への継立つぎたてと言え

ば、人足にんそくや馬の世話から荷物の扱いまで、一通行あるごとに宿役人としての心づかいもかなり多い。多人数の宿泊、もしくはお小休こやすみの用意も忘れてはならなかつた。水戸みとの御茶壺おちやつぼ、公儀の御鷹方おたかかたをも、こんなふうにして迎える。しかしそれらは普通の場合である。村方の財政や山林田地のことなぞに干渉されないうで済む通行である。福島勘定所の奉行を迎えるとか、木曾山一帯を支配する尾張藩おわりはんの材木方を迎えるとかいう日になると、ただの送り迎えや継立てだけではなかなか済まされなかつた。

多感な光景が街道にひらけることもある。文政九年の十二月に、黒川村の百姓が牢舎ろうや御免ということで、美濃境まで追放を命ぜられたことがある。二十二人の人数が宿籠しゆくかごで、朝の五つ時に馬籠まじめへ着いた。師走しわすももう年の暮れに近い冬の日だ。その時も、吉左衛門は金兵衛と一緒に雪の中を奔走して、村の二軒の

旅籠屋はたごやで昼ひるじたくをさせるから国境くにざかいへ見送るまでの世話をした。もつとも、福島からは四人の足軽あしがらが付き添って来たが、二十二人とともに残らず腰繩こしなわ手錠てじやうであつた。

五十余年の生涯しょうがいの中で、この吉左衛門きちざゑもんらが記憶に残る大通行おほごうじやうと言いえ、尾張藩主の遺骸いがいがこの街道を通つた時のことにとどめをさす。藩主は江戸で亡なくなつて、その領地にあたる木曾谷こしを輿こしで運ばれて行つた。福島ふくしまの代官、山村氏やまむらじから言いえ、木曾谷中の行政上の支配権だけをこの名古屋の大領主から託されてゐるわけだ。吉左衛門きちざゑもんらは二人ふたりの主人をいただいてゐることになるので、名古屋城の藩主を尾州びしゅうの殿と呼び、その配下にある山村氏を福島の旦那様だんなと呼んで、「殿様」と「旦那様」で区別くわくべつしてゐた。

「あれは天保十年てんぽうじゅうねんのことでした。全く、あの時の御通行は前代未聞ぜんだいみもん

でしたわい。」

この金兵衛の話が出るたびに、吉左衛門は日ごろから「本陣鼻」と言われるほど大きく肉厚にくあつな鼻の先へしわをよせる。そして、「また金兵衛さんの前代未聞とが出た」と言わなければかりに、年齢としの割合にはつやつやとした色の白い相手の顔をながめる。しかし金兵衛の言うとおりに、あの時の大通行は全く文字どおり前代未聞の事と言ってよかつた。同勢およそ千六百七十人ほどの人数がこの宿にあふれた。問屋の九太夫くだゆう、年寄役の儀助ぎすけ、同役の新七、同じく与次衛門よじえもん、これらの宿役人仲間から組頭くみがしらのものはおろか、ほとんど村じゅう総がかりで事に当たつた。木曾谷中から寄せた七百三十人の人足だけでは、まだそれでも手が足りなくて、千人あまりもの伊那いなの助郷すけごうが出たのもあの時だ。諸方から集めた馬の数は二百二十四匹にも上つた。吉左衛門の家

は村でも一番大きい本陣のことだから言うまでもないが、金兵衛すまいの住居にすら二人の御用人ごようじんのほかに上下合わせて八十人の人数を泊め、馬も二匹引き受けた。

木曾は谷の中が狭くて、田畑もすくない。限りのある米でこの多人数の通行をどうすることもできない。伊那の谷からの通路にあたる権兵衛ごんべえ街道の方には、馬の振る鈴音に調子を合わせるような馬子唄まごうたが起こつて、米をつけた馬匹ばひつの群れがこの木曾街道に続くのも、そういう時だ。

三

山の中の深さを思わせるようなものが、この村の周囲には数知れずあった。林には鹿しかも住んでいた。あの用心深い獣は村の

東南を流れる細い下坂川おりさかがわについて、よくそこへ水を飲みに降りて来た。

古い歴史のある御坂越みさかじえをも、ここから恵那山脈えなの方に望むことがができる。大宝たいほうの昔に初めて開かれた木曾路とは、実はその御坂を越えたものであるという。その御坂越から幾つかの谷を隔てた恵那山のすその方には、霧が原の高原もひらけていて、そこにはまた古代の牧場の跡が遠くかすかに光っている。

この山の中だ。時には荒くれた猪いのししが人家の並ぶ街道にまで飛び出す。塩沢やくしどうというところから出て来た猪は、宿しゆくはずれの陣場から薬師堂やくしどうの前を通り、それから村の舞台の方をあばれ回って、馬場へ突進したことがある。それ猪だと言って、皆々鉄砲などを持ち出して騒いだが、日暮れになってその行くえもわからなかつた。この勢いのいい獣に比べると、向山むこうやまから鹿の飛び出し

た時は、石屋の坂の方へ行き、七回りの藪やぶへはいった。おおぜいの村の人が集まって、とうとう一矢ひとやでその鹿を射とめた。ところが隣村の湯舟ゆづね沢の方から抗議が出て、しまいには口論にまであつたことがある。

「鹿よりも、けんかの方がよつぽどおもしろかつた。」

と吉左衛門は金兵衛に言つて見せて笑つた。何かというふたりと二人は村のことに引っぱり出されるが、そんなけんかは取り合わなかつた。

檜木ひのき、榎さわら、明檜あすひ、高野槇こうやまき、※ねずこ——これを木曾ぎじでは五木ごぼくという。

そういう樹木の生長する森林の方はことに山も深い。この地方には巢山すやま、留山とめやま、明山あきやまの区別があつて、巢山と留山とは絶対に村民の立ち入ることを許されない森林地帯であり、明山のみが自

由林とされていた。その明山でも、五木ばかりは許可なしに伐採することを禁じられていた。これは森林保護の精神より出たことは明らかで、木曾山を管理する尾張藩がそれほどこの地方から生まれて来る良い材木を重く視ていたのである。取り締まりはやかましい。すこしの怠りでもあると、木曾谷中三十三か村の庄屋は上松の陣屋へ呼び出される。吉左衛門の家は代々本陣庄屋問屋の三役を兼ねたから、そのたびに庄屋として、背伐りの厳禁を犯した村民のため言い開きをしなければならなかった。どうして檜木一本でもばかにならない。陣屋の役人の目には、どうかすると人間の生命よりも重かった。

「昔はこの木曾山の木一本伐ると、首一つなかつたものだぞ。」陣屋の役人の威し文句だ。

この役人が吟味のために村へはいり込むといううわさでも伝

わると、猪いのししや鹿しかどころの騒ぎでなかつた。あわてて不用の材木を焼き捨てるものがある。囲つて置いた檜板ひのきいたを他よそへ移すものがある。多分の木を盗んで置いて、板にへいだり、売りさばいたりした村の人などはことに狼狽ろうばいする。背伐せぎりの吟味と言えは、村じゆう家探やさがしの評判が立つほど嚴重をきわめたものだ。

目証めあかしの弥平やへいはもう長いこと村に滞在して、幕府時代の卑ひくい「おかつびき」の役目をつとめていた。弥平の案内で、福島 of 役所からの役人を迎えた日のことは、一生忘れられない出来事の一つとして、まだ吉左衛門の記憶には新しくてある。その吟味は本陣の家の門内で行なわれた。のみならず、そんなにたくさん怪我けがにん人を出したことも、村の歴史としてかつて聞かなかつたことだ。前庭の上段には、福島から来た役人の年寄、用人、書役かきやくなどが居並んで、そのわきには足軽が四人も控えた。それから

村じゅうのものが呼び出された。その科とがによつて腰繩こしなわ手錠で宿役人の中へ預けられることになつた。もつとも、老年で七十歳以上のものは手錠を免ぜられ、すでに死亡したものは「お叱りしか」というだけにとどめて特別な憐憫れんぴんを加えられた。

この光景をのぞき見ようとして、庭のすみの梨なしの木のかげに隠れていたものもある。その中に吉左衛門せがれが悴せがれの半蔵もいる。当時十八歳の半蔵は、目を据えて、役人のすることや、腰繩につながれた村の人たちのさまを見ている。それに吉左衛門は気がついて、

「さあ、行つた、行つた——ここはお前たちなぞの立つてるところじゃない。」

としかつた。

六十一人も村民が宿役人へ預けられることになつたのも、

その時だ。その中の十人は金兵衛が預かつた。馬籠まじめの宿役人や組頭くみがしらとしてこれが見ていられるものでもない。福島ふくしまの役人たちが湯舟沢村の方へ引き揚げて行つた後で、「お叱り」のものの赦免せられるようにと、不幸な村民のために一同お日待ひまちをつとめた。その時のお札は一枚ずつ村じゅうへ配当した。

この出来事があつてから二十日はつかばかり過ぎに、「お叱り」のものの残らず手錠を免ぜられる日がようやく来た。福島からは三人の役人が出張してそれを伝えた。

手錠を解かれた小前こまえのもの一人ひとりは、役人の前に進み出て、おずおずとした調子で言つた。

「畏おそれながら申し上げます。木曾は御承知のとおりな山の中でございます。こんな田畑もすくないような土地でございます。お役人様の前ですが、山の林にでもすがるよりほかに、わたく

しどもの立つ瀬はございません。」

四

新茶屋に、馬籠の宿の一番西のはずれのところに、その路傍みちばたに芭蕉ばしやうの句塚くづかの建てられたころは、なんと云つても徳川の代よはまだ平和であつた。

木曾路の入り口に新しい名所を一つ造る、信濃しなのと美濃みのの国境くにぎかいにあたる一里塚つづかに近い位置をえらんで街道を往来する旅人の目にもよくつくような緩慢なだらかな丘のすそおきなづかに翁塚おきなづかを建てる、山石つづじや躑躅つづじや蘭らんなどを運んで行って周圍に休息の思いを与える、土を盛りあげた塚の上に翁の句碑を置く——その楽しい考えが、日ごろ俳諧はいかいなぞに遊ぶと聞いたこともない金兵衛の胸に浮かんだとい

うことは、それだけでも吉左衛門を驚かした。そういう吉左衛門はいくらか風雅の道に嗜みたしなもあつて、本陣や庄屋の仕事のたわら、美濃派の俳諧の流れをくんだ句作にふけることもあつたからで。

あれほど山里に住む心地しこころもちを引き出されたことも、吉左衛門らにはめずらしかった。金兵衛はまた石屋に渡した仕事もほぼできたと言つて、その都度つど句碑の工事を見に吉左衛門を誘つた。二人とも山家風やまがふうな軽袵かるさん（地方により、もんぺいというもの）をはいて出かけたものだ。

「親父おやじも俳諧は好きでした。自分の生きているうちに翁塚の一つも建てて置きたいと、口癖のようにそう言つていました。まあ、あの親父の供養くようにと思つて、わたしもこんなことを思い立ちましたよ。」

そう言つて見せる金兵衛の案内で、吉左衛門も工作された石のそばに寄つて見た。碑の表面には左の文字が読まれた。

送られつ送りつ果は木曾の穠

はせを

「これは達者たつしやに書いてある。」

「でも、この秋という字がわたしはすこし氣に入らん。禾のぎへんがくずして書いてあつて、それにつくりが龜かめでしょう。」

「こういう書き方もありますサ。」

「どうもこれでは木曾の蠅はえとしか読めない。」

こんな話の出たのも、一昔前ひとむかしまえだ。

あれは天保十四年にあたる。いわゆる天保の改革の頃で、世の中建て直しということがしきりに触れ出される。村方一切の

諸帳簿の取り調べが始まる。福島役所からは公役、普請役が上つて来る。尾張藩の寺社奉行、または材木方の通行も続く。馬籠の荒町あらまちにある村社の鳥居とりいのために檜木ひのきを背伐せぎりしたと言つて、その始末書を取られるような細かい干涉がやつて来る。村民の使用する煙草たばこ入れ、紙入れから、女のかんざしまで、およそ銀という銀を用いた類たぐいのものは、すべて引き上げられ、封印をつけられ、目方まで改められて、庄屋しょうや預けということになる。それほど政治はこまかくなつて、句碑一つもうっかり建てられないような時世ではあつたが、まだまだそれでも社会にゆとりがあつた。

翁塚の供養はその年の四月のはじめに行なわれた。あいにくと曇つた日で、八やつ半時はんどきより雨も降り出した。招きを受けた客は、おもに美濃の連中で、手土産てみやげも田舎いなからしく、扇子せんすに羊羹ようかんを

添えて来るもの、生椎茸なまじいたけをさげて来るもの、先代の好きな菓子
を仏前へと言つてわざわざ玉あられ一箱用意して来るもの、そ
れらの人たちが金兵衛方へ集まつて見た時は、国も二つ、言葉
の訛りなまもまた二つに入れまじつた。その中には、峠一つ降りた
ところに住む隣宿落合おちあいの宗匠、崇佐坊すさぼうも招かれて来た。この人
の世話で、美濃派の俳席らしい支考しこうの『三頼さんちようの図』なぞの壁に
かけられたところで、やがて連中の付合つけあいがあつた。

主人役の金兵衛は、自分で五十韻、ないし百韻の仲間入りは
できないまでも、

「これで、さぞ親父おやしもよろこびましようよ。」

と言つて、弁当に酒さかななど重詰じゆうづめにして出し、招いた人た
ちの間を斡旋あつせんした。

その日は新たにできた塚のもとに一同集まつて、そこで吟声

供養を済ますはずであつた。ところが、記念の一卷を巻き終わるのに日暮れ方までかかつて、吟声は金兵衛の宅で済ました。供養の式だけを新茶屋の方で行なつた。

むかしかたぎ昔氣質むかしかたぎの金兵衛は亡父の形見かたみだと言つて、その日の宗匠すさぼう崇佐坊ちやじまへ茶縞の綿入れ羽織などを贈るために、わざわざ自分で落合まで出かけて行く人である。

吉左衛門は金兵衛に言つた。

「やつぱり君はわたしのよい友だちだ。」

五

暑い夏が来た。旧暦五月の日のあたたつた街道を踏んで、伊那いなの方面まで繭買いにと出かける中津川の商人も通る。その草い

きれのするあつい空気の中で、上り下りの諸大名の通行もある。

月の末には毎年福島の方に立つ毛付けけづ（馬市）も近づき、各村

の駒改めこまあらたということも新たに開始された。当時幕府に勢力のあ

る彦根ひこねの藩主（井伊掃部頭いいかもんのかみ）も、久しぶりの帰国と見え、須原宿すはらじゆく

泊まり、妻籠宿つまごしゆくちゆうじき昼食、馬籠はお小休みこやすみで、木曾路を通った。

六月にはいつて見ると、うち続いた快晴で、日に増し照りも強く、村じゅうで雨乞いあまごでも始めなければならぬほどの激しい暑気になった。荒町の部落ではすでにそれを始めた。

ちようど、峠の上の方から馬をひいて街道を降りて来る村のこまえ小前こまえのものがあつた。福島ふくしまの馬市からの戻りもどと見えて、青毛の親馬おやうまのほかに、当歳らしい一匹の子馬をもそのあとに連れてくる。気の短い問屋くたゆうの九太夫くたゆうがそれを見つけて、どなつた。

「おい、どこへ行っていたんだい。」

「馬買いよなし。」

「この早りを知らんのか。お前の留守に、田圃は乾いてしまふ。荒町あたりじゃ梵天山へ登つて、雨乞いを始めている。氏神さまへ行つてごらん、お千度参りの騒ぎだ。」

「そう言われると、一言もない。」

「さあ、このお天気続きでは、伊勢木を出さずに済むまいぞ。」
伊勢木とは、伊勢太神宮へ祈願をこめるための神木をさす。こうした深い山の中に古くから行なわれる雨乞いの習慣である。よくよくの年でなければこの伊勢木を引き出すということもなかつた。

六月の六日、村民一同は鎌止めを申し合わせ、荒町にある氏神の境内に集まつた。本陣、問屋をはじめ、宿役人から組頭まで残らずそこに参集して、氏神境内の宮林から樅の木一本を元伐

りにする相談をした。

「一本じゃ、伊勢木も足りまい。」

と吉左衛門が言い出すと、金兵衛はすかさず答えた。

「や、そいつはわたしに寄付させてもらいましょ。ちようど

よい樅もみが一本、吾家うちの林にもありますから。」

元伐もとぎりにした二本の樅には注連しめなぞが掛けられて、その前で

禰宜ねぎの祈禱きとうがあつた。この清浄な神木が日暮れ方になつてよう

やく鳥居の前に引き出されると、左右に分かれた村民は声を揚

げ、太い綱でそれを引き合はじめた。

「よいよ。よいよ。」

互いに競い合う村の人たちの声は、荒町のはずれから馬籠の

中央にある高札場こうさつばあたりまで響けた。こうなると、庄屋として

の吉左衛門も骨が折れる。金兵衛は自分から進んで神木の樅を

寄付した関係もあり、夕飯のしたくもそこそこにまた馬籠の町内のものを引き連れて行つて見ると、伊勢木はずつと新茶屋の方まで荒町の百姓の力に引かれて行く。それを取り戻そうとして、三つみや表おもてから畳石たたみいしの辺で双方のみみ合いが始まる。とうとうその晩は伊勢木を荒町に止めて置いて、一同疲れて家に帰つたころは一番どり鶏が鳴いた。

「どうもことしは年回りがよくない。」

「そう言えば、正月のはじめから不思議なこともありましたよ。正月の三日の晩です、この山の東の方から光つたものが出て、それが西南にしみなみの方角へ飛んだといひます。見たものは皆驚いたそうですよ。馬籠まじめばかりじゃない、妻籠つまじめでも、山口でも、中津川

でも見たものがある。」

吉左衛門と金兵衛とは二人ふたりでこんな話をして、伊勢木の始末をするために、村民の集まるところへ急いだ。山里に住むものは、すこし変わったことでも見たり聞いたりすると、すぐそれを何かの暗示に結びつけた。

三日がかりで村じゅうのものが引き合つた伊勢木を落合川の方へ流したあとになつても、まだ御利生ごりしょうは見えなかつた。峠のものは熊野大権現くまのだいごんげんに、荒町あらかのものは愛宕山あたごやまに、いずれも百八ひゃちまの松明をとぼして、思い思いの祈願をこめる。宿内では二組に分かれてのお日待ひまちも始まる。雨乞いの祈祷きとう、それに水の拝借と言つて、村からは諏訪大社すわたいしやへ二人の代参までも送つた。神前へのおはつほりよう初穂料として金百疋びき、道中の路用として一人ひとりにつき一分二朱ぶしゆずつ、百六十軒の村じゅうのものが十九文ずつ出し合つてそれを

分担した。

東海道浦賀うらがの宿しゆく、久里くりが浜はまの沖合いに、黒船のおびただしく現われたといううわさが伝わって来たのも、村ではこの雨乞いの最中である。

問屋の九太夫がまずそれを彦根ひこねの早飛脚はやびぎやくから聞きつけて、吉左衛門にも告げ、金兵衛にも告げた。その黒船の現われたため、にわかには彦根の藩主は幕府から現場の詰役つめやくを命ぜられたとのこと。

嘉永六年六月十日の晩で、ちょうど諏訪大社からの二人の代参かえいが村をさして大急ぎに帰って来たころは、その乾かわききつた夜の空気の中を彦根の使者が西へ急いだ。江戸からの便たよりは中仙道なかせんどうを経て、この山の中へ届くまでに、早飛脚でも相応日数はかかる。黒船とか、唐人船とうじんぶねとかがおびただしくあの沖合いであらわ

れたということ以外に、くわしいことはだれにもわからない。ましてアメリカの水師提督ペリイが四艘そうの軍艦を率いて、初めて日本に到着したなぞとは、知りようもない。

「江戸は大変だということですよ。」

金兵衛はただそれだけを吉左衛門の耳にささやいた。

第一章

一

七月にはいつて、吉左衛門きちざえもんは木曾福島きそふくしまの用事を済まして出張先から引き取つて来た。その用向きは、前の年の秋に、福島ふくしまの勘定所から依頼のあつた仕法しほう立ての件で、馬籠まじめの宿しゆくとしては金百両の調達を引き請け、暮れに五十両の無尽むじんを取り立ててその金は福島の方へ回し、二番口も敷金にして、首尾よく無尽も終会になつたところで、都合全部の上納を終わつたことを届けて置いてあつた。今度、福島からその挨拶あいさつがあつたのだ。

金兵衛きんべえは待ち兼ね顔に、無事で帰つて来たこの吉左衛門を自

分の家の店座敷みせざしきに迎えた。金兵衛の家は伏見屋ふしみやと言つて、造り酒屋をしてゐる。街道に添うた軒先に杉すぎの葉の円まるく束たばにしたのを掛け、それを清酒の看板に代えてあるようなところだ。店座敷も広い。その時、吉左衛門は福島から受け取つて来たものを風呂敷ふろしきづつ包みの中から取り出して、

「さあ、これだ。」

と金兵衛の前に置いた。村の宿役人仲間へ料紙一束ふたはばずつ、無尽の加入者一同への酒肴料しゅじょうりょう、まだそのほかに、二巾ちりめんの縮緬ちりめんの風呂敷が二枚あつた。それは金兵衛と榊田屋ますだやの儀助ぎすけの二人ふたりが特に多くの金高を引き受けたといふので、その挨拶の意味のものだ。

吉左衛門の報告はそれだけにとどまらなかつた。最後に、一通かきつけの書付もそこへ取り出して見せた。

「其方儀、御勝手御仕法立てにつき、頼母子講御世話方格別に存じ入り、小前の論し方も行き届き、その上、自身にも別段御奉公申し上げ、奇特の事に候。よつて、一代苗字帯刀御免なし下され候。その心得あるべきものなり。」

嘉永六年丑六月

三逸作

石団之丞

荻丈左衛門

白新五左衛門

青山吉左衛門殿

「ホ。苗字帯刀御免とありますね。」

「まあ、そんなことが書いてある。」

「吉左衛門さん一代限りともありますね。なんにしても、これは名誉だ。」

と金兵衛が言うと、吉左衛門はすこし苦い顔をして、

「これが、せめて十年前だとねえ。」

ともかくも吉左衛門は役目を果たしたが、同時に勘定所の役人たちがいやな臭気においをもかいで帰つて来た。苗字帯刀を勘定所のやり繰り算段に替えられることは、吉左衛門としてあまりいい心持ちはしなかつた。

「金兵衛さん、君には察してもらえらるでしょうが、庄屋しょうやのつとめも辛いつらものだと思つて来ましたよ。」

吉左衛門の述懐だ。

その時、上かみの伏見屋の仙十郎せんじゅうろうが顔を出したので、しばらく二人ふたり

はこんな話を打ち切った。仙十郎は金兵衛の仕事を手伝わされているので、ちよつと用事の打ち合わせに来た。金兵衛を叔父おじと呼び、吉左衛門を義理ある父としているこの仙十郎は伏見家から分家して、別に上の伏見屋という家を持つている。年も半蔵より三つほど上で、腰にした煙草入れたばこいの根付ねつけにまで新しい時の流行はやりを見せたような若者だ。

「仙十郎、お前も茶でも飲んで行かないか。」

と金兵衛が言ったが、仙十郎は吉左衛門の前に出ると妙に改まってしまって、茶も飲まなかった。何か気づまりな、じつとしていられないようなふうで、やがてそこを出て行った。

吉左衛門は見送りながら、

「みんなどういう人になつて行きますかき——仙十郎にしても、半蔵にしても。」

若者への関心にかけては、金兵衛とても吉左衛門に劣らない。アメリカのペリイ来訪以来のあわただしきはおろか、それ以前からの周囲の空気の中にあるものは、若者の目や耳から隠しいことばかりであった。殺人、盗賊、かけおち 駈落、男女の情死、諸役人の腐敗沙汰ざたなどは、この街道でめずらしいことではなくなった。

同宿三十年——なんとと言っても吉左衛門と金兵衛とは、その同じ駅路の記憶につながっていた。この二人に言わせると、日ごろ上に立つ人たちからやかましく督促せらるることは、街道のよい整理である。言葉をかえて言えば、封建社会の「秩序」である。しかしこの「秩序」を乱そうとするものも、そういう上に立つ人たちからであった。博打ばくちはもつてのほかだという。しかし毎年の毛付けけづ（馬市）を賭博場とばくじょうに公開して、土地の繁華を計っているのも福島の役人であった。袖そでの下はもつてのほかだとい

う。しかし御着代おさかなだいもしくは御祝儀何両かの献上金を納めさせることなしに、かつてこの街道を通行したためしのないのも日光への例幣使であった。人殺しはもつてのほかだという。しかしやさわ八沢の長坂の路傍みちばたにあたるところで口論の末から土佐とさの家中かちゆうの一人を殺害し、その仲裁にはいった一人の親指を切り落とし、この街道で刃傷にんじょうの手本を示したのも小池伊勢こいけいせの家中であった。女は手形てがたなしには関所をも通さないという。しかし木曾路を通るごとに女の乗り物を用意させ、見る人が見ればそれが正式な夫人のものでないのも彦根ひこねの殿様であった。

「あゝ。」と吉左衛門は嘆息して、「世の中はどうなつて行くかと思うようだ。あの御勘定所のお役人などがお殿様からのお言葉だなんて、献金の世話を頼みに出張して来て、吾家うちの床柱の前にでもすわり込まれると、わたしはまたかと思う。しかし、金

兵衛さん、そのお役人の行つてしまつたあとでは、わたしはどんな無理なことでも聞かなくちやならないような気がする……」

東海道浦賀の方に黒船の着いたといううわさを耳にした時、最初吉左衛門や金兵衛はそれほどにも思わなかつた。江戸は大変だということであつても、そんな騒ぎは今にやむだらうぐらゐに二人とも考えていた。江戸から八十三里の余も隔たつた木曾の山の中に住んで、鎖国以来の長い眠りを眠りつづけて来たものは、アメリカのような異国の存在すら初めて知るくらいの時だ。

この街道に伝わるうわさの多くは、ことわざ諺にもあるようにころがるたびに大きな塊かたまりになる雪達磨ゆきだるまに似ている。六月十日の晩に、彦根の早飛脚が残して置いて行つたうわさもそれで、十四日には黒船八十六艘そつもの信じがたいような大きな話になつて伝わつ

て来た。寛永十年以来、日本国の一切の船は海の外に出ることを禁じられ、五百石以上の大船を造ることも禁じられ、オランダ、シナ、朝鮮をのぞくのほかは外国船の来航をも堅く禁じてある。その国のおきてを無視して、故意にもそれを破ろうとするものがまっしぐらにあの江戸湾を望んで直進して来た。当時幕府が船改めの番所は下田しもだの港から浦賀の方に移してある。そんな番所の所在地まで知って、あの唐人船とうじんぶねがやって来たことから、すでに不思議の一つであると言われた。

種々な流言が伝わって来た。宿役人としての吉左衛門らはそんな流言からも村民をまもらねばならなかった。やがて通行の前触れだ。間もなくこの街道では江戸出府の尾張おわりの家中を迎えた。尾張藩主よしかつ（徳川慶勝みょうだい）の名代なるせは、成瀬隼人之正のしよう、その家中のおびただしい通行のあとには、かねて待ち受けていた彦根の家中も

追い追いやつて来る。公儀の御茶壺おちやつぼ同様にとの特別扱いのお触れがあつて、名古屋城からの具足長持ぐそくながもちが十棹とさおもそのあとから続いた。それらの警護の武士が美濃路みのじから借りて連れて来た人足だけでも、百五十人に上つた。継立つぎたても難渋であつた。馬籠の宿場としては、山口村からの二十人の加勢しか得られなかつた。例の黒船はやがて残らず帰つて行つたとやらで、江戸表へ出張の人たちは途中から引き返して来るものがある。ある朝馬籠まじめから送り出した長持は隣宿の妻籠つまじで行き止まり、翌朝中津川から来た長持は馬籠の本陣の前で立ち往生する。荷物はそれぞれ問屋預けということになつたが、人馬継立けんぶんての見分みぶんとして奉行ぶぎようまで出張して来るほど街道はごたごたした。

狼狽ろうばいそのもののようなこの混雑が静まつたのは、半月ほど前にあたる。浦賀へ押し寄せて来た唐人船も行くえ知れずになつ

て、まずまず恐悦きょうえつだ。そんな報知しらせが、江戸方面からは追い追いと伝わって来たころだ。

吉左衛門は金兵衛を相手に、伏見屋の店座敷で話し込んでいると、ちようどそこへ警護の武士を先に立てた尾張の家中の一隊が西から街道を進んで来た。吉左衛門と金兵衛とは談話はなし半ばに伏見屋を出て、この一隊を迎えるためにほかの宿役人らとも一緒になった。尾張の家中は江戸の方へ大筒おおづつの鉄砲を運ぶ途中で、馬籠の宿の片側に来て足を休めて行くところであった。本陣や問屋の前あたりは檜木ひのきがさ笠や六尺棒なぞで埋めうずられた。騎馬から降りて休息する武士もあった。肌脱はだぎになつて背中に流れる汗をふく人足たちもあつた。よくあの重いものをつぎ上げて、美濃境みのぎかいの十曲峠じつきよくとうげを越えることができた、人々はその話で持ちきつた。吉左衛門はじめ、金兵衛らはこの労苦をねぎらい、

問屋の九太夫はまた柵田屋ますだやの儀助らと共にその間を奔り回つて、隣宿妻籠までの継立てのあっせんことを斡旋した。

村の人たちは皆、街道に出て見た。その中に半蔵もいた。彼は父の吉左衛門に似て背も高く、青々とした月代さかやきも男らしく目につく若者である。ちようど暑さの見舞いに村へ来ていた中津川の医者と連れだつて、通行の邪魔にならないところに立つた。この医者が宮川寛齋みやがわかんさいだ。半蔵の旧ふるい師匠だ。その時、半蔵は無言。寛齋も無言で、ただ医者らしく頭を円まるめた寛齋の胸のあたりに、手にした扇だけがわずかに動いていた。

「半蔵さん。」

上の伏見屋の仙十郎もそこへ来て、考え深い目つきをしている半蔵のそばに立つた。目方百十五、六貫ばかりの大筒おおづつの鉄砲、この人足二十二人がかり、それに七人がかりから十人がかりま

での大筒五挺ちよう、都合六挺が、やがて村の人々の目の前を動いて行つた。こんなに諸藩から江戸の邸やしきへ向けて大砲を運ぶことも、その日までなかつたことだ。

間もなく尾張の家中衆は見えなかつた。しかし、不思議な沈黙が残つた。その沈黙は、何が江戸の方に起こっているか知れないような、そんな心持ちを深い山の中にいるものに起こさせた。六月以来頻繁ひんぱんな諸大名の通行で、江戸へ向けてこの木曾街道を経由するものに、黒船騒ぎに関係のないものはなかつたからで。あるものは江戸湾一帯の海岸の防備、あるものは江戸城下の警固のためであつたからで。

金兵衛は吉左衛門の袖そでを引いて言つた。

「いや、お帰り早々、いろいろお骨折りで。まあ、おかげでおつぎた継立ても済みました。今夜は御苦労呼びというほどでもありません。

せんが、お玉のやつにしたくさせて置きます。あとでおいでを願いましう。そのかわり、吉左衛門さん、ごちそうは何もありませんよ。」

酒のさかな。胡瓜きゅうりもみに青紫蘇あおじそ。枝豆。到来物のたた畳みいわし。それに茄子なすの新漬しんづけ。飯の時にとろろ汁じ。すべてお玉の手料理の物で、金兵衛は夕飯に吉左衛門を招いた。

店座敷も暑苦しいからと、二階を明けひろげて、お玉はそこへ二人ふたりの席を設けた。山家風やまがふうな風呂ふろの用意もお玉の心づくしであつた。招かれて行つた吉左衛門は、一風呂よばれたあとのさつぱりとした心持ちで、広い炉ばたの片すみから二階への箱梯子はこぼしごを登つた。黒光りのするほどよく拭き込んであるその箱梯子も

伏見屋らしいものだ。西向きの二階の部屋には、金兵衛が先代の遺物と見えて、美濃派の俳人らの寄せ書きが灰汁あく抜ぬけのした表装にして壁に掛けてある。八人のものが集まって馬籠風景の八つの眺ながめを思い思いの句と画の中に取り入れたものである。この俳味のある掛け物の前に行つて立つことも、吉左衛門をよろこばせた。

夕飯。お玉は膳ぜんを運んで来た。ほんの有り合わせの手料理ながら、青みのある新しい野菜で膳の上を涼しく見せてある。やがて酒もはじまつた。

「吉左衛門さん、何もありませんが召し上がってくださいな。」とお玉が言った。「吾家うちの鶴松つるまつも出まして、お世話さまでございます。」

「さあ、一杯やってください。」と言つて、金兵衛はお玉を顧み

て、「吉左衛門さんはお前、みょうじ苗字帯刀御免ということになつたんだよ。今までの吉左衛門さんとは違うよ。」

「それはおめでとうございます。」

「いえ。」と吉左衛門は頭をかいて、「苗字帯刀もこう安売りの時世になつて来ては、それほどありがたくもありません。」

「でも、悪い気持ちはしないでしよう。」と金兵衛は言つた。「二

本さして、青山吉左衛門で通る。どこへ出ても、おおいば大威張りだ。」

「まあ、そう言わないでくれたまえ。それよりか、さかずき盃でもいただこうじゃありませんか。」

吉左衛門も酒はいける口であり、それに勧めじょうず上手なお玉のお

しゃく酌で、金兵衛とさしむかいに盃を重ねた。その二階は、かつて

おきなづか翁塚の供養のあつたおりに、落合の宗匠すさぼう崇佐坊まで集まつて、

金兵衛が先代の記念のために俳席を開いたところだ。そう言え

ば、吉左衛門や金兵衛の旧なじみでもはやこの世にいない人も多い。馬籠の生まれで水墨の山水や花果などを得意にした画家の蘭溪らんけいもその一人だ。あの蘭溪も、黒船騒ぎなどは知らずに亡なくなつた。

「お玉さんの前ですが。」と吉左衛門は言った。「こうして御酒ごしゅでもいただく、実に一切を忘れますよ。わたしはよく思い出す。金兵衛さん、ほら、あのアトリ（鴉子鳥）三十羽に、茶漬ちやづけ三杯——」

「それさ。」と金兵衛も思い出したように、「わたしも今それを言おうと思つていたところさ。」

アトリ三十羽に茶漬ちやづけ三杯。あれは嘉永かえい二年にあたる。山里では小鳥のおびただしく捕とれた年で、ことに大平村おおだいらむらの方では毎日三千羽ずつものアトリが驚くほど鳥網にかかると言われ、こ

の馬籠の宿までたびたび売りに来るものがあつた。小鳥の名所として土地のものが誇る木曾の山の中でも、あんな年はめつたにあるものでなかつた。仲間のもものが集まつて、一興を催すことにしたのもその時だ。そのアトリ三十羽に、茶漬け三杯食えば、褒美ほうびとして別に三十羽もらえる。もしまた、その三十羽と茶漬け三杯食えなかつた時は、あべこべに六十羽差し出さなければならぬという約束だ。場処は蓬菜屋ほうらいや。時刻は七つ時どき。食く手は吉左衛門と金兵衛の二人。食くわせる方かたのものは組頭くみがしら笹屋ささやの庄兵衛しょうべえと小笹屋こざさやの勝七。それには勝負を見届けるものもなくてはならぬ。蓬菜屋の新七がその審判官を引き受けた。さて、食くつた。約束のとおり、一人で三十羽、茶漬け三杯、残らず食くい終わつて、褒美の三十羽つぐみづつは吉左衛門と金兵衛とでもらつた。アトリは形もちいさく、骨も柔らかく、鶉つぐみのような小鳥と

はわけが違う。それでもなかなか食いではあつたが、二人とも腹もはらないで、その足で会所の店座敷へ押し掛けてたくさん茶を飲んだ。その時の二人の年齢もまた忘れられずにある。吉左衛門は五十一歳、金兵衛は五十三歳を迎えたころであつた。二人はそれほど盛んな食欲を競い合つたものだ。

「あんなおもしろいことはなかつた。」

「いや、大笑いにも、なんにも。あんなおもしろいことは前代みもん未聞さ。」

「出ましたね、金兵衛さんの前代未聞が——」

こんな話も酒の上を楽しくした。隣人同志でもあり、宿役人同志でもある二人の友だちは、しばらく街道から離れる思いで、よばなし尽きない夜咄に、とろろ汁に、夏の夜のふけやすいことも忘れていた。

馬籠まじめの宿しゆくで初めて酒を造つたのは、伏見屋ふしみやでなくて、梶田屋かじだやであつた。その初代と二代目の主人、惣右衛門そうえもん親子のものであつた。梶田屋の親子が協力して水の量目を計つたところ、下坂川おりさかがわで四百六十目、梶田屋の井戸で四百八十目、伏見屋の井戸で四百九十目あつたという。その中で下坂川の水をくんで、惣右衛門親子は初めて造り酒の試みに成功した。馬籠の水でも良い酒のできることを実際に示したのも親子二人のものであつた。それまで馬籠には造り酒屋というものはなかつた。

この惣右衛門親子は、村の百姓の中から身を起こして無遠慮に頭を持ち上げた人たちであるばかりでなく、後の金兵衛らのためにも好よかれ悪あしかれ一つの進路を切り開いた最初の人たちである。梶田屋の初代が伏見屋から一軒置いて上隣りの街道に添うた位置に大きな家を新築したのは、宝暦七年の昔で、その

ころに初代が六十五歳、二代目が二十五歳であつた。親代々からの百姓であつた初代惣右衛門が本家の梅屋から分かれて、別に自分の道を踏み出したのは、それよりさらに四十年も以前のことにあたる。

馬籠は田畠たはたの間にすら大きくあらわれた石塊いしころを見るような地方で、古くから生活も容易でないとされた山村である。初代惣右衛門はこの村に生まれて、十八歳の時から親の名跡みょうせきを継ぎ、岩石の間をもちとわず百姓の仕事を励んだ。本家は代々の年寄役でもあつたので、若輩じゃくはいながらにその役をも勤めた。旅人相手の街道に目をつけて、旅籠屋はたごやの新築を思い立つたのは、この初代が二十八、九のころにあたる。そのころの馬籠は、一分ぶか二分の金を借りるにも、隣宿つまじの妻籠か美濃の中津川まで出なければならなかつた。師走しわすも押し詰まつたころになると、中津川の

備前屋びぜんやの親仁おやしが十日あまりも馬籠へ来て泊まっていた、町中へ小貸こがしなどした。その金でようやく村のものが年を越したくらいがらの土地柄であった。

四人の子供を控えた初代惣右衛門夫婦の小歴史は、馬籠のよ
うな困窮な村にあつて激しい生活苦とたたかつた人たちの歴史
である。百姓の仕事とする朝草あさくさも、春先青草を見かける時分か
ら九月十月の霜をつかむまで毎朝二度ずつは刈り、昼は人並み
に会所の役を勤め、晩は宿泊の旅人を第一にして、その間に少
しずつの米商いもした。かみさんはまたかみさんで、内職に豆
腐屋をして、三、四人の幼いものを控えながら夜通し石臼いしうすをひ
いた。新宅の旅籠屋はたごやもできあがるころは、普請ふしんのおりに出た木
の片きれを燈とほして、それを油火あぶらびに替え、夜番の行燈あんどんを軒先としようじへかかげ
るにも毎朝夜明け前に下掃除したそうじを済まし、同じ布で戸障子の敷居

などを拭ふいたのも、そのかみさんだ。貧しさにいる夫婦二人のものは、自分の子供らを路頭に立たせまいとの願いから、夜一夜ろくろく安あん氣きに眠ったこともなかったほど働いた。

そのころ、本家の梅屋では隣村湯舟沢から来る人足たちの宿をしていた。その縁故から、初代夫婦はなじみの人足に頼んで、春先の食米くまい三斗ずつ内証で借りうけ、秋米あきまいで四斗ずつ返すことにしていた。これは田地を仕付けるにも、旅籠屋片手間はたごやでは芝草の用意もなりかねるところから、麦で少しずつ刈り造ることに生活の方法を改めたからで。

初代惣右衛門はこんなところから出発した。旅籠屋の営業と、そして骨の折れる耕作と。もともと馬籠にはほかによい旅籠屋もなかったから、新宅と言って泊まる旅人も多く、追いつ追いと常得意の客もつき、小女こおんなまで置き、その奉公人の給金も三分がもの

は翌年は一両に増してやれるほどになった。飯米はんまい一升買いの時代のあとには、一俵買いの時代も来、後には馬で中津川から呼ぶ時代も来た。新宅榊田屋の主人はもうただの百姓でもなかった。旅籠屋営業のほかになん少しずつ商売などもする町人であった。

二代目惣右衛門はこの夫婦の末子として生まれた。親から仕来しきたった百姓は百姓として、惣領そうりょうにはまだ家の仕事を継ぐ特権もある。次男三男からはそれも望めなかった。十三、四のころから草刈り奉公に出て、末は雲助くもすけにでもなるか。末子と生まれたものが成人しても、馬追いか駕籠かごかきにきまつたものとされたほどの時代である。そういう中で、二代目惣右衛門は親のそばにいて、物心づくころから草刈り奉公にも出されなかつたというだけでも、親惣右衛門を徳とした。この二代目がまた、親の仕事を幾倍かにひろげた。

人も知るように、当時の諸大名が農民から収めた年貢米ねんぐまいの多くは、大坂の方に輸送されて、金銀に替えられた。大坂は米取引の一大市場であつた。次第に商法も手広くやるころの二代目惣右衛門は、大坂の米相場にも無関心ではなかつた人である。彼はまた、優に千両の無尽にも応じたが、それほど実力を積み蓄えた分限者ぶげんしやは木曾谷中にも彼のほかにないと言われるようになった。彼は貧困を征服しようとした親惣右衛門の心を飽くまでも持ちつづけた。誇るべき伝統もなく、そうかと言つて煩わわずらされやすい過去もなかつた。腕一本で、無造作に進んだ。

天明六年てんめいは二代目惣右衛門が五十三歳を迎えたころである。そのころの彼は、大きな造り酒屋の店にすわつて、自分の子に酒の一番火入れなどをさせながら、初代在世のころからの八十年にわたる過去を思い出すような人であつた。彼は親先祖から

譲られた家督財産その他一切のものを天からの預かり物と考えよと自分の子に誨おしえた。彼は金銭を日本の宝の一つと考えよと誨おしえた。それをみだりにわが物と心得て、私用に費やそうものなら、いつか「天道」に泄もれ聞こえる時が来るとも誨おしえた。彼は先代惣右衛門の出発点を忘れそうな子孫の末を心配しながら死んだ。

伏見屋の金兵衛は、この惣右衛門親子の衣鉢いはつを継いだのである。そういう金兵衛もまた持ち前の快活さで、家では造り酒屋のほか質屋を兼ね、馬も持ち、田も造り、時には米の売買にもたずさわり、美濃の久々くく里りあたりの旗本にまで金を貸した。

二人ふたりの隣人——吉左衛門と金兵衛とをよく比べて言う人に、

中津川の宮川寛齋がある。この学問のある田舎医者に言わせる
と、馬籠は国境だ、おそらく町人氣質の金兵衛にも、あの惣右
衛門親子にも、商才に富む美濃人の血が混り合っているのだろ
う、そこへ行くと吉左衛門は多分に信濃の百姓であると。

吉左衛門が青山の家は馬籠の裏山にある本陣林のように古い。
木曾谷の西のはずれに初めて馬籠の村を開拓したのも、相州三浦
の方から移って来た青山監物の第二子であった。ここに一字を
建立して、万福寺と名づけたのも、これまた同じ人であった。
万福寺殿昌屋常久禅定門、俗名青山次郎左衛門、隠居しての
名を道齋と呼んだ人が、自分で建立した寺の墓地に眠ったのは、
天正十二年の昔にあたる。

「金兵衛さんの家と、おれの家とは違う。」

と吉左衛門が自分の倅に言つて見せるのも、その家族の歴史

をさす。そういう吉左衛門が青山の家を継いだころは、十六代も連なり続いて来た木曾谷での最も古い家族の一つであつた。

遠い馬籠の昔はくわしく知るよしもない。青山家の先祖が木

曾にはいつたのは、木曾義昌よしまさの時代で、おそらく福島ふくしまの山村氏よ

りも古い。その後この地方の郷土ごう土として馬籠その他数か村の代

官を勤めたらしい。慶長年代のころ、石田三成いしだみつなりが西国の諸侯を

かたらつて濃州関ヶ原へ出陣のおり、徳川台徳院は中仙道なかせんどうを登つ

て関ヶ原の方へ向かつた。その時の御先立おさきだちには、山村甚兵衛じんべえ、

馬場半左衛門ばばはんざえもん、千村平右衛門ちむらへいえもんなどの諸士を数える。馬籠の青山

庄三郎しょうざぶろう、またの名重長しげなが（青山二代目）もまた、徳川方がたに味方し、

馬籠の砦とりでにこもつて、犬山勢いぬやませいを防いだ。当時犬山城の石川備前

は木曾へ討手うってを差し向けたが、木曾の郷土らが皆徳川方の味方

をすると聞いて、激しくも戦わないで引き退いた。その後、青

山の家では帰農して、代々本陣、庄屋、問屋の三役を兼ねるようになってのも、当時の戦功によるものであるという。

青山家の古い屋敷は、もと石屋の坂をおりた辺にあつた。由緒のある武器馬具などは、寛永年代の馬籠の大火に焼けて、二本の鎗やりだけが残つた。その屋敷跡には代官屋敷の地名も残つたが、尾張藩への遠慮から、享保九年の検地の時以来、代官屋敷の字を石屋に改めたともいう。その辺は岩石の間で、付近に大きな岩があつたからで。

子供の時分の半蔵を前にすわらせて置いて、吉左衛門はよくこんな古い話をして聞かせた。彼はまた、酒の上のきげんのよい心持ちなぞから、表玄関の長押ながしの上に掛けてある古い二本の鎗の下へ小忰こせがれを連れて行つて、

「御覽、御先祖さまが見ているぞ。いたずらするとこわいぞ。」

と戯れた。

隣家の伏見屋などない古い伝統が年若としわかな半蔵の頭に深く刻みつけられたのは、幼いころから聞いたこの父の炬燵こたつ話からで、自分の倅に先祖のことも語り聞かせるとなると、吉左衛門の目はまた特別に輝いたものだ。

「代官造りという言葉は、地名で残っている。吾家うちの先祖が代官を勤めた時分に、田地を手造りにした場所だというので、それで代官造りさ。今の町田まちだがそれさ。その時分には、毎年五月に村じゅうの百姓を残らず集めて植え付けをした。その日に吾家うちから酒を一斗出した。酔って田圃たんぼの中に倒れるものがあれば、その年は豊年としたものだそうだ。」

この話もよく出た。

吉左衛門の代になって、本陣へ出入りの百姓の家は十三軒ほ

どある。その多くは主従の關係に近い。吉左衛門が隣家の金兵衛とも違つて、村じゅうの百姓をほとんど自分の子のように考へているのも、由来する源は遠かつた。

二

「また、黒船ですぞ。」

七月の二十六日には、江戸からの御隠使ごおんしが十二代將軍徳川家慶いえよしの薨去こうきよを伝えた。道中奉行どうちゆうゆうぎやうから、普請鳴り物類一切停止の触れも出た。この街道筋では中津川の祭礼のあるところに当たつたが、狂言もけいこぎりけいこぎりで、舞台の興行なしに謹慎の意を表することになつた。問屋九太夫の「また、黒船ですぞ」が、吉左衛門をも金兵衛をも驚かしたのは、それからわずかに三日過ぎのこと

であつた。

「いつたい、きようは幾日です。七月の二十九日じゃありませんか。公儀の御隠使ごおんしが見えてから、まだ三日にしかならない。」

と言つて吉左衛門は金兵衛と顔を見合わせた。長崎へ着いたというその唐人船とうじんぶねが、アメリカの船ではなくて、ほかの異国の船だといううわさもあるが、それさえこの山の中では判然はつきりしなかつた。多くの人は、先に相州浦賀の沖合いへあらわれたと同じ唐人船だとした。

「長崎の方がまた大変な騒動だそうですよ。」

と金兵衛は言つたが、にわかには長崎奉行の通行があるというだけで、先荷物さきにもつを運んで来る人たちの話はまちまちであつた。奉行は通行を急いでいるとのことで、道割もいろいろに変わつて来るので、宿場宿場では継立つぎたてに難渋した。八月の一日には、

この街道では栗色なめしの鎗を立てて江戸方面から進んで来る新任の長崎奉行、幕府内でも有数の人材に数えられる水野筑後の一行を迎えた。

ちようど、吉左衛門が羽織を着かえに、大急ぎで自分の家へ帰った時のことだ。妻のおまんは刀に脇差なぞをそこへ取り出して来て勧めた。

「いや、馬籠の駅長で、おれはたくさんだ。」

と吉左衛門は言つて、晴れて差せる大小も身に着けようとしなかつた。今までどおりの丸腰で、着慣れた羽織だけに満足して、やがて奉行の送り迎えに出た。

諸公役が通過の時の慣例のように、吉左衛門は長崎奉行の駕籠の近く挨拶に行つた。旅を急ぐ奉行は乗り物からも降りなかつた。本陣の前に駕籠を停めさせてのほんのお小休みであつた。

料紙を載せた三宝さんぼうなぞがそこへ持ち運ばれた。その時、吉左衛門は、駕籠のそばにひざまずいて、言葉も簡単に、

「当宿本陣の吉左衛門でございます。お目通りを願います。」
と声をかけた。

「おゝ、馬籠の本陣か。」

奉行の碎けた挨拶だ。

水野筑後ちくごは二千石の知行ちぎょうということであるが、特にその旅は十万石の格式で、重大な任務を帯びながら遠く西へと通り過ぎた。

街道は暮れて行つた。会所に集まつた金兵衛はじめ、その他の宿役人もそれぞれ家の方へ帰つて行つた。隣宿落合まで荷を

つけて行った馬方なぞも、長崎奉行の一行を見送ったあとで、ぼつぼつ馬を引いて戻つて来るころだ。

子供らは街道に集まつていた。夕空に飛びかう蝙蝠こうもりの群れを追い回しながら、遊び戯れているのもその子供らだ。山の中のことで、夜鷹よたかもなき出す。往来一つ隔てて本陣とむかい合つた梅屋の門口には、夜番の軒行燈のきあんどんの燈火あかりもついた。

一日の勤めを終わつた吉左衛門は、しばらく自分の家の外に出て、山の空気を吸つていた。やがておまんが二人の下女げじょを相手に働いている炉ばたの方へ引き返して行つた。

「半蔵は。」

と吉左衛門はおまんにたずねた。

「今、今、仙十郎さんと二人でここに話していましたよ。あなた、異人の船がまたやつて来たというじやありませんか。半蔵

はだれに聞いて来たんですか、オロシヤの船だと言う。仙十郎さんはアメリカの船だと言う。オロシヤだ、いやアメリカだ、そんなことを言い合つて、また二人で屋外へ出て行きましたよ。」

「長崎あたりのことは、てんで様子がわからない——なにしろ、きょうはおれもくたぶれた。」

山家らしい風呂ふろと、質素な夕飯とが、この吉左衛門を待つていた。ちようど、その八月朔日ついたちは吉左衛門が生まれた日にも当たつていた。だれしもその日となるといういろいろ思い出すことが多いように、吉左衛門もまた長い駅路の経験を胸に浮かべた。雨にも風にもこの交通の要路を引き受け、旅人の安全を第一に心がけて、馬方うまかた、牛方うしかた、人足の世話から、道路の修繕、助郷すけごうの掛合かけあいまで、街道一切のめんどうを見て来たその心づかいは言葉にも尽くせないものがあつた。

吉左衛門は炉ばたにいて、妻のおまんが温めて出した一本の銚子と、到来物の鮎あゆの塩焼きとで、自分の五十五歳を祝おうとした。彼はおまんに言った。

「きよようの長崎奉行にはおれも感心したねえ。水野筑後ちくごの守かみ——

あの人は二千石の知行取りちぎようだそうだが、きよようの御通行は十万石の格式だぜ。非常に破格な待遇さね。一足飛びに十万石の格式なんて、今まで聞いたこともない。それだけでも、徳川様の代よは変わって来たような気がする。そりゃ泰平無事な日なら、いくら無能のものでも上に立つお武家様でいばっていられる。いったん、事ある場合に際会してごらん——」

「なにしろあなた、この唐人船の騒ぎですもの。」

「こういう時世になって来たのかなあ。」

寛くわんぎの間まと名づけてあるのは、一方はこの炉ばたにつづき、

一方は広い仲なかの間まにつづいている。吉左衛門が自分の部屋へやとしてねお臥起きねおをしているのもその寛ぎの間だ。そこへも行つて周囲を見回しながら、

「しかし、御苦労、御苦労。」

と吉左衛門は繰りかえした。おまんはそれを聞きとがめて、「あなたはだれに言つていらつしやるの。」

「おれか。だれも御苦労とも言つてくれるものがないから、おれは自分で自分に言つてるところさ。」

おまんは苦笑いした。吉左衛門は言葉をついで、

「でも、世の中は妙なものじゃないか。名古屋なふるやの殿様のために、お勝手向きのお世話でもしてあげれば、苗字みょうじ帯刀御免たてばちごめんということになる。三十年この街道の世話をして、だれも御苦労とも言ひ手がな。このおれにとつては、目に見えない街道の世話

の方がどれほど骨が折れたか知れないがなあ。」

そこまで行くと、それから先には言葉がなかつた。

馬籠の駅長としての吉左衛門は、これまでにどれほどの人を送つたり迎えたりしたか知れない。彼も殺風景な仕事にあくせくとして来たが、すこしは風雅の道を心得ていた。この街道を通るほどのものは、どんな人でも彼の目には旅人であつた。

遠からず来る半蔵の結婚の日のことは、すでにしばしば吉左衛門夫婦の話に上るころであつた。隣宿妻籠つまごの本陣、青山寿平じゅへいの妹、お民たみという娘が半蔵の未来の妻に選ばれた。この悴せがれの結婚には、吉左衛門も多くの望みをかけていた。早くも青年時代にやつて来たような濃い憂鬱ゆううつが半蔵を苦しめたことを想おもつて見て、もつと生活を変えさせたいと考えることは、その一つであつた。六十六歳の隠居半六から家督を譲り受けたように、吉左衛

門自身もまた勤められるだけ本陣の当主を勤めて、あとから来るものに代よを譲つて行きたいと考えることも、その一つであった。半蔵の結婚は、やがて馬籠の本陣と、妻籠の本陣とを新たに結びつけることになる。二軒の本陣はもともと同姓を名乗るばかりでなく、遠い昔は相州三浦の方から来て、まず妻籠に落ち着いた、青山監物けんもつを父祖とする兄弟関係の間柄でもある、と言ひ伝えられている。二人ふたりの兄弟は二里ばかりの谷間をへだてて分かれ住んだ。兄は妻籠に。弟は馬籠に。何百年來のこの古い関係をもう一度新しくして、末頼すえもしい寿平次を半蔵の義理ある兄弟と考えて見ることも、その一つであつた。

この縁談には吉左衛門は最初からその話を金兵衛の耳に入れて、相談相手になつてもらつた。吉左衛門が半蔵を同道して、親子二人づれで妻籠の本陣を訪ねたずに行つて来た時のことも、ま

ずその報告をもたらずのは金兵衛のもとであつた。ある日、二人は一緒になつて、秋の祭礼までには間に合わせたいという舞台普請の話などから、若い人たちのうわさに移つて行つた。

「吉左衛門さん、妻籠の御本陣の娘さんはおいくつにおなりでしたっけ。」

「十七さ。」

その時、金兵衛は指を折つて数えて見て、

「して見ると、半蔵さんとは六つ違いでおいでなさる。」

よい一對の若夫婦ができ上がるであらうというふうにならぬ吉左衛門に言つて見せた。そういう金兵衛にしても、吉左衛門にしても、二十三歳と十七歳とで結びつく若夫婦をそれほど早いとは考えなかつた。早婚は一般にあたりまえの事と思われ、むしろよい風習とさえ見なされていた。当時の木曾谷には、新

郎十六歳、新婦は十五歳で行なわれるような早い結婚もあつて、それすら人は別に怪しみもしなかつた。

「しかし、金兵衛さん、あの半蔵のやつがもう祝言しゅうげんだなんて、早いものですね。わたしもこれで、平素ふだんはそれほどにも思ひませんが、こんな話が持ち上がると、自分でも年を取つたかと思ひますよ。」

「なにしろ、吉左衛門さんもお大抵じゃない。あなたのところのお嫁取りなんて、御本陣と御本陣の御婚礼ですからねえ。」

「半蔵さま——お前さまのところへは、妻籠の御本陣からお嫁さまが来こさつせるそうだなし。お前さまも大きくならつせいたものだ。」

半蔵のところへは、こんなことを言い寄る出入りのおふき婆ばあさんもある。おふきは乳母うばとして、幼い時分の半蔵の世話をした女だ。まだちいさかったころの半蔵を抱き、その背中に載せて、歩いたりしたのもこの女だ。半蔵の縁談がまとまったことは、本陣へ出入りの百姓のだれにもまして、この婆さんをよろこばせた。

おふきはまた、今の本陣の「姉あねさま」（おまん）のいないところで、半蔵のそばへ来て齒のかけた声で言った。

「半蔵さま、お前さまは何も知らつせまいが、おれはお前さまのお母様つかをよく覚えていゝ。お袖そでさま——美しい人だつたぞなし。あれほどの容色きりようは江戸にもないと言つて、通る旅の衆が評判したくらいの人だつたぞなし。あのお袖そでさまが煩わづらつて亡なくなつたのは、あれはお前さまを生んでから二十日はつかばかり過ぎだつたぞ

ら。おれはお前さまを抱いて、お母さまの枕もとへ連れて行つたことがある。あれがお別れだった。三十二の歳の惜しい盛りよなし。それから、お前さまはまた、間もなく黄疸を病まつせる。あの時は助かるまいと言われたくらいよなし。大旦那（吉左衛門）の御苦勞も一通りじゃあらすか。あのお母さまが今まで達者たっしやでいて、今度のお嫁取りの話などを聞かつせいたら、どんなはずら——」

半蔵も生みの母を想像する年ごろに達していた。また、一人で両親を兼ねたような父吉左衛門が養育の辛苦を想像する年ごろにも達していた。しかしこのおふき婆さんを見るたびに、多く思い出すのは少年の日のことであつた。子供の時分の彼が、あれが好きだつたとか、これが好きだつたとか、そんな食物のことをよく覚えていて、木曾の焼き米の青いにおい、蕎麦粉と

里芋さとしいもの子で造る芋焼餅いもやきもちなぞを数えて見せるのも、この婆さんであるから。

山地としての馬籠は森林と岩石との間であるばかりでなく、村の子供らの教育のことなぞにかけては耕されない土も同然であつた。この山の中に生まれて、周囲には名を書くことも知らないようなものが多い村民の間に、半蔵は学問好きな少年としての自分を見つけたものである。村にはろくな寺小屋もなかつた。人を化かす狐きつねや狸たぬき、その他種々さまざまな迷信はあたりに暗く跋扈ばつこしていた。そういう中で、半蔵が人の子を教えることを思い立つたのは、まだ彼が未熟な十六歳のころからである。ちようど今の隣家の鶴松つるまつが柵田屋ますだやの子息むすこなどと連れだつて通つて来るように、多い年には十六、七人からの子供が彼のもとへ読書習字珠算などのけいこに集まつて来た。峠からも、荒町あらまちからも、中の

かやからも。時には隣村の湯舟沢、山口からも。年若な半蔵は自分を育てようとするばかりでなく、同時に無学な村の子供を教えることから始めたのであった。

山里にいて学問することも、この半蔵には容易でなかった。良師のないのが第一の困難であった。信州上田うえだの人で児玉政雄こだままさおという医者がひところ馬籠に来て住んでいたことがある。その人に『詩経しきやう』の句読くとうを受けたのは、半蔵が十一歳の時にあたる。小雅しょうがの一章になって、児玉は村を去つてしまつて、もはや就ついて学ぶべき師もなかった。馬籠の万福寺には桑園和尚そうえんおしやうのような禅僧もあつたが、教えて倦うまない人ではなかった。十三歳のころ、父吉左衛門について『古文眞宝こぶんしんぼう』の句読を受けた。当時の半蔵はまだそれほど勉強する心があるでもなく、ただ父のそばにいて習字をしたり写本をしたりしたに過ぎない。そのうちに自

ら奮つて『四書』の集註を読み、十五歳には『易書』や『春秋』の類にも通じるようになった。寒さ、暑さをいとわなかつた独学の苦心が、それから十六、七歳のころまで続いた。父吉左衛門は和算を伊那の小野村の小野甫邦に学んだ人で、その術には達していたから、半蔵も算術のことは父から習得した。村には、やれ魚釣りだ碁将棋だと言つて時を送る若者の多かつた中で、半蔵ひとりはそのな方に目もくれず、また話相手の友だちもなくて、読書をそれらの遊戯に代えた。幸い一人の学友を美濃の中津川の方に見いだしたのはそのころからである。蜂谷香蔵と言つて、もつと学ぶことを半蔵に説き勧めてくれたのも、この香蔵だ。二人の青年の早い友情が結ばれはじめからは、馬籠と中津川との三里あまりの間を遠しとしなかつた。ちようど中津川には宮川寛斎がある。寛斎は香蔵が姉の夫にあたる。医者

ではあるが、漢学に達していて、また国学にもくわしかつた。馬籠の半蔵、中津川の香蔵——二蔵は互いに競い合つて寛齋の指導を受けた。

「自分は独学で、そして固陋ころうだ。もとよりこんな山の中にいて見聞も寡すくない。どうかして自分のようなものでも、もつと学びたい。」

と半蔵は考え考えした。古い青山のような家に生まれた半蔵は、この師に導かれて、国学に心を傾けるようになって行つた。二十三歳を迎えたころの彼は、言葉の世界に見つけた学問のよろこびを通して、賀茂真淵かものまぶち、本居宣長もとおりのりなが、平田篤胤ひらたあつたねなどの諸先輩がのこして置いて行つた大きな仕事を想像するような若者であつた。

黒船は、実にこの半蔵の前にあらわれて来たのである。

その年、嘉永六年かえいの十一月には、半蔵が早い結婚の話も妻籠の本陣あてに結納ゆいのうの品を贈るほど運んだ。

もはや恵那山えなさんへは雪が来た。ある日、おまんは裏の土蔵の方へ行こうとした。山家のならわしで、めぼしい器物という器物は皆土蔵の中に持ち運んである。皿さら何人前、膳ぜん何人前などと箱書きしたものを出したり入れたりするだけでも、主婦ひとやくの一役だ。ちようど、そこへ会所の使いが福島まごめの役所からの差紙さしがみを置いて行つた。馬籠まごめの庄屋しやうやあてだ。おまんはそれを渡そうとして、夫おつとを探さがした。

「大旦那おおだんなは。」

と下女にきくと、

「蔵の方へおいでだぞなし。」

という返事だ。おまんはその足で、母屋もやから勝手口の横手について裏の土蔵の前まで歩いて行つた。石段の上には夫の脱いだ下駄げたもある。戸前の錠もはずしてある。夫もやはり同じ思いで、婚礼用の器物でも調べているらしい。おまんは土蔵の二階の方にごとごと音のするのを聞きながら梯子はしごを登つて行つて見た。そこに吉左衛門がいた。

「あなた、福島からお差紙さしがみですよ。」

吉左衛門はわずかの閑ひまの時を見つけて、その二階に片づけ物などをしていた。壁によせて幾つとなく古い本箱の類たぐいも積み重ねてある。日ごろ彼の愛蔵する俳書、和漢の書籍などもそこに置いてある。その時、彼はおまんから受け取つたものを窓に近

く持つて行つて読んで見た。

その差紙には、海岸警衛のため公儀の物入りも莫大だぼくだいとある。国恩を報ずべき時節であると言つて、三都の市中はもちろん、諸国の御料所ごりようしょ、在方村々までざいかた、めいめい冥加みょうがのため上納金を差し出せとの江戸からの達しだということが書いてある。それにはまた、浦賀表うらがおもてへアメリカ船四艘そう、長崎表へオロシヤ船四艘交易のため渡来したことが断わつてあつて、海岸防禦ぼうぎよのためとも書き添えてある。

「これは国恩金の上納を命じてよこしたんだ。」と吉左衛門はおまんに言つて見せた。「外は風雨しけだというのに、内では祝言のしただ——しかしこのお差紙さしがみの様子では、おれも一肌脱ひとたがずばなるまいよ。」

その時になつて見ると、半蔵の祝言を一つのくぎりとして、

古い青山の家にもいろいろな動きがあつた。年老いた吉左衛門の養母は祝言のごたごたを避けて、土蔵に近い位置にある隠居所の二階に隠れる。新夫婦の居間にと定められた店座敷へは、昼屋も通つて来る。長いこと勤めていた下男も暇を取つて行って、そのかわり佐吉という男が今度新たに奉公に来た。

おまんが梯子を降りて行つたあと、吉左衛門はまた土蔵の明り窓に近く行つた。鉄格子を通してさし入る十一月の光線もあたりを柔らかかに見せている。彼はひとりで手をもんで、福島から差紙のあつた国防献金のことを考えた。徳川幕府あつて以来いまだかつて聞いたこともないような、公儀の御金蔵がすでにからつぽになつていゝるといふ内々の取り沙汰などが、その時、胸に浮かんだ。昔氣質の彼はそれらの事を思い合せて、若者の前でもなんでもおかまいなしに何事も大げさに触れ回るよう

な人たちを憎んだ。そこから子に対する心持ちをも引き出されて見ると、年もまだ若く心も柔らかく感じやすい半蔵なぞに、今から社会の奥をのぞかせたくないと考えた。いかなる人間同志の醜い秘密にも、その刺激に耐えられる年ごろに達するまでは、ゆつくりしたくさせたいと考えた。権威はどこまでも権威として、子の前には神聖なものとして置きたいとも考えた。おそらく隣家の金兵衛とても、親としてのその心持ちに変わりはなからう。そんなことを思い案じながら、吉左衛門はその蔵の二階を降りた。

かねて前触れのあつた長崎行きの公儀衆も、やがて中津川泊まりで江戸の方角から街道を進んで来るようになった。空は晴れても、大雪の来たあとであつた。野尻宿のじりしゆくの継所つぎしよから落合おちあいまで通し人足七百五十人の備えを用意させるほどの公儀衆が、さく

さく音のする雪の道を踏んで、長崎へと通り過ぎた。この通行が三日も続いたあとには、妻籠つまごの本陣からその同じ街道を通つて、新しい夜具のぎつしり詰なかもちまった長持ながもちなぞが吉左衛門の家へかつぎ込まれて来た。

吉日として選んだ十二月の一日が来た。金兵衛は朝から本陣へ出かけて来て、吉左衛門と一緒に客の取り持ちをした。台所でもあり応接間でもある広い炉ばたには、手伝いとして集まつて来ているお玉、お喜佐、おふきなどの笑い声も起こつた。

せんじゅうろう仙十郎も改まった顔つきでやって来た。寛くわんぎの間まと店座敷の間を往いつたり来たりして、半蔵を退屈させまいとしていたのもこの人だ。この取り込みの中で、金兵衛はちよつと半蔵を見て来て言つた。

「半蔵さん、だれかお前さんの呼びたい人がありますかい。」

「お客にですか。宮川寛齋先生に中津川の香蔵さん、それに景蔵けいぞうさんも呼んであげたい。」

浅見あさみ景蔵は中津川本陣の相続者で、同じ町に住む香蔵を通して知るようになった半蔵の学友である。景蔵はもと漢学の畠はたけの人であるが、半蔵らと同じように国学に志すようになったのも、寛齋の感化であった。

「それは半蔵さん、言うまでもなし。中津川の御連中はあすということにして、もう使いが出してありますよ。あの二人は黙ふたりつて置いたって、向こうから祝いに来てくれる人たちでさ。」

そばにいた仙十郎は、この二人の話を引き取って、「おれも——そうだなあ——もう一度祝言の仕直しでもやりたくなつた。」

と笑わせた。

山家にはめずらしい冬で、一度は八寸も街道に積もつた雪が大雨のために溶けて行つた。そのあとには、金兵衛のような年配のものが子供の時分から聞き伝えたこともないと言うほどの暖かさが来ていた。寒がりの吉左衛門ですら、その日は炬燵こたつや火鉢ひばちでなしに、煙草盆たばこぼんの火だけで済ませるくらいだ。この陽気は本陣の慶事を一層楽しく思わせた。

午後ごごに、寿平次兄妹きやうだいがすでに妻籠つまごの本陣を出発したろうと思われるころには、吉左衛門は定紋付きじやうもんのネ杯姿かみしもで、表玄関前の広い板の間を歩き回つた。下男しもやうの佐吉もじつとしていられないというふうで、表門を出たりはいつたりした。

「佐吉、めずらしい陽気だなあ。この分じや妻籠の方も暖かいだろう。」

「そうよなし。今夜は門の前で篝かがりでも焚たかずと思つて、おれは

山から木を背負^{しよ}つて来た。」

「こう暖かじや、篝^{かがり}にも及ぶまいよ。」

「今夜は高張^{たかはり}だけにせずか、なし。」

そこへ金兵衛も奥から顔を出して、一緒に妻籠から来る人たちのうわさをした。

「一昨日^{おととい}の晩でさ。」と金兵衛は言った。「梶田屋^{ますだや}の儀助さんが

夜行で福島へ出張したところが、往還の道筋にはすこしも雪がない。茶屋へ寄つて、店先へ腰掛けても、凍えるということがない。どうもこれは世間一統の陽気でしょう。あの儀助さんがそんな話をしていましたつけ。」

「金兵衛さん——前代未聞^{みもん}の冬ですかね。」

「いや、全く。」

日の暮れるころには、村の人たちは本陣の前の街道に集まつ

て来て、梅屋の格子先こうしあたりから問屋の石垣いしがきの辺へかけて黒山を築いた。土地の風習として、花嫁を載せて来た駕籠かごはいきなり門の内へはいらない。峠の上まで出迎えたものを案内にして、寿平次らの一行はまず門の前で停とまった。提灯ちようちんの灯ひに映る一つの駕籠を中央にして、木曾の「なかのりさん」の唄うたが起こった。荷物をかついで妻籠から供をして来た数人のものが輪を描きながら、唄ふしの節ふしにつれて踊りはじめた。手を振り腰を動かす一つの影の次ぎには、またほかの影が動いた。この鄙ひなびた舞踏の輪は九度も花嫁の周囲まわりを回った。

その晩さかづき、盃さかずきをすましたあとの半蔵はお民と共に、冬の夜とも思われないような時を送った。半蔵がお民を見るのは、それが初めての時でもない。彼はすでに父と連れだつて、妻籠にお民の家を訪たずねたこともある。この二人の結びつきは当人同志の選

扱からではなくて、ただ父兄の選択に任せたのであつた。親子の間柄でも、当時は主従の關係に近い。それほど二人は従順であつたが、しかし決して安閑としてはいなかつた。初めて二人が妻籠の方で顔を見合わせた時、すべてをその瞬間に決定してしまつた。長くかかつて見るべきものではなくて、一目に見るべきものであつたのだ。

店座敷は東向きで、戸の外には半蔵の好きな松の樹きもあつた。新しい青い部屋へやの畳は、鶯うぐいすでもなき出すかと思われるような温暖あたたかい空氣に香かおつて、夜遊び一つしたことのない半蔵の心を逆上のぼせるばかりにした。彼は知らない世界にでもはいつて行く思いで、若さとおそろしさのために震えているようなお民を自分のそばに見つけた。

「お父さん——わたしのためでしたら、祝いはなるべく質素にしてください。」

「それはお前に言われるまでもない。質素はおれも賛成だねえ。でも、本陣には本陣の慣例しきたりというものもある。呼ぶだけのお客はお前、どうしたって呼ばなけりやならない。まあ、おれに任せて置け。」

半蔵が父とこんな言葉をかわしたのは、客振舞きやくふるまいの続いた三日目の朝である。

思いがけない尾張藩の徒士目付かちめつけと作事方さくじかたとがその日の午前馬籠しゆくの宿に着いた。来たる三月には尾張藩主が木曾路を経て江戸へ出府のことに決定したという。この役人衆の一行は、冬のうちに各本陣を見分けんぶんするためということであつた。

こういう場合に、なくてならない人は金兵衛と問屋の九太夫とであった。万事扱い慣れた二人は、吉左衛門の当惑顔をみて取った。まず二人で梅屋の方へ役人衆を案内した。金兵衛だけが吉左衛門のところへ引き返して来て言った。

「まずありがたかった。もう少しで、この取り込みの中へ乗り込まれるところでした。オット。皆さま、当宿本陣には慶事がございます、取り込んでおります、恐れ入りますが梅屋の方でしばらくお休みを願いたい、そうわたしが言いましたね。そこはお役人衆も心得たものでさ。お昼のしたくもあちらで差し上げることにして来ましたよ。」

梅屋と本陣とは、呼べば応えるほどの対い合った位置にある。

午後、徒士目付の一行は梅屋で出した福草履にはきかえて、乾いた街道を横ぎつて来た。大きな鬚のにおい、帯刀の威、袴

の摺すれる音、それらが役人らしい挨拶あいさつと一緒になつて、本陣の表玄関には時ならぬいかめしきを見せた。やがて、吉左衛門の案内で、部屋へや部屋の見分があつた。

吉左衛門は徒士目付にたずねた。

「はなはだ恐縮ですが、中納言ちゆうなごん様の御通行は来春のようによけたまわります。当宿しゆくではどんな心じたくをいたしたものでしょうか。」

「さあ、ことによるとお昼食ひるを仰せ付けられるかもしれない。」

婚礼の祝いは四日も続いて、最終の日の客振舞きやくふるまひにはこの慶事けいじに来て働いてくれた女たちから、出入りの百姓、会所じようづかいの定使じようづかいなどまで招かれて来た。大工も来、畳屋も来た。日ごろ吉左衛門や半蔵のところへ油じみた台箱だいばこをさげて通かよつて来る髪結かみむすい直次なおじまでが、その日は羽織着用でやつて来て、膳ぜんの前にかしこまつ

た。

町内の小前こまえのものの前に金兵衛、髪結い直次の前に仙十郎、涙を流してその日の来たことを喜んでいるようなおふきばあ婆さんの前には吉左衛門がすわつて、それぞれ取り持ちをすることは、酒も始まつた。吉左衛門はおふきの前から、出入りの百姓たちの前へ動いて、

「さあ、やつとくれや。」

とそこにある銚子ちょうしを持ち添えて勧めた。百姓の一人ひとりは膝ひざをかき合わせながら、

「おれにかなし。どうも大旦那おおだんなにお酌しやくしていただいては申しわけがない。」

隣席にいるほかの百姓が、その時、吉左衛門に話しかけた。

「大旦那おおだんな——こないだの上納金のお話よなし。ほかの事とも違

いますから、一同申し合わせをして、お受けをすることにしましたわい。」

「あゝ、あの国恩金のことかい。」

「それが大旦那、百姓はもとより、豆腐屋、按摩^{あんま}まで上納するような話ですぞ、おれたちも見ていられますか。十八人で二両二分とか、五十六人で三両二分とか、村でも思い思いに納めるよ。うだが、おれたちは七人で、一人が一朱^{いっしゆ}ずつと話をまとめましたわい。」

仙十郎は酒をついで回っていたが、ちようどその百姓の前まで来た。

「よせ。こんな席で上納金の話なんか。伊勢^{いせ}の神風の一つも吹いてごらん、そんな唐人^{とうじん}船^{ぶね}なぞはどこかへ飛んでしまふ。くよくよするな。それよりか、一杯行こう。」

「どうも旦那はえらいことを言わつせる。」と百姓は仙十郎の盃さかずきをうけた。

「上の伏見屋の旦那。」と遠くの席から高い声で相槌あいづちを打つものもある。「おれもお前さまに賛成だ。徳川さまの御威光で、四艘や五艘ぐらいの唐人船がなんだなし。」

酒が回るにつれて、こんな話は古風な石場いしばづ搗うたきの唄うたなぞに変わわりりかけて行いつた。この地方のものは、いつたいに酒に強い。だれでも飲む。若い者にも飲ませる。おふき婆さんのような年をとつた女ですら、なかなか隅すみへは置けないくらいだ。そのうちに仙十郎が半蔵の前へ行つてすわつたころは、かなりの上きげんになつた。半蔵も方々から来る祝いの盃をことわりかねて、顔を紅あかくしていた。

やがて、仙十郎は声高くうたい出した。

木曾のナ

なかのりさん、

木曾の御嶽おんたけさんは

なんちやらほい、

夏でも寒い。

よい、よい、よい。

半蔵とは対むかい合いに、お民の隣には仙十郎の妻で半蔵が異母妹にあたるお喜佐も来て膳ぜんに着いていた。お喜佐は目を細くして、若い夫のほればれとさせるような声に耳を傾けていた。その声は一座のうちのだれよりも清すずしい。

「半蔵さん、君の前でわたしがうたうのは今夜初めてでしょう。」

と仙十郎は軽く笑って、また手拍子てびょうしを打ちはじめた。百姓の仲間からおふき婆さんまでが右に左にからだを振り動かしながら

ら手を拍うつて調子を合わせた。塩しお辛い声を振り揚げる髪結い直次の音頭おんどと取りで、鄙ひなびた合唱がまたそのあとに続いた。

裕ナあわせ

なかのりさん、

裕やりたや

なんちやらほい、

足袋たび添えて。

よい、よい、よい。

本陣とは言っても、吉左衛門の家の生活は質素で、芋焼餅いもやきもちなぞを冬の朝の代用食とした。祝言のあつた六日目の朝には、もはや客振舞きやくふるまいの取り込みも静まり、一日がかりのあと片づけも済

み、出入りの百姓たちもそれぞれ引き取つて行つたあとなので、おまんは炉ばたにいて家の人たちの好きな芋焼餅を焼いた。

店座敷に休んだ半蔵もお民もまだ起き出さなかつた。

「いつも早起きの若旦那が、この二、三日はめずらしい。」

そんな声が二人の下女の働いている勝手口の方から聞こえて来る。しかしおまんは奉公人の言うことなぞに頓着とんちやくしないで、ゆつくり若い者を眠らせようとした。そこへおふき婆さんが新夫婦の様子を見に屋外そとからはいつて来た。

「姉あねさま。」

「あい、おふきか。」

おふきは炉ばたにいろおまんを見て入り口の土間のところに立つたまま声をかけた。

「姉さま。おれはけさ早く起きて、山の芋いもを掘りに行つて来た。」

大旦那も半蔵さまもお好きだで、こんなものをさげて来た。店座敷ではまだ起きさつせんかなし。」

おふきは※苞わらづぬにつつんだ山の芋にも温あたたかい心を見せて、半蔵の乳母うばとして通かよつて来た日と同じように、やがて炉ばたへ上がった。

「おふき、お前はよいところへ来てくれた。」とおまんは言った。

「きようは若夫婦せごいもちに御幣餅ごへいもちを祝うつもりで、胡桃くるみを取りよせて置いた。お前も手伝つておくれ。」

「ええ、手伝うどころじゃない。農家も今は閑ひまだで。御幣餅とはお前さまもよいところへ気がつかつせいた。」

「それに、若夫婦せごいもちのお相伴しようばんに、お隣の子息むすこさんでも呼んであげようかと思つてさ。」

「あれ、そうかなし。それじゃおれが伏見屋へちよつくら行つて来る。そのうちには店座敷でも起きさつせるずら。」

気候はめずらしい暖かさを続けていて、炉ばたも楽しい。黒く煤すすけた竹筒、魚の形、その自在じざいかぎ鍵の天井から吊つるしてある下では、あかあかと炉の火が燃えた。おふきが隣家まで行つて帰つて見たころには、半蔵とお民とが起きて来ていて、二人で松薪まつまきをくべていた。渡し金がねの上に載せてある芋焼餅も焼きざましになつたころだ。おふきはその里芋さと芋の子の白くあらわれたやつを温め直して、大根おろしを添えて、新夫婦に食べさせた。

「お民、おいで。髪でも直しましょう。」

おまんは奥の坪庭に向いた小座敷のところへお民を呼んだ。妻籠つまこの本陣から来た娘を自分の嫁として、「お民、お民」と名を呼んで見ることもおまんにはめずらしかつた。おとなの世界

をのぞいて見たばかりのようなお民は、いくらか羞はじらいを含みながら、十七の初島田はつしまだの祝いのおりに妻籠の知人から贈られたという櫛箱くしばこなどをそこへ取り出して来ておまんに見せた。

「どれ。」

おまんは襷たすき掛けになつて、お民を古風な鏡台に向かわせ、人形でも扱うようにその髪をといてやった。まだ若々しく、娘らしい髪かみの感覚は、おまんの手にあまるほどあつた。

「まあ、長い髪かみの毛けだこと。そう言えば、わたしも覚えがあるが、これで眉まゆでも剃そり落とす日が来てごらん——あの里帰りというものは妙たぎに昔の恋こひしくなるものですよ。もう娘の時分ともお別れわかれですねえ。女はだれでもそうしたものですからねえ。」

おまんはいろいろに言つて見せて、左の手に油あぶらじみた髪かみの根元ねもとを堅く握り、右手に木曾名物のお六櫛ろくぐしというやつを執つた。

額ひたいから鬢びんの辺へかけて、梳すき手の力てがはいるたびに、お民は目を細くして、これから長く姑しゅうとめとして仕えなければならぬ人のするままに任せていた。

「熊くまや。」

とその時、おまんはそばへ寄つて来る黒毛ねこの猫の名を呼んだ。熊は本陣に飼われていて、だれからもかわいがられるが、ただ年老いた隠居からは憎まれていた。隠居が熊を憎むのは、みんなの愛がこの小さな動物にそそがれるためだともいう。どうかすると隠居は、おまんや下女たちの見ていないところで、人知れずこの黒猫に拳固げんこを見舞うことがある。おまんはお民の髪を結いながらそんな話までして、

「吾家うちのおばあさんも、あれだけ年をとつたかと思ひますよ。」

とも言い添えた。

やがて本陣の若い「御新造」に似合わしい髪のかたちができ上がった。儀式ばった晴れの装いはとれて、さつぱりとした蒔絵の櫛などがそれに代わった。林檎のように紅くて、そして生き生きとしたお民の頬は、まるで別の人のように鏡のなかに映った。

「髪はできました。これから部屋の案内です。」

というおまんのことについて、間もなくお民は家の内部をすみずみまでも見て回った。生家を見慣れた目で、この街道に生えたような家を見ると、お民にはいろいろな似よりを見いだすことも多かった。奥の間、仲の間、次の間、寛ぎの間というふうに、部屋部屋に名のつけてあることも似ていた。上段の間という部屋が一段高く造りつけてあつて、本格な床の間、障子から、白地に黒く雲形を織り出したような高麗縁の畳まで、この

木曾路を通る諸大名諸公役の客間にあててあるところも似ていた。

熊は鈴の音をさせながら、おまんやお民の行くところへついて来た。二人が西向きの仲の間の障子の方へ行けば、そこへも来た。この黒毛の猫は新来の人をもおそれないで、まだ半分お客さまのようなお民の裾すそにもまといついて戯れた。

「お民、来てごらん。きょうは恵那山えなさんがよく見えますよ。妻籠つまごの方はどうかねえ、木曾川の音が聞こえるかねえ。」

「え、日によつてよく聞こえます。わたしどもの家は河かわのすぐそばでもありませんけれど。」

「妻籠じゃそうだろうねえ。ここでは河の音は聞こえない。そのかわり、恵那山の方で鳴る風の音が手に取るように聞こえますよ。」

「それでも、まあよいながめですこと。」

「そりゃ馬籠まじめはこんな峠の上ですから、隣の国まで見えます。どうかするとお天気の良い日には、遠い伊吹山いぶきまで見えることがありますよ——」

林も深く谷も深い方に住み慣れたお民は、この馬籠に来て、西の方に明るく開けた空を見た。何もかもお民にはめずらしかった。わずかに二里を隔てた妻籠と馬籠とでも、言葉の訛なまりからしていくらか違っていた。この村へ来て味わうことのできる紅あかい「ずいき」の漬物つけものなぞも、妻籠の本陣では造らないものであった。

まだ半蔵夫婦の新規な生活は始まったばかりだ。午後にお

まんは一通り屋敷のなかを案内しようと言つて、土蔵の大きな鍵かぎをさげながら、今度は母屋もやの外の方へお民を連れ出そうとした。

炉ばたでは山家らしい胡桃くるみを割る音がしていた。おふきは二人の下女を相手に、堅い胡桃たねの核を割つて、御幣餅ごへいもちのしたくに取とりかかつていた。その時、上がり端はなにある杖つえをさがして、おまんやお民と一緒に裏の隠居所まで歩こうと言い出したのは隠居だ。このおばあさんもひところよりは健康を持ち直して、食事のたびに隠居所かよから母屋もやへ通かよつていた。

馬籠の本陣は二棟ふたむねに分かれて、母屋もや、新屋しんやより成り立つ。新屋は表門の並びに続いて、すぐ街道と対むかい合あつた位置にある。別に入り口のついた会所（宿役人詰め所）と問屋場の建物がそこにある。石垣いしがきの上に高く隣家の伏見屋を見上げるのもその位

置からで、大小幾つかの部屋がその裏側に建て増してある。多人数の通行でもある時は客間に当てられるのもそこだ。おまんなは雨戸のしまった小さな離れ座敷をお民にさして見せて、そこにも本陣らしい古めかしさがあることを話し聞かせた。ずっと昔からこの家の習慣で、女が見るものを見るころは家族のものからも離れ、ひとりで煮焚にたきまでして、そこにこもり暮らすという。

「お民、来てごらん。」

と言いながら、おまんなは隠居所の階下したにあたる味噌納屋みそなやの戸をあけて見せた。味噌、たまり、漬物おけの桶おけなどがそこにあつた。おまんなは土蔵の前の方へお民を連れて行って、金網の張つてある重い戸をあけ、薄暗い二階の上までも見せて回つた。おまんなの古い長持と、お民の新しい長持とが、そこに置き並べてあつ

た。

土蔵の横手について石段を降りて行つたところには、深い掘り井戸を前に、米倉、木小屋などが並んでいる。そこは下男佐吉の世界だ。佐吉も案内顔に、伏見屋寄りの方の裏木戸を押して見せた。街道と並行した静かな村の裏道がそこに続いていった。古い池のある方に近い木戸をあけて見せた。本陣の稲荷いなりの祠ほくらが檜かしや柅ひいらぎの間に隠れていた。

その晩、家のもの一同は炉ばたに集まつた。隠居はじめ、吉左衛門から、佐吉まで一緒になつた。隣家の伏見家からは少年つるまつの鶴松も招かれて来て、半蔵の隣にすわつた。おふきが炉で焼く御幣餅の香気はあたりあに満ちあふれた。

「鶴さん、これが吾家うちの嫁ですよ。」

とおまんは隣家の子息むすこにお民を引き合わせて、串差くしざしにした

御幣餅をその膳ぜんに載せてすすめた。こんがりきつねいろと狐色きつねいろに焼けた胡桃くるみだまり醬油のうまそうなやつは、新夫婦の膳にも上った。吉左衛門夫婦はこの質素な、しかし心のこもった山家料理で、半蔵やお民の前途を祝福した。

第二章

一

じつぎよくとうげ

十曲峠の上にある新茶屋には出迎えのものが集まつた。今度いよいよ京都本山の許しを得、僧智現ちげんの名も松雲しよううんと改めて、馬籠まじめ万福寺の跡を継つごうとする新住職がある。組頭くみがしら笹屋ささやの庄兵衛しようべえはじめ、五人組仲間、その他のものが新茶屋に集まつたのは、この人の帰国を迎えるためであつた。

山里へは旧暦二月末の雨の来るころで、年も安政元年あんせいと改まつた。一同が待ち受けている和尚おしょうは、前の晩のうちに美濃手賀野みのてがの村の松源寺しょうげんじまでは帰つて来ているはずで、村からはその朝早く

五人組の一人ひとりを発たたせ、人足ふたりも二人つけて松源寺まで迎えに出してある。そろそろあの人たちも帰つて来ていいころだった。

「きようは御苦労さま。」

出迎えの人たちに声をかけて、本陣の半蔵もそこへ一緒になつた。半蔵は父吉左衛門の名代みょうだいとして、小雨の降る中をやつて来た。

こうした出迎えにも、古い格式のまだ崩くずれずにあつた当時には、だれとだれはどこまでというようなことをやかましく言つたものだ。たとえば、村の宿役人仲間は馬籠の石屋の坂あたりまでとか、五人組仲間は宿はずれの新茶屋までとかというふうに。しかし半蔵はそんなことに頓着とんちやくしない男だ。のみならず、彼はこうした場処に来て腰掛けるのが好きで、ここへ来て足を休めて行く旅人、馬をつなぐ馬方、または土足のまま茶屋の囲炉裏いろり

ばたに踏ん込んで木曾風な「めんぱ」(木製割籠)を取り出す人足なぞの話にまで耳を傾けるのを楽しみにした。

馬籠の百姓総代とも言うべき組頭庄兵衛は茶屋を出たりはいたりして、和尚の一行を待ち受けたが、やがてまた仲間のものそばへ来て腰掛けた。御休処とした古い看板や、あるものは青くあるものは茶色に諸講中のしるしを染め出した下げ札などの掛かった茶屋の軒下から、往来一つ隔てて向こうに翁塚が見える。芭蕉ばしょうの句碑もその日の雨にぬれて黒い。

間もなく、半蔵のあとを追って、伏見屋の鶴松つるまつが馬籠しゆくの宿の方からやって来た。鶴松も父金兵衛きんべえの名代みょうだいという改まった顔つきだ。

「お師匠さま。」

「君も来たのかい。御覧、翁塚のよくなつたこと。あれは君の

お父さんとつの建てたんだよ。」

「わたしは覚えがない。」

半蔵が少年の鶴松を相手にこんな言葉をかわしていると、庄兵衛も思い出したように、

「そうはずら、鶴さまは覚えがあらつせまい。」
と言ひ添えた。

小雨は降つたりやんだりしていた。松雲和尚の一行はなかなか見えそうもないので、半蔵は鶴松を誘つて、新茶屋の周囲を歩きに出た。路傍みちばたに小高く土を盛り上げ、榎えのきを植えて、里程を示すたよりとした築山つぎやまがある。駅路時代の一里塚だ。その辺は信濃しなのと美濃みのの国境くにぎわいにあたる。西よりする木曾路の一番最初の入り口でもある。

しばらく半蔵は峠の上において、学友の香蔵や景蔵の住む美濃の

盆地の方に思いを馳はせた。今さら関東関西の諸大名が一大合戦かつせんに運命を決したような関ヶ原の位置を引き合いに出すまでもなく、古くから東西両勢力の相接触する地点と見なされたのも隣の国である。学問に、宗教に、商業に、工芸に、いろいろなものがそこに発達したのに不思議はなかったかもしれない。すくなくもそこに修業時代を送って、そういう進んだ地方の空気の中に僧侶そうりよとしてのたましいを鍛えて来た松雲が、半蔵にはうらやましかつた。その隣の国に比べると、この山里の方にあるものはすべておそい。あだかも、西から木曾川を伝わって来る春が、兩岸に多い櫛けやきや雑木の芽を誘いながら、一か月もかかつて奥へ奥へと進むように。万事がそのとおりにおこなわれていた。

その時、半蔵は鶴松を顧みて、

「あの山の向こうが中津川なかつがわだよ。美濃はよい国だねえ。」

と言つて見せた。何かにつけて彼は美濃尾張おわりの方の空を恋しく思つた。

もう一度半蔵が鶴松と一緒に茶屋へ引き返して見ると、ちよ
うど伏見屋の下男がそこへやって来るのにあつた。その男は庄
兵衛の方を見て言つた。

「吾家うちの旦那だんなはお寺の方でお待ち受けだけな。和尚さまはまだ
見えんかなし。」

「おれはさつきから来て待つてるが、なかなか見えんよ。」

「弁当持ちの人足も二人出かけたはずだが。」

「あの衆は、いずれ途中で待ち受けているはずらで。」

半蔵がこの和尚を待ち受ける心は、やがて西から帰つて来る
人を待ち受ける心であつた。彼が家と万福寺との縁故も深い。

最初にあの寺を建立して万福寺と名づけたのも青山の家の先祖だ。しかし彼は今度帰国する新住職のことを想像し、その人の尊信する宗教のことを想像し、人知れずある予感に打たれずにはいられなかった。早い話が、彼は中津川の宮川寛齋に就いた弟子である。寛齋はまた平田派の国学者である。この彼が日ごろ先輩から教えらるることは、暗い中世の否定であった。中世以来学問道德の権威としてこの国に臨んで来た漢学び風の因習からも、仏の道で教えるような物の見方からも離れよということであった。それらのものの深い影響を受けない古代の人の心に立ち帰って、もう一度心寛かにこの世を見直せということであった。一代の先駆、荷田春満をはじめ、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤、それらの諸大人が受け継ぎ受け継ぎして来た一大反抗の精神はそこから生まれて来ているということであった。彼

に言わせると、「物学びするともがら」の道は遠い。もしその道を追い求めて行くとしたら、彼が今待ち受けている人に、その人の信仰に、行く行く反対を見いだすかもしれないなかつた。

こんな本陣の子息むすこが待つとも知らずに、松雲の一行は十曲峠さかみちの険しい坂路を登つて来て、予定の時刻よりおくれて峠の茶屋に着いた。

松雲は、出迎えの人たちの予想に反して、それほど旅やつれのした様子もなかつた。六年の長い月日を行脚あんぎゃの旅に送り、さらに京都本山まで出かけて行って来た人とは見えなかつた。一行六、七人のうち、こちらから行つた馬籠の人足たちのほかに、中津川からは宗泉寺の老和尚も松雲に付き添つて来た。

「これは恐れ入りました。ありがとうございます。」

と言いなから松雲は笠かさの紐ひもをとりて、半蔵の前にも、庄兵衛たちの前にもお辞儀をした。

「鶴さんですか。見ちがえるように大きくお成りでしたね。」

とまた松雲は言つて、そこに立つ伏見屋の子息むすこの前にもお辞儀をした。手賀野村からの雨中の旅で、笠かさも草鞋わらじもぬれて来た松雲の道中姿は、まず半蔵の目をひいた。

「この人が万福寺の新住職か。」

と半蔵は心の中で思わずにはいられなかつた。和尚としては年も若い。まだ三十そこそこの年配にしかない。そういう彼よりは六つか七つも年長としうえにあたるくらいの青年の僧侶そうりよだ。とりあえず峠の茶屋に足を休めるとあつて、京都の旅の話なぞがほつぽつ松雲の口から出た。京都に十七日、名古屋に六日、それ

から美濃路回りで三日目に手賀野村の松源寺に一泊——それを松雲は持ち前の禅僧らしい調子で話し聞かせた。もののこはんとき小半時も半蔵が一緒にいるうちに、とてもこの人を憎むことのできなような善良な感じのする心の持ち主を彼は自分のそばに見つけた。

やがて一同は馬籠の本宿をさして新茶屋を離れることになった。途中で松雲は庄兵衛を顧みて、

「ほ。見ちがえるように道路がよくなっていますな。」

「この春、尾州びしゅうの殿様が江戸へ御出府だけな。お前さまはまだ何も御存じなしか。」

「その話はわたしも聞いて来ましたよ。」

「新茶屋の境から峠の峰まで道みち普請ふしんよなし。尾州からはもう宿割しゆくわりの役人まで見えていますぞ。道造りの見分けんぶん、見分で、みんな

そがしい思いをしましたに。」

うわさのある名古屋の藩主（尾張慶勝^{よしかつ}）の江戸出府は三月のはじめに迫っていた。来たる日の通行の混雑を思わせるような街道を踏んで、一同石屋の坂あたりまで帰って行くと、村の宿役人仲間がそこに待ち受けるのにあつた。問屋^{といや}の九太夫^{くだゆう}をはじめ、梼田屋^{ますだや}の儀助、蓬萊屋^{ほうらいや}の新七、梅屋^{うめや}の与次衛門^{よじえもん}、いずれも袴^{かみしも}着用^{あまがさ}に雨傘^{あまがさ}をさしかけて松雲の一行を迎えた。

当時の慣例として、新任職が村へ帰り着くところは寺の山門ではなくて、まず本陣の玄関だ。出家の身としてこんな歓迎を受けることはあながち松雲の本意ではなかつたけれども、万事は半蔵が父の計らいに任せた。付き添いとして来た中津川の老和尚の注意もあつて、松雲^{しょうぞく}が装束^{しょうぞく}を着かえたのも本陣の一室であつた。乗り物^{さきばこ}、先箱^{だいがさ}、台傘^{だいがさ}で、この新任職^{きちざえもん}が吉左衛門の家を

出ようとすると、それを見ようとする村の子供たちはぞろぞろ寺の道までついて来た。

万福寺は小高い山の上にある。門前の墓地に茂る杉の木立ちの間を通して、傾斜を成した地勢に並び続く民家の板屋根を望むことのできるような位置にある。松雲が寺への帰参は、沓ばきで久しぶりの山門をくぐり、それから方丈へ通つて、一礼座了で式が済んだ。わざとばかりの饅飴振舞のあとには、隣村の寺方、村の宿役人仲間、それに手伝いの人たちなどもそれぞれ引き取つて帰つて行つた。

「和尚さま。」

と言つて松雲のそばへ寄つたのは、長いことここに身を寄せている寺男だ。その寺男は主人が留守中のことを思い出し顔に、「よつぽど伏見屋の金兵衛さんには、お礼を言わつせるがいい。

お前さまがお留守の間にもよく見舞いにおいでで、本堂の廊下には大きな新しい太鼓が掛かったし、すっかり屋根の葺き替えもできました。あの萱かやだけでも、お前さま、五百二十把ばからかかりましたよ。まあ、おれは何からお話していいか。村へ大風の来た年には鐘つき堂が倒れる。そのたびに、金兵衛さんのお骨折りも一通りじゃあらすか。」

松雲はうなずいた。

諸国を遍歴して来た目でこの境内を見ると、これが松雲には馬籠の万福寺であつたかと思われるほど小さい。長い留守中は、ここへ来て世話をしてくれた隣村の隠居和尚任せで、なんとなく寺も荒れて見える。方丈には、あの隠居和尚が六年もながめ暮らしたような古い壁もあつて、そこには達磨だるまの画像が帰参の新就職を迎え顔に掛かつていた。

「寺に大地小地なく、住持じゅうじに大地小地あり。」

この言葉が松雲を励ました。

松雲は周囲を見回した。彼には心にかかるかざかざのことがあつた。当時の戸籍簿とも言うべき宗門帳は寺で預かつてある。あの帳面もどうなっているか。位牌堂いはいどうの整理もどうなっているか。数えて来ると、何から手を着けていいかもわからないほど種々雑多な事が新任職としての彼を待っていた。毎年の献鉢けんぱちを例とする開山忌かいざんきの近づくことも忘れてはならなかつた。彼は考えた。ともかくもあすからだ。朝早く身を起こすために何かの目的を立てることだ。それには二人ふたりの弟子でしや寺男任せでなしに、まず自分で庭の鐘楼に出て、十八声の大鐘を撞つくことだと考えた。

翌朝は雨もあがつた。松雲は夜の引き明けに床を離れて、山

から来る冷たい清水しみずに顔を洗った。法鼓ほうこ、朝課ちようかはあと回しとして、まず鐘楼の方へ行つた。恵那山えなさんを最高の峰さんかくとしてこの辺一帯の村々を支配して立つような幾つかの山嶽も、その位置からは隠れてよく見えなかつたが、遠くかすかに鳴きかわす鶏の声を谷の向こうに聞きつけることはできた。まだ本堂の前の柵ひいらぎも暗い。その時、朝の空気の静かさを破つて、澄んだ大鐘の音が起こつた。力をこめた松雲の撞つき鳴らす音だ。その音は谷から谷を伝い、畠はたけから畠はを匍はつて、まだ動きはじめない村の水車小屋の方へも、半分眠っているような馬小屋の方へもひびけて行つた。

ある朝、半蔵は妻のそばに目をさまして、街道を通る人馬の物音を聞きつけた。妻のお民は、と見ると、まだ娘のような顔をして、寝心地ねごちのよい春の暁を寝惜しんでいた。半蔵は妻の目をさませまいとするように、自分ひとり起き出して、新婚後ふたり二人の居間となつてゐる本陣の店座敷の戸を明けて見た。

旧暦三月はじめのめずらしい雪が戸の外へ来た。暮れから例年になく暖かさだと言われたのが、三月を迎えてかえつてその雪を見た。表庭の塀へいの外は街道に接して、雪を踏んで行く人馬の足音がする。半蔵は耳を澄ましながらその物音を聞いて、かねてうわさのあつた尾張藩主の江戸出府がいよいよ実現されることを知つた。

「尾州の御先荷おさきにがもうやつて来た。」
と言つて見た。

宿継ぎ差立さしたてについて、尾張藩から送られて来た駄賃だちんがね金が馬籠の宿だけでも金四十一両に上った。駄賃金は年寄役金兵衛が預かったが、その金高を聞いただけでも今度の通行のかなり大げさなものであることを想像させる。半蔵はうすうす父からその話を聞いて知っていたので、部屋へやにじつとしていられなかつた。台所に行つて顔を洗うとすぐ雪の降る中を屋外そとへ出て見ると、会所では朝早くから継立つぎたてが始まる。あとからあとからと坂路さかみちを上つて来る人足たちの後ろには、鈴の音に歩調を合わせるような荷馬の群れが続く。朝のことで、馬の鼻息は白い。時には勇ましいいななきの声さえ起こる。村の宿役人仲間でも一番先に家を出て、雪の中を奔走していたのは問屋の九太夫であつた。

前の年の六月に江戸湾を驚かしたアメリカの異国船は、また

正月からあの沖合いにかかっているところで、今度は四隻の軍艦を八、九隻に増して来て、武力にも訴えかねまじき勢いで、幕府に開港を迫っているとのうわさすら伝わっている。全国の諸大名が江戸城に集まって、交易を許すか許すまいかの^{だいひょうじょう}大評定も始まろうとしているという。半蔵はその年の正月二十五日に、尾州から江戸送りの^{おおづつ}大筒の大砲や、軍用の長持が二十二^{さお}棹もこの街道に続いたことを思い出し、一人持ちの荷物だけでも二十一^か荷もあつたことを思い出して、目の前を通る人足や荷馬の群れをながめていた。

半蔵が家の方へ^{もと}戻って行つて見ると、吉左衛門はゆつくりしたもので、炉ばたで朝茶をやっていた。その時、半蔵はきいて見た。

「お父^{とつ}さん、けさ着いたのはみんな尾州の荷物でしょう。」

「そうさ。」

「この荷物は幾日ぐらい続きましたよう。」

「さあ、三日も続くかな。この前に唐人船とうじんぶねの来た時は、上のももの下のももの大あわてさ。今度は戦争にはなるまいよ。何にしても尾州の殿様も御苦労さまだ。」

馬籠の本陣親子が尾張藩主おわりに特別の好意を寄せていたのは、ただあの殿様が木曾谷きそだにや尾張地方の大領主であるというばかりではない。吉左衛門には、時に名古屋まで出張するおりなぞには藩主のお目通りを許されるほどの親しみがあつた。半蔵は半蔵で、『神祇宝典じんぎ』や『類聚日本紀るいじゆうにほんぎ』などをえらんだ源敬公以来の尾張藩主であるということが、彼の心をよろこばせたのであつた。彼はあの源敬公の仕事を水戸みとの義公ぎこうに結びつけて想像し、『大日本史』の大業を成就したのもそういう義公であり、僧の

契沖けいちゆうをして『万葉代匠記だいにしやうぎ』をえらばしめたのもこれまた同じ人であることを想像し、その想像を儒仏の道がまだこの国に渡つて来ない以前のまじりけのない時代にまでよく持つて行つた。彼が自分の領主を思ふ心は、当時の水戸の青年がその領主を思ふ心に似ていた。

その日、半蔵は店座敷にこもつて、この深い山の中に住むさみしさの前に頭をたれた。障子の外には、塀へいに近い松の枝をすべる雪の音がする。それが恐ろしい響きを立てて庭の上に落ちる。街道から聞こえて来る人馬の足音も、絶えたかと思つてまた続いた。

「こんな山の中にばかり引つ込んでいると、なんだかおれは気でも違いそうだ。みんな、のんきなことを言つてるが、そんな時世じゃない。」

と考えた。

そこへお民が来た。お民はまだ十八の春を迎えたばかり、妻籠本陣への里帰りを済ましたころから眉を剃り落としていて、いくらか顔のかたちはちがったが、動作は一層生き生きとして来た。

「あなたの好きなねぶ茶をいれて来ました。あなたはまた、何をそんなに考えておいでなさるの。」

とお民がきいた。ねぶ茶とは山家で手造りにする飲料である。

「おれか。おれは何も考えていない。ただ、こうしてぼんやりしている。お前とおれと、二人一緒になつてから百日の余にもなるが——そうだ、百日どころじゃないや、もう四か月にもなるんだ——その間、おれは何をしていたかと思うようだ。阿爺の好きな煙草たばこの葉を刻んだことと、祖母おばあさんの看病をしたこと

と、まあそれくらいのものだ。」

半蔵は新婚のよろこびに酔つてばかりもいなかつた。学業の怠りを嘆くようにして、それをお民に言つて見せた。

「わたしはお節句のことを話そうと思うのに、あなたはそんなに考えてばかりいるんですもの。だって、もう三月は来てるじゃないませんか。この御通行が済むまでは、どうすることもできないじゃありませんか。」

新婚のそもそものは、娘の昔に別れを告げたばかりのお民にとつて、むしろ苦痛でさえもあつた。それが新しいよろこびに変わつて来たところから、とかく店座敷を離れかねている。いつのまにか半蔵の膝はひざお民の方へ向いた。彼はまるで尻餅しりもちでもついたように、後ろ手を畳の上に落として、それで身をささえながら、妻籠から持つて来たという記念の雛人形ひなの話などをするお民の

方をながめた。手織り縞じまでこそあれ、当時の風俗のように割合に長くひいた裾すその着物は彼女に似合つて見える。剃り落とした眉まゆのあとも、青々として女らしい。半蔵の心をよろこばせたのは、ことにお民の手だ。この雪に燃えているようなその娘らしい手だ。彼は妻と二人ぎりできて、その手に見入るのを楽しみに思つた。

実に突然に、お民は夫のそばですすり泣きを始めた。

「ほら、あなたはよくそう言うじゃありませんか。わたしに学問の話などをしても、ちつともわけがわからんなんで。そりゃ、あのお母さんつか（姑しゅうとめ、おまん）のまねはわたしにはできない。今まで、妻籠の方で、だれもわたしに教えてくれる人はなかつたんですもの。」

「お前は機はたでも織つていてくれれば、それでいいよ。」

お民は容易にすすり泣きをやめなかつた。半蔵は思いがけない涙を聞きつけたというふうに、そばへ寄つて妻をいたわろうとすると、

「教えて。」

と言いながら、しばらくお民は夫の膝ひざに顔をうずめていた。

ちようど本陣では隠居が病みついているころであつた。あの婆ばあさんもう老衰の極度にあつた。

「おい、お民、お前は祖母おばあさんをよく看みてくれよ。」

と言つて、やがて半蔵は隠居の臥ねている部屋へやの方へお民を送り、自分でも気を取り直した。

いつでも半蔵が心のさみしいおりには、日ごろ慕つている平田篤胤あつたねの著書を取り出して見るのを癖くせのようにしていた。『靈たまの真柱まはしら』、『玉だすき』、それから講本の『古道大意』などは読んで

も読んでも飽きるということを知らなかつた。大判の薄藍色の表紙から、必ず古紫の糸で綴じてある本の装幀までが、彼には好ましく思われた。『静の岩屋』、『西籍概論』の筆記録から、三百部を限りとして絶版になつた『毀誉相半ばする書』のような気吹の舎の深い消息までも、不便な山の中で手に入れてゐるほどの熱心さだ。平田篤胤は天保十四年に没している故人で、この黒船騒ぎなどをもとより知りようもない。あれほどの強さに自国の学問と言語の独立を主張した人が、嘉永安政の代に生きるとしたら——すくなくもあの先輩はどうするだろうとは、半蔵のような青年の思いを潜めなければならぬことであつた。

新しい機運は動きつつあつた。全く氣質を相異にし、全く傾向を相異にするようなものが、ほとんど同時に踏み出そうとしていた。長州萩の人、吉田松陰は当時の嚴禁たる異国への密

航を企てて失敗し、信州松代まつしろの人、佐久間象山さくましやうざんはその件に連座して獄に下つたとのうわさすらある。美濃の大垣おおがきあたりに生まれた青年で、異国の学問に志し、遠く長崎の方へ出発したという人の話なぞも、決してめずらしいことではなくなつた。

「黒船。」

雪で明るい部屋へやの障子に近く行つて、半蔵はその言葉を繰り返して見た。遠い江戸湾のかなたには、実に八、九艘そうもの黒船が来てあの沖合いに掛かっていることを胸に描いて見た。その心から、彼は尾張藩主の出府も容易でないと思つた。

木曾きそ寄せの人足七百三十人、伊那いなの助郷すけごう千七百七十人、この人数合わせて二千五百人を動かすほどの大通行が、三月四日に

馬籠の宿を経て江戸表へ下ることになった。宿場に集まった馬の群れだけでも百八十四、馬方百八十人にも上った。

松雲和尚は万福寺の方にいて、長いこと留守にした方丈にもろくろく落ちつかないうちに、三月四日を迎えた。前の晩に来たはげしい雷鳴もおさまり、夜中ごろから空も晴れて、人馬の継ぎ立てはその日の明け方から始まった。

尾張藩主が出府と聞いて、寺では徒弟僧とていそうも寺男もじつとしない。大領主のさかんな通行を見ようとして裏山越しに近在から入り込んで来る人たちは、門前の石段の下に小径こみちの続いている墓地の間を急ぎ足に通る。

「お前たちも行って殿様をお迎えするがいい。」

と松雲は二人の弟子でしにも寺男にも言った。

旅にある日の松雲はかなりわびしい思いをして来た。京都の

宿で患わずらいついた時は、書きにくい手紙を伏見屋の金兵衛にあてて、余分な路銀の心配までかけたこともある。もし無事に行脚あんぎゃの修業を終わる日が来たら、村のためにも役に立とう、貧しい百姓の子供をも教えよう、そう考えて旅から帰つて来た。周囲にある空気のおわただしさ。この動揺の中に僧侶そうりよの身をうけて、どうして彼は村の幼く貧しいものを育てて行こうかとさえ思つた。

「和尚さま。」

と声をかけて裏口からはいつて来たのは、日ごろ、寺へ出入りの洗濯せんたくばあ婆さんだ。腰に鎌かまをさし、※草履わらぞうりをはいて、男のようがんにょうな頑丈な手をしている山家の女だ。

「お前さまはお留守居かなし。」

「そうさ。」

「おれは今まで畠はたけにいたが、餅草もちぐさどころじゃあらずか。きょうのお通りは正五しょういつつ時どきだけな。殿様は下町の笹屋ささやの前まで馬のに騎のつておいでで、それから御本陣までお歩行ひろいだけな。お前さまも出て見さつせれや。」

「まあ、わたしはお留守居だ。」

「こんな日にお寺に引つ込んでいるなんて、そんなお前さまのような人があらずか。」

「そう言うものじゃないよ。用事がなければ、親類へも行かない。それが出家の身なんだもの。わたしはお寺の番人だ。それでたくさんだ。」

婆おはぐろさんは鉄漿おはぐろのはげかかった半分黒い歯を見せて笑い出した。庭の土間での立ち話もそこそこにして、また裏口から出て行つ

た。

やがて正五つ時も近づくころになると、寺の門前を急ぐ人の足音も絶えた。物音一つしなかつた。何もかも鳴りをひそめて、静まりかえつたようになった。ちょうど例年より早くめずらしい陽気は谷間に多い花の蕾をつぼみふくらませている。馬に騎りかえて新茶屋あたりから進んで来る尾張藩主が木曾路の山ざくらかげに旅の身を見つけようというころだ。松雲は戸から外へ出ないまでも、街道の両側に土下座する村民の間を縫ってお先案内をうけたまわる問屋の九太夫をも、まのあたり藩主を見ることを光栄としてありがたい仕合わせだとさきさきやき合っているよな宿役人仲間をも、うやうやしく大領主を自宅に迎えようとする本陣親子をも、ありありと想像で見ることができた。

方丈もしんかんとしていた。まるでそこいらはからつぽのよ

うになつていた。松雲はただ一人黙然として、古い壁にかかる
達磨だるまの画像の前にすわりつづけた。

三

なんとなく雲脚くもあしの早さを思わせるような諸大名諸公役の往来
は、それからも続き続いた。尾張藩主の通行ほど大がかりで
はないまでも、土州としゅう、雲州うんしゅう、讃州さんしゅうなどの諸大名は西から。長崎奉
行永井岩之丞ながいいわのじょうの一行は東から。五月の半ばには、八百人の同勢
を引き連れた肥後ひごの家老長岡監物ながおかげんもつの一行が江戸の方から上つて
来て、いずれも鉄砲持参で、一人ずつ腰弁当でこの街道を通つ
た。

仙洞御所せんとうごしよの出火のうわさ、その火は西陣にしじんまでの町通りを焼き

尽くして天明年度の大火よりも大変だといううわさが、京都方面から伝わって来たのもそのころだ。

この息苦しさの中で、年若な半蔵などが何物かを求めてやまないのにひきかえ、村の長老たちの願いとしてしていることは、結局現状の維持であつた。黒船騒ぎ以来、諸大名の往来は激しく、伊那いなあたりから入り込んで来る助郷すけごうの数もおびただしく、その弊害は靦面てきめんに飲酒賭博とばくの流行にあらわれて来た。庄屋しょうやとしての吉左衛門が宿役人らの賛成を得て、賭博嚴禁ということを出し、それを村民一同に言い渡したのも、その年の馬市が木曾福島の方で始まろうとするころにあたる。

「あの時分はよかつた。」

年寄役の金兵衛が吉左衛門の顔を見るたびに、よくそこへ持ち出すのも、「あの時分」だ。同じ駅路の記憶につながれてい

る二人の隣人は、まだまだ徳川の代が平和であつた時分のことを忘れかねている。新茶屋に建てた翁塚おきなづか、伏見屋の二階に催した供養の俳諧はいかい、蓬萊屋ほうらいやの奥座敷でうんと食つたアトリ三十羽に茶漬ちやづけ三杯——「あの時分」を思い出させるようなものは何かにつけ恋しかつた。この二人には、山家が山家でなくなつた。街道はいとわしいことで満たされて来た。もつとゆつくり隣村の湯舟沢や、山口や、あるいは妻籠つまごからの泊まり客を家に迎え、こちらからも美濃の落合の祭礼や中津川あたりの狂言を見に出かけて行って、すくなくも二日や三日は泊まりがけで親戚知人しんせきの家の客となつて来るようではなくては、どうしても二人には山家のような気がしなかつた。

その年の祭礼狂言をさかんにするといふことが、やがて馬籠の本陣で協議された。組頭庄兵衛もこれには賛成した。ちよう

ど村では金兵衛の胆煎りきまひりで、前の年の十月あたりに新築の舞台普請をほぼ終わっていた。付近の山の中に適当な普請木ふしんぎを求めるところから、舞台の棟上げむなあげ、投げ餅もちの世話まで、多くは金兵衛の骨折りでできた。その舞台は万福寺の境内に近い裏山の方に造られて、もはや楽しい秋の祭りの日を待つばかりになっていった。

この地方で祭礼狂言を興行する歴史も古い。それだけ土地の人たちが歌舞伎かぶきそのものに寄せている興味も深かった。当時の南信のうびから濃尾地方へかけて、演劇の最も発達した中心地は、近くは飯田いいた、遠くは名古屋であつて、市川いちかわ海老蔵えびぞうのような江戸の役者が飯田の舞台を踏んだこともめずらしくない。それを聞くたびに、この山の中に住む好劇家連は女中衆まで引き連れて、大平峠おおだいらとうげを越しても見に行つた。あの蘭あいらぎ、広瀬あたりから伊那の

谷の方へ出る深い森林の間も、よい芝居しばいを見たいと思う男や女には、それほど遠い道ではなかったのである。金兵衛もその一人だ。彼は秋の祭りの来るのを待ちかねて、その年の閏七月うるしづにしばらく村を留守にした。伏見屋もどうしたろう、そう言つて吉左衛門などがうわきをしているところへ、豊川とよかわ、名古屋、小牧こまき、御嶽おんたけ、大井おおいを経て金兵衛親子が無事に帰つて来た。そのおりの土産話みやげばなしが芝居好きな土地の人たちをうらやましがらせた。名古屋の若宮の芝居では八代目市川團十郎が一興行を終わつたところであつたけれども、橘町たちばなちようの方には同じ江戸の役者三桝大五郎みます、関三十郎、大谷広右衛門などの一座がちようど舞台に上るころであつたという。

九月も近づいて来るころには、村の若いものは祭礼狂言のけいこに取りかかった。荒町からは十一人も出て舞台へ通う村の

道を造った。かねて金兵衛が秘蔵子息むすこのために用意した狂言用の大小の刀も役に立つ時が来た。彼は鶴松つるまつばかりでなく、上の伏見屋の仙十郎せんじゅうろうをも舞台に立たせ、日ごろの溜飲りゅういんを下げようとした。好ましい鬘かすらを子にあてがうためには、一分二朱ふぶしゆぐらいの金は惜しいとは思わなかった。

狂言番組。式三番叟しきさんばそう。碁盤太平記ごばんたいへいき。白石噺三の切りしらいしばなし。小倉色紙おぐらしきし。

最後にもと戻り籠かご。このうち式三番叟と小倉色紙に出る役と、その二役は仙十郎が引きうけ、戻り籠に出る難波治郎作なにわじろさくの役は鶴松がすることになった。金兵衛がはじめて稽古場けいこばへ見物に出かけるころには、ともかくも村の若いものでこれだけの番組を作るだけの役者がそろった。

その年の祭りの季節には、馬籠以外の村々でもめずらしいにぎわいを呈した。各村はほとんど競争の形で、神輿みこしを引き出そうとしていた。馬籠でさかんにやると言えば、山口でも、湯舟沢でも負けてはいないというふうで。中津川での祭礼狂言は馬籠よりも一月ほど早く催されて、そのおりは本陣のおまんも仙十郎と同行し、金兵衛はまた吉左衛門とそろって押しかけて行つて来た。目にあまる街道一切の塵埃ほこりツぽいことも、このにぎやかな祭りの気分には埋めうずられそうになつた。

そのうちに、名古屋の方へ頼んで置いた狂言衣裳いしやうの荷物が馬で二駄だも村に届いた。舞台へ出るけいこ最中の若者らは他村にひけ敗を取るまいとして、振付ふりつけは飯田の梅蔵に、唄うたは名古屋の治兵衛じへえに、三味線しませんは中村屋鍵蔵かぎぞうに、それぞれ依頼する手はずをさだめた。祭りの楽しさはそれを迎えた当日ばかりでなく、それを迎

えるまでの日に深い。浄瑠璃方じょうるりかたがすでに村へ入り込んだとか、化粧方が名古屋へ飛んで行ったとか、そういううわさが伝わるだけでも、村の娘たちの胸にはよろこびがわいた。こうなると、金兵衛はじつとしていられない。毎日のように舞台へ詰めて、さじき 棧敷をかける世話までした。伏見屋の方でも鶴松に初舞台を踏ませるとあつて、お玉の心づかいは一通りでなかつた。中津川からは親戚しんせきの女まで来て衣裳ごしらえを手伝つた。

「きょうもよいお天気だ。」

そう言つて、金兵衛が伏見屋の店先から街道の空を仰いだころは、旧曆九月の二十四日を迎えた。例年祭礼狂言の初日だ。朝早くから金兵衛は髪結いの直次を呼んで、年齢とし相応の鬘まげに結わせた。五十八歳まで年寄役を勤続して、村の宿役人仲間での年長者と言われる彼も、白い元結もとゆいで堅く鬘の根を締めた時は、

さすがにさわやかな、祭りの日らしい心持ちに返った。剃り立てた顎のあたりも青く生き生きとして、平素の金兵衛よりもかえって若々しくなった。

「鶴、うまくやっておくれよ。」

「大丈夫だよ。お父さん、安心しておいでよ。」

伏見屋親子はこんな言葉をかわした。

そこへ仙十郎もちよつと顔を出しに来た。金兵衛はこの義理ある甥の方を見た時にも言った。

「仙十郎しつかり頼むぜ。式三番と言えば、お前、座頭の勤める役だぜ。」

仙十郎は美濃の本場から来て、上の伏見屋を継いだだけに、こうした祭りの日などには別の人かと見えるほど快活な男を發揮した。彼はこんな山の中に惜しいと言われるほどの美貌で、そ

の享樂的な氣質は造り酒屋の手伝いなぞにはあまり向かなかつた。

「さあ。きょうは、うんと一つあばれてやるぞ。村の舞台が抜けるほど踊りぬいてやるぞ。」

仙十郎の言い草だ。

まだ狂言の蓋ふたもあけないうちから、金兵衛の心は舞台の楽屋の方へも、棧敷さじきの方へも行つた。だんだら模様の烏帽子えぼしをかぶり、三番叟さんばそうらしい寛濶かんかつな狂言の衣裳をつけ、鈴を手にした甥おいの姿が、彼の目に見えて来た。戻り籠もどに出る籠かき姿の子が杖つえでもついで花道にかかる時に、棧敷の方から起こる喝采かつさいは、必ず「伏見屋」と来る。そんな見物の掛け声まで、彼の耳の底に聞こえて来た。

「ほんとに、おれはこんなばかな男だ。」

金兵衛はそれを自分で自分に言つて、束にして掛けた杉すぎの葉のしるしも酒屋らしい伏見屋の門口を、出たりはいつたりした。

三日続いた狂言はかなりの評判をとつた。たとい村芝居でもかしやく仮借はしなかつたほど藩の検閲は嚴重で、風俗壞乱、その他の取り締まりにと木曾福島の役所の方から来た見届けみびきよう奉行なども、狂言の成功を祝つて引き取つて行つたくらいであつた。

いたるところの囲炉裏いろりばたでは、しばらくこの狂言の話で持ち切つた。何しろ一年に一度の楽しい祭りのことで、顔だちから仕草しぐさから衣裳まで三拍子そろつた仙十郎が三番叟の美しかつたことや、十二歳で初舞台を踏んだ鶴松が難波治郎作のいたいけであつたことなどは、村の人たちの話の種になつて、そろそ

ろ大根引きの近づくころになつても、まだそのうわさは絶えなかつた。

旧曆十一月の四日は冬至とうじの翌日である。多事な一年も、どうやら滞りなく定例の恵比須講えびすこうを過ぎて、村では冬至を祝うまでにこぎつけた。そこへ地震だ。あの家々に簾すだれを掛けて年寄りから子供まで一緒になつて遊んだ祭りの日から数えると、わずか四十日ばかりの後に、いつやむとも知れないようなそんな地震が村の人たちを待つていようとは。

吉左衛門の家では一同裏の竹藪たけやぶへ立ち退いた。おまんも、お民も、皆足袋たびはだし跣足で、半蔵に助けられながら木小屋の裏に集まつた。その時は、隠居はもはやこの世にいなかった。七十三の歳としまで生きたあのおばあさんも、孫のお民が帯祝いの日にあわずじまいに、ましてお民に男の子の生まれたことも、生まれる間

もなくその子の亡なくなったことも、そんな慶事と不幸とがほとんど同時にやつて来たことも知らずじまいに、その年の四月にはすでに万福寺の墓地の方に葬られた人であつた。

「あなた、遠くへ行かないでくださいよ。皆と一緒にいてくださいよ。」

とおまんが吉左衛門のことを心配するそばには、産後三十日あまりにしかならないお民が青ざめた顔をしていた。また揺れて来たと言うたびに、下男の佐吉も二人ふたりの下女までも、互いに顔を見合わせて目の色を変えた。

太い青竹の根を張った藪やぶの中で、半蔵は帯を締め直した。父と連れだつてそこいらへ見回りに出たころは、本陣の界限かいわいに住むもので家の中にいるものはほとんどなかった。隣家のことも気にかかつて、吉左衛門親子が見舞いに行くと、伏見屋でもお

玉や鶴松などは舞台下の日刈小屋の方に立ち退いたあとだった。さすがに金兵衛はおちついたもので、その不安の中でも下男の一人を相手に家に残つて、京都から来た飛脚に駄賃を払つたり、判取り帳をつけたりしていた。

「どうも今年ことしは正月の元日から、いやに陽気が暖かで、おかしいおかしいと思つていましたよ。」

それを吉左衛門が言い出すと、金兵衛も想い当たるように、

「それさ。元日に草履ぞうりばきで年始が勤まつたなんて、木曾きそじゃ

聞いたこともない。おまけに、寺道の向こうに椿つばきが咲き出す、

若餅わかもちでも搗つこうという時分に蓬よもぎが青々としてる。あれはみんな

この地震の来る知らせてしたわい。なにしろ、吉左衛門さん、

吾家うちじゃ仙十郎の披露ひろうを済ましたばかりで、まあおかげであれ

も組頭くみがしらのお仲間入りができた。わたしも先祖への顔が立った、

そう思つて祝いの道具を片づけているところへ、この地震でしよう。^{さるどし}」

「申年の善光寺の地震が大きかったなんて言つたつてとても比べものにはなりませんまいよ、ほら、^{とらどし}寅年六月の地震の時だつて、こんなじゃなかつた。」

「いや、こんな地震は前代未聞にも、なんにも。」

とりあえず宿役人としての吉左衛門や金兵衛が相談したこと
は、老人女子供以外の町内のものを一定の場所に集めて、火災盗
難等からこの村を護^{まも}ることであつた。場所は問屋と伏見屋の前
に決定した。そして村民一同お日待^{ひまち}をつとめることに申し合
わせた。天変地異に驚く山の中の人たちの中には、春以来江戸表
や浦賀辺を騒がしたアメリカの船をも、長崎から大坂の方面にた
びたび押し寄せたというオロシヤの船をも、さては仙洞御所^{せんとうごしよ}の

出火までも引き合いに出して、この異変を何かの前兆に結びつけるものもある。夜一夜、だれもまんじりとしなかつた。半蔵もその仲間に加わつて、産後の妻の身を案じたり、竹藪たけやぶや背戸田せどたに野宿する人たちのことを思つたりして、太陽の登るのを待ち明かした。

翌日は雪になつたが、揺り返しはなかなかやまなかつた。問屋、伏見屋の前には二組に分れた若者たちが動いたり集まつたりして、美濃の大井や中津川辺は馬籠まじめよりも大地震だとか、隣宿の妻籠つまごも同様だとか、どこから聞いて来るともなくいろいろなうわさを持つては帰つて来た。恵那山えなさん、川上山かおれやま、鎌沢山かまざわやまのあなたには大崩れおおくずができて、それが根の上あたりから望まれることを知らせに来るのも若い連中だ。その時になると、まれに見るにぎわいだったと言われた祭りの日のよろこびも、狂言の評

判も、すべて地震の騒ぎの中に浚さらわれたようになった。

揺り返し、揺り返しで、不安な日がそれから六日も続いた。宿しゆくでは十八人ずつの夜番が交替に出て、街道から裏道までを警戒した。祈祷きとつのためと言つて村の代参を名古屋の熱田あつた神社へも送つた。そのうちに諸方からの通知がぼつぽつ集まつて来て、今度の大地震が関西地方にことはげに劇はげしかつたこともわかつた。東海道岡崎宿おかざきしゆくあたりへは海嘯つなみがやつて来て、新井あらいの番所などは海嘯つなみのために浚さらわれたこともわかつて来た。

熱田からの代参の飛脚が村をさして帰つて来たころには、怪しい空の雲行きもおさまり、そこいらもだいぶ穏やかになつた。吉左衛門は会所の定使じようづかいに言いつけて、熱田神社祈祷の札を村じゆ

う軒別に配らせていると、そこへ金兵衛の訪ねて来るのにあつた。

「吉左衛門さん、もうわたしは大丈夫と見ました。時に、あすは十一月の十日にもなりますし、仏事をしたいと思つて、お茶湯ちやとうのしたくに取りかかりましたよ。御都合がよかつたら、あなたにも出席していただきたい。」

「お茶湯とは君もよいところへ気がついた。こんな時の仏事は、さぞ身にしみるだろうねえ。」

その時、金兵衛は一通の手紙を取り出して吉左衛門に見せた。舌代ぜつだいとして、病中の松雲和尚おしようから金兵衛にあてたものだ。それには、伏見屋の仏事にも弟子でしを代理として差し出すという詫わびからはじめて、こんな非常時には自分のようなものでも村の役に立ちたいと思ひ、行脚あんぎやの旅にあるころからそのことを心がけ

て帰つて来たが、あいにくと病に臥ふして、それでできないのが残念だという意味を書いてある。寺でも経堂その他の壁は落ち、土蔵にもエミ（亀裂きれつ）を生じたが、おかげで一人ひとりの怪我けがもなくて済んだと書いてある。本陣の主人へもよろしくと書いてある。

「いや、和尚さまもお堅い、お堅い。」

「なにしろ六年も行脚に出ていた人ですから、旅の疲れぐらいは出ましようよ。」

それが吉左衛門の返事だった。

「お宅では。」

「まだみんな裏の竹藪たけやぶです。ちよつと、おまんにもあつてやつてください。」

そう言つて吉左衛門が金兵衛を誘つて行つたところは、おそ

ろしげに壁土の落ちた土蔵のそばだ。木小屋を裏へ通りぬけると、暗いほど茂った竹藪がある。その辺に仮小屋を造りつけ、戸板で囲って、たいせつな品だけは母屋もやの方から運んで来てある。そこにおまんや、お民なぞが避難していた。

「わたしはお民さんがお気の毒でならない。」と金兵衛は言った。「妻籠つまじからお嫁にいらしって、翌年にはこの大地震なんて全くやり切れませんねえ。」

おまんはその話を引き取って、「お宅でも、皆さんお変わりもありませんか。」

「え、まあおかげで。たった一人おもしろい人物がいます、これだけは無事とは言えないかもしれません。実は吾家うちで使ってる源吉のやつですが、この騒ぎの中で時々どこかへいなくなってしまう。あれはすこし足りないですよ。あれはアメリカと

いう人相ですよ。」

「アメリカという人相はよかった。金兵衛さんの言いそうなことだ。」

と吉左衛門もかたわらにいて笑った。

こんな話をしているところへ、生家さとの親たちを見に来る上の伏見屋のお喜佐、半蔵夫婦を見に来る乳母うばのおふき婆ばあさん、いずれも立ち退のき先からそこへ一緒になった。主従の關係もひどくやかましかった封建時代に、下男や下女までそこへ膝ひざを突き合わせて、目上目下の区別もなく、互いに食うものを分け、互いに着るものを心配し合う光景は、こんな非常時でなければ見られなかった図だ。

村民一同が各自の家に帰って寝るようになったのは、ようやぐ十一月の十三日であった。はじめて地震が来た日から数えて

実に十日目に当たる。夜番に、見回りに、ごく困窮な村民の救恤きゆうじゆつに、その間、半蔵もよく働いた。彼は伏見屋から大坂二地震の絵図などを借りて来て、それを父と一緒に見たが、震災の実際はうわさよりも大きかった。大地震の区域は伊勢いせの山田辺から志州ししゅうの鳥羽とばにまで及んだ。東海道の諸宿でも、出火、潰つぶれ家など数えきれないほどで、宮みやの宿しゆくから吉原よしわらの宿までの間に無難なところはわずかに二宿しかなかった。

やがて、その年初めての寒さも山の上へやって来るようになって。一切を沈黙させるような大雪までが十六日の暮れ方から降り出した。その翌日は風も立ち、すこし天気の良い時もあったが、夜はまた大雪で、およそ二尺五寸も積もった。石を載せた山家の板屋根は皆さびしい雪の中に埋うずもれて行つた。

「九太夫さん、どうもわたしは年回りがよくないと思う。」

「どうぞでしょう、馬籠でも年を祭り替えることにしては。」

「そいつはおもしろい考えだ。」

「この街道筋でも祭り替えるようなうわきで、村によつてはもう松を立てたところもあるそうです。」

「早速、さっそく年寄仲間や組頭の連中を呼んで、相談して見ますか。」
本陣の吉左衛門と問屋の九太夫とがこの言葉をかわしたのは、村へ大地震の来た翌年安政二年の三月である。

流言。流言には相違ないが、その三月は実に不吉な月で、悪病が流行するか、大風が吹くか、大雨が降るかないし大饑饉だいききんが来るか、いずれ天地の間に恐ろしい事が起こる。もし年を祭り替えるなら、その災難からのがれることができる。こんなうわ

さがどこの国からともなくこの街道に伝わつて来た。九太夫が言い出したこともこのうわさからで。

やがて宿役人らが相談の結果は村じゅうへ触れ出された。三月節句の日を期して年を祭り替えること。その日およびその前日は、農事その他一切の業務を休むこと。こうなると、流言の影響も大きかった。村では時ならぬ年越しのしたくで、暮れのような餅搗もちつきの音が聞こえて来る。松を立てた家もちらほら見える。「そえご」と組み合わせた門松の大きなのは本陣の前にも立てられて、日ごろ出入りの小前こまえのものは勝手の違った顔つきでやつて来る。その中の一人は、百姓らしい手をもみもみ吉左衛門にたずねた。

「大旦那おおだんな、ちよつくら物を伺いますが、正月を二度すると言えば、年を二つ取ることだざら。村の衆の中にはそんなことを言つ

て、たまげてるものもあるわなし。おれの家じゃ、お前さま、去年の暮れに女の子が生まれて、まだ数え歳どし二つにしかならぬい。あれも三つと勘定したものかなし。」

「待つてくれ。」

この百姓の言うようにすると、吉左衛門自身は五十七、五十八と一時に年を二つも取つてしまう。伏見屋の金兵衛などは、一足飛びに六十歳を迎える勘定になる。

「ばかなことを言うな。正月のやり直しと考えたらいいじやないか。」

そう吉左衛門は至極しじくまじめに答えた。

一年のうちに正月が二度もやつて来ることになつた。まるでうそのように。気の早い連中は、屠蘇とそを祝え、雑煮ぞうにを祝えと言つて、節句の前日から正月のような気分になつた。当日は村民一同

夜のひきあけに氏神諏訪社すわしやへの参詣さんげいを済まして来て、まず吉例として本陣の門口に集まった。その朝も、吉左衛門は麻かみしものネ袴着用で、にこにこした目、大きな鼻、静かな口に、馬籠の駅長らしい表情を見せながら、一同の年賀を受けた。

「へい、大旦那おおだんな、明けましておめでとうございます。」

「あい、めでたいのい。」

これも一時の気休めであつた。

その年、安政二年の十月七日には江戸の大地震を伝えた。この山の中ひこねのものは彦根の早飛脚からそれを知つた。江戸表は七分通りつづれ、おまけに大火を引き起こして、大部分焼失したという。震災後一年に近い地方の人たちにとって、この報知しらせは全く他事ひとごとではなかつた。もつとも、馬籠のような山地でもかなりの強震を感じて、最初にどしんと来た時は皆屋外そとへ飛び出し

たほどであつた。それからの昼夜幾回とない微弱な揺り返しは、八十余里を隔てた江戸方面からの余波とわかつた。

江戸大地震の影響は避難者の通行となつて、次第にこの街道にもあらわれて来た。村では遠く江戸から焼け出されて来た人たちに物を与えるものもあり、またそれを見物するものもある。月も末になるころには、吉左衛門は家のものを集めて、江戸から届いた震災の絵図をひろげて見た。一鶯いちおうさいく斎国周画、あるいは芳綱よしつな画として、浮世絵師の筆になつた悲惨な光景がこの世ながらの地獄じごくのようにそこに描き出されている。下谷したやひろ広小路こうじから金龍山きんりゆうざんの塔までを遠見にして、町の空には六か所からも火の手が揚がつている。右に左にと逃げ惑う群衆は、京橋しほうぐら四方蔵から竹河岸たけがしあたりふかがわに続いている。深川方面ふかがわを描いたものは武家、町家いちめんの火で、煙につつまれた火見櫓ひのみやぐらも物すごい。目もくらむばかり

りだ。

半蔵が日ごろその人たちのことを想望していた水戸の藤田東湖、とだほうけん戸田蓬軒なども、この大地震の中に巻き込まれた。おそらく水戸ほど当時の青年少年の心を動かしたところはなかつたらう。しょうこうかん彰考館の修史、こうどうかん弘道館の学問は言うまでもなく、義公、武公、烈公のような人たちが相続いてその家に生まれた点で。御三家の一つと言われるほどの親藩でありながら、大義名分を明らかにした点で。『ひたちおび常陸帯』を書き、『かいてんしし回天詩史』を書いた藤田東湖はこの水戸をささえる主要な人物の一人として、少年時代の半蔵の目にも映じたのである。あの『せいぎ正氣の歌』などを諳誦した時の心は変わらぬにある。そういう藤田東湖は、水戸内部の動揺がようやくしげくなるうとするところに、開港か攘夷かじょういの舞台の序幕の中で、倒れて行つた。

「東湖先生か。せめてあの人だけは生かして置きたかった。」
と半蔵は考えて、あの藤田東湖の死が水戸にとつても大きな
損失であろうことを想つて見た。

やがて村へは庚申講こうしんこうの季節がやつて来る。半蔵はそのめつき
り冬らしくなつた空をながめながら、自分の二十五とじという歳も
むなしく暮れて行くことを思い、街道の片すみに立ちつくす時
も多かつた。

四

安政三年は馬籠まじめの万福寺で、松雲和尚おしろうが寺小屋を開いた年
である。江戸の大地震後一年目という年を迎え、震災のうわさも
やや薄らぎ、この街道を通る避難者も見えないころになると、

なんとなくそこいらは嵐あらしの通り過ぎたあとのようになつた。当時の中心地とも言うべき江戸の震災は、たしかに封建社会の空気を一転させた。嘉永かえい六年の黒船騒ぎ以来、続きが続いた一般人心の動揺も、震災の打撃のために一時取り沈められたようになつた。もつとも、尾張藩主が江戸出府後の結果も明らかでなく、すでに下田しもだの港は開かれたとのうわさも伝わり、交易を非とする諸藩の抗議には幕府の老中もただただ手をこまねいているとのうわさすらある。しかしこの地方としては、一時の混乱も静まりかけ、街道も次第に整理されて、米の値までも安くなつた。

各村儉約の申し渡しとして、木曾福島からの三人の役人が巡回して来たところは、山里も震災のあとらしい。土地の人たちは正月の味噌みそ搗つきに取りかかるころから、その年の豊作を待ち構

え、あるいは杉苗植すぎなええ付けの相談なぞに余念もなかった。

ある一転機が半蔵の内部なにもきざして来た。その年の三月には彼も父となっていた。お民は彼のそばで、二人の間ふたりに生まれた愛らしい女の子を抱くようになった。お糸くめというのがその子の名で、それまで彼の知らなかつたちいさなものの動作や、物を求めるような泣き声や、無邪気なあくびや、無心なほほえみなどが、なんとなく一人前になったという心持ちを父としての彼の胸の中によび起こすようになった。その新しい経験は、今までのような遠いところにあるものばかりでなしに、もつと手近なものに彼の目を向けさせた。

「おれはこうしちやいられない。」

そう思つて、辺鄙へんぴな山の中の寂しき不自由さに突き当たたるたびに、半蔵は自分の周囲を見回した。

「おい、峠うしかたしゅうの牛方衆——中津川の荷物がさつぱり来ないが、どうしたい。」

「当分休みよなし。」

「とぼけるなよ。」

「おれが何を知らすか。当分の間、角十かどじゅうの荷物を付け出すなど言つて、仲間のものから差し留めが来た。おれは一向知らんが、仲間のことだから、どうもよんどころない。」

「困りものだな。荷物を付け出さなかつたら、お前たちはどうして食うんだ。牛行司うしぎょうじにあつたらよくそう言つてくれ。」

往来のまん中で、尋ねるものは問屋の九太夫、答えるものは峠の牛方だ。

最初、半蔵にはこの事件の真相がはつきりつかめなかつた。今までいりにでに入荷出荷とも付送りつけおくを取り扱つて来た中津川の間屋角十に対抗して、牛方仲間が団結し、荷物の付け出しを拒んだことは彼にもわかつた。角十の主人、角屋かどや十兵衛が中津川からやつて来て、伏見屋の金兵衛にその仲裁を頼んだこともわかつた。事件の当事者なる角十と、峠の牛行司ふたり二人の間に立つて、六十歳の金兵衛が調停者としてたつこともわかつた。双方示談の上、牛馬共に今までどおりの出入りをするように、それにはよく双方の不都合を問いただそうというのが金兵衛の意思らしいこともわかつた。西は新茶屋から東は桜沢まで、木曾路の荷物は馬ばかりでなく、牛の背で街道を運搬されていたので。

荷物送り状の書き替え、駄賃だちんの上刎うわはね——駄路時代の間屋の弊害はそんなところに潜んでいた。角十ではそれがはなはだし

かつたのだ。その年の八月、小草山の口明けの日から三日にわたって、金兵衛は毎日のように双方の間に立つて調停を試みたが、紛争は解けそうもない。中津川からは角十側の人がある。峠からは牛行司の利三郎、それに十二兼村じゅうにかねむらの牛方までが、呼び寄せられる。峠の組頭、平助は見るに見かねて、この紛争の中へ飛び込んで来たが、それでも埒らちは明きそうもない。

半蔵が本陣の門を出て峠の方まで歩き回りに行つた時のことだ。崖がけに添うた村の裏道には、村民の使用する清い飲料水が樋といをつたつてあふれるように流れて来ている。そこは半蔵の好きな道だ。その辺にはよい樹陰こかげがあつたからで。途中で彼は峠の方からやって来る牛方の一人に行きあつた。

「お前たちもなかなかやるねえ。」

「半蔵さま。お前さまも聞かつせいたかい。」

「どうも牛方衆は苦手にがてだなんて、平助さんなぞはそう言つてるぜ。」

「冗談でしょう。」

その時、半蔵は峠の組頭から聞いた言葉を思い出した。いずれ中津川からも人が出張しているから、とくと評議の上、随分いっさいぶん一札も入れさせ、今後無理非道のないように取り扱いたい、それが平助を通して聞いた金兵衛の言葉であることを思い出した。

「まあ、そこへ腰を掛けるよ。場合によつては、吾家うちの阿父おやじに話してやつてもいい。」

牛方は杉すぎの根元にあつた古い切り株を半蔵に譲り、自分はその辺の樹陰こかげにしやがんで、路傍みちばたの草をむしりむしり語り出した。

「この事件は、お前さま、きのうやきように始まつたことじゃあらすか。角十のような問屋は断わりたい。もつと他の問屋に頼

みたい、そのことはもう四、五年も前から、下海道しもかいどう辺の問屋でも今渡いまど（水陸荷物の集散地）の問屋仲間でも、荷主まで一緒になつて、みんな申し合わせをしたことよなし。ところが今度という今度、角十のやり方がいかにも不実だ、そう言つて峠の牛行司ふたりが二人とも怒おこつてしまつたもんだで、それからこんなことになりましたわい。伏見屋の旦那だんなの量見じゃ、『おれが出たら』と思わつせるか知らんが、この事件がお前さま、そうやすやすと片づけられすか。そりや峠の牛方仲間は言うまでもないこと、宮みやの越こしの弥治衛門やじえもんに弥吉から、水上村の牛方や、山田村の牛方まで、そのほかアンコ馬まで申し合わせをしたことです。まあ、見ていさつせれ——牛方もなかなか粘りますぞ。いったい、角十は他の問屋よりも強欲じやうよくすぎるわなし。それがそもそも事の起こりです。』

半蔵はいろいろにしてこの牛方事件を知ること努めた。彼が手に入れた「牛方より申し出の個条」は次ぎのようなものであつた。

一、これまで駄賃だちんの儀、すべて送り状は包み隠し、控えの付にて駄賃等書き込みにして、別に送り状を認め荷主方へ付送りしたたのこと多く、右にては一同掛念けねんやみ申さず。今後は有体ありていに、実意になし、送り状も御見せ下さるほど万事親切に御取り計らい下さらば、一同安心致いたすべきこと。

一、牛方どものうち、平生心安へいせいき者は荷物もよく、また駄賃等も御贖ごひいきあり。しかるに向きに合わぬ牛方、並びに丸亀屋まるがめや出入りの牛方どもには格別不取り扱いにて、有り合わせし荷

物も早速には御渡しなく、願ひ奉る上ならでは付送り方に御回し下さらず、これも御出入り牛方同様に不憫を加え、荷物も早速御出し下さるよう御取り計らいありたきこと。(もつとも、寄せ荷物なき時は抛なく、その節はいずれなりとも御取り計らいありたし。)

一、大豆売買の場合、これを一駄四百五十文と問屋の利分を定め、その余は駄賃として牛方どもに下されたたきこと。

一、送り荷の運賃、運上は一駄一分割と御定めもあることなれば、その余を駄賃として残らず牛方どもへ下さるよう、今後御取り極めありたきこと。

一、通し送り荷駄賃、名古屋より福島まで半分割の運上引き去り、その余は御勿ねなく下されたたきこと。

一、荷物送り出しの節、心安き牛方にて、初めて参り候牛

方にても、同様に御扱い下され、すべて今渡いまどの問屋同様に、
依怙えこひいぎ鼻肩なきよう願いたきこと。

一、すべて荷物、問屋に長く留め置き候ては、荷主催促に及び、はなはだ牛方にて迷惑難渋つかまつ仕り候間、早速付送り方、御取り計らい下され候よう願いたきこと。

一、このたび組定くみじようとりきめ候上は、双方堅く相守り申すべく、万一間屋無理非道の儀を取り計らい候わば、その節は牛方どもにおいて問屋を替え候とも苦しからざるよう、その段御引き合ひ下されたく候こと。

これは調停者の立場から書かれたもので、牛方仲間がこの個条書をそっくり認めるか、どうかは、峠の牛行司でもなんとも言えないとのことであつた。はたして、水上村から強い抗議が出た。八月十日の夜、峠の牛方仲間のものが伏見屋へ見えての

話に、右の書付を一同に読み聞かせたところ、少々腑ぶに落ちないところもあるから、いずれ仲間どもで別の案文を認めしたたた上のことにした、それまで右の証文は二人の牛行司の手に預かつて置くというようなことで、またまた交渉は行き悩んだらしい。

ちようど、中津川の医者で、半蔵が旧ふるい師匠にあたる宮川寛齋ますだやが榊田屋まじめの病人を見に馬籠へ頼まれて来た。この寛齋からも、半蔵は牛方事件の成り行きを聞くことができた。牛方仲間に言わせると、とかく角十の取り扱い方には依怙えこひ鼻肩いぎがあつて、駄賃書き込み等の態度は不都合もはなはだしい、このまま双方得心とくしんということにはどうしても行きかねる、今一応仲間のもので相談の上、伏見屋まで挨拶あいさつしようという意向であるらしい。牛方仲間は従順ではあつたが、決して屈してはいなかつた。

とうとう、この紛争は八月の六日から二十五日まで続いた。

長引けば長引くほど、事件は牛方の側に有利に展開した。下海道の荷主が六、七人も角十を訪れて、峠の牛方と同じようなことは何も言わないで、今まで世話になった礼を述べ、荷物問屋のことは他の新問屋へ依頼すると言つて、お辞儀をしてさつさと帰つて行つた時は、角屋十兵衛もあつけに取られたという。その翌日には、六人の瀬戸物商人が中津川へ出張して来て、新規の問屋を立てることに談判を運んでしまつた。

中津川の和泉屋いずみやは、半蔵から言えば親しい学友蜂谷香蔵はちやこうぞうの家である。その和泉屋が角十かゝに替つて問屋を引き受けるなども半蔵にとつては不思議な縁故のように思われた。もみにもんだこの事件が結局牛方の勝利に帰したことは、半蔵にいろいろなことを考えさせた。あらゆる問屋が考えて見なければならぬような、こんな新事件は彼の足もとから動いて来ていた。ただ、

彼ら、名もない民は、それを意識しなかつたまでだ。

生みの母を求める心は、早くから半蔵を憂鬱ゆううつにした。その心は友だちを慕わせ、師とする人を慕わせ、親のない村の子供にまで深い哀憐あわれみを寄せさせた。彼がまだ十八歳のころに、この馬籠の村民が木曾山の嚴禁を犯して、多分の木を盗んだり背伐せぎりをしたりしたという科とがで、村から六十一人もの罪人を出したことがある。その村民が彼の家の門内に呼びつけられて、福島から出張して来た役人の吟味を受けたことがある。彼は庭のすみの梨なしの木のかげに隠れて、腰繩こしなわ手錠をかけられた不幸な村民を見ていたことがあるが、貧窮くろうな黒鍬くわや小前こまえのものを思う彼の心はすでにそのころから養われた。馬籠本陣のような古い歴史のあ

る家柄に生まれながら、彼の目が上に立つ役人や権威の高い武士の方に向かわないで、いつでも名もない百姓の方に向かい、従順で忍耐深いものに向かい向かいしたというのも、一つはままはは継母に仕えて身を慎んで来た少年時代からの心の満たされがたさが彼の内部なかに奥深く潜んでいたからで。この街道に荷物を運搬する牛方仲間のような、下層にあるものの動きを見つけるようになったのも、その彼の目だ。

五

「御免ください。」

まじめ馬籠の本陣の入り口には、伴ともを一人連れた訪問の客があつた。
「つまじ妻籠からお客さまが見えたぞなし。」

という下女の声を聞きつけて、お民は奥から囲炉裏いろりばたへ飛んで出て来て見た。兄の寿平次だ。

「まあ、兄さん、よくお出かけでしたねえ。」

とお民は言つて、奥しゅうとめにいる姑のおまんにも、店座敷しゅうとめにいる半蔵にもそれと知らせた。広い囲炉裏いろりばたは、台所でもあり、食堂たきびでもあり、懇意なものの応接間でもある。山家らしい焚火たきびで煤すすけた高い屋根の下、黒光りのするほど古い太い柱のそばで、やがて主客の挨拶あいさつがあつた。

「これさ。そんなところに腰掛けていないで、草鞋わらじでもおぬぎよ。」

おまんは本陣の「姉あねさま」らしい調子で、寿平次の供をして来た男にまで声をかけた。二里ばかりある隣村からの訪問者でも、供やまみちを連れて山路を踏んで来るのが当時の風習であつた。ちよう

ど、木曾路は山の中に多い栗くりの落ちるころで、妻籠から馬籠までの道は楽しかったと、供の男はそんなことをおまんにもお民にも語つて見せた。

間もなくお民は明るい仲の間を片づけて、秋らしい西の方の空の見えるところに席をつくつた。馬籠と妻籠の両本陣の間には、宿場の連絡をとる上から言つても絶えず往来がある。半蔵が父の代理として木曾福島の役所へ出張するおりなどは必ず寿平次の家を訪れる。その日は半蔵もめずらしくゆつくりやつて来てくれた寿平次を自分の家に迎えたわけだ。

「まず、わたしの失敗話しくじりばなしから。」

と寿平次が言い出した。

お民は仲の間と囲炉裏いろり裏うらばたの間を往いつたり来たりして、茶道具などをそこへ持ち運んで来た。その時、寿平次は言葉をつい

で、

「ほら、この前、お訪ねたずした日ですねえ。あの帰りに、藤蔵とうぞうさんの家の上道を塩野へ出ましたよ。いろいろな細い道があつて、自分ながらすこし迷つたかと思ひますね。それから林の中の道を回つて、下り坂の平蔵さんの家の前へ出ました。狸たぬきにでも化かされたように、ぼんやり妻籠へ帰つたのが八つ時じきごろでしたさ。」

半蔵もお民も笑い出した。

寿平次はお民と二人ふたりぎりの兄妹きょうだいで、その年の正月によく二十五歳厄除やくよけのお日待ひまちを祝つたほどの年ごろである。先代が木曾福島へ出張中に病死してからは、早く妻籠の本陣の若主人となつただけに、年齢としの割合にはふけて見え、口のききようもおとなびていた。彼は背せいの低い男で、肩の幅で着ていた。一つ

上の半蔵とそこへ対^{むか}い合つたところは、どつちが年長^{としうえ}かわからないくらいに見えた。年ごろから言つても、二人はよい話し相手であつた。

「時に、半蔵さん、きようはめずらしい話を持つて来ました。」と寿平次は目をかがやかして言つた。

「どうもこの話は、ただじゃ話せない。」

「兄さんも、勿^{もつた}体をつけること。」とお民はそばに聞いていて笑つた。

「お民、まあなんでもいいから、お父^{とう}さんやお母^{つか}さんをお呼んで来ておくれ。」

「兄さん、お喜佐さんも呼んで来ましょうか。あの人も仙十郎^{せんじゅうろう}さんと別れて、今じゃ家にいますから。」

「それがいい、この話はみんなに聞かせたい。」

「大笑い。大笑い。」

吉左衛門はちようど屋外そとから帰つて来て、まず半蔵の口から寿平次の失敗話しくじりばなしというのを聞いた。

「お父さんとつ、寿平次さんは塩野から下り坂の方へ出たと言うんですがね、どこの林をそんなに歩いたものでしょう。」

「きつと梅屋林の中だぞ。寿平次さんも狸たぬきに化かされたか。そいつは大笑いだ。」

「山の中らしいお話ですねえ。」

とおまんもそこへ来て言い添えた。その時、お喜佐も挨拶あいさつに来て、母のそばにいて、寿平次の話に耳を傾けた。

「兄さん、すこし待って。」

お民は別の部屋へやに寝かして置いた乳呑児ちのみじを抱きに行つて来た。目をさまして母親を探さがす子の泣き声を聞きつけたからで。

「へえ、糸くもを見てやつてください。こんなに大きくなりました。」
「おゝ、これはよい女の子だ。」

「寿平次さん、御覧なさい。もうよく笑いますよ。女の子は知恵のつくのも早いものですねえ。」

とおまんは言つて、お民に抱かれている孫娘の頭をなでて見せた。

その日、寿平次が持つて来た話というは、供の男を連れて木曾路を通り過ぎようとしたある旅人が妻籠の本陣に泊まり合あわせたことから始まる。偶然にも、その客は妻籠本陣じょうもんの定紋じやうもんを見つけて、それが自分の定紋と同じであることを発見する。窠かに木瓜もっこうがそれである。客は主人を呼びよせて物を尋ねようとする。

そこへ寿平次が挨拶に出る。客は定紋の暗合に奇異な思いがすると言つて、まだこのほかに替え紋はないかと尋ねる。丸まるに三みつつ引びきがそれだと答える。客はいよいよ不思議がつて、ここの本陣の先祖に相州そうしゅうの三浦みうらから来たものはないかと尋ねる。答えは、そのとおりに。その先祖は青山監物けんもつとは言わなかつたか、とまた客が尋ねる。まさにそのとおりに。その時、客は思わず膝ひざを打つて、さてさて世には不思議なこともあればあるものだという。そういう自分は相州三浦に住む山上七郎左衛門やまがみしちろうざえもんというものである。かねて自分の先祖のうちには、分家して青山監物と名のつた人があると聞いている。その人が三浦から分かれて、木曾の方へ移り住んだと聞いている。して見ると、われわれは親類である。その客の言葉は、寿平次にとつても深い驚きであつた。とうとう、一夜の旅人と親類さかすきの盃さかずきまでかわして、系図の交換と

再会の日とを約束して別れた。この奇遇のもととは、妻籠と馬籠の両青山家に共通な窠かに木瓜もっこうと、丸に三つ引びきの二つの定紋からであった。それから糸図を交換して見ると、二つに割った竹を合わせたようで、妻籠の本陣なぞに伝わらなかつた祖先が青山監物以前にまだまだ遠く続いていることがわかつたという。

「これにはわたしも驚かされましたねえ。自分らの先祖が相州の三浦から来たことは聞いていましたがね、そんな古い家がまだ立派に続いているとは思いませんでしたねえ。」と寿平次が言い添えて見せた。

「ハーン。」吉左衛門は大きな声を出してうなつた。

「寿平次さん、吾家うちのこともそのお客に話してくれましたか。」と半蔵が言った。

「話したとも。青山監物に二人の子があつて、兄が妻籠の代官

をつとめたし、弟は馬籠の代官をつとめたと話して置いたさ。」
何百年となく続いて来た青山の家には、もつと遠い先祖があり、もつと古い歴史があつた。しかも、それがまだまだ立派に生きていた。おまん、お民、お喜佐、そこに集まっている女たちも皆何がなしに不思議な思いに打たれて、寿平次の顔を見まもつていた。

「その山上さんとやはらは、どんな人柄のお客さんでしたかい。」
とおまんが寿平次にきいた。

「なかなか立派な人でしたよ。なんでも話の様子では、よほど古い家らしい。相州の方へ帰るとすぐ系図と一緒に手紙をくれましたよ。ぜひ一度訪ねて来てくれと言つてよこしましたよ。」
「お民、店座敷へ行つて、わたしの机の上にある筆と紙を持つといで。」半蔵は妻に言いつけて置いて、さらに寿平次の方を見

て言った。「もう一度、その山上という人の住所を言つて見てくれませんか。忘れないように、書いて置きたいと思うから。」

半蔵は紙をひろげて、まだ若々しくはあるがみごとな筆で、寿平次の言うとおりを写し取つた。

相州三浦、横須賀^{よこすか}在、公郷村^{くじょう}

山上七郎左衛門

「寿平次さん。」と半蔵はさらに言葉を つづけた。「それで君は

——」

「だからさ。半蔵さんと二人^{ふたり}で、一つその相州三浦を訪ねて見たらと思うのさ。」

「訪ねて行つて見るか。えらい話になつて来た。」

しばらく沈黙が続いた。

「山上の方の系図も、持つて来て見せてくださるとよかつた。」

「あとから届けますよ。あれで見ると、青山の家は山上から分かれる。山上は三浦家から出ていますね。つまりわたしたちの遠い祖先は鎌倉時代かまくらに活動した三浦一族の直系らしい。」

「相州三浦の意味もそれで読める。」と吉左衛門は言葉をはさんだ。

「寿平次さん、もし相州の方へ出かけるとすれば、君はいつごろのつもりなんですか。」

「十月の末あたりはどうでしょう。」

「そいつはおれも至極しごく賛成だねえ。」と吉左衛門も言い出した。「半蔵も思い立って出かけて行って来るがいいぞ。江戸も見て来るがいい——ついでに、日光あたりへも参詣さんけいして来るがいい。」

その晩、おまんは妻籠から来た供の男だけを帰らせて、寿平次を引きとめた。半蔵は店座敷の方へ寿平次を誘って、昔風な

行燈あんどんのかけでおそくまで話した。青山氏系図として馬籠の本陣に伝わったものをもそこへ取り出して来て、二人でひろげて見た。その中にはこの馬籠の村の開拓者であるという祖先青山道齋のことも書いてあり、家中女子ばかりになった時代に妻籠の本陣から後見こうけんに來た百助ももすけというような隱居のことも書いてある。道齋から見れば、半蔵は十七代目の子孫にあたった。その晩は半蔵は寿平次と枕まくらを並べて寝たが、父から許された旅のことなぞが胸に満ちて、よく眠られなかった。

偶然にも、半蔵が江戸から横須賀の海の方まで出て行って見る思いがけない機会はこんなふうにして恵まれた。翌日、まだ朝のうちに、お民は万福寺の墓地の方へ寿平次と半蔵を誘った。

寿平次は久しぶりで墓参りをして行きたいと言ひ出したからで。お民が夫と共に看病に心を砕いたあの祖母おばあさんももはやそこに長く眠っているからで。

半蔵と寿平次とは一歩ひとあし先に出た。二人は本陣の裏木戸から、隣家の伏見屋の酒蔵さかぐらについて、暗いほど茂った苦竹まだけと淡竹はちくの藪の横へ出た。寺の方へ通う静かな裏道がそこにある。途中で二人はお民を待ち合わせたか、煙の立つ線香や菊の花などを家から用意して来たお民と、お糸くめを背中にのせた下女とが細い流れを渡つて、田圃たんぼの間の寺道を踏んで来るのが見えた。

小山の上に立つ万福寺は村の裏側から浅い谷一つ隔てたところにある。墓地はその小川に添うて山門を見上げるような傾斜の位置にある。そこまで行くと、墓地の境内もよく整理されていて、以前の住職の時代とは大違ひになった。村の子供を集め

てちいさく寺小屋をはじめている松雲和尚のもとへは、本陣へ通学することを遠慮するような髪結いの娘や、大工の悴せがれなぞが手習い草紙を抱いて、毎日通かよつて来ているはずだ。隠れたところに働く和尚の心は墓地の掃除そうじにまでよく行き届いていた。半蔵はその辺に立てかけてある竹箒たけぼうきを執つて、古い墓石の並んだ前を掃こうとしたが、わずかに落ち散っている赤ちやけた杉の古葉を取り捨てるぐらいで用は足りた。和尚の心づかいと見えて、その辺の草までよくむしらせてあつた。すべて清い。

やがて寿平次もお民も亡なくなつた隠居の墓の前に集まつた。

「兄さん、おばあさんの名は生きてる時分からおじいさんと並べて刻んであつたんですよ。ただそれが赤くしてあつたんですよ。」

とお民は言つて、下女の背中にいるお糸の方をも顧みて、

「御覽、ののさんだよ。」

と言つて見せた。

古く苔蒸こけむした先祖の墓石は中央の位置に高く立っていた。何百年の雨にうたれ風にもまれて来たその石の面おもてには、万福寺殿昌屋常久禅定門の文字が読まれる。青山道齋がそこに眠つていた。あだかも、自分で開拓した山村の発展と古い街道の運命とを長い目でそこにながめ暮らして来たかのように。

寿平次は半蔵に言つた。

「いかにも昔の人のお墓らしいねえ。」

「この戒名かいみやうは万福寺まんぷくじを建立こんりゆうした記念でしょう。まだこのほかに、村の年寄りの集まるところがなくちや寂しかろうと言つて、薬師堂を建てたのもこの先祖だそうですよ。」

二人の話は尽きなかつた。

裏側から見える村の眺望は、その墓場の前の位置から、杉の木立こだちの間だにひらけていた。半蔵は寿平次と一緒に青い杉の葉のにおいをかぎながら、しばらくそこに立つてながめた。そういう彼自身の内部なかには、父から許された旅のことを考えて見たばかりでも、もはや別の心持こころちが湧わき上がって来た。その心持ちから、彼は住み慣れた山の中をいくらかでも離れて見るようにして、あそこに柿かきの梢こずえがある、ここに白い壁があると、寿平次にさして言いって見みせた。恵那山えなさんのふもとに隠かくれている村の眺望ちようぼうは、妻籠つまごから来て見る寿平次をも飽あきさせなかつた。

「寿平次さん、旅に出る前にもう一度ぐらいあえましようか。」

「いろいろな打ち合わせは手紙でもできましよう。」

「なんだかわたしは夢のような気がする。」

こんな言葉をかかわして置いて、その日の午後に寿平次は妻籠

をさして帰つて行つた。

長いこと見聞の寡いことを嘆き、自分の固陋を嘆いていた半蔵の若い生命も、ようやく一步踏み出して見る機会をとらえた。その時になつて見ると、江戸は大地震後一年目の復興最中である。そこには国学者としての平田鉄胤もいる。鉄胤は篤胤大人の相続者である。かねて平田篤胤没後の門人に加わることを志していた半蔵には、これは得がたい機会でもある。のみならず、横須賀海岸の公郷村とは、黒船上陸の地点から遠くないところとも聞く。半蔵の胸はおどつた。

第三章

一

「蜂谷君、はちや近いうちに、自分は江戸から相州三浦方面へかけて出発する。妻の兄、妻籠本陣つまじの寿平次と同行する。この旅は横須賀在の公郷村くじょうむらに遠い先祖の遺族を訪ねるためであるが、江戸をも見たい。自分は長いことこもり暮らした山の中を出て、初めての旅に上ろうとしている。」

こういう意味の手紙を半蔵は中津川にある親しい学友の蜂谷香蔵あてに書いた。

「君によるこんでもらいたいことがある。自分はこの旅で、かね

ての平田入門の志を果たそうとしている。最近に自分は佐藤信淵さとうのぶひろの著書を手に入れて、あのすぐれた農学者が平田大人うしと同郷の人であることを知り、また、いかに大人うしの深い感化を受けた人であるかをも知った。本居もとおり、平田諸大人の国学ほど世に誤解されていくものはない。古代の人に見るようなあの直すぐな心は、もう一度この世に求められないものか。どうかして自分らはあの出発点に帰りたい。そこからもう一度この世を見直したい。」
という意味をも書き添えた。

馬籠まじめのような狭い片田舎かたいなかでは半蔵の江戸行きうわさが村のすみまでもすぐに知れ渡った。半蔵が幼少な時分からのことを知っていて、遠い旅を案じてくれる乳母うばのおふきのような婆ばあさんもある。おふきは半蔵を見に来た時に言った。

「半蔵さま、男はそれでもいいぞなし。どこへでも出かけられ

て。まあ、女の身になつて見さつせれ。なかなかそんなわけにいかすか。おれも山の中にいて、江戸の夢でも見ずかい。この辺鄙へんぴな田舎には、お前さま、せめて一生のうちの名古屋でも見て死にたいなんて、そんなことを言う女もあるに。」

江戸をさして出発する前に、半蔵は平田入門のことを一応は父にことわつて行こうとした。平田篤胤はすでに故人であつたから、半蔵が入門は先師没後の門人に加わることであつた。それだけでも彼は一層自分をはつきりさせることであり、また同門の人たちと交際する上にも多くの便宜があろうと考えたからで。

父、吉左衛門きちざえもんはもう長いことこの悴せがれを見まもつて来て、行く

行く馬籠の本陣を継ぐべき半蔵が寢食を忘れるばかりに平田派の学問に心を傾けて行くのを案じないではなかつた。しかし吉左衛門は根が好学の人で、自分で学問の足りないのを嘆いていくくらいだから、

「お前の学問好きも、そこまで来たか。」

と言わないばかりに半蔵の顔をながめて、結局子の願いを容れた。

当時平田派の熱心な門人は全国を通じて数百人に上ると言われ、南信から東美濃のの地方へかけてもその流れをくむものは少なくない。篤胤ののこした仕事はおもに八人のすぐれた弟子でしに伝えられ、その中でも特に選ばれた養嗣ようしとして平田家を継いだのが当主鉄胤かねたねであつた。半蔵が入門は、中津川の宮川寛斎みやがわかんさいの紹介によるもので、いずれ彼が江戸へ出た上は平田家を訪ねて、

鉄胤からその許しを得ることになつていた。

「お父さんとつに賛成していただき、ほんとにありがたい。長いこと私はこの日の来るのを待つていたようなものですよ。」

と半蔵は先輩を慕う真実を顔にあらわして言った。同じ道を踏もうとしている中津川の浅見景蔵も、蜂谷香蔵も、さぞ彼のためによろこんでくれるだろうと父に話した。

「まあ、何も試みだ。」

と吉左衛門は持ち前の大きな本陣鼻の上へしわを寄せながら言った。父は半蔵からいろいろと入門の手続きなどを聞いたのみで、そう深入りするなとも言わなかつた。

安政の昔は旅も容易でなかつた。木曾谷の西のはずれから江戸へ八十三里、この往復だけでも百六十六里の道は踏まねばならない。その間、峠を四つ越して、関所を二つも通らねばならない。

吉左衛門は関西方面に明るいほど東の方の事情に通じてもいなかったが、それでも諸街道問屋の一人ひとりとして江戸の道中奉行所どうちゆうぎやうじよへ呼び出されることがあつて、そんな用向きで二、三度は江戸の土を踏んだこともある。この父は、いろいろ旅の心得になりそうなことを子に教えた。寿平次のようなよい連れがあるにしても、若い者二人ふたりぎりではどうあろうかと言つた。遠く江戸から横須賀辺までも出かけるには、伴ともの男を一人連れて行けと勧めた。当時の旅行者が馬や人足を雇い、一人でも多く連れのあるのをよろこび、なるべく隊伍たいごをつくるようにしてこの街道を往いつたり来たりするのも、それ相応の理由がなくてはかなわぬことを父は半蔵に指摘して見せた。

「ひとり旅のものは宿屋でも断ことわられるぜ。」
とも注意した。

かねて妻籠の本陣とも打ち合わせの上、出発の日取りも旧暦の十月上旬に繰りあげてあった。いよいよその日も近づいて、継母のおまんは半蔵のために青地あおじの錦にしきの守り袋を縫い、妻のお民は晒木綿さらしの胴巻きなぞを縫ったが、それを見る半蔵の胸にはなんとなく前途の思いがおごそかに迫つて来た。遠く行くほどのものは、河止めかわどなぞの故障の起こらないかぎり、たとい強い風雨を冒しても必ず予定の宿しゆくまではたどり着けと言われているころだ。遊山ゆうさん半分にできる旅ではなかつた。

「佐吉さん、お前は半蔵さまのお供だそうなのい。」

「あい、半蔵さまもそう言ってくれるし、大旦那おおだんなからもお許しが出たで。」

おふきはだれよりも先に半蔵の門出かどでを見送りに来て、もはや本陣の囲炉裏いろりばたのところところで旅たびしたくたくをしてしている下男しもやうの佐吉さきちを見つけた。佐吉は雇よめわれて来きてからまだ年としも浅あく、半蔵はんざうといくつも違ちがわないくらいくらいの若わかさであるが、今度いまど江戸えどへの供ともに選えらばれたことをこの上うへもないよろこびにして、留守中主人留守中主人の家の炉いろりで焚たくだけの松薪まつまきなぞはすでに山やまから木小屋きこやへ運こんで来きてあつた。

いよいよ出発しゅつぱつの時ときが来きた。半蔵はんざうは青あおい河内木綿かわちもめんの合羽かっぱを着き、脚絆きゃはんをつけて、すつかり道中姿みちなかすがたになつた。旅たびの守まもり刀やいばは綿更紗めんざらさの袋ふくろで鍰元つぼもとを包つつんで、それを腰こしにさした。

「さあ、これだ。これさえあれば、どんな関所せきじょでも通とほられる。」と吉左衛門きちざゑもんは言いつて、一枚まいの手形てがたを半蔵はんざうの前まへに置おいた。関所せきじょの通り手形てがただ。それには安政三年十月あんせい三年十月として、宿役人しゆくやくにんの署名しごみがあり、馬籠宿うまかごしゆくの印いんが押おしてある。

「このお天気じゃ、あすも霜でしよう。半蔵も御苦労さまだ。」
という継母にも、女の子のお糸くめを抱きながら片手に檜木笠ひのきがさを持って来てすすめる妻にも別れを告げて、やがて半蔵は勇んで家を出た。おふきは、目にいっぱい涙をためながら、本陣の女衆と共に門口に出て見送った。

峠には、組頭くみがしら平助の家がある。名物栗くりこわめしの看板をかけた休み茶屋もある。吉左衛門はじめ、組頭庄兵衛しょうべえ、そのほか隣家の鶴松つるまつのような半蔵の教え子たちは、峠の上まで一緒に歩いた。当時の風習として、その茶屋で一同別れの酒をくみかわして、思い思いに旅するものの心得になりそうなことを語った。出発のはじめはだれしも心がはやって思わず荒く踏み立てるものである、とかくはじめは足をたいせつにすることが肝要だ、と言うのは庄兵衛だ。旅は九日路ここのかじのものなら、十日かかつて行

け、と言つて見せるのはそこへ来て一緒になつた平助だ。万福寺の松雲和尚さまが禅僧らしい質素な法衣に茶色の袈裟けさがけで、わざわざ見送りに来たのも半蔵の心をひいた。

「夜道は気をつけるがいいぜ。なるべく朝は早く立つようにして、日の暮れるまでには次ぎの宿しゆくへ着くようにするがいいぜ。」

この父の言葉を聞いて、間もなく半蔵は佐吉と共に峠の上から離れて行つた。この山地には俗に「道知らせ」と呼んで、螢ほたるの形したやさしい虫があるが、その青と紅のあざやかな色の背を見せたやつまでが案内顔に、街道を踏んで行く半蔵たちの行く先に飛んだ。

隣宿妻籠つまごの本陣には寿平次がこの二人ふたりを待っていた。その日

は半蔵も妻籠泊まりときめて、一夜をお民の生家きやに送って行くことにした。寿平次を見るたびに半蔵の感ずることは、よくその若さで本陣庄屋問屋三役の事務を処理して行くことであつた。寿平次の部屋へやには、先代からつけて来たという覚え帳がある。諸大名宿泊しゆくぱくのおりの人數、旅籠賃はたごちんから、入り用の風呂何本、火鉢ひばち何個、燭台しゆくたい何本というようなことで、事こまかに記しるしつけてある。当時の諸大名は、各自に寝具、食器たぐいの類を携帯して、本陣へは部屋代を払うというふうであつたからで。寿平次の代になつてもそんなめんどくさいことを一々書きとめて、後日の参考とすることを怠おろそかしていない。半蔵が心深くながめたのもその覚え帳だ。

「寿平次さん、今度の旅は佐吉に供をさせます。そのつもりで馬籠から連れて来ました。あれも江戸を見たがつていますよ。」

君の荷物はあれにかつがせてください。」

この半蔵の言葉も寿平次をよろこばせた。

翌朝、佐吉はだれよりも一番早く起きて、半蔵や寿平次が目をさましたころには、二足の草鞋わらじをちゃんとそろえて置いた。自分用の檜木笠ひのきがさ、天秤棒てんびんぼうまで用意した。それから囲炉裏いろりにばかりこまつて、主人らのしたくのできるのを待った。寿平次は留守中のことを脇本陣わきほんじんの扇屋おうぎやの主人、得右衛門とくえもんに頼んで置いて、柿色かきいろの地じに黒羅紗くろらしやの襟えりのついた合羽かっぱを身につけた。関所の通り手形も半蔵と同じように用意した。

妻籠の隠居はもういい年のおばあさんで、孫にあたる寿平次をそれまでに守り立てた人である。お民の女の子のうわさを半蔵にして、寿平次に迎えた姫よめのお里にはまだ子がないことなどを言つて見せる人である。隠居は家の人たちと一緒に門口に出

て、寿平次を見送る時に言った。

「お前にはもうすこし背をくれないなあ。」

この言葉が寿平次を苦笑させた。隠居は背の高い半蔵に寿平次を見比べて、江戸へ行つて恥をかいて来てくれるなというふうにそれを言ったからで。

半蔵や寿平次は檜木笠をかぶつた。佐吉も荷物をかついでそのあとについた。同行三人のものはいずれも軽い草鞋で踏み出した。

二

木曾十一宿はおおよそ三つに分けられて、馬籠、妻籠、三留野、野尻を下四宿といい、須原、上松、福島を中三宿といい、宮の

越、藪原、奈良井、贄川を上四宿と云う。半蔵らの進んで行つた道はその下四宿から奥筋への方角であるが、こうしてそろつて出かけるということがすでにめずらしいことであり、興も三人の興で、心づかいも三人の心づかいであつた。あそこの小屋の前に檜木の実が乾してあつた、ここに山の中らしい耳のつがつた茶色な犬がいた、とそんなことを語り合つて行く間にも楽しい笑い声が起こつた。一人の草鞋の紐が解けたと言へば、他の二人はそれを結ぶまで待つた。

深い森林の光景がひらけた。妻籠から福島までの間は寿平次のよく知つている道で、福島さしがみの役所からの差紙でもあるおりに半蔵も父吉左衛門の代理としてこれまで幾たびとなく往来したことがある。幼い時分から街道を見る目を養われた半蔵らは、馬方や人足や駕籠かきなぞの隠れたところに流している汗を行

く先に見つけた。九月から残った蠅はえは馬にも人にも取りついて、それだけでも木曾路の旅らしい思いをさせた。

「佐吉、どうだい。」

「おれは足は達者たっしゃだが、お前さまは。」

「おれも歩くことは平気だ。」

寿平次と連れだつて行く半蔵は佐吉を顧みて、こんな言葉をかわしては、また進んだ。

秋も過ぎ去りつつあった。色づいた霜葉しもはは谷に満ちていた。

季節が季節なら、木曾川の水流を利用して山から伐り出した材木を流しているさかな活動のさまがその街道から望まれる。

小谷狩こたにがりにはややおそく、大川狩おおかわがりにはまだ早かった。河原かわらには堰せき

を造る日傭ひようの群れの影もない。木鼻きはな、木尻きじりの作業もまだ始まっ

ていない。諸役人が沿岸の警戒に出て、どうかすると、鉄砲ま

で持ち出して、盗木流材を取り締まろうとするような時でもない。半蔵らの踏んで行く道はもはや幾たびか時雨しぐれの通り過ぎたあとだった。気の置けないものばかりの旅で、三人はときどき路傍みちばたの草の上に笠かさを敷いた。小松の影を落としてゐる川の中洲なかずを前にして休んだ。対岸には山が迫つて、檜木ひのき、樾さむらいの直立した森林がその断層を覆おおうてゐる。とがった三角を並べたようになり合つた木と木の梢こずえの感じも深い。奥筋うづまの方から渦巻き流れて来る木曾川四の水は青緑の色に光つて、乾かわいたりぬれたりしてゐる無数の白い花崗石みかげいしの間におどつていた。

その年は安政の大地震後初めての豊作と言われ、馬籠の峠の上のような土地ですら一部落で百五十俵からの増収があつた。木曾も妻籠から先は、それらの自然の恵みを受くべき田畠たはたとてもすくない。中三宿となると、次第に谷の地勢せほも狭まつて、わ

ずかの河岸かしの傾斜、わずかの崖がけの上の土地でも、それを耕地にあててある。山のなかに成長して樹木も半分友だちのような三人には、その河岸さやに茨さいかちをたれたき皂茨さいかちの樹がある、この崖の上に枝の細いなつめ棗なつめの樹があると、指さして言うことができた。土地の人たちが路傍に設けた意匠もまたしおらしい。あるところの石垣いしがきの上は彼らの花壇であり、あるところの崖の下は二十三夜もしくは馬頭観音ばとうかんのんなどの祭壇である。

この谷の中だ。木曾地方の人たちが山や林を力にしているのに不思議はない。当時の木曾山一帯を支配するものは尾張藩おわりはんで、すやま巢山とめやま、あきやま留山、明山の区域を設け、そのうち明山のみは自由林であつても、許可なしに村民が五木を伐採することは禁じられてあつた。言つて見れば、ひのき檜木、さわら榎、あすひ明檜、こうやまき高野槇、ねずみ※の五種類

が尾張藩の嚴重な保護のもとにあつたのだ。半蔵らは、名古屋から出張している諸役人の心が絶えずこの森林地帯に働いてゐることを知つていた。一石柘いちごくとしにある白木しらぎの番所から、上松あげまつの陣屋の辺へかけて、諸役人の目の光らない日は一日もないことを知つていた。

しかし、巢山、留山とは言つても、絶対に村民の立ち入るところを許されない区域は極少部分に限られていた。自由林は木曾山の大部分を占めていた。村民は五木の嚴禁を犯さないかぎり、意のままに明山ぼつしょうを跋渉して、雑木を伐採したり薪炭しんたんの材料を集めたりすることができた。檜木笠、めんぱ（木製割籠）わりご、お六櫛ろくぐし、諸種の塗り物——村民がこの森林に仰いでいる生活の資本もとでもかなり多い。耕地も少なく、農業も難渋で、そうかと言つて塗り物渡世の材料も手に入れがたいところでは、「御免ごめんの檜物ひもの」と称とな

えて、毎年千数百駄だずつの檜木を申し受けている村もある。あるいはまた、そういう木材で受け取らない村々では、慶長年度けいちようの昔から谷中一般人民に許された白木六千駄のかわりに、それを「御切替えおきりか」と称えて、代金で尾張藩から分配されて来た。これらは皆、歴史的に縁故の深い尾張藩が木曾山保護の精神にもとづく。どうして、山や林なしに生きられる地方ではないのだ。半蔵らの踏んで行ったのも、この大きな森林地帯を貫いている一筋道だ。

寝覚ねざめまで行くと、上松あげまつの宿の方から荷をつけて来る牛の群れが街道に続いた。

「半蔵さま、どちらへ。」

とその牛方仲間から声をかけるものがある。見ると、馬籠の峠とうげのものだ。この界限かいがいに顔を知られている牛行うしぎようじ司利三郎だ。そ

の牛行司は福島から積んで来た荷物の監督をして、美濃みのの今渡いまどへの通し荷を出そうとしているところであつた。

その時、寿平次が尋ね顔に佐吉の方をふりかえると、佐吉は笑つて、

「峠の牛よなし。」

と無造作に片づけて見せた。

「寿平次さん、君も聞いたでしょう。あれが牛方事件の張本人でさ。」

と言つて、半蔵は寿平次と一緒に、その荒い縞しまの回し合羽まわを着た牛行司の後ろ姿を見送つた。

下民百姓の目をさまさせまいとすることは、長いこと上に立つ人たちが封建時代に執つて来た方針であつた。しかし半蔵はこの街道筋に起こつて来た見のがしがたい新しい現象として、

あの牛方事件から受け入れた感銘を忘れなかった。不正な問屋を相手に血戦を開き、抗争の意気で起^たつて来たのもあの牛行司であつたことを忘れなかった。彼は旅で思いがけなくその人から声をかけられて見ると、たとい自分の位置が問屋側にあるとしても、そのために下層に黙って働いているような牛方仲間を笑えなかつた。

木曾福島の関所も次第に近づいた。三人ははらはら舞い落ちる木の葉を踏んで、さらに山深く進んだ。時には岩石が路傍に迫つて来ていて、高い杉^{すぎ}の枝は両側からおおいかぶさり、昼でも暗いような道を通ることはめずらしくなかつた。谷も尽きたかと思えるところまで行くと、またその先に別の谷がひらけて、

そこに隠れている休み茶屋の板屋根からは青々とした煙が立ちのぼった。棧かけはし、合渡ごうどから先は木曾川も上流の勢いに変わつて、山坂の多い道はだんだん谷底へと降くだつて行くばかりだ。半蔵らはある橋を渡つて、御嶽おんたけの方へ通う山道の分かれるところへ出た。そこが福島ふくしまの城下町であつた。

「いよいよ御関所ですかい。」

佐吉は改まつた顔つきで、主人らの後ろから声をかけた。

福島ふくしまの関所は木曾街道中の関門と言われて、大手橋の向こうに正門を構えた山村氏の代官屋敷からは、河かわ一つ隔てた町はずれのところにある。「出女でおんな、入り鉄砲でつぱう」と言つた昔は、西よりする鉄砲の輸入と、東よりする女の通行をそこで取り締まつた。ことに女の旅は嚴重をきわめたもので、髪かみの長いものはもとより、そうでないものも尼あま、比丘尼びくに、髪切かみぎり、少女おとめなどと通行者の風

俗を区別し、乳まで探つて真偽を確かめたほどの時代だ。これは江戸を中心とする参観交代さんかんの制度を語り、一面にはまた婦人の位置のいかなるものであるかを語っていた。通り手形を所持する普通の旅行者にとつて、なんのはばかるところはない。それでもいよいよ関所にかかるとなると、その手前から笠かさや頭巾ずきんを脱ぎ、思わず襟えりを正したものであるという。

福島では、半蔵らは関所に近く住む植松菖助うえまつしよすけの家を訪ねた。

父吉左衛門からの依頼で、半蔵はその人に手紙を届けるはずであつたからで。菖助は名古屋藩の方に聞こえた宮谷家から後妻を迎えている人で、関所を預かる主な給人おも きゆうにんであり、砲術の指南役であり、福島でも指折りの武士の一人ひとりであつた。ちようど非番の日で、菖助は家において、半蔵らの立ち寄つたことをひどくよろこんだ。この人は伏見屋あたりへ金の融通ゆうずうを頼むために、

馬籠の方へ見えることもある。それほど武士も生活には骨の折れる時になつて来ていた。

「よい旅をして来てください。時に、お二人とも手形をお持ちですね。ここの関所は堅いというので知られていまして、大名のお女中がたでも手形のないものは通しません。とにかく、私が御案内しましょう。」

と菖助は言つて、餞別せんべつのしるしにと先祖伝来の秘法による自家製の丸葉なぞを半蔵にくれた。

ひらばかま

はおり

平袴ひらばかまに紋付の羽織はおりで大小を腰にした菖助のあとについて、半

蔵らは関所にかかった。そこは西の門から東の門まで一町ほどの広さがある。一方は傾斜の急な山林やまに倚り、一方は木曾川の断崖だんがいに臨んだ位置にある。山村甚兵衛代理格じんべえの奉行ぶぎよう、加番の給人にんらが四人も調べ所の正面に控えて、そのそばには足軽が二人

ずつ詰めていた。西に一人、東に二人の番人がさらにその要害のよい門のそばを堅めていた。半蔵らは門内に敷いてある米石こめいしを踏んで行つて、先着の旅行者たちが取り調べの済むまで待つた。由緒ゆいしょのある婦人の旅かと思えて、門内に駕籠かごを停めさせ、乗り物のまま取り調べを受けているのもあつた。

半蔵らはかなりの時を待った。そのうちに、

「髪長かみなが、御一人ごいちにん。」

と乗り物のそばで起こる声を聞いた。駕籠で来た婦人はいくらかの袖そでの下を番人の妻に握らせて、型のように通行を許されたのだ。半蔵らの順番が来た。調べ所の壁に掛かる突棒つくぼう、さすまた又なぞのいかめしく目につくところで、階段の下に手をついて、かねて用意して来た手形を役人たちの前にささげるだけで済んだ。

菖助にも別れを告げて、半蔵がもう一度関所の方を振り返つた時は、いかにすべてが形式的であるかを感じた。

とりいとうげ
鳥居峠はこの関所から宮みやの越こし、藪原二宿やぶはらを越したところにあ

る。風は冷たくても、日はかんかん照りつけた。前途の遠きは曲がりくねった坂道に行き悩んだ時よりも、かえつてその高い峠の上に御嶽遙拜所おんたけようはいじよなぞを見つけた時にあつた。そこは木曾川の上流とも別れて行くところだ。

「寿平次さん、江戸から横須賀よこすかまで何里とか言いましたね。」

「十六里さ。わたしは道中記でそれを調べて置いた。」

「江戸までの里数を入れると、九十九里ですか。」

「まあ、ざつと百里というものでしょう。」

供の佐吉も、この主人らの話を引き取つて、

「まだこれから先に木曾二宿もあるら。江戸は遠いなし。」

こんな言葉をかわしながら、三人とも日暮れ前の途を急いで、やがてその峠を降りた。

「お泊まりなすつておいでなさい。奈良井のお宿はこちらでございませう。浪花講の御定宿はこちらでございませう。」

しきりに客を招く声がする。街道の両側に軒を並べた家々からは、競うようにその招き声が聞こえる。半蔵らが鳥居峠を降りて、そのふもとにある奈良井に着いた時は、他の旅人らも思い思いに旅籠屋を物色しつつあった。

半蔵はかねて父の懇意にする庄屋仲間の家に泊めてもらうことにして、寿平次や佐吉をそこへ誘った。往来の方へ突き出したようなこの家の低い二階にもきまりで表廊下が造りつけて

あつて、馬籠や妻籠に見る街道風の屋造りはその奈良井にもあつた。

「半蔵さん、わたしはもう胼胝をこしらえてしまつた。」

と寿平次は笑いながら言つて、草鞋のために水腫れのした足を盥の中の湯に浸した。半蔵も同じように足を洗つて、広い囲炉裏ばたから裏庭の見える座敷へ通された。きのこ、豆、唐辛、紫蘇などが障子の外の縁に乾してあるようなところだ。気の置けない家だ。

「静かだ。」

寿平次は腰にした道中差しを部屋へやの床の間へ預ける時に言つた。その静かさは、河の音の耳につく福島あたりにはないものだった。そのこの庄屋の主人は、半蔵が父とはよく福島の方で顔を合わせるかと言ひ、この同じ部屋に吉左衛門を泊めたこともあ

ると言い、そんな縁故からも江戸行きとやの若者をよろこんでもてなそうとしてくれた。ちようど鳥屋とやのさかりのころで、木曾名物の小鳥でも焼こうと言つてくれるのもその主人だ。鳥居峠つぐみの鶉つぐみは名高い。鶉ばかりでなく、裏山には駒鳥こまどり、山郭公やまほととぎすの声すがきかれる。仏法僧ぶつぼうそうも来て鳴く。ここに住むものは、表の部屋に向かうの鳥の声をきき、裏の部屋にこちらの鳥の声をきく。そうしたことを語り聞かせるのもまたその主人だ。

半蔵らは同じ木曾路でもずっと東寄りの宿場の中に来ていた。鳥居峠一つ越したただけでも、親たちや妻子のいる木曾の西のはずれはにわかわかに遠くなつた。しかしそこはなんとなく気の落ち着く山のすそで、旅の合羽かっぱも脚絆きやはんも脱いで置いて、田舎風いなかな風呂ふろに峠道の汗を忘れた時は、いずれも活いき返つたような心地こころになつた。

「ここの家は庄屋を勤めてるだけなんです。本陣問屋は別にあるんですね。」

「そうらしい。」

半蔵と寿平次は一風呂浴びたあとのきつぱりした心地で、奈良井の庄屋の裏座敷に互いの旅の思いを比べ合った。朝晩はめつきり寒く、部屋には炬燵こたつができていくらいだ。寿平次は下女がさげて来てくれた行燈あんどんを引きよせて、そのかげに道中の日記や矢立てを取り出した。藪原やぶはらで求めた草鞋わらじが何文もん、峠の茶屋での休みが何文というようなことまで細かくつけていた。

「寿平次さん、君はそれでも感心ですね。」

「どうしてさ。」

「妻籠の方でもわたしは君の机の上に載つてる覚え帳を見て来ました。君にはそういう綿密なところがある。」

どうして半蔵がこんなことを言い出したかというに、本陣庄屋問屋の仕事は将来に彼を待ち受けていたからで。二人は十八歳のころから、すでにその見習いを命ぜられていて、福島役所への出張といい、諸大名の送り迎えといい、二人が少年時代から受けて来た薰陶はすべてその準備のためでないものはなかった。半蔵がまだ親の名跡みょうせきを継がないのに比べると、寿平次の方はすでに青年の庄屋であるの違いだ。

半蔵は嘆息して、

「吾家うちの阿爺おやじの心持ちはわたしによくわかる。家を放擲ほうてきしてまで学問に没頭するようなものよりも、よい本陣の跡継ぎを出したいというのが、あの人の本意なんでき。阿爺おやじももう年を取つ

ていますからね。」

「半蔵さんはため息ばかりついてるじゃありませんか。」

「でも、君には事務の執れるように具そなわつてるところがあるからいい。」

「そう君のように、むずかしく考えるからさ。庄屋としては民意を代表するし、本陣問屋としては諸街道の交通事業に参加すると想おもつて見たまえ。とにかく、働きがいがありますぜ。」

囲炉裏いろりばたの方で焼く小鳥の香氣は、やがて二人のいる座敷の方まで通つて来た。夕飯には、下女が来て広い炬燵こたついた板の上を取り片づけ、そこを食卓の代わりとしてくれた。一本つけてくれた鋤ちゆうし子、串差くしざしにして皿さらの上に盛られた鵜つぐみ、すべては客を扱くつろいだ慣れた家の主人の心づかいからであつた。その時、半蔵は次ぎの間に寛くつろいでいる佐吉を呼んで、

「佐吉、お前もここへお膳ぜんを持って来ないか。旅だ。今夜は一杯やれ。」

この半蔵の「一杯」が佐吉をほほえませた。佐吉は年若ながらに、半蔵よりも飲める口であつたから。

「おれは囲炉裏いろりばたでいたただかず。その方が勝手だで。」
と言つて佐吉は引きさがつた。

「寿平次さん、わたしはこんな旅に出られたことすら、不思議のような気がする。実に一切から離れますね。」

「もうすこし君は楽な気持ちでもよくはありませんか。まあ、その盃さかずきでも乾ほすさ。」

若いもの二人ふたりは旅の疲れを忘れる程度に盃を重ねた。主人が馳走ちそうぶ振りの鵜うも食つた。焼きたての小鳥の骨をかむ音も互いの耳には楽しかつた。

「しかし、半蔵さんもよく話すようになった。以前には、ほんとに黙っていたようですね。」

「自分でもそう思いますよ。今度の旅じゃ、わたしも平田入門を許されて来ました。吾家の阿爺うちおやじもああいう人ですから、快く許してくれましたよ。わたしも、これで弟でもあると、家はその弟に譲って、もつと自分の勝手な方へ出て行って見たいんだけれど。」

「今から隠居でもするようなことを言い出した。半蔵さん——君は結局、宗教にでも行くような人じゃありませんか。わたしはそう思っただけで見ているんだが。」

「そこまではまだ考えていません。」

「どうでしょう、平田先生の学問というものは宗教じゃないでしょうか。」

「そうも言えましよう。しかし、あの先生の説いたものは宗教でも、その精神はいわゆる宗教とはまるきり別のものです。」

「まるきり別のものはよかつた。」

こたつばなし

炬燵話に夜はふけて行つた。ひっそりとした裏山に、奈良井川の上流に、そこへはもう東木曾の冬がやって来ていた。山気は二人の身にしみて、翌朝もまた霜かと思わせた。

おいわけ

追分の宿まで行くと、江戸の消息はすでにそこでいくらかわ

かつた。同行三人のものは、塩尻しおじり、下諏訪しもすわから和田峠を越え、

ちくまがわ

千曲川を渡つて、木曾街道と善光寺道との交叉点こうさてんにあたるその

なぬし

高原地の上へ出た。そこに住む追分の名主で、年寄役を兼ねた

ぶんだゆう

文太夫は、かねて寿平次が先代とは懇意にした間柄で、そんな

縁故から江戸行き若者らの素通りを許さなかつた。

名主文太夫は、野半天のぼんてん、割羽織わりぼおりに、捕縄とりなわで、御領私領の入れ

交まじつた十一か村の秣場まぐさばを取り締まつているような人であつた。

その地方にある山林の枯れ痛み、風折れ、雪折れ、あるいは枝卸

しなどの見回りをしているような人であつた。半蔵らはこの客

好きな名主の家に引き留められて、佐久の味噌汁みそじるや堅い地大根じだいこん

の沢庵たくあんなどを味わいながら、赤松、落葉松からまつの山林の多い浅間山

腹がいかに郷里の方の谿たにと相違するかを聞かされた。曠野こうやと、

焼け石と、砂と、烈風と、土地の事情に精通した名主の話は尽

きるということを知らなかつた。

しかし、そればかりではない。半蔵らが追分に送つた一夜の

無意味でなかつたことは、思いがけない江戸の消息までもそこ

で知ることができたからで。その晩、文太夫が半蔵や寿平次に

取り出して見せた書面は、ある松代まつしろの藩士から借りて写し取つて置いたというものであつた。嘉永六年六月十一日付として、江戸屋敷の方にいる人の書き送つたもので、黒船騒ぎ当時の様子を伝えたものであつた。

「このたび、異国船渡り来り候きた そらうらうにつき、江戸表はことのほかなる儀にて、東海道筋よりの早注進矢はやちゆうしんのごとく、よつて諸国

御大名とところどころの御堅め仰せ付けられ候。しかるところ、

異国船神奈川沖かながわおきへ乗り入れ候おもむき、御老中御屋敷へ注進あり。右につき、夜分急に御登城にて、それぞれ御下知仰せ

付けられ、七日夜までに陣の面々は左の通り。

一、松平越前守様まつだいらえちぜんのかみ、(越前福井藩主) 品川御殿山お堅めしながわごてんやま かた。

一、細川越中守様ほそかわえちゆうのかみ、(肥後熊本藩主) 大森村お堅めおおもりむら。

一、松平大膳太夫様だいでんだゆう、(長州藩主) 鉄砲洲および佃島てっぽうず つくだじま。

一、松平阿波守様、あわのかみ（阿州徳島藩主）御浜御殿。おはまごてん

一、酒井雅楽頭様、さかいうたのかみ（播州姫路藩主）ばんしゅうひめじ 深川一円。ふかがわ

一、立花左近将監様。たちばなぎこんしょうげん 伊豆大島一円。いずおおしま 松平下総守様、しもうさのかみ 安房上総

の両国。その他、川越城主松平大和守様をかわごえはじめ、万石以上

にて諸所にお堅めのため出陣の御大名数を知らず。

公儀御目付役、戸川中務少輔様、なかつかさしょうぶ 松平十郎兵衛様、じゅうろべえ 右御

両人は異国船見届けのため、陣場見回り仰せ付けられ、六日夜浦賀表へ御出立にこれあり候。

さて、このたびの異国船、国名相尋ね候ところ、北アメ

リカと申すところ。大船四艘着船。そう もつとも船の中より、朝

夕一両度ずつ大筒など打ち放し申し候よし。町人並びに近在

のものは賦役に遣わされ、ふえき 海岸の人家も大方はうちつぶして

諸家様のお堅め場所となり、民家の者ども妻子を引き連れて

立ち退き候もあり、米石べいこく日に高く、目も当てられず。実に戦国の習い、是非もなき次第にこれあり候。八日の早曉にいたり、御触れの文面左の通り。

一、異国船万一にも内海へ乗り入れ、非常の注進これあり候節は、老中より八代洲やしろずがし河岸火消し役へ相達し、同所にて平日の出火に紛れざるよう早鐘うち出しいだ申すべきこと。

一、右の通り、火消し役にて早鐘うち出し候節は、出火の通り相心得、登城の道筋その他相堅め候よういたすべきこと。

一、右については、江戸場末まで早鐘行き届かざる場合もこれあるべく、万石以上の面々においては早半鐘はやはんしやう相鳴らし申すべきこと。

右のおもむき、御用番御老中よりも仰せられ候。とりあえず当地のありさま申し上げ候。

以上。」

実に、一息に、かねて心にかかつていたことが半蔵の胸の中を通り過ぎた。これだけの消息も、木曾の山の中までは届かなかつたものだ。すくなくも、半蔵が狭い見聞の世界へは、漠然ぼくぜんとしたうわきとしてしかはいって来なかつたものだ。あの彦根ひこねの早飛脚が一度江戸のうわさを伝えてからの混雑、狼狽ろうばいそのものとも言うべき諸大名がおびただしい通行、それから引き続きこの街道に起こつて来た種々な変化の意味も、その時思い合わされた。

「寿平次さん、君はこの手紙をどう思いますね。」

「さあ、わたしもこれほどとは思わなかつた。」

半蔵は寿平次と顔を見合わせたが、激しい精神こころの動揺は隠せなかつた。

郷里を出立してから十一日目に三人は板橋の宿を望んだ。戸田川の舟渡しを越して行くと、木曾街道もその終点で尽きている。そこまでたどり着くと江戸も近かった。

十二日目の朝早く三人は板橋を離れた。江戸の中心地まで二里と聞いただけでも、三人が踏みしめて行く草鞋わらじの先は軽かった。道中記のたよりになるのも板橋いたばしまでで、巢鴨すがもの立場たてばから先は江戸の絵図にでもよるほかはない。安政の大地震後一年目で、震災当時多く板橋に避難したという武家屋敷の人々もすでに帰って行ったところであるが、仮小屋の屋根、傾いた軒、新たに修繕の加えられた壁などは行く先に見られる。三人は右を見、左を

見して、本郷森川宿ほんごうから神田明神かんだみょうじんの横手に添い、筋違見附すじかいみつけへと取って、復興最中の町にはいった。

「これが江戸か。」

半蔵らは八十余里の道をたどつて来て、ようやくその筋違すじかいの広場に、見附の門に近い高札場こうさつばの前に自分らを見つけた。広場の一角に配置されてある大名屋敷、向こうの町の空に高い火見櫓ひのみやぐらまでがその位置から望まれる。諸役人は騎馬で市中を往来すると見えて、鎗持やりもちの奴やつこ、その他の従者を従えた馬上の人が、その広場を横ぎりつつある。にわかこつぷしよに講武所の創設されたとも聞くところで、旗本はたもと、御家人ごけにん、陪臣ばいしん、浪人ろうにんに至るまでもけいこの志望者を募るなぞの物々しい空気が満ちあふれていた。

半蔵らがめざして行つた十一屋という宿屋は、両国りやうごくの方にある。小網町こあみちよう、馬喰町ばくろちよう、日本橋数寄屋町すきやちよう、諸国旅人の泊まる定宿じようやどもいろ

いろある中で、半蔵らは両国の宿屋を選ぶことにした。同郷の人が経営しているというだけでもその宿屋は心やすく思われたからで。ちようど、昌平橋しょうへいばしから両国までは船で行かれることを教えてくれる人もあつて、三人とも柳の樹きの続いた土手の下を船で行つた。うわさに聞く浅草橋あさくさばしまで行くと、筋違すじかいで見たような見附みつけの門はそこにもあつた。両国の宿屋は船の着いた河岸かしからごちやごちやとした広小路ひろこうじを通り抜けたところにあつて、一屋とした看板からして堅気風かたぎふうな家だ。まだ昼前のことで、大きな風呂敷包ふろしきづつみを背負しよつた男、帳面をぶらさげて行く小僧こぞうなぞが、その辺の町中を往いつたり来たりしていた。

「皆さんは木曾きその方から。まあ、ようこそ。」

と言つて迎えてくれる若いかみさんの声を聞きながら、半蔵も寿平しゅへい次も草鞋わらじの紐ひもを解いた。そこへ荷を卸した佐吉のそばで、

ふたり
二人とも長い道中のあとの棒のようになった足を洗った。

「ようやく、ようやく。」

二階の部屋へやへ案内されたあとで、半蔵は寿平次と顔を見合わせて言ったが、まだ二人とも脚絆きやはんをつけたままだった。

「ここまで来ると、さすがに陽気は違えますなあ。宿屋の女中などはまだ袴あわせを着ていますね。」

と寿平次も言つて、その足で部屋のなかを歩き回つた。

半蔵が江戸へ出たころは、木曾の青年でこの都会に学んで
いるという人のうわさも聞かなかつた。ただ一人ひとり、木曾福島の
武居拙蔵たけいせつぞう、その人は漢学者としての古賀侗庵こがどうあんに就つき、塩谷岩陰しおのやとういん、
松崎慊堂まつざきけんどうにも知られ、安井息軒やすいそつけんとも交わりがあつて、しばらく

おぢや みず 御茶の水の昌平しやうへいこう鬢に学んだが、親は老い家は貧しくて、数年前に郷里の方へ帰つて行つたというわきだけが残つていた。

半蔵もまだ若かつた。青年として生くべき道を求めていた彼には、そうした方面のうわきにも心をひかれた。それにもまして彼の注意をひいたのは、幕府で設けた蕃書調所ばんしよしらべしよなぞのすでに開かれていますと聞くことだつた。箕作みつくりげんぼ阮甫、杉田すぎたせいけい成卿なぞの蘭学者を中心に、諸人所蔵の蕃書の翻訳がそこで始まつていた。

この江戸へ出て来て見ると、日に日に外国の勢力の延びて来ていることは半蔵なぞの想像以上である。その年の八月には三隻の英艦までが長崎にはいつたことの報知しらせも伝わっている。品川しながわおき沖には御台場おだいばが築かれて、多くの人の心に海防の念をよび起こしたとも聞く。外国御用掛ごようがかりの交代に、江戸城を中心にした交易大評定のうわきに、震災後めぐつて来た一周年を迎えた江戸の市

民は毎日のように何かの出来事を待ち受けるかのようでもある。

両国へ着いた翌日、半蔵は寿平次と二人で十一屋の二階にいて、遠く町の空に響いて来る大砲調練の音なぞをききながら、旅に疲れたからだを休めていた。佐吉も階下したで別の部屋へやに休んでいた。同郷と聞いてはなつかしいと言つて、半蔵たちのところへ話し込みに来る宿屋の隠居もある。その話し好きな隠居は、木曾の山の中を出て江戸に運命を開拓するまでの自分の苦心なぞを語つた末に、

「あなたがたに江戸の話をお聞かせるとおっしゃられても、わたしも困る。」

と断わつて、なんと言つても忘れがたいのは嘉永六年かえいの六月に十二代將軍の薨去こうきよを伝えたころだと言ひ出した。

受け売りにしても隠居の話はくわしかつた。ちようどアメリ

カのパリイが初めて浦賀に渡来した翌日あたりは、將軍は病の床にあつた。強い暑さに中あたつて、多勢の医者が手を尽くしても、將軍の疲労は日に日に増すばかりであつた。將軍自身にもはや起たてないことを知りながら、押して老中を呼んで、今回の大事は開關かいびやく以来の珍事である、自分も深く心を痛めているが、不幸にして大病に冒され、いかんともすることができないと語つたという。ついては、水戸みとの隠居（烈公）は年来海外のことに苦心して、定めしよい了簡りょうけんもあるうから、自分の死後外国処置の件は隠居に相談するようにと言い置いたという。アメリカの軍艦が内海に乗り入れたのは、その夜のことであつた。宿直のものから、ただいま伊勢いせ（老中阿部あべ）登城、ただいま備後びんご（老中牧野）登城と上申するのを聞いて、將軍はすぐにこれへ呼べと言ひ、「肩衣かたぎぬ、肩衣」と求めた。その時將軍はすでに疲れ切つ

ていた。極度に困くるしんで、精神も次第に恍惚こうこつとなるほどだった。それでも人に扶たすけられて、いつものように正しくすわり直し、肩衣を着けた。それから老中を呼んで、二人の言うことを聞くうとしたが、アメリカの軍艦がまたにわかはいつに外海へ出たという再度の報知しらせを得たので、二人の老中も拜謁はいえつを請うには及ばないで引き退いた。翌日、將軍は休息の部屋へやで薨こうじた。

十一屋の隠居はこの話を日ごろ出入りする幕府奥詰おくづめの医者で喜多村瑞見きたむらざいけんという人から聞いたと半蔵らに言い添えて見せた。

さらに言葉を継いで、

「わたしはあの公方様くぼうさまの話の思い出すと、涙が出て来ます。何にしろ、あなた、初めて異国の船が内海かじぐに乗り入れた時の江戸の騒ぎはありませんや。諸大名は火事具足かじぐそくで登城するか、持出場持ち場を堅めるかというんでしょう。火の用心のお触れは出

る。鉄砲や具足の値は平常ふだんの倍になる。海岸の方に住んでるものは、みんな荷物を背負しょつて逃げましたからね。わたしもこんな宿屋商売をして見ていますが、世の中はあれから変わりましたよ。」

半蔵も、寿平次も、この隠居の出て行つたあとで、ともかくも江戸の空気の濃い町中に互いの旅の身を置き得たことを感じた。木曾の山の中にいて想像したと、出て来て見たとでは、実にたいした相違であることも感じた。

「半蔵さん、きょうは国へ手紙でも書こう。」

「わたしも一つ、馬籠まじめへ出すか。」

「半蔵さん、君はそれじゃ佐吉を連れて、あす平田先生を訪ねたずね

るとしたまえ。」

とりあえずそんな相談をして、その日一日は二人とも休息することにした。旅に限りがあつて、そう長い江戸の逗留とらりゆうは予定の日取りが許さなかつた。まだこれから先に日光行きにっこう、横須賀よこすか行きも二人を待つていた。

寿平次は手を鳴らして宿のかみさんと呼んだ。もうすこし早く三人が出て来ると、夷講えびすこうに間に合つて、大伝馬町おおてんまちょうの方に立つべつたら市のにぎわいも見られたとかみさんはいう。芝居しばいは、と尋ねると、市村いちむら、中村、森田三座とも狂言名題なだいの看板が出たばかりのころで、茶屋のかざり物、燈籠とうろう、提灯ちようちん、つみ物などは、あるいは見られても、狂言の見物には月のかわるまで待てといふ。当時売り出しの作者の新作で、世話に碎けた小団次こだんじの出し物が見られようかともいふ。

「朔日ついでちの顔見世かおみせは明けの七つ時どきでございますよ。太夫たゆうの二番叟さんばそうでも御覧ごらんになるんでしたら、暗くらいうちからお起きおきにならないと、間に合あいません。」

「江戸の芝居見物しばいみぶつも一日いちにちがかりですね。」

こんな話はなしの出るのも、旅たびらしかった。

夕飯ゆふめし後、半蔵はんざうはかねて郷里きやうりを出る時に用意よういして来た一通いっとうの書かき面めんを旅たびの荷物にものの中から取り出した。

「どれ、一つ寿平次しゅへいじさんに見みせますか。これがあす持つて行く誓詞せいしです。」

と言いって寿平次しゅへいじの前に置おいた。

誓詞

「このたび、御門ごもん入り願ねがい奉たてまつり候こうところ、御許ごきよ容ゆるなし下くだされ、御門ごもん人の列れつに召めいし加かえられ、本懐ほんくわいの至いたりに存ぞんじ奉たてまつり候こう。しか

る上は、専ら^{もは}皇国の道を尊信いたし、最も敬神の儀怠慢いたすまじく、生涯^{しやうがい}師弟の儀忘却^{つかまつ}仕るまじき事。

^{おおよけ}公の御制法に相背^{あいそむ}き候儀は申すに及ばず。すべて古学を申し立て、世間に異様の行ないをいたし、人の見聞を驚かし候よ
うの儀これあるまじく、ことさら師伝と偽り奇怪の説など申し立て候儀、一切仕るまじき事。

御流儀においては、秘伝口授など申す儀、かつてこれなき段、堅く相守り、さよふの事申し立て候儀これあるまじく、すべて^{ひれつ}鄙劣の振舞をいたし古学の名を穢^{けが}し申すまじき事。

学の兄弟相かわらず随分睦^{むつ}まじく相交わり、互いに古学興隆の志を相励み申すべく、我^{がしゅう}執を立て争論なぞいたし候儀これあるまじき事。

右の条々、謹^{つつし}んで相守り申すべく候。もし違乱に及び候わば、

やおよろず
あまつかみ
八百萬の天津神、
くにつかみ
国津神、
くだんのごとし
明らかに知ろしめすべきところな
り。よつて、誓詞如件。」

信州、木曾、馬籠村

青山半蔵

安政三年十月

かねたね
平田鉄胤大人

おんもと
御許

「これはなかなかやかましいものだ。」

「まだそのほかに、名簿を出すことになっています。行年何歳、
こうねん
父はだれ、職業は何、だれの紹介ということまで書いてあるん
です。」

その時、半蔵は翌朝の天気を気づかい顔に戸の方へ立って行つ

た。すみだがわ隅田川に近い水辺の夜の空がその戸に見えた。

「半蔵さん。」と寿平次はまたそばへ来てすわり直した相手の顔をながめながら、「君の誓詞には古学ということがしきりに出て来ますね。いつたい、国学をやる人はそんなに古代の方に目標を置いてかかるんですか。」

「そりゃ、そうさ。君。」

「過去はそんなに意味がありますかね。」

「君のいう過去は死んだ過去でしょう。ところが、あつたね篤胤先生なぞの考えた過去は生きてる過去です。あすは、あすはッて、みんなあすを待つてるけれど、そんなあすはいつまで待っても来やしません。きょうは、君、またたく間まに通まり過ぎて行く。過去こそ真まことじやありませんか。」

「君のいうことはわかります。」

「しかし、国学者だつて、そう一概に過去を目標に置こうとはしていません。中世以来は濁つて来ていると考えるんです。」

「待つてくれたまえ。わたしはそうくわしいことも知りませんがね、平田派の学問は偏かたより過ぎるような気がしてしかたがない。こんな時世になつて来て、そういう古学はどんなものでしょうかね。」

「そこですよ。外国の刺激を受ければ受けるほど、わたしたちは古代の方を振り返つて見るようになりました。そりや、わたしばかりじゃありません、中津川の景蔵さんや香蔵さんだつても、そうです。」

どうやら定めない空模様だつた。さびしくはあるが、そう寒くない時雨しぐれの来る音も戸の外にした。

江戸は、初めて来て見る半蔵らにとつて、どれほどの広さに伸びている都会とも、ちよつと見当のつけられなかつたような大きなところである。そこに住む老若男女ろうにやくなんによの数はかつて正確に計算せられたことがないと言うものもあるし、およそ二百万の人口はあろうと言うものもある。半蔵が連れと一緒に、この都会に足を踏み入れたのは武家屋敷の多い方面で、その辺は割合に人口も稀薄きはくなところであつた。両国まで来て初めて町の深さにはいつて見た。それもわずかに江戸の東北にあたる一つの小さな区域というにとどまる。

数日の滞在の後には、半蔵も佐吉を共に連れて山下町の方に平田家を訪問し、持参した誓詞のほか、酒魚料、扇子せんす壺箱を差し出したところ、先方でも快く祝い納めてくれた。平田家で

は、彼の名を誓詞帳（平田門人の台帳）に書き入れ、先師没後の門人となつたと心得よと言つて、束脩そくしゅうも篤胤大人うしの霊前に供えた。彼は日ごろ敬慕する鉄胤かねたねから、以来懇意にするように、学事にも出精するようになつて言われて帰つて来たが、その間に寿平次は猿若町さるわかちようの芝居見物などに出かけて行つた。そのころになると、二人はあちこちと見て回つた町々の知識から、八百八町から成るといふこの大きな都会の広がりはいくらかがい知ることができた。町中にある七つの橋を左右に見渡すことのできる一石橋いちこくばしの上に立つて見た時。国への江戸土産みやげに、元結もとゆい、油ようじ楊枝たぐいの類を求めらるなら、親父橋おやしばしまで行くと十一屋の隠居に教えられて、あの橋の畔たもとから鎧よろいの渡しの方を望んで見た時。目に入るかぎり無数の町家がたて込んでいて、高い火見櫓ひのみやぐら、並んだ軒、深い暖簾のれんから、いたるところの河岸かしに連なり続く土蔵の壁まで

——そこからまとまつて来る色彩の黒と白との調和も江戸らしかった。

しかし、世は封建時代だ。江戸大城の関門とも言うべき十五、六の見附みつけをめぐりにめぐる内濠うちぼりはこの都会にある橋々の下へ流れ続いて来ている。その外廓そとがわにはさらに十か所の関門を設けた外濠そとぼりがめぐらしてある。どれほどの家族を養い、どれほどの土地の面積を占め、どれほどの庭園と樹木とをもつかと思われるような、諸国大小の大名屋敷が要所要所に配置されてある。どこに親藩の屋敷を置き、どこに外様しんざまだいみよう大名の屋敷を置くかというような意匠の用心深さは、日本国の縮図を見る趣もある。言つて見れば、ここは大きな関所だ。町の角かどには必ず木戸があり、木戸のそばには番人の小屋がある。あの木曾街道の関所の方では、そこにいる役人が一切の通行者を監視するばかりでなく、

役人同志が互いに監視し合っていた。どうかすると、奉行ぶぎょうその人ですら下役から監視されることをまぬかれなかつた。それを押しひろげたような広大な天地が江戸だ。

半蔵らが予定の日取りもいつのまにか尽きた。いよいよ江戸を去る前の日が来た。半蔵としては、この都会で求めて行きたい書籍の十が一をも手に入れず、思うように同門の人も訪ねず、賀茂かもの大人うしが旧居の跡も見ずじまいであつても、ともかくも平田家を訪問して、こころよく入門の許しを得、鉄胤かねたねはじめその息子むすこさんの延胤のぶたねとも交わりを結ぶ端緒いとぐちを得たというだけでも満足して、十一屋の二階でいろいろと荷物を片づけにかかつた。

半蔵が部屋へやの廊下に出て見たころは夕方に近い。

「半蔵さん、きょうはひとりで町へ買い物に出て、それはよい娘を見て来ましたぜ。」

と言つて寿平次は国への江戸土産にするものなぞを手にはさげながら帰つて来た。

「君にはかなわない。すぐにそういうところへ目がつくんだから。」

半蔵はそれを言いかけて、思わず顔を染めた。二人は宿屋の二階の欄てすりに身を倚よせて、目につく風俗なぞを話し合いながら、しばらくそこに旅らしい時を送つた。髪を結綿ゆいわたというものにして、紅あかい鹿かの子この帯なぞをしめた若いさかりの娘の洗練された風俗も、こうした都会でなければ見られないものだ。国の方で素枯すがれた葱ねぎなぞを吹ふいている年ごろの女が、ここでは酸漿ほおずきを鳴ならしている。渋かきいろい柿色の「けいし」を小脇こわきにかかえながら、唄うたのけいこにでも通うらしい小娘のあどけなさ。黒縹くろじゆす子の襟えりのかわつた着物を着て水茶屋の暖簾のれんのかげに物思わしげな女のなま

めかしさ。極度に爛熟らんじゅくした江戸趣味は、もはや行くところまで行き尽くしたかとも思わせる。

やがて半蔵は佐吉を呼んだ。翌朝出かけられるばかりに旅の荷物をまとめさせた。町へは鯛いわしを売りに来た、蟹かにを売りに来たと言つて、物売りの声があるたびにきき耳を立てるのも佐吉だ。佐吉は、山下町の方の平田家まで供をしたおりのことを言い出して、主人と二人で帰りの昼じたくにある小料理屋へ立ち寄ろうとしたことを寿平次に話した末に、その下足番げそくばんの客を呼ぶ声が高い調子であるには驚かされたと笑つた。

「へい、いらつしやい。」

と佐吉は木訥ぼくとつな調子で、その口調をまねて見せた。

「あのへい、いらつしやいには、おれも弱つた。そこへ立ちすくんでしまつたに。」

とまた佐吉は笑つた。

「佐吉、江戸にもお別れだ。今夜は一緒に飯でもやれ。」

と半蔵は言つて、三人して宿屋の台所に集まつた。夕飯の膳が出た。佐吉がそこへかしまつたところは、馬籠の本陣の囲炉裏ばたで、どんどん焚火たきびをしながら主従一同食事する時と少しも変わらない。十一屋では膳部も質素なものであるが、江戸にもお別れだという客の好みとあつて、その晩にかぎり刺身さしみもついた。木曾の山の中のことにして見たら、深い森林に住む野鳥を捕え、熊くま、鹿しか、猪いのししなどの野獣の肉を食ひ、谷間の土に巢いしをかける地蜂じばちの子を賞美し、肴さかなと言えは塩辛いさんまか、鯛いいわしか、一年に一度の塩鱒しおぶりが膳につくのは年取りの祝いの時ぐらいにきまつたものである。それに比べると、ここにある鮪まぐろの刺身の新鮮な紅あかさはどうだ。その皿さらに刺身のツマとして添えてあるのも、織

細をきわめたものばかりだ。細い緑色の海髪。小さな茎のままの紫蘇しその実。黄菊。一つまみの大根おろしの上に青く置いたよわさびうな山葵。

「こう三人そろつたところは、どうしても山の中から出て来た野蛮人ですね。」

赤い襟えりを見せた給仕きゅうじの女中を前に置いて、寿平次はそんなことを言い出した。

「こんな話があるで。」と佐吉も膝ひざをかき合わせて、「木曾福島やまぎのこの山村様が江戸へ出るたびに、山猿やまざる、山猿と人にからかわれるのが、くやしくてしかたがない。ある日、口の悪い人たちを屋敷に招よんだと思わつせれ。そこが、お前さま、福島ふくしまの山村様だ。これが木曾名物の焼き栗ぐりだと言って、生なまの栗を火鉢ひばちの灰の中にくべて、ほんほんはねるやつをわざと鏝やじりでかき回したげな。」

「野性を發揮したか。」

と寿平次がふき出すと、半蔵はそれを打ち消すように、「しかし、寿平次さん、こう江戸のように開け過ぎてしまったら、動きが取れますまい。わたしたちは山猿でいい。」と言つて見せた。

食後にも三人は、互いの旅の思いを比べ合つた。江戸の水茶屋には感心した、と言うのは寿平次であつた。思いがけない屋敷町の方で読書の声を聞いて来た、と言うのは半蔵であつた。

その晩、半蔵は寿平次と二人枕まくらを並べて床についたが、夜番ひょうしぎの拍子木の音なぞが耳について、よく眠らなかつた。枕もとにあるしよんぼりとした行燈あんどんのかけで、敷いて寝た道中用の脇差わきざしを探つて見て、また安心して蒲団ふとんをかぶりながら、平田家を訪ねた日のことなぞを考えた。あの鉄胤かねたねから古学の興隆に励めと

言われて来たことを考えた。世は濁り、江戸は行き詰まり、一切のものが実に雑然紛然として互いに叫びをあげている中で、どうして国学者の夢などをこの地上に実現し得られようと考えた。

「自分のような愚かなものが、どうして生きよう。」
そこまで考えつづけた。

翌朝は、なるべく早く出立しようということになった。時が来て、半蔵は例の青い合羽かっぱ、寿平次は柿色かきいろの合羽かっぱに身をつつんで、すっかりしたくができた。佐吉はすでに草鞋わらじの紐ひもを結んだ。三人とも出かけられるばかりになった。

十一屋の隠居はそこへ飛んで出て来て、

「オヤ、これはどうも、お粗末さまでございました。どうかまた、お近いうちに。」

と手をもみながら言う。江戸生まれで、まだ木曾を知らない
というかみさんまでが、隠居のそばにいて、

「ほんとに、木曾のかたはおなつかしい。」

と別れぎわに言い添えた。

十一屋のあるところから両国橋まではほんのひとあし一歩だ。江戸の

なごりに、隅田川すみだがわを見て行こう、と半蔵が言い出して、やがて三

人で河岸の物揚げ場の近くへ出た。早い朝のことで、大江戸は

まだ眠りからさめきらないかのようである。ちようど、渦巻きうずま

流れて来る隅田川の水に乗って、川上の方角から橋の下へ降くだつ

て来る川船があつた。あたりに舫もやつている大小の船がまだ半分

夢を見ている中で、まず水の上へ活気をそそぎ入れるものは、

その船頭たちの掛け声だ。十一屋の隠居の話で、半蔵らはそれ

が埼玉川越さいたまかわごえの方から伊勢町河岸いせちようがしへと急ぐ便船びんせんであることを知っ

た。

「日の出だ。」

言い合わせたようなその声が起こった。三人は互いに雀躍こおどりして、本所方面ほんじよの初冬らしい空に登る太陽を迎えた。紅あかくはあるが、そうまぶしく輝かない。木曾の奥山に住み慣れた人たちは、谷間からだんだん空の明るくなることは知つていても、こんな日の出は知らないのだ。間もなく三人は千住せんじゆの方面をさして、静かにその橋のたもともからも離れて行つた。

四

千住から日光への往復九十里、横須賀への往復に三十四里、それに江戸と木曾との間の往復の里程を加えると、半蔵らの踏

む道はおよそ二百九十里からの旅である。

日光への寄り道を済まして、もう一度三人が千住まで引き返して来たころは、旅の空で旧曆十一月の十日過ぎを迎えた。その時は、千住からすぐに高輪たかなわへと取り、札ふだの辻つじの大木戸おおきど、番所を経て、東海道へと続く袖そでが浦うらの岸へ出た。うわさに聞く御台場おだいば、五つの堡壘ほうるいから成るその建造物はすでに工事を終わって、沖合ほしの方に遠く近く姿をあらわしていた。大森おおもりの海岸まで行って、半蔵はハツとした。初めて目に映る蒸気船——徳川幕府がオランダ政府から購かい入れたという外輪型がいりんがたの観光丸がその海岸から望まれた。

とうとう、半蔵らの旅は深い藍色あいいろの海の見えるところまで行った。神奈川かながわから金沢かなざわへと進んで、横須賀行きの船の出る港まで行った。客や荷物を待つ船頭が波打ちぎわで船のしたくをして

いるところまで行つた。

「なんだか遠く来たような気がする。郷里くにの方でも、みんなどうしていきましょう。」

「さあ、ねえ。」

「わたしたちが帰つて行く時分には、もう雪が村まで来ていましょう。」

「なんだぞなし。きつと、けきはサヨリ飯でもたいて、こつちのうわさでもしているぞなし。」

三人はこんなことを語り合いながら、金沢の港から出る船に移つた。

海は動いて行く船の底でおどつた。もはや、半蔵らはこれから尋ねて行こうとする横須賀在、公郷村くしやうむらの話で持ち切つた。五百年からの歴史のある古い山上やまがみの家族がそこに住むかと語り合つ

た。三浦一族の子孫にあたるという青山家の遠祖が、あの山上の家から分かれて、どの海を渡り、どの街道を通って、遠く木曾谷の西のはずれまではいって行つたものだろうと語り合つた。

当時の横須賀はまだ漁村である。船から陸を見て行くことも生まれ初めてのような半蔵らには、その辺を他の海岸に比べて言うこともできなかつたが、大島小島の多い三浦半島の海岸に沿うて旅を続けていることを想つて見ることはできた。ある岬みさきのかけまで行つた。海岸の方へ伸びて来ている山のふところに抱かれたような位置に、横須賀の港が隠れていた。

公郷村くこうむらとは、船の着いた漁師町りょうしまちから物の半道と隔たつていなかった。半蔵らは横須賀まで行つて、山上のうわさを耳にした。公郷村に古い屋敷と言えば、土地の漁師にまでよく知られていた。三人がはるばる尋ねて行つたところは、木曾の山の中で想

像したとは大違いなところだ。長閑のどかなことも想像以上だ。ほのかな鶏の声が聞こえて、漁師たちの住む家々の屋根からは静かに立ちのぼる煙を見るような仙郷せんきょうだ。

妻籠つまご本陣青山寿平次殿へ、短刀一本。ただし、古刀。銘なし。馬籠まごめ本陣青山半蔵殿へ、蓬菜ほうらいの凶掛け物一軸。ただし、光琳こうりん筆。山上家の当主、七郎左衛門は公郷村すまいの住居の方にいて、こんな記念の二品までも用意しながら、二人ふたりの珍客を今か今かと待ち受けていた。

「もうお客さまも見えそうなものだぞ。だれかそこいらまで見に行つて来い。」

と家に使っている男衆に声をかけた。

半蔵らが百里の道も遠しとしないで尋ねて来るといふ報知しらせは七郎左衛門をじつとさせて置かなかつた。彼は古い大きな住宅の持ち主で、二十畳からある広間を奥の方へ通り抜け、人一人ひとり隠れられるほどの太い大極柱だいくぼしらのわきを回つて、十五畳、十畳と二部屋へや続いた奥座敷のなかをあちこちと静かに歩いた。そこは彼が客をもてなすために用意して待つていたところだ。心をこめた記念の二品は三宝さんぼうに載せて床の間に置いてある。先祖伝来の軸物などは客待ち顔に壁の上に掛かっている。

七郎左衛門の家には、三浦氏から山上氏、山上氏から青山氏と分かれて行つたくわしい系図をはじめ、祖先らの遺物と伝えらるる古い直垂ひたれから、武具、書画、陶器たぐいの類まで、何百年となく保存されて来たものはかなり多い。彼が客に見せたいと思う古文書などは、取り出したら際限きりのないほど長櫃ながびつの底うすに埋まつて

いる。あれもこれとも思う心で、彼は奥座敷から古い庭の見える方へ行つた。松林の多い裏山つづきに樹木をあしらつた昔の人の意匠がそこにある。硬質な岩の間に躑躅つづじ、楓かえでなどを配置した苔蒸こけむした築山つきやまがそこにある。どつしりとした古風な石燈籠いしどうろうが一つ置いてあつて、その辺には円まるく厚ぼつたい「つわぶき」なごも集めてある。遠い祖先の昔はまだそんなところに残つて、子孫の目の前に息づいているかのようでもある。

「まあ、客が来たら、この庭でも見て行つてもらおう。これは自分が子供の時分からながめて来た庭だ。あの時分からほとんど変わらない庭だ。」

こんなことを思いながら待ち受けているところへ、半蔵と寿平次の二人が佐吉を供に連れて着いた。その時、七郎左衛門は家のものを呼んで袴はかまを持つて来させ、その上に短い羽織を着て、

古い鎗やりなぞの正面の壁の上に掛かっている玄関まで出て迎えた。

「これは。これは。」

七郎左衛門は驚きに近いほどのよろこびのこもった調子で言った。

「これ、お供の衆。まあ草鞋わらじでも脱いで、上がってください。」
と彼の家内かないまでそこへ出て言葉を添える。案内顔な主人のあとについて、寿平次は改まった顔つき、半蔵も眉まゆをあげながら奥の方へ通つたあとで、佐吉は二人の脱いだ草鞋ひもの紐ひもなど結び合わせた。

やがて、奥座敷では主人と寿平次との一別以来の挨拶あいさつ、半蔵との初対面の挨拶あいさつなどがあつた。主人の引き合わせで、幾人の家の人が半蔵らのところへ挨拶に来るとも知れなかつた。これはせがれ、これはその弟、これは嫁、と主人の引き合わせが済んだ。

あとには、まだ幼い子供たちが目を円くまるしながら、かわるがわるそこへお辞儀をしに出て来た。

「青山さん、わたしどもには三夫婦もそろっていますよ。」

この七郎左衛門の言葉がまず半蔵らを驚かした。

古式を重んずるもてなし款待のありさまが、間もなくそこにひらけた。

かわらけ土器なぞを三宝の上に載せ、挨拶かたがたはいつて来る髪のおおばあさんの後ろからは、十六、七ばかりの孫娘がへいじ瓶子を運んで来た。

「おゝ、おゝ、よいむすこ息さんがただ。」

とおばあさんは半蔵の前にも、寿平次の前にも挨拶に来た。

「とりあえず一つお受けください。」

とまたおばあさんは言いながら、三つ組のかわらけ土器を白木の三宝のまま丁寧れいしゆに客の前に置いて、それから冷酒を勧めた。

「改めて親類のお盃さかずきとやりますかな。」

そういう七郎左衛門の愉快げな声を聞きながら、まず年若な寿平次が土器を受けた。続いて半蔵も冷酒を飲みほした。

「でも、不思議な御縁じゃありませんか。」と七郎左衛門はおばあさんの方を見て言った。「わたしが妻籠つまごの青山さんのお宅へ一晩泊めていただいた時に、同じ定紋じやうもんから昔がわかりましたよ。え、丸まるに三みつ引びきと、窠かに木瓜もっこうとでさ。さもなかったら、わたし

は知らずに通り過ぎてしまふところでしたし、わざわざお二人で訪ねたずて来てくださるなんて、こんなめずらしいことも起こつて来やしません。こうしてお盃を取りかわすなんて、なんだか夢のような気がします。」

「そりゃ、お前さん、御先祖さまが引き合わせてくださつたのさ。」

おばあさんは、おばあさんらしいことを言った。

相州三浦の公郷村まで動いたことは、半蔵にとつて黒船上陸の地点に近いところまで動いて見たことであつた。

その時になると、半蔵は浦賀に近いこの公郷村の旧家に身を置いて、あの追分おいわけの名主なぬし文太夫ぶんたゆうから見せてもらつて来た手紙も、

両国十一屋の隠居から聞いた話も、すべてそれを胸にまとめて

見ることができた。江戸から踏んで来た松並樹まつなみきの続いた砂の多

い街道は、三年前うしどし丑年の六月にアメリカのペリイが初めての着

船を伝えたころ、早飛脚の織るように往来したところだ。当時

木曾路きそじを通過した尾張藩おわりの家中、続いて彦根ひこねの家中などがおび

ただしい同勢で山の上を急いだのも、この海岸一帯の持ち場持ち

場を堅めるため、あるいは浦賀の現場へ駆けつけるためであったのだ。

そういう半蔵はここまで旅を一緒にして来た寿平次にたんとお礼を言ってもよかった。もし寿平次の誘ってくれることがなかったら、容易にはこんな機会は得られなかつたかもしれない。供の佐吉にも感謝していい。雨の日も風の日も長い道中を一緒にして、影の形に添うように何くれと主人の身をいたわりながら、ここまでやって来たのも佐吉だ。おかげと半蔵は平田入門のこころざしを果たし、江戸の様子をも探り、日光の地方をも見、いくらかでもこれまでの旅に開けて来た耳でもって、七郎左衛門のような人の話をきくこともできた。

半蔵の前にいる七郎左衛門は、事あるごとに浦賀の番所へ詰めるという人である。この内海へ乗り入れる一切の船舶は一応

七郎左衛門のところへ断わりに来るといふほど土地の名望を集めている人である。

古風な盃の交換も済んだころ、七郎左衛門の家内の茶菓などをそこへ運んで来て言った。

「あなた、茶室の方へでも御案内したら。」

「そうさなあ。」

「あちらの方が落ち着いてよくはありませんか。」

「いろいろお話を伺いたいこともある。とにかく、吾家うちにある古い系図をここでお目につけよう。それから茶室の方へ御案内するとしよう。」

そう七郎左衛門は答えて、一丈も二丈もあるような巻き物を奥座敷おくずまの小襖から取り出して来た。その長巻の軸を半蔵や寿平次の前にひろげて見せた。

この山上の家がまだ三浦の姓を名乗っていた時代の遠い先祖のことがそこに出て来た。三浦の祖で鎮守府將軍であつた三浦忠通ただみちという人の名が出て来た。衣笠城きぬがさじょうを築き、この三浦半島を領していた三浦平太夫という人の名も出て来た。治承四年の八月に、八十九歳で衣笠城に自害した三浦大介義明おおすけよしあきという人の名も出て来た。宝治元年の六月、前將軍頼經よりつねを立てようとして事あらわ覚れ、討手うってのために敗られて、一族共に法華堂ほつけどうで自害した三浦若狭守泰村わかさのかみやすむらという人の名なども出て来た。

「ホ。半蔵さん、御覽なさい。ここに三浦兵衛尉義勝ひょうえのじょうよしかつとありますよ。この人は従五位下じゆげだ。元弘二年新田義貞げんこうを輔けて、鎌倉かまくらを攻め、北条高時ほうじょうたかときの一族を滅ぼす、先世の讐あだを復すかえというべしとしてありますよ。」

「みんな戦場を駆け回つた人たちなんですな。」

寿平次も半蔵も互いに好奇心に燃えて、そのくわしい系図に見入った。

「つまり三浦の家は一度北条早雲そううんに滅ぼされて、それからまた再興したんですね。」と七郎左衛門は言った。「五千町の田地をもらって、山上と姓を改めたともありますね。昔はこの辺を公郷くじょうの浦とも、大田津とも言ったそうです。この半島には油壺あぶらつぼというところがありますが、三浦道寸父子どうすんの墓石などもあそこに残っていますよ。」

やがて半蔵らはこの七郎左衛門の案内で、茶室の方へ通う庭こみちの小径のところへ出た。裏山つづぎの稲荷いなりの祠ほくらなどが横手に見える庭石の間を登って、築山つきやまをめぐる位置まで出たところに、寿平次は半蔵を顧みて言った。

「驚きましたねえ。この山上の二代目の先祖は楠家くすのきけから養子に來

ていますよ。毎年正月には楠公なんこうの肖像を床の間に掛けて、鏡餅かがもちや神酒みきを供えるというじゃありませんか。」

「わたしたちの家が古いと思つたら、ここの家はもつと古い。」

松林の間に海の見える裏山の茶室に席を移してから、七郎左衛門は浦賀の番所通いの話などを半蔵らの前で始めた。二千人の水兵を載せたアメリカの艦隊が初めて浦賀に入港した当時のことがそれからそれと引き出された。

七郎左衛門の話はくわしい。彼は水師提督すいしペリイの座乗ざじようした三本マストの旗艦ミスシッパイ号をも目撃した人である。浦賀の奉行ぶぎようがそれと知つた時は、すぐに要所要所を堅め、ここは異国の人と応接すべき場所でない、アメリカ大統領の書翰しよかんを呈し

たいとあるなら長崎の方へ行けと論ろんした。けれども、アメリカが日本の開国を促そうとしたは決して一朝一夕のことではないらしい。先方は断然たる決心をもつて迫つて来た。もし浦賀で国書を受け取ることができないなら、江戸へ行こう。それでも要領を得ないなら、艦隊は自由行動を執ろう。この脅迫の影響は実に大きかった。のみならずペリイは測量艇隊を放つて浦賀付近の港内を測量し、さらに内海に向かわしめ、軍艦がそれを掩護えんごして観音崎かんのんざきから走水はしりみずの付近にまで達した。浦賀奉行とペリイとの久里くりが浜はまでの会見がそれから開始された。海岸に幕を張り、弓矢、鉄砲を用意し、五千人からの護衛の武士が出て万一の場合に具そなえた。なにしろ先方は二千人からの水兵が上陸して、列をつくつて進退する。軍艦から打ち出す大筒おおづつの礼砲は近海から遠い山々までもとどろき渡る。かねての約束のとおり、奉行

は一言をも発しないで国書だけを受け取つて、ともかくも会見の式を終わった。その間半時ほんときばかり。ペリイは大いに軍容を示して、日本人の高い鼻をへし折ろうとでも考えたものか、脅迫がましい態度がそれからも続きに続いた。全艦隊は小柴沖こしばおきから羽田はねだ沖まで進み、はるかに江戸の市街を望み見るところまでも乗り入れて、それから退帆たいはんのうちに、万一国書を受けつけないなら非常手段に訴えるという言葉を残した。そればかりではない。日本で飽くまで開国を肯がえんじないなら、武力に訴えてもその態度を改めさせなければならぬ、日本人はよろしく国法によつて防戦するがいい、米国は必ず勝つて見せる、ついでには二本の白旗を贈る、戦いくに敗まけて講和を求める時にそれを掲げて来るなら、その時は砲撃を中止するであろうとの言葉を残した。

「わたしはアメリカの船を見ました。二度目にやつて来た時は

九艘そうも見ました。さよう、二度目の時などは三か月もあの沖合いに掛かっていたよ。そりゃ、あなた、日本の国情がどうあろうと、こつちの言い分が通るまでは動かないというふうに——槓杆てこでも動かない巖いわのような権幕けんまくで。」

これらの七郎左衛門の話は、半蔵にも、寿平次にも、容易ならぬ時代に際会したことを悟らせた。当時の青年として、この不安はまた当然覚悟すべきものであることを思わせた。同時に、この仙郷せんきやうのような三浦半島の漁村へも、そうした世界の新しい暗い潮うしおが遠慮なく打ち寄せて来ていることを思わせた。

「時に、お話はお話だ。わたしの茶も怪しいものですが、せつかくおいでくださいだったのですから、一服立てて進ぜたい。」

そう言いながら、七郎左衛門はその茶室にある炉の前にすわり直した。そこにある低い天井も、簡素な壁も、静かな窓も、海

の方から聞こえて来る濤なみの音も、すべてはこの山上の主人がたましいを落ち着けるためにあるかのように見える。

「なにしろ青山さんたちは、お二人ふたりともまだ若いのがうらやましい。これからの時世はあなたがたを待っていますよ。」

七郎左衛門は手にした袱紗ふくさで夏目の蓋ふたを掃き浄きよめながら言った。匂においこぼれるような青い挽茶ひきちやの粉は茶碗ちやわんに移された。湯と水とに対する親しみの力、貴賤きせん貧富ひんぷの外にあるむなしさ、渋さと甘さと濃さと淡さとを一つの茶碗に盛り入れて、泡あわも汁しるも一緒に溶け合つたような高い茶の香気をかいで見た時は、半蔵も寿平次もしばらくそこに旅の身を忘れていた。

母屋もやの方からは風呂ふろの沸いたことを知らせに来る男があつた。

七郎左衛門は起たちがけに、その男と寿平次とを見比べながら、「妻籠つまごの青山さんはもうお忘れになつたかもしれない。」

「へい、手前は主人のお供をいたしまして、木曾のお宅へ一晚泊めていただいたものでございますよ。」

その男は手をもみもみ言った。

夕日は松林の間に満ちて来た。海も光った。いずれこの夕焼けでは翌朝も晴れだろう、一同海岸に出て遊ぼう、網でも引かせよう、ゆつくり三浦に足を休めて行ってくれ、そんなことを言つて客をもてなそうとする七郎左衛門が言葉のはしにも古里の人の心がこもつていた。まつたく、木曾の山村を開拓した青山家の祖先にとつては、ここが古里なのだ。裏山の崖がけの下の方には、岸へ押し寄せ押し寄せする潮が全世界をめぐる生命の脈搏みやくはくのように、間まをおいては響き砕けていた。半蔵も寿平次もその裏山の上の位置から去りかねて、海を望みながら松林の間に立ちつくした。

五

異国——アメリカをもロシヤをも含めた広い意味でのヨーロッパ——シナでもなく朝鮮でもなくインドでもない異国に対するこの国の人の最初の印象は、決して後世から想像するような好ましいものではなかった。

もし当時のいわゆる黒船、あるいは唐人船とうじんぶねが、二本の白旗をこの国の海岸に残して置いて行くような人に乗せて来なかつたら。もしその黒船が力に訴えても開国を促そうとするような人でなしに、真に平和修好の使節を乗せて来たなら。古来この国に住むものは、そう異邦から渡つて来た人たちを毛ぎらいする民族でもなかつた。むしろそれらの人たちをよろこび迎えた

早い歴史をさえ持つていた。シナ、インドは知らないこと、この日本の関するかぎり、もし真に相互の国際の義務を教えようとして渡来した人があつたなら、よろこんでそれを学ぼうとしたりに違いない。また、これほど深刻な国内の動揺と狼狽ろうばいと混乱とを経験せず済んだかもしれない。不幸にも、ヨーロッパ人は世界にわたつての土地征服者として、まずこの島国の人の目に映つた。「人間の組織的な意志の壮大な権化ごんげ、人間の合理的な利益のためにはいかなる原始的な自然の状態にあるものをも克服し尽くそうというごとき勇猛な目的を決定するもの」——それが黒船であつたのだ。

当時この国には、紅毛こうもうという言葉があり、毛唐人けとうじんという言葉があつた。当時のそれは割合に軽い意味での毛色の変つた異国の人というほどにとどまる。一種のおかし味をまじえた言葉

できえある。黒船の載せた外国人があべこべにこの国の住民を想像して来たように、決してそれほど未開な野蛮人をば意味しなかつた。

しかし、この国には嘉永年代よりずっと以前に、すでにヨーロッパ人が渡つて来て、二百年も交易を続けていたことを忘れてはならない。この先着のヨーロッパ人の中にはポルトガル人もあつたが、主としてオランダ人であつた。彼らオランダ人は長崎蘭医らんいの大家として尊敬されたシイボルトのような人ばかりではなかつたのだ。彼らがこの国に来て交易からおさめた利得は、年額のこぼん小判十五万両ではきくまいという。諸種の毛織り物、羅紗らしや、精巧な「びいどろ」、「ぎやまん」の器うつわ、その他の天産および人工に係る珍品をヨーロッパからもシヤムからも東インド地方からも輸入して来て、この国の人に取り入るためにいかな

る機会をも見のがさなかつたのが彼らだ。自由な貿易商としてよりも役人の奴隷扱どれいいに甘んじたのが彼らだ。港の遊女でも差し向ければ、異人はどうにでもなる、そういう考えを役人に抱いだかせたのも、また、その先例を開かせたのも彼らだ。

このオランダ人がまず日本を世界に吹聴ふいちようした。事実、オランダ人はこの国に向かつて、ヨーロッパの紹介者であり、通訳者であり、ヨーロッパ人同志としての激しい競争者でもあった。アメリカのペリイが持参した国書にすら、一通の蘭訳を添えて来たくらいだ。この国の最初の外交談判もおもに蘭語によつてなされた。すべてはこのとおりにオランダというものを通してであつて、直接にアメリカ人と会話を交えうるものはなかつたのである。

この言葉の不通だ。まして東西道德の標準の相違だ。どうし

て先方の話すこともよくわからないものが、アメリカ人、ロシヤ人、イギリス人とオランダ人とを区別し得られよう。長崎に、浦賀に、下田に、続々到着する新しい外国人が、これまでのオランダ人の執った態度をかなぐり捨てようとは、どうして知ろう。全く対等の位置に立つて、一国を代表する使節の威厳を損ずることなしに、重い使命を果たしに来たとは、どうして知ろう。この国のものは、ヨーロッパそのものを静かによく見うるようなまず最初の機会を失った。迫り来るものは、誠意のほども測りがたい全くの未知数であった。求めらるるものは幾世紀もかかつて積み重ね積み重ねして来たこの国の文化ではなくて、この島に産する硫黄いおう、樟腦しょうのう、生糸きいと、それから金銀たぐいの類たぐいなぞが、その最初の主おもなる目的物であったのだ。

十一月下旬のはじめには、半蔵らは二日ほど逗留とまりゆうした公郷村

をも辞し、山上の家族にも別れを告げ、七郎左衛門から記念として贈られた古刀や光琳こうりんの軸なぞをそれぞれ旅の荷物に納めて、故郷の山へ向かおうとする人たちであつた。おそらく今度の帰り途みちには、国を出て二度目に見る陰曆十五夜の月も照らそう。その旅の心は、熱い寂しい前途の思いと一緒になつて、若い半蔵の胸にまじり合つた。別れぎわに、七郎左衛門は街道から海の見えるところまで送つて来て、下田の方の空を半蔵らにさして見せた。もはや異国の人は粗末な板画ばんがなどで見るような、そんな遠いところにいる人たちばかりではなかつた。相模灘さがみなだをへだてた下田の港の方には、最初のアメリカ領事ハリス、その書記ヒュウスケンが相携えてすでに海から陸に上り、長泉寺を仮の領事館として、赤と青と白とで彩いろどつた星条の国旗を高くそこに掲げていたころである。

第四章

一

中津川の商人、万屋安兵衛よろずややすべえ、手代嘉吉てだいかきち、同じ町の大和屋李助やまとやりすけ、これらの人たちが生糸売り込みに目をつけ、開港後まだ間もない横浜へとこころざして、美濃みのを出発して来たのはやがて安政六年の十月を迎えたころである。中津川の医者で、半蔵はんざうの旧いふる師匠にあたる宮川寛齋みやがわかんさいも、この一行に加わって来た。もつとも、寛齋はただの横浜見物ではなく、やはり出稼でかせぎの一人ひとりとして――

万屋安兵衛かきやくの書役かきやくという形で。

一行四人は中津川から馬籠峠まごめとうげを越え、木曾街道きそを江戸へと取

り、ひとまず江戸両国の十一屋に落ち着き、あの旅籠屋はたごやを足だまりとして、それから横浜へ出ようとした。木曾出身で世話好ききな十一屋の隠居は、郷里に縁故の深い美濃衆のためにも何かにつけて旅の便宜を計ろうとするような人だ。この隠居は以前に馬籠本陣の半蔵を泊め、今また寛齋の宿をして、弟子でしと師匠とを江戸に迎えるということは、これも何かの御縁であろうなどと話した末に言った。

「皆さまは神奈川かながわ泊まりのつもりでお出かけになりませんと、浜にはまだ旅籠屋はたごやもございますまいよ。神奈川の牡丹屋ぼたんや、あそこは古くからやっております。牡丹屋なら一番安心でございませぬ。」

こんな隠居の話聞いて、やがて一行四人のものは東海道筋を横浜へ向かった。

横浜もさみしかつた。地勢としての横浜は神奈川より岸深きしぶかで、海岸にはすでに波止場はとばも築き出だされていたが、いかに言つてもまだ開けたばかりの港だ。たまたま入港する外国の貿易船があつても、船員はいずれも船へ帰つて寝るか、さもなければ神奈川まで来て泊まつた。下田を去つて神奈川に移つた英国、米國、仏國、オランダ等の諸領事はさみしい横浜よりもぎやかな東海道筋をよろこび、いったん仮寓かぐうと定めた本覺寺その他の寺院から動こうともしない。こんな事情をみて取つた寛齋らは、やはり十一屋の隠居から教えられたとおりに、神奈川の牡丹屋に足をとどめることにした。

この出稼でかせぎは、美濃から来た四人のものにとつて、かなりの冒険とも思われた。中津川から神奈川まで、百里に近い道を馬の背で生糸の材料を運ぶということすら容易でない。おまけに、

相手は、全く知らない異国の人たちだ。

当時、異国のことについては、実にいろいろな話が残っている。ある異人が以前に日本へ来た時、この国の女を見て懸想けそうした。異人はその女をほしいと言ったが、許されなかつた。そんなら女の髪の毛を三本だけくれろと言うので、しかたなしに三本与えた。ところが、どうやらその女は異人の魔法にでもかかつたかして、とうとう異国へ往いつてしまつたという。その次ぎに来た異人がまた、女の髪の毛を三本と言ひ出したから、今度は篩ふるいの毛を三本抜いて与えた。驚くべきことには、その篩ふるいが天に登つて、異国へ飛んで往いつたともいう。これを見たものはびつくりして、これは必ず切支丹キリシタンに相違ないと言つて、皆大いに恐懼おそれ

を抱いたとの話もある。

異国に対する無知が、およそいかなる程度のものであったかは、黒船から流れ着いた空壕あきびんの話にも残っている。アメリカのペリイが来航当時のこと、多くの船員を乗せた軍艦からは空壕を海の中へ投げすてた。その投げすてられたものが風のない時は、底の方が重く口ばかり海面に出ている、水がその中にはいるから、浪なみのまにまに自然と海岸に漂着する。それを拾って黙つて家に持ちかえるものは罰せられた。だから、こういうものが流れ着いたと言つて、一々届け出なければならぬ。その時の役人の言葉に、これは先方で毒を入れて置くものに相違ない、もしこの中に毒がはいっていたら大変だ、さもなければこんなものを流す道理もない、きつと毒が盛つてあつて日本人を苦しめようという軍略であろう、ついでは一か所捨て置く場所を設け

る、心得違いのものがあつて万一届け出ない場合があつたら直ちに召し捕とるとのきびしい触れを出したものだ。そこであつちの村から五本、こつちの村から三本、と続々届け出るものがある。役人らは毎日それを取り上げ、一軒の空屋あきやを借り受け、そのなかに積んで置いて、嚴重な戸締まりをした。それが異人らの日常飲用する酒の空壇であるということすらわからなかつたという。

すべてこの調子だ。籐椅子とういすが風のために漂着したと言つては不思議がり、寝椅子が一個漂着したと言つては不思議がつた。ペリイ出帆の翌日、アメリカ側から幕府への献上物の中には、壇詰びんづめ、罐詰かんづめ、その他の箱詰があり、浦賀奉行への贈り物があつたが、これらの品々は江戸へ伺い済みの上で、浦賀の波止場で焼きすてたくらいだ。後日の祟たたりをおそれたのだ。實際、寛齋

が中津川の商人について神奈川へ出て来たのは、そういう黒船の恐怖からまだ離れ切ることができなかつたころである。

ちようど、時は安政大獄のあとにあたる。彦根の城主、井伊掃部頭

が大老の職に就いたころは、どれほどの暗闘と反目とがそこに

あつたかしのれない。彦根と水戸。紀州と一橋。幕府内の有司と

有司。その結果は神奈川条約調印の是非と、徳川世子の継嗣問

題とにからんであらわれて来た。しかもそれらは大きな抗争の

序幕であつたに過ぎぬ。井伊大老の期するところは沸騰した国

論の統一にあつたらうけれど、彼は世にもまれに見る闘士とし

て政治の舞台にあらわれて来た。いわゆる反対派の張本人なる

水戸の御隠居（烈公）を初め、それに荷担した大名有司らが謹

慎や蟄居を命ぜられたばかりでなく、強い圧迫は京都を中心に

渦巻き始めた新興勢力の苗床にまで及んで行つた。京都にある

鷹司、近衛、三条の三公は落飾を迫られ、その他の公卿たちの関
 東反対の嫌疑のかかったものは皆謹慎を命ぜられた。老女と言
 われる身で、囚人として江戸に護送されたものもある。民間にあ
 る志士、浪人、百姓、町人などの捕縛と嚴刑とが続きに続いた。
 一人は切腹に、一人は獄門に、五人は死罪に、七人は遠島に、十
 一人は追放に、九人は押込に、四人は所払いに、三人は手鎖に、
 七人は無構に、三人は急度叱りに。勤王攘夷の急先鋒と目ざさ
 れた若狭の梅田雲浜のように、獄中で病死したものが別に六人
 もある。水戸の安島帯刀、越前の橋本左内、京都の頼鴨崖、長
 州の吉田松陰などは、いずれも恨みをのんで倒れて行った人た
 ちである。

こんな周囲の空気の中で、だれもがまだ容易に信用しようと
 もしない外国人の中へ、中津川の商人らは飛び込んで来た。神

奈川条約はすでに立派に調印されて、外国貿易は公然の沙汰さたとなつてゐる。生糸でも売り込もうとするものにとつて、なんの憚はばかるところはない。寛永十年以来の嚴禁とされた五百石以上の大船を造ることも許されて、海はもはや事実において解放されている。遠い昔の航海者の夢は、二百何十年の長い鎖国の後に、また生き還かえるような新しい機運に向かつて來てゐる。

寛齋がこの出稼ぎに來たころは六十に近かつた。田舎いなか医者として彼の漢方で治療の届くかぎりどんな患者でも診みないことはなかつたが、中にも眼科を得意にし、中津川の町よりも近在まじめ回りを主にして、病家から頼まれれば峠越しに馬籠まじめへも行き、三留野みどへも行き、蘭あいらぎ、広瀬から清内路せいなじの奥までも行き、余暇さえ

あれば本を読み、弟子でしを教えた。学問のある奇人のように言われて来たこの寛齋が医者いの玄関も中津川では張り切れなくなつたと言つて、信州飯田いいたの在に隠退しようと考えようになつたのも、つい最近のことである。今度一緒に来た万屋よろずやの主人は日ごろ彼が世話になる病院先のことであり、生糸売り込みもよほどの高に上ろうとの見込みから、彼の力にできるだけの手伝いもして、その利得を分けてもらおうという約束で来ている。彼ももう年をとつて、何かにつけて心細かつた。最後の「隠れ家が」に余生を送るよりほかの願ひもなかつた。

さしあたり寛齋の仕事は、安兵衛らを助けて横浜貿易の事情をさぐることであつた。新参の西洋人は内地の人を引きつけるために、なんでも買い込む。どうせ初めは金を捨てなければいけないくらいのは外国商人も承知していて、気に入らない

ものでも買つて見せる。江戸の食い詰め者で、二進も三進も首の回らぬ連中などは、一つ新開地の横浜へでも行つて見ようという気分を出かけて来る時だ。そういう連中が持つて来るような、二文か三文の資本もとでで仕入れられるおもちゃ五の類たぐいでさえ西洋人にはめずらしがられた。徳川大名の置き物とさえ言えば、仏壇の蠟燭ろうそくだ立てを造りかえたような、いかがわしい骨董品こつとうひんでさえ二両の余に売れたという。まだ内地の生糸商人はいくらも入り込んでいない。万屋安兵衛よろずや、大和屋李助やまとやりすけなぞにとつて、これは見のがせない機会だった。

だんだん様子がわかつて来た。神奈川在留の西洋人は諸国領事から書記まで入れて、およそ四十人は来ていることがわかった。紹介してもらおうとさえ思えば、適当な売り込み商の得られることもわかった。おぼつかないながらも用を達たすぐらいの

通弁は勤まるというものも出て来た。

やがて寛齋は安兵衛らと連れだつて、一人の西洋人を見に行つた。二十戸ばかりの異人屋敷、最初の居留地とは名ばかりのように隔離した一区域が神奈川台の上にある。そこに住む英国人で、ケウスキイという男は、横浜の海岸通りに新しい商館でも建てられるまで神奈川に仮住居かりずまいするといふ貿易商であつた。初めて寛齋の目に映るその西洋人は、羅紗ろしやの丸羽織を着、同じ羅紗ももひきの股引ももひきをはき、羽織ひもの紐ひものかわりに釦ぼたんを用もちいている。手まわりの小道具一切を衣裳いしやうのかくしにいれているのも、異国の風俗だ。たとえば手ぬぐいは羽織のかくしに入れ、金入れは股引ももひきのかくしに入れ、時計は胴着のかくしいに入れて鎖ぼたんを釦ぼたんの穴あなに掛かけるといふふうふうに。履物はきものも変わかつている。獣の皮で造つくつた靴くつが日本にで言いつて見みるなら雪駄せったの代たわりだ。

安兵衛らの持つて行つて見せた生糸の見本は、ひどくケウス
キイを驚かした。これほど立派な品ならどれほどでも買おうと
言うらしいが、先方の言うことは燕つばめのように早口で、こまかい
ことまでは通弁にもよくわからない。ケウスキイはまた、安兵
衛らの結い立ての鬻まひや、すっかり頭を円まるめてゐる寛齋の医者ら
しい風俗をめずらしそうにながめながら、煙草たばこなどをそこへ取
り出して、客にも勧めれば自分でもうまそうに服のんで見せた。
寛齋が近く行つて見たその西洋人は、髪の色こそ違ひ、眸ひとみの
色こそ違つてゐるが、黒船の連想と共に起こつて来るような恐
ろしいものでもない。幽霊でもなく、化け物でもない。やはり
血の氣かよの通つてゐる同じ人間の仲間だ。

「糸目百匁あれば、一両で引き取ろうと言つています。」

この売り込み商の言葉に、安兵衛らは力を得た。百匁一両は

前代未聞の相場であつた。

早い貿易の様子もわかり、糸の値段もわかつた。この上は一日も早く神奈川を引き揚げ、来る年の春までにはできるだけ多くの糸の仕入れもして来よう。このことに安兵衛と李助りすけは一致した。二人ふたりが見本のつもりで持つて来て、牡丹屋ぼたんやの亭主ていしゅに預かつてもらつた糸まで約束ができて、その荷だけでも一個につき百三十両に売れた。

「宮川先生、あなただけは神奈川に残つていてもらいますぜ。」と安兵衛は言つたが、それはもとより寛齋も承知の上であつた。

「先生ひとりも一人で、鼠ねずみにでも引かれないうようにしてください。」手代かきちの嘉吉は嘉吉らしいことを言つて、置いて行くあとの事を堅く寛齋に託した。中津川と神奈川の連絡を取ることは、一

切寛齋の手にまかせられた。

二

十一月を迎えるころには、寛齋は一人牡丹屋の裏二階に残つた。

「なんだかおれは島流しにでもなつたような気がする。」

と寛齋は言つて、時には孤立のあまり、海に見える神奈川台へ登りに行つた。坂になつた道を登れば神奈川台の一角に出られる。目にある横浜もさびしかつた。あるところは半農半漁の村民を移住させた町であり、あるところは運上所うんじょうしょ（税関）を中心に掘立小屋ほつたてごやの並んだ新開の一区域であり、あるところは埋め立てと縄張りなわばの始まつたばかりのような畑と田圃たんぼの中である。

弁天の杜もりの向こうには、ところどころにぽつんぽつん立っている樹木が目につく。全体に湿っぽいところで、まだ新しい港の感じも浮かばない。

長くは海もながめていられなくて、寛齋は逃げ帰るように自分の旅籠屋はたごやへ戻もどった。二階の窓で聞く鴉からすの声も港に近い空を思わせる。その声は郷里にある妻や、子や、やがては旧ふるい弟子でしたちの方へ彼の心を誘った。

古い桐きりの机がある。本が置いてある。そのそばには弟子たちが集まっている。馬籠本陣むすこの子息がいる。中津川和泉屋いずみやの子息がいる。中津川本陣の子息も来ている。それは十余年前に三人の弟子の顔のよくそろった彼の部屋へやの光景である。馬籠の青山半蔵、中津川の蜂谷香蔵はちや、同じ町の浅見景蔵——あの三人を寛齋が戯れに三蔵と呼んで見るのを楽しみにしたほど、彼のもと

へ本を読みに通かよつて来たかずかずの若者の中でも、末頼もしく思つた弟子たちである。ことに香蔵は彼が妻の弟にあたる親戚しんせきの間柄でもある。みんなどういふ人になつて行くかと見ている中にも、半蔵の一本気と正直さと来たら、一度これが自分らの行く道だと見さだめをつけたら、それを改めることも変えることもできないのが半蔵だ。

考え続けて行くと、寛齋はそばにいない三人の弟子の前へ今の自分を持つて行つて、何か弁解せずにはいられないような矛盾した心持ちに打たれて来た。

「待てよ、いずれあの連中はおれの出稼でかせぎを疑問にしているに相違ない。」

「金銀欲ほしからずといふは、例の漢からやうの虚偽いつわりにぞありける。」
この大先達だいせんだつの言葉、『玉かつま』の第十二章にある本居宣長の
この言葉は、今の寛齋にとつては何より有力な味方だった。金
もほしいと思ひながら、それをほしくないようなことを言うの
は、例の漢学者流の虚偽だと教えてあるのだ。

「だれだつて金のほしくないものはない。」

そこから寛齋のように中津川の商人について、横浜出稼きよぎと
いうことも起こつて来た。本居大人うしのような人には虚心坦懐きよしんたんかいと
いうものがある。その人の前にはなんでも許される。しかし、
血氣さか壯さかんで、単純なものは、あの寛大な先達のように貧しい老
人を許しそうもない。

そういう寛齋は、本居、平田諸大人の歩いた道をたどつて、早
くも古代復帰の夢想を抱いだいた一人ひとりである。この夢想は、京都を

中心に頭を持ち上げて来た勤王家の新しい運動に結びつくべき運命のものであった。彼の教えた弟子の三人が三人とも、勤王家の運動に心を寄せているのも、実は彼が播まいた種だ。今度の大獄に連座れんざした人たちはいずれもその渦中かちゆうに立っていないものはない。その中には、六人の婦人さえまじっている。感じやすい半蔵らが郷里の方でどんな刺激を受けているかは、寛斎はそれを予想でありありと見る事ができた。

その時になつて見ると、旧ふるい師匠と弟子との間にはすでによほどの隔たりがある。寛斎から見れば、半蔵らの学問はますます実行的な方向に動いて来ている。彼も自分の弟子を知らないではない。古代の日本人に見るような「雄心おしころ」を振るい起こすべき時がやって来た、さもなくて、この国創はじまつて以来の一大危機とも言うべきこんな艱難かんなんな時を歩めるものではないという

弟子の心持ちもわかる。

新たな外来の勢力、五か国も束になってやって来たヨーロッパの前に、はたしてこの国を解放したのかどうかのやかましい問題は、その時になってまだ日本国じゅうの頭痛の種になっていた。先入主となった黒船の強い印象は容易にこの国の人の心を去らない。横浜、長崎、函館はこだての三港を開いたことは井伊大老の専断であつて、朝廷の許しを待ったものではない。京都の方面も騒がしくて、賢い帝みかどの心を悩ましていることも一通りでないと言ひ伝えられている。開港か、攘夷じょういか。これほど矛盾を含んだ言葉もない。また、これほど当時の人たちの悩みを言ひあらわした言葉もない。前者を主張するものから見れば攘夷は実に頑執がんしゅう妄排もうはいであり、後者を主張するものから見れば開港は屈従まもそのものである。どうかして自分らの内部なにあるものを護り

育てて行こうとしているような心ある人たちは、いずれもこの矛盾に苦しみ、時代の悩みを悩んでいたのだ。

牡丹屋ぼたんやの裏二階からは、廊下の廂ひびしに近く枝をさし延べている椎しいの樹きの梢こずえが見える。寛齋はその静かな廊下に出て、ひとりで手をもんだ。

「おれも、平田門人の一人として、こんな恐ろしい大獄に無関心でいられるはずもない。しかし、おれには、あきらめというものができた。」

「さぞ、御退屈さまでございましょう。」

そう言つて、牡丹屋の年とつた亭主ていしゅはよく寛齋を見に来る。東海道筋にあるこの神奈川の宿は、古いといえは古い家で、煙草盆たばこぼん

は古風な手さげのついたのを出し、大きな菓子鉢かしぼちには扇子形せんすがたの箸はし入れを添えて出すような宿だ。でも、わざとらしいところは少しもなく、客扱いも親切だ。

寛齋は日に幾たびとなく裏二階の廊下を往いつたり来たりするうちに、目につく椎しいの風情ふぜいから手習いすることを思いついた。枝に枝のさした冬の木にながめ入つては、しきりと習字を始めた。そこへ宿の亭主が来て見て、

「オヤ、御用事のほかはめつたにお出かけにならないと思いましたら、お手習いでございますか。」

「六十の手習いとはよく言つたものさね。」

「手前どもでも初めての孫が生まれまして、昨晚は七夜しちやを祝いました。いろいろごだごだいたしました。さだめし、おやかましかろうと存じます。」

こんな言葉も、この亭主の口から聞くと、ありふれた世辞とは響かなかつた。横浜の海岸近くに大きな玉楠たまぐすの樹きがしげっている、世にやかましい神奈川条約はあの樹の下で結ばれたことなどを語つて見せるのも、この亭主だ。あの辺は駒形水神こまがたすいじんの杜もりと呼ばれるところで、玉楠たまぐすの枝には巢をかける白い鴉からすがあるが、毎年冬の来るころになるとどこともなく飛び去ると言つて見せるのも、この亭主だ。生糸の売り込みとはなんと言つてもよいところへ目をつけたものだ、外国貿易ももはや売ろうと買おうと勝手次第だ、それでも御紋付きの品々、雲上の明鑑、武鑑、兵学書、その他甲冑刀剣かっちゅうの類たぐいは厳禁であると数えて見せるのも、この亭主だ。

旧暦十二月のさむい日が来た。港の空には雪がちらついた。例のように寛齋は宿の机にむかつて、遠く来ている思いを習字

にまぎらわそうとしていた。そこへ江戸両国の十一屋から届いたと言つて、宿の年とつたかみさんが二通の手紙を持って来た。

その時、かみさんは年老いた客をいたわり顔に、盆に載せた井どんぶりを階下したから女中に運ばせた。見ると、寛齋の好きなうどんだ。

「うどんのごちそうですか。や、そいつはありがたい。」

「これはうでまして、それからダシで煮て見ました。お塩で味がつけてございます。これが一番さっぱりしているかと思ひますが、一つ召し上がって見てください。」

「うどんとはよい物を造つてくださった。わたしはお酒の方ですがね、寒い日にはこれがまた何よりですよ。」

「さあ、お口に合いますか、どうですか。手前どもではよくこれをこしらえまして、年寄りに食べさせます。」

牡丹屋ではすべてこの調子だ。

一通の手紙は木曾から江戸を回つて来たものだ。馬籠まごめの方に
いる伏見屋金兵衛ふしみやきんべえからのめずらしい消息だ。最愛ひとりむすこの一人息子、
鶴松つるまつの死がその中に報じてある。鶴松も弱かつた子だ。あの少
年のからだは、医者としての寛齋も診みてよく知っている。馬籠
の伏見屋から駕籠かごで迎いが来るたびに、寛齋は薬箱をさげ、
美濃みのと信濃しなのの国境くにぎわかいにあたる十曲峠じつきよくとうげをよく急いだものだ。筆まめ
な金兵衛はあの子が生前に寛齋の世話になつた札から始めて、
どうかして助けられるものならの願いから、あらゆる加持祈祷かじぎとう
を試み、わざわざ多賀の大社まで代参のものをやつて病氣全快
を祈らせたことや、あるいは金毘羅大権現こんびらだいこんげんへ祈願のために落合おちあい
の大橋から神酒みき一樽たるを流させたことまで、口説くどくように書いて
よこした。病氣の手当ては言うまでもなく、寛齋留守中は大垣おおがき
の医者いしやを頼み、おりから木曾路を通行じやくしゅうする若州わかしゅうの典医、水戸姫

君の典医にまですがつて診察を受けさせたことも書いてよこした。とうとう養生もかなわなかつたという金兵衛の残念がる様子が目に見えるように、その手紙の中にあらわれている。

平素懇意にする金兵衛が六十三歳でこの打撃を受けたということは、寛齋にとつて他事ひとごととも思われぬ。今一通の手紙は旧いなじみのある老人から来た。それにはまた、筆に力もなく、言葉も短く、ことのほかに老い衰えたことを訴えて、生きていくというばかりのような心細いことが書いてある。ただ、昔を思うたびに人恋しい、もはや生前に面会することもあるまいかと書いてある。「貴君には、いまだ御往生ごおうじょうもなされず候そうろうよし」ともある。

「いまだ御往生もなされず候よしは、ひどい。」
と考えて、寛齋は哭ないていいか笑つていいかわからないよう

なその手紙の前に頭をたれた。

寛齋の周囲にある旧知も次第に亡くなつた。達者で働いてい
るものは数えるほどしかない。今度十七歳の鶴松を先に立てた
金兵衛、半蔵の父吉左衛門——指を折つて見ると、そういう人
たちはもはや幾人も残っていない。追ひ追ひの無常の風に吹き
立てられて、早く美濃へ逃げ帰りたいと思うところへ、横浜の
方へは浪士来襲のうわさすら伝わつて来た。

三

とうとう、寛齋は神奈川の旅籠屋はたごやで年を越した。彼の日課は
開港場の商況を調べて、それを中津川の方へ報告すること、
その都度万屋つどよろずやからの音信にも接したが、かんじんの安兵衛らは

まだいつ神奈川へ出向いて来るともわからない。

年も万延まんえん元年と改まるころには、日に日に横浜への移住者がふえた。寛齋が海をながめに神奈川台へ登って行つて見ると、そのたびに港らしいにぎやかさが増している。弁天寄りの沼地は埋め立てられて、そこに貸し長屋ができ、外国人の借地を願かい出るものが二、三十人にも及ぶと聞くようになった。吉田橋架かけ替えの工事も始まつていて、神奈川から横浜の方へ通う渡し舟も見える。ある日も寛齋は用達ようたしのついでに、神奈川台の上まで歩いたが、なんとなく野毛山のげやまも霞かすんで見え、沖の向こうに姿をあらわしている上総辺かずさの断崖だんがいには遠い日があたつて、さびしい新開地に春のめぐつて来るのもそんなに遠いことではなからうかと思われた。

時には遠く海風を帆にうけて、あだかも夢のように、寛齋の

視野のうちにはいつて来るものがある。日本最初の使節を乗せた咸臨丸がアメリカへ向けて神奈川沖を通過した時だ。徳川幕府がオランダ政府から購かい入れたというその小さな軍艦は品川沖から出帆して来た。艦長木村摂津守、指揮官勝麟太郎かつりんたろうをはじめ、運用方、測量方から火夫水夫まで、一切西洋人の手を借りることなしに、オランダ人の伝習を受け初めてからようやく五年にしかならない航海術で、とにもかくにも大洋を乗り切ろうという日本人の大胆さは、寛齋を驚かした。薩摩さつまの沖で以前に難船して徳川政府の保護を受けていたアメリカの船員らも、咸臨丸で送るかえされるといふ。その軍艦は港の出入りに石炭を焚たくばかり、航海中はただ風をたよりに運転せねばならないほどの小型のものであったから、煙も揚げずに神奈川沖を通過しただけが、いささか物足りなかつた。大変な評判で、神奈川台

の上には人の黒山を築いた。不案内な土地の方へ行くために、使節の一行は何千何百足の草鞋わらじを用意して行ったかしのれないなぞというわさがそのあとに残った。当時二十六、七歳の青年ふくざわゆきち福沢諭吉が木村摂津守のお供という格で、その最初の航海に上つて行つたといううわさなぞも残つた。

二月にはいつて、寛齋は江戸両国十一屋の隠居から思いがけない便りたよを受け取つた。それには隠居が日ごろ出入りする幕府奥詰おくづめの医師を案内して、横浜見物に出向いて来るとある。その節は、よろしく頼むとある。

旅の空で寛齋が待ち受けた珍客は、喜多村瑞見きたむらずいけんと言つて、幕府奥詰の医師仲間でも製薬局の管理をしていた人である。汽船

觀光丸の試乗者募集のあつた時、瑞見もその募りに応じようとしたが、時の御匙おさじほうし法師にいらまれて、譴責けんせきを受け、蝦夷えぞ移住を命ぜられたという閱歴をもつた人である。この瑞見は二年ほど前に家を挙げあ蝦夷の方に移つて、函館はこだて開港地の監督なぞをしてゐる。今度函館から江戸までちよつと出て来たついでに、新開の横浜をも見て行きたいといふので、そのことを十一屋の隠居が通知してよこしたのだ。

瑞見は供の男を一人ひとり連れ、十一屋の隠居を案内にして、天気の良い日の夕方に牡丹屋ぼたんやへ着いた。神奈川には奉行組頭ぶぎようくみがしらもある、そういう役人の家よりもわざわざ牡丹屋のような古い旅籠屋はたじやを選んで微行で瑞見のやつて来たことが寛齋をよろこばせた。あつて見ると、思ひのほか、年も若い。三十二、三ぐらいにか見えない。

「きょうのお客さまは名高い人ですが、お目にかかつて見ると、まだお若いかたのようですね。」

と牡丹屋の亭主ていしゅが寛齋の袖そでを引いて言つたくらいだ。

翌日は寛齋と牡丹屋の亭主とが先に立つて、江戸から来た三人をまず神奈川台へ案内し、黒い館門やかたもんの木戸を通つて、横浜道へ向かつた。番所のあるところから野毛山のげやまの下へ出るには、内浦に沿うて岸を一回りせねばならぬ。程ヶ谷ほどやからの道がそこへ続いて来ている。野毛には奉行の屋敷があり、越前えちぜんの陣屋もある。そこから野毛橋を渡り、土手通りを過ぎて、仮の吉田橋から関内かんないにはいつた。

「横浜もさびしいところですね。」

「わたしの来た時分には、これよりもつとさびしいところでした。」

瑞見と寛齋とは歩きながら、こんな言葉をかわして、高札場の立つあたりから枯れがれな太田新田の間の新道を進んだ。

瑞見は遠く蝦夷えぞの方で採薬、薬園、病院、疏水そすい、養蚕等の施設を早く目論もくろんでいる時で、函館の新開地にこの横浜を思い比べ、牡丹屋の亭主を顧みてはいろいろと土地の様子をきいた。当時の横浜関内は一羽の蝶ちょうのかたちにとえられる。海岸へ築き出した二か所の波止場はとばはその触角であり、中央の運上所付近はそのからだであり、本町通りと商館の許可地は左右の翅はねにあたる。一番左の端にある遊園で、樹木のしげった弁天の境内けいだいは、蝶の翅に置く唯一の美しい斑紋はんもんとも言われよう。しかしその翅の大部分はまだ田圃たんぼと沼地だ。そこには何か開港一番の思いつきでもあるかのように、およそ八千坪からの敷地から成る大規模な遊女屋の一郭もひらけつつある。横浜にはまだ市街の連

絡もなかつたから、一丁目ごとに名主を置き、名主の上に総年寄を置き、運上所わきの町会所で一切の用事を取り扱っている」と語り聞かせるのも牡丹屋の亭主だ。

やがて、その日同行した五人のものは横浜海岸通りの波止場に近いところへ出た。西洋の船にならつて造つた二本マストもしくは一本マストの帆前船ほまえせんから、従来あつた五大力ごだいきの大船、種々な型の荷船、便船、漁り船いさぶね、小舟まで、あるいは碇泊ていはくしたりあるいは動いたりしているごちやごちやとした光景が、鴉からすの群れ飛ぶ港の空気と煙とを通してそこに望まれた。二か所の波止場、水先案内の職業、運上所で扱う税関と外交の港務などは、全く新しい港のために現われて来たもので、ちようど入港した一艘そうの外国船も周囲の単調を破っている。

その時、牡丹屋の亭主は波止場の位置から、向こうの山下の

方角を瑞見や寛齋にさして見せ、旧横浜村の住民は九十戸ばかりの竈かまどを挙げてそちらの方に退却を余儀なくされたと言った。それほどこの新開地に内外人の借地の請求が頻繁ひんぱんとなつて来た意味を通わせた。大岡川おおおかがわの川尻かわじりから増徳院わきへかけて、長さ五百八十間ばかりの堀川ほりかわの開鑿かいさくも始まつたことを語つた。その波止場の位置まで行くと、海から吹いて来る風からして違ふ。しばらく瑞見は入港した外国船の方を望んだまま動かなかつた。やがて、寛齋を顧みて、

「やつぱりよくできていますね。同じ汽船でも外国のはどこか違いますね。」

「喜多村先生のお供はかなわない。」とその時、十一屋の隠居が横槍よこやりを入れた。

「どうしてさ。」

「いつまでも船などをながめていらつしやるから。」

「しかし、十一屋さん、早くわれわれの国でもああいうよい船を造りたいじゃありませんか。今じゃ薩州さつしゅうでも、土州としゅうでも、越前えちぜんでも、二、三艘そうぐらいの汽船を持っていますよ。それがみんな外国から買った船ばかりでさ。十一屋さんは昌平丸しやうへいまるという船のことをお聞きでしたらうか。あれは安政二年の夏に、薩州侯が三本マストの大船を一艘造らせて、それを献上したものでさ。幕府に三本マストの大船ができたのは、あれが初めてだと思いません。ところが、どうでしょう。昌平丸を作る時分には、まだ螺旋釘ねじくぎを使うことを知らない。まっすぐな釘くぎばかりで造ったものですから、大風雨おおあらしの来た年に、品川沖でばらばらに解けてこわれてしまいました。」

「先生はなかなかくわしい。」

「函館の方にだつて、二本マストの帆前船がまだ二艘しかできていません。一艘は函館丸。もう一艘の船の方は亀田丸かめだまる。高田屋嘉兵衛の呼び寄せた人で、豊治とよじという船大工があれを造りましたがね。」

「先生は函館で船の世話までなさるんですか。」

「まあ、そんなものでさ。でも、こんな藪医者やぶいにかかつちやかなわれないなんて、函館の方の人は皆そう言っていますよ。」

この「藪医者」には、そばに立って聞いている寛齋もうなつた。

入港した外国船を迎え顔な西洋人などが、いつのまにか寛齋らの周囲に集まつて来た。波止場には九年母くねんぼの店をひろげて売っている婆さんばあがある。そのかたわらに背中の子供をおろして休んでいる女がある。道中差どうちゆうざしを一本腰にぶちこんで、草鞋わらじばきの

まま、何か資本もとでのかからない商売でも見つけ顔に歩き回っている男もある。おもしろい丸帽をかぶり、辮髪べんぱつをたれ下げ、金入れらしい袋を背負しよいながら、上陸する船客を今か今かと待ち受けているようなシナ人の両替商りようがえしやうもある。

見ると、定紋じやうもんのついた船印ふなじるしの旗を立てて、港の役人を乗せた船が外国船から漕こぎ帰つて来た。そのあとから、二、三の艇はしけが波に揺られながら岸の方へ近づいて来た。横浜とはどんなところかと内々想像して来たような目つきのも、全く生おい立ちを異にし氣質を異にしたようなもの、本国から来たもの、東洋の植民地の方から来たもの、それらの雑多な冒険家が無遠慮に海から陸おかへ上がって来た。いづれも生命いのちがけの西洋人ばかりだ。上陸するものの中にはまだ一人ひとりの婦人を見ない。中には、初めて日本の土を踏むと言いたそうに、連れの方を振り返るものも

ある。叔父甥おじおいなぞの間柄かと見えて、迎えるものと迎えらるるものが男同志互いに抱き合うのもある。その二人ふたりは、寛齋や瑞見の見ている前で、熱烈な頬ほおずりをかわした。

瑞見はなかなかトボケた人で、この横浜を見に来たよりも、実は牛肉の試食に来たと白状する。こんな注文を出す客のこと、あちこち引っぱり回されるのは迷惑らしい上に、案内者側の寛齋の方でもなるべく日のあるうちに神奈川へ帰りたかった。いつでも日の傾きかけるのを見ると、寛齋は美濃みのの方の空を思い出したからで。

横浜も海岸へ寄った方はすでに区画の整理ができ、新道はその間を貫いていて、町々の角かどには必ず木戸を見る。帰り路みちには、

寛齋らは本町一丁目の通りを海岸の方へ取つて、渡し場のあるところへ出た。そこから出る舟は神奈川の宮下というところへ着く。わざわざ野毛山の下の方を遠回りして帰つて行かないでも済む。牡丹屋の亭主はその日の夕飯にと言つて瑞見から注文のあつた肉を横浜の町で買い求めて来て、それをさげながら一緒に神奈川行きの舟に移つた。

「横浜も鴉からすの多いところですね。」

「蝦夷えぞの方ではゴメです。海の鷗かもめの一種です。あの鳴き声を聞くと、いかにも北海らしい気持ちが起こつて来ますよ。そう言えば、この横浜にはもう外国の宣教師も来てるといふじやありませんか。」

「一人。」

「なんでも、神奈川の古いお寺を借りて、去年の秋から来ている

アメリカ人があります。ブラウンといいましたっけか。横浜へ着いた最初の宣教師です。狭い土地ですからすぐ知れますね。」

「いつたい、^{キリシタン}切支丹宗は神奈川条約ではどういふことになりましょう。」

「そりや無論内地のものには許されぬ。ただ、宣教師がこつちへ来ている西洋人仲間に布教するのは自由だということになつていましょう。」

「神奈川へはアメリカの医者も一人来ていますよ。」

「ますます世の中は多事だ。」

だれが語るともなく、だれが答えるともなく、こんな話が舟の中で出た。

牡丹屋へ帰り着いてから、しばらく寛齋は独り^{ひと}居る休息の時を持った。例の裏二階から表側の廊下へ出ると、神奈川の町の

一部が見える。晩年の彼を待ち受けているような信州伊那いなの豊かな谷と、現在の彼の位置との間には、まだよほどの隔たりがある。彼も最後の「隠れ家」がにたどり着くには、どんな寂しい路みちでも踏まねばならない。それにしても、安政大獄以来の周囲にある空気の重苦しさは寛斎の心を不安にするばかりであった。ますます嚴重になつて行く町々の取り締まり方と、志士や浪人の気味の悪いこの沈黙とはどうだ。すでに直接行動に訴えたものすらある。前の年の七月の夜には横浜本町で二人ふたりのロシヤの海軍士官が殺され、同じ年の十一月の夕には港崎町こうざきまちのわきで仏国領事の雇い人が刺され、最近には本町一丁目と五丁目の間で船員と商人との二人のオランダ人が殺された。それほど横浜の夜は暗い。外国人の入り込む開港場へ海から何か這はうようにやつて来る闇やみの恐ろしさは、それを経験したものでなければわから

ない。彼は瑞見のような人をめずらしく案内して、足もとの明るいうちに牡丹屋へ帰つて来てよかつたと考えた。

「お夕飯のおしたくができました。ごさいます。」

という女中に誘われて、寛齋もその晩は例になく庭に向いた階下の座敷へ降りた。瑞見や十一屋の隠居なぞとそこで一緒になつた。

「喜多村先生や宮川先生の前ですが、横浜の遊女屋にはわたしもたまげました。」と言い出すのは十一屋だ。

「すこし繁昌はんじやうして来ますと、すぐその土地にできるものは飲食店と遊郭です。」と牡丹屋の亭主も夕飯時の挨拶あいさつに来て、相槌あいづちを打つ。

牛鍋ぎゅうなべは庭で煮た。女中しちりんが七輪を持ち出して、飛び石の上でそれを煮た。その鍋を座敷へ持ち込むことは、牡丹屋のお婆さんばあ

がどうしても承知しなかつた。

「臭い、臭い。」

奥の方では大騒ぎする声すら聞こえる。

「ここにも西洋ぎらいがあると見えますね。」

と瑞見が笑うと、亭主はしきりに手をもんで、

「いえ、そういうわけでもございませんが、吾家のお袋などはもう驚いております。牛の臭気がこもるのは困るなんて、しきりにそんなことを申しまして。この神奈川には、あなた、肉屋の前を避けて通るような、そんな年寄りもございません。」

その時、寛齋は自分でも好きな酒をはじめながら、瑞見の方を見ると、客も首を延ばし、なみなみとついである方へとがらした口唇くちびるを持って行く盃さかずきの持ち方からしてどうもただではないので、この人は話せると思つた。

「こんな話がありますよ。」と瑞見は思い出したように、「あれは一昨年おととしの七月のことでしたか、エルジンというイギリスの使節が蒸気船を一艘そう幕府に献上したいと言つて、軍艦で下田から品川まで来ました。まあ品川の人たちとしてはせつかくの使節をもてなすという意味でしたらう。その翌日に、品川の遊女を多勢で軍艦まで押しかけさしたというものです。さすがに向こうでも面くらつたと見えて、あとになつての言い草がいい。あれは何者だ、いったい日本人は自分の国の女をどう心得ているんだらうツて、いかにもイギリス人の言いそうなことじゃありませんか。」

「先生。」と十一屋は膝ひざを乗り出した。「わたしはまたこういう話を聞いたことがあります。こっちの女が齒を染めたり、眉まゆを落としたりしているのを見ると、西洋人は非常にいやな気がす

るそうですね。ほんとうでしょうか。まあ、わたしたちから見ると、優しい風俗だと思えますがなあ。」

「気味悪く思うのはお互いでしょう。事情を知らない連中と来たら、いろいろなことをこじつけて、やれ幕府の上役のものは西洋人と結託しているの、なんのツて、悪口ばかり。鎖攘さじょう、鎖攘（鎖港攘夷の略）——あの声はどうです。わたしに言わせると、幕府が鎖攘を知らないどころか、あんまり早く鎖攘し過ぎてしまった。蕃書ばんしょは禁じて読ませない、洋学者は遠ざけて近づけない、その方針をよいとしたばかりじゃありません、国内の人材まで鎖攘してしまった。御覧なさい、前には高橋作左衛門を鎖攘する。土生玄磧はぶげんせきを鎖攘する。後には渡辺華山わたなべかざん、高野長英たかのちようえいを鎖攘する。その結果はと言うと、日本国じゆうを実に頑固がんこなものにしちまいました。外国のことを言うのも恥だなんて思わ

せるようにまで——」

「先生、肉が煮えました。」

と十一屋は瑞見の話をさえぎった。

女中が白紙を一枚ずつ客へ配りに来た。肉を突ツついた箸は
その紙に置いてもらいたいとの意味だ。煮えた牛鍋ぎゅうなべは庭から縁
側の上へ移された。奥の部屋へやに、牡丹屋の家の人たちがいる方
では、障子しょうじをあけひろげるやら、こもった空気を追い出すやら
の物音が聞こえる。十一屋はそれを聞きつけて、

「女中さん、そう言つてください。今にこちらのお婆さんでも、
おかみさんでも、このにおいをかぐと飛んで来るようになりま
すよッて。」

十一屋の言い草だ。

「どれ、わたしも一つ薬食くすりぐいとやるか。」

と寛齋は言つて、うまそうに煮えた肉のにおいをかいだ。好きな酒を前に、しばらく彼も一切を忘れていた。盃の相手には、こんな頼もしい人物も幕府方にあるかと思われるような客がいる。おまけに、初めて味わう肉もある。

四

当時、全国に浪打なみつような幕府非難の声からすれば、横浜や函館の港を開いたことは幕府の大失策である。東西人種の相違、道徳の相違、風俗習慣の相違から来るものを一概に未開野蛮として、人を食った態度で臨んで来るような西洋人に、そうやすやすとこの国の土を踏ませる法はない。開港が東照宮の遺志にそむくはおろか、朝廷尊崇の大義にすら悖もとると齒はぎしりをかむ

ものがある。

しかし、瑞見に言わせると、幕府のことほど世に誤り伝えられていたものはない。開港の事情を知るには、神奈川条約の実際の起草者なる岩瀬肥後守いわせひごのかみに行くに越したことはない。それにはまず幕府で監察（目付めつけ）の役を重んじたことを知ってかかる必要がある。

監察とは何か。この役は禄ろくもそう多くないし、位もそう高くない。しかし、諸司諸職に関係のないものはないくらいだから、きわめて権威がある。老中はじめ三奉行の重い役でも、監察の同意なしには事を決めることができない。どうかして意見のちがうのを顧みずに断行することがあると、監察は直接に將軍なり老中なりに面会して思うところを述べ立てても、それを止めることもできない。およそ人の昇進に何がうらやましがられる

かと言つて、監察の右に出るものはない。その人を得ると得ないことで一代の盛衰に関する役目であることも想おもい知られよう。嘉永年代かえい、アメリカの軍艦が渡つて来た日のように、外国関係の一大事変に当たつては、幕府の上のものも下のものも皆強い衝動を受けた。その衝動が非常な任撰にんせんを行なわせた。人材を登庸とうようしなければだめだということを教えたのも、またその刺激だ。従来親子共に役に就ついているものがあれば、子は賢くても父に超こえることはできなかつたのが旧ふるい規則だ。それを改めて、三人のものが監察に拔擢ばつてきせられた。その中の一人ひとりが岩瀬肥後なのだ。

岩瀬肥後は名を忠震ただなりといい、字を百里あざなという。築地つきじに屋敷があつたところから、号を蟾州せんしゅうとも言つてゐる。心あるものはいずれもこの人を推して、幕府内での第一の人とした。たとえばオ

ランダから観光船を贈つて来た時に矢田堀景蔵、勝麟太郎などを小普請役から抜いて、それぞれ航海の技術を学ばせたのも彼だ。下曾根金三郎、江川太郎左衛門には西洋の砲術を訓練させる。箕作阮甫、杉田玄端には蕃書取調所の教育を任せる。そういう類のことはほとんど数えきれない。松平河内、川路左衛門、大久保右近、水野筑後、その他の長老でも同輩でも、いやしくも国事に尽くす志のあるものには誠意をもつて親しく交わらないものはなかつたくらいだ。各藩の有為な人物をも延いて、身をもつて時代に当たろうとしたのも彼だ。

瑞見に言わせると、幕府有司のほとんどすべてが英米仏露をひきくるめて一概に毛唐人と言っていたような時に立つて、百方その間を周旋し、いくらかでも明るい方へ多勢を導こうとしたものの摧心と労力とは想像も及ばない。岩瀬肥後はそれを成

した人だ。最初の米国領事ハリスが来航して、いよいよ和親貿易の交渉を始めようとした時、幕府の有司はみな尻込みして、一人として背負つて立とうとするものがない。皆手をこまねいて、岩瀬肥後を推した。そこで彼は一身を犠牲にする覚悟で、江戸と下田の間を往復して、数か月もかかった後にようやく草稿のできたのが安政の年の条約だ。

草稿はできた。諸大名は江戸城に召集された。その時、井伊大老が出で、和親貿易の避けがたいことを述べて、委細は監察の岩瀬肥後に述べさせるから、とくときいたあとで諸君各自の意見を述べられるようにと言った。そこで大老は退いて、彼が代わって諸大名の前に進み出た。その時の彼の声はよく徹り、言うこともはつきりしていて、だれ一人異議を唱えるものもない。いずれも時宜に適つた説だとして、よろこんで退出した。とこ

ろが数日後に諸大名各自の意見書を出すころになると、ことごとく前の日に言ったことを覆して、彼の説を破ろうとするものが出て来た。それは多く臣下の手に成つたものだ。君侯といえどもそれを制することができなかつたのだ。そこで彼は水戸の御隠居や、尾州びしゅうの徳川慶勝や、松平春嶽しゅんがく、鍋島閑叟なべしまんそう、山内容堂ようどうの諸公に説いて、協力して事に当たることを求めた。岩瀬肥後の名が高くなつたのもそのころからだ。

しかし、条約交渉の相手方なるヨーロッパ人が次第に態度を改めて来たことをも忘れてはならない。来るものも来るものも、皆ペリイのような態度の人ばかりではなかつたのだ。アメリカ領事ハリス、その書記ヒュウスケン、イギリスの使節エルジン、その書記オリファント、これらの人たちはいずれも日本を知り、日本の国情というものを認めた。中には、日本に来た最初の

印象は思いがけない文明国の感じであつたとさえ言つた人もある。すべてこれらの事情は、岩瀬肥後のようにその局に当たつた人以外には多く伝わらない。それにつけても、彼にはいろいろな逸話がある。彼が頭脳あたまのよかつた証拠には、イギリスの使節らが彼の聰明そうめいさに驚いたというくらいだ。彼はイギリス人からきいた言葉を心覚えに自分の扇子せんすに書きつけて置いて、その次ぎの会見のおりには、かなり正確にその英語を発音したという。イギリスの方では、また彼のすることを見て、日本の扇子は手帳にもなり、風を送る器うつわにもなり、退屈な時の手慰みにもなると言つたという話もある。

もともと水戸の御隠居はそう頑かたくな人ではない。尊王攘夷そんのうじょういという言葉は御隠居自身の筆に成る水戸弘道館の碑文から来ているくらいで、最初のうちこそ御隠居も外国に対しては、なんでも

一つ撃ち懲せという方にばかり志を向けていたらしいが、だんだん岩瀬肥後の説を聞いて大いに悟られるところがあつた。御隠居はもとより英明な生まれつきの人だから、今日の外国は古の夷狄ではないという彼の言葉に耳を傾けて、無謀の戦いはいたずらにこの国を害するに過ぎないことを回顧するようになった。その時、御隠居は彼に一つのたとえ話を告げた。ここに一人の美しい娘がある。その娘にしきりに結婚を求めるものがある。再三拒んで容易に許さない。男の心がますます動いて来た時になつて、始めて許したら、その二人の愛情はかえつて濃やかで、多情な人のすみやかに受けいれるものには勝ろうというのである。実際、あの御隠居が断乎として和親貿易の変更すべきでないことを彼に許した証拠には、こんな娘のたとえを語つたのを見てもわかる。御隠居がすでにこのとおり、外交のやむ

を得ないことを認めて、他の親藩にも外様とさまの大名にも説き勧め
るくらいだ。それまで御隠居を動かして鎖攘さじようの説を唱えた二人
の幕僚、藤田東湖ふじたとうこ、戸田蓬軒とだほうけんなども遠見とおみのきく御隠居の見識に
服して、自分らの説を改めるようになった。そこへ安政の大地
震が来た。一藩の指導者は二人とも圧死を遂げた。御隠居は一
時に両ふたつの翼を失ったけれども、その老いた精神はますます明
るいところへ出て行つた。御隠居の長い生涯しやうがいのうちでも岩瀬肥
後にあつたところは特別の時代で、御隠居自身の内部に起こつて
来た外国というものの考え直しもその時代に行なわれた。

しかし、岩瀬肥後にとつては、彼が一生のつまずきになるほ
どの一大珍事しゆつたいが出来た。十三代將軍（徳川家定いえさだ）は生来多病
で、物言うことも滞りがちなくらいであつた。どうしてもよい
世嗣よつぎを定めねばならぬ。この多事な日に、内は諸藩の人心を

鎮め、外は各国に応じて行かねばならぬ。徳川宗室を見渡したところ、その任に耐えそうなものは、一橋慶喜ひとつばしよしのぶのほかには、ことに一代の声望並ぶものがないような水戸の御隠居が現にその父親であるのだから、諸官一同申し合わせて、慶喜擁立のこゝとを上請することになった。岩瀬肥後はその主唱者なのだ。水戸はもとより、京都方面まで異議のあろうはずもない。ところがこれには反対の説が出て、血統の近い紀州慶福よしとみを立てるのが世襲伝来の精神から見て正しいと唱え出した。その声は大奥の深い簾すだれの内からも出、水戸の野心と陰謀を疑う大名有司の仲間からも出た。この形勢をみて取った岩瀬肥後は、血統の近いものを立てるといふ声を排斥して、年長で賢いものを立てるのが今日こんにちの急務であると力説し、老中奉行おぎやうらもその説に賛成するものが多く、それを漏れ聞いた国内の有志者たちも皆大いに喜ん

で、太陽はこれから輝こうと言ひ合ひながら、いずれもその時の来るのを待ち望んだ。意外にも、その上請をしないうちに、將軍は脚か気っけにかかつて、わずか五年を徳川十三代の一期として、にわかこに薨きよ去した。岩瀬肥後の極力排斥した慶福擁立説がまた盛り返して来た日を迎えて見ると、そこに將軍の遺旨を奉じて起たち上がったのが井伊大老その人であつたのだ。

岩瀬肥後の政治生涯しやうがはその時を終わりとした。水戸の御隠居を始めとして、尾州、越前、土州の諸大名、およそ平生へいぜい彼の説に賛成したものは皆江戸城に集まつて大老と激しい議論があつたが、大老は一切きき入れなかつた。安政大獄の序幕はそこから切つて落おとされた。彼はもとより首唱の罪で、きびしい譴責けんせきを受けた。屏しりぞけられ、すわらせられ、断わりなしに人と往来ゆきぎすることすら禁ぜられた。その時の大老の言葉に、岩瀬輩が輕賤けいせん

の身でありながら柱石たるわれわれをさし置いて、勝手に將軍の継嗣問題なぞを持ち出した。その罪は憎むべき大逆無道にも相当する。それでも極刑に処せられなかつたのは、彼も日本国の平安を謀はかつて、計画することが凶に当たり、その尽力の功勞は埋うづめられるものでもないから、非常な寛典を与えられたのであると。

瑞見に言わせると、今度江戸へ出て来て見ても、水戸の御隠居はじめ大老と意見の合わないものはすべて斥しりぞけられている。諸司諸役ことごとく更替して、大老の家の子郎党ともいふべき人たちが占められている。驚くばかりさかんな大老の権威の前には、幕府内のものは皆屏息へいそくして、足を累かさねて立つ思いをしているほどだ。岩瀬肥後も今は向島むこうじまに蟄居ちつきよして、客にも会わず、号おうしよを鵬所と改めてわずかに好きな書画なぞに日々の憂うさを慰めて

いと聞く。

「幕府のことはもはや語るに足るものがない。」

と瑞見は嘆息して、その意味から言つても、罪せられた岩瀬肥後を憐あわれんだ。そういう瑞見は、彼自身も思いがけない譴責けんせきを受けて、蝦夷えぞ移住を命ぜられたのがすこし早かつたばかりに、大獄事件の巻き添えを食わなかつたというまでである。

十一屋の隠居は瑞見よりも一歩先ひとあしに江戸の方へ帰つて行つた。瑞見の方は腹具合を悪くして、寛齋の介抱などを受けていたために、神奈川を立つのが二、三日おくれた。

瑞見は蝦夷えぞから同行して来た供の男を連れて、寛齋にも牡丹屋ぼたんやの亭主ていしゅにも別れを告げる時に言つた。

「わたしもまた函館はこだての方へ行つて、昼寝でもして来ます。」

こんな言葉を残した。

客を送り出して見ると、寛齋は一層さびしい日を暮らすようになった。毎晩のように彗星すいせいが空にあらわれて怪しい光を放つのは、あれは何かの前兆を語るものであろうなどと、人のうわさにろくなことはない。水戸藩へはまた秘密な勅旨あんぎやそうが下つた、その使者が幕府の嚴重な探偵たんでいを避けるため、行脚僧あんぎやそうに姿を変えてこの東海道を通つたという流言なども伝わつて来る。それを見て来たことのようにおもしろがって言い立てるものもある。攘夷じょういを意味する横浜襲撃が諸浪士によつて企てられているとのうわさも絶えなかつた。

暖かい雨は幾たびか通り過ぎた。冬じゆうどこかへ飛び去つていた白い鴉からすは、また横浜海岸に近い玉楠たまぐすの樹きへ帰つて来る。

旧曆三月の季節も近づいて来た。寛齋は中津川の商人らをしきりに待ち遠しく思った。例の売り込み商を訪ねるたびに、貿易諸相場は上値うわねをたどつていふことと、この調子で行けば生糸六十五匁か七十匁につき金一両の相場もあらわれようとの話が出る。江州いしゅう、甲州、あるいは信州飯田いいたあたりの生糸商人も追いついて入り込んで来る模様があるから、なかなか油断はならないとの話もある。神奈川在留の外国商人——中にもイギリス人のケウスキイなどは横浜の将来を見込んで、率先して木造建築の商館なりと打ち建てたいとの意気込みでいるとの話もある。

「万屋よろずやさんも、だいぶごゆつくりでございますね。」

と牡丹屋の亭主は寛齋を見に裏二階へ上がって来るたびに言つた。

三月三日の朝はめずらしい大雪が来た。寛齋が廊下に出ては

ながめるのを楽しみにする椎しいの枝などは、夜から降り積もる雪にお圧されて、今にも折れそうなくらいに見える。牡丹屋では亭主の孫にあたるちいさな女の子のために初節句を祝うと言つて、その雪の中で、白酒まめいだ豆煎りだと女中までが大騒ぎだ。割子わりご弁当に重詰め、客振舞かきふるまいの酒肴さけさかなは旅に來ている寛齋の膳ぜんにまでついた。

その日一日、寛齋は椎の枝から溶け落ちる重い音を聞き暮らした。やがてその葉が雪にぬれて、かえつて一層の輝きを見せるころには、江戸方面からの人のうわさが桜田門外さくらだもんの変事を伝えた。

刺客いともおよそ十七人、脱藩除籍の願書を藩邸に投げ込んで永ながの暇いとまを告げたというから、浪人ではあるが、それらの水戸の侍たちが井伊大老の登城を待ち受けて、その首級あを挙げた。この変

事は人の口から口へと潜むように伝わつて来た。刺客はいずれも斬奸主意書ざんかんというを懐ふところにしていたという。それには大老を殺害すべき理由を弁明してあつたという。

「あの喜多村先生などが蝦夷えぞの方で聞いたら、どんな気がするだろう。」

と言つて、思わず寛齋は宿の亭主と顔を見合わせた。

井伊大老の横死おうしは絶対の秘密とされただけに、来たるべき時勢の変革を予想させるかのような底気味の悪い沈黙が周囲を支配した。首級を挙げられた大老をよく言う人は少ない。それほど憎まれ者も、亡なくなつたあとになつて見ると、やつぱり大きい人物であつたと、一方には言い出した人もある。なるほど、生前の大老はとかくの評判のある人ではあつたが、ただ、他人にまねのできなかつたことが一つある。外国交渉のことにかけては、

天朝の威をも畏れず、各藩の意見のためにも動かされず、断然として和親通商を許した上で、それから上奏の手續きを執つた。この一事は天地も容れない大罪を犯したように評するものが多けれども、もしこの決断がなかったら、日本国はどうなつたろう。軽く見積もつて蝦夷はもとより、対州も壱岐も英米仏露の諸外国に割き取られ、内地諸所の埠頭は随意に占領され、その上に背負い切れないほどの重い償金を取られ、シナの道光時代の末のような姿になつて、独立の体面はとても保たれなかつたかもしれない。大老がこの至険至難をしのぎ切つたのは、この国にとつての大功と言わねばなるまい。こんなふうに言う人もあつた。ともあれ、大老は徳川世襲伝来の精神をささえていた大極柱の倒れるように倒れて行つた。この報知を聞く彦根藩士の憤激、続いて起こつて来そうな彦根と水戸両藩の葛藤は寛

斎にも想像された。前途は実に測りがたかつた。

神奈川付近から横浜へかけての町々の警備は一層嚴重をきわめるようになった。鶴見つるみの橋詰めには杉すぎの角柱かくぼしらに大貫おおぬきを通した関門が新たに建てられた。夜になると、神奈川にある二か所の関門も堅く閉ざされ、三つ所紋わりぼおりの割羽織たつつげぼかまに裁付袴かぎょうもいかめしい番兵が三人の人足を先に立てて、外国諸領事の仮寓かぐうする寺々から、神奈川台の異人屋敷の方までも警戒した。町々は夜ふけて出歩く人も少なく、あたりをいましめる太鼓の音のみが聞こえた。

ようやく、その年の閏三月うるすを迎えるころになつて、※⁵（角万かくまん）とした生糸の荷がぼつぽつ寛齋のもとに届くようになった。寛齋は順に来るやつを預かつて、適当にその始末をしたが、木曾街道の宿場宿場を経て江戸回りで届いた荷を見るたびに、中津川商人が出向いて来る日の近いことを思った。毎日のように何かの出来事を待ち受けさせるかのような、こんな不安な周囲の空気の中で、よくそれでも生糸の荷が無事に着いたとも思った。

万屋安兵衛よろずややすべえが手代の嘉吉かきちを連れて、美濃みのの方を立て来たのは同じ月の下旬である。二人ふたりはやはり以前と同じ道筋を取つて、江戸両国の十一屋泊まりで、旧曆四月にはいつてから神奈川の牡丹屋ぼたんやに着いた。

にわかには寛齋のまわりもにぎやかになつた。旅の落し差を床の間に預ける安兵衛もいる。部屋の片すみに脚絆の紐を解く嘉吉もいる。二人は寛齋の聞きたいと思う郷里の方の人たちの消息——彼の妻子の消息、彼の知人の消息、彼の古い弟子たちの消息ばかりでなく、何かこう一口には言つてしまえないが、あの東美濃の盆地の方の空気までもなんとなく一緒に寛齋のところへ持つて来た。

寛齋がたつたりすわつたりしているそばで、嘉吉は働き盛りの手代らしい調子で、

「宮川先生も、ずいぶんお待ちになつたでしょう。なにしろ春蚕の済まないうちは、どうすることもできませんでした。糸はでそろいませんし。」

と言うと、安兵衛も寛齋をねぎらい顔に、

「いや、よく御辛抱ごしんぼうが続きましたよ。こんなに長くなるんでしたら、一度国の方へお帰りを願って、また出て来ていただきたいもとは思いましたがね。」

百里の道を往復して生糸商売でもしようという安兵衛には、さすがに思いやりがある。

「どうしても、だれか一人ひとりこっちにいないことには、浜の事情もよくわかりませんし、人任せでは安心もなりませんし——やっぱり先生に残っていていただいでよかつたと思いました。」

とも安兵衛は言い添えた。

やがて灯ひともしごろであつた。三人は久しぶりで一緒に食事を済ました。町をいましめに来る太鼓の音が聞こえる。閏三月うるうの晦日みそかまで隠されていた井伊大老の喪もすでに発表されたが、神奈川付近ではなかなか警戒の手をゆるめない。嘉吉は裏座敷

から表側の廊下の方へ見に行つた。陣笠をかぶつて両刀を腰にした番兵の先には、弓張提灯ゆみはりちょうちんを手にした二人の人足と、太鼓をたたいて回る一人の人足とが並んで通つたと言つて、嘉吉は目を光らせながら寛齋のいるところへ戻もどつて来た。

「そう言えば、先生はすこし横浜の匂においがする。」
と嘉吉が戯れて言い出した。

「ばかなことを言つちやいけない。」

この七か月ばかりの間、親しい人のだれの顔も見ず、だれの言葉も聞かないでいる寛齋が、どうして旅の日を暮らしたか。嘉吉の目がそれを言つた。

「そんなら見せようか。」

寛齋は笑つて、毎日のように手習いした反古ほごを行燈あんどんのかげに取り出して来て見せた。過ぐる七か月は寛齋にとつて、二年に

も三年にも当たった。旅籠屋はたごやの裏二階から見える椎しいの木よりほかにこの人の友とするものもなかった。その枝ぶりをながめながめするうちに、いつのまにか一変したと言つてもいいほどの彼の書体がそこにあつた。

寛齋は安兵衛にも嘉吉にも言つた。

「去年の十月ごろから見ると、横浜も見ちがえるようになりましたよ。」

糸目六十四匁につき金一両の割で、生糸の手合わせも順調に行なわれた。この手合わせは神奈川台の異人屋敷にあるケウスキイの仮宅で行なわれた。売り込み商と通弁の男とがそれに立ち合つた。売り方では牡丹屋ぼたんやに泊まつている安兵衛も嘉吉も共

に列席して、書類の調製は寛齋が引き受けた。

ケウスキイはめつたに笑わない男だが、その時だけは青い瞳ひとみの目に笑えみをたたえて、

「自分は近く横浜の海岸通りに木造の二階屋を建てて。自分の同業者でこの神奈川に来ているものには、英国人バルベルがあり、米国人ホウルがある。しかし、自分はだれよりも先に、あの商館を完成して、そこにイギリス第一番の表札を掲げたい。」
こういう意味のことを通弁に言わせた。

その時、ケウスキイは「わかつてくれたか」という顔つきをして、安兵衛にも嘉吉にも握手を求め、寛齋の方へも大きな手をさし出した。このイギリス人は寛齋の手を堅く握った。

「手合わせは済んだ。これから糸の引き渡しだ。」

異人屋敷を出てから安兵衛がホツとしたようにそれを言い出

すと、嘉吉も連れだつて歩きながら、

「旦那だんな、それから、まだありますぜ。請け取つた現金を国の方へ運ぶという仕事がありますぜ。」

「その事なら心配しなくてもいい。先生が引き受けていてくださる。」

「こいつがまた一仕事ですぞ。」

寛齋は二人のあとから神奈川台の土を踏んで、一緒に海の見えるところへ行つて立つた。目に入るかぎり、ちようど港は発展の最中だ。野毛町のげ、戸部町とべなぞの埋め立てもでき、開港当時百一戸ばかりの横浜にどれほどの移住者が増したと言つて見ることもできない。この横浜は来たる六月二日を期して、開港一周年を迎えようとしている。その記念には、弁天の祭礼をすら迎えようとしている。牡丹屋の亭主の話によると、神輿みこしはもと

より、山車^{だし}、手古舞^{てこまい}、蜘蛛^{くも}の拍子舞^{ひょうしまい}などという手踊りの舞台まで張り出して、できるだけ盛んにその祭礼を迎えようとしている。だががこの横浜開港をどう非難しようと、まるでそんなことはとんちやく頓着^{とんちやく}しないかのようになり、いったんヨーロッパの方へ向かつて開いた港からは、世界の潮^{うしほ}が遠慮会釈なくどんどん流れ込むように見えて来た。羅紗^{らしや}、唐棧^{とうざん}、金巾^{かなきん}、玻璃^{はり}、菓種^{くわしゆ}、酒類^{しゆらい}などがそこからはいって来れば、生糸^{せいし}、漆器^{しやくき}、製茶^{せいぢ}、水油^{みずあぶら}、銅^{どう}および銅器^{どうき}の類^{たぐい}などがそこから出て行つて、好^よかれ悪^あしかれ東と西の交換^{かんげん}がすでにすでに始まつたように見えて来た。

郷里^{きやうり}の方に待ち受けている妻子^{さいし}のことも、寛齋^{かんさい}の胸^{むね}に浮かんで来た。彼の心は中津川の香蔵^{かうざう}、景蔵^{けいざう}、それから馬籠^{まごめ}の半蔵^{はんざう}などの旧^{ふる}い三人^{さんにん}の弟子^{でし}の方^{かた}へも行つた。あの血氣^{けき}壯^{さか}んな人^{ひと}たちが、このむずかしい時^{とき}をどう乗^{のり}ッ切^きるだらうかとも思^{おも}いやつた。

生糸売り上げの利得のうち、小判こばんで二千四百両の金を遠く中津川まで送り届けることが寛齋の手に委ねゆだられた。安兵衛、嘉吉の二人は神奈川に居残つて、六月のころまで商売を続ける手はずであつたからで。当時、金銀の運搬にはいろいろ難渋した話がある。※するめにくるんで乾物の荷と見せかけ、かろうじて胡麻ごまの蠅はえの難をまぬかれた話もある。武州川越かわごえの商人は駕籠かごで夜道を急かごうとして、江戸へ出る途中で駕籠かごかきに襲われた話もある。五十両からの金を携帯する客となると、駕籠かきにはその重さでわかるという。こんな不便な時代に、寛齋は二千四百両からの金を預かつて行かねばならない。貧しい彼はそれほどの

金をかつて見たこともなかつたくらいだ。

寛齋は牡丹屋の二階にいた。その前へ来てすわって、手さげのついた煙草盆たばこぼんから一服吸いつけたのが安兵衛だ。

「先生に引き受けていただいて、わたしも安心しました。この役を引き受けていたただきたいばかりに、わざわざ先生を神奈川へお誘いして来たようなものですよ。」

と安兵衛が白状した。

しかし、これは安兵衛に言われるまでもなかつた。もとより寛齋も承知の上で来たことだ。

寛齋は前途百里の思いに胸のふさがる心地こころでたちあがった。迫り来る老年はもはやこの人の半身に上っていた。右の耳にはほとんど聴きく力がなく、右の目の視みる力も左のほどにはきかなかつた。彼はその衰えたからだを起こして、最後の「隠れ家が」に

たどり着くための冒険に当たろうとした。その時、安兵衛は一人のさいりりょう宰領を彼のところへ連れて来た。

「先生、この人が一緒に行つてくれます。」

見ると、荷物を護まもつて行くには屈強な男だ。千両箱の荷造りには嘉吉も来て手伝つた。

四月十日ごろには、寛齋は朝早くしたくをはじめ、旅おとの落しさしに身を堅めて、七か月のわびしい旅籠屋はたしやずまい住居に別れて行こうとする人であつた。牡丹屋の亭主の計らいで、別れの盃さかずきなぞがそこへ運ばれた。安兵衛は寛齋の前にすわつて、まず自分で一口飲んだ上で、その土器かわらけを寛齋の方へ差しした。この水盃は無量の思いでかわされた。

「さあ、退どいた。退どいた。」

という声が起こつた。廊下に立つ女中なぞの間を分けて、三

つの荷が二階から梯子段はしごだんの下へ運ばれた。その荷造りした箱の一つ一つは、嘉吉と宿の男とが二人がかりでようやく持ち上がるほどの重さがあった。

「オヤ、もうお立ちでございますか。江戸はいずれ両国のお泊まりでございましょう。あの十一屋の隠居にも、どうかよろしくおつしやつてください。」

と亭主も寛齋のところへ挨拶あいさつに来た。

馬荷一駄だ。それに寛齋と宰領とが付き添って、牡丹屋の門口を離れた。安兵衛や嘉吉はせめて宿しゆくはずれまで見送りたいと言つて、一緒に滝の橋を渡り、オランダ領事館の国旗の出ている長延寺の前を通つて、神奈川御台場の先までついて来た。

その時になつて見ると、郷里の方にいる旧ふるい弟子でしたちの思惑おもわくもしきりに寛齋の心にかかつて来た。彼が一步踏ひとあしみ出したところ

ろは、ゆきぎ往来するものが多い東海道だ。彼は老鷲ろうおじうの世を忍ぶ風情ふぜいで、とぼとぼとした荷馬わらぐまの※杳の音を聞きながら、遠く板橋回りで木曾街道に向かって行った。

第五章

一

宮川寛齋みやがわかんさいが万屋よろずやの主人と手代とを神奈川かながわに残して置いて帰国の途に上ったことは、早く美濃みのの方へ知れた。中津川も狭い土地だから、それがすぐ弟子でし仲間なかまの香蔵や景蔵の耳に入り、半蔵はまた三里ほど離れた木曾きその馬籠まごめの方で、旧ふるい師匠が板橋方面から木曾街道を帰つて来ることを知った。

横浜開港の影響は諸国の街道筋にまであらわれて来るころだ。半蔵は馬籠の本陣ほんじんにいて、すでに幾たびか銭相場引き上げの声を聞き、さらにまた小判こばん買いの声を聞くようになった。古一朱金、

保字金などの当時に残存した古い金貨の買い占めは地方でも始まった。きのうは馬籠榑田屋ますだやへ江州辺けいしゅうの買い手が来て貯え置きたくわの保金小判を一両につき一両三分までに買い入れて行つたとか、きょうは中津川大和屋やまとやで百枚の保金小判を出して当時通用の新小判二百二十五両を請け取つたとか、そんなうわさが毎日のように半蔵の耳を打つた。金一両で二両一分ずつの売買だ。それどころか、二両二分にも、三両にも買い求めるものがあらわれて来た。半蔵が家の隣に住んで昔気質かたぎで聞こえた伏見屋金兵衛ふしみやきんべえなどは驚いてしまつて、まことに心ならぬ浮世ではある、こんな姿で子孫が繁昌はんじょうするならそれこそ大慶の至りだと皮肉を言つたり、この上どうなつて行く世の中だろうと不安な語氣をもらしたりした。

半蔵が横浜貿易から帰つて来る旧師を心待ちに待ち受けたの

は、この地方の動揺の中だ。

旅人を親切にもてなすことは、古い街道筋の住民が一朝一夕に養い得た気風でもない。椎しいの葉はに飯いを盛ると言つた昔の人の旅情は彼らの忘れ得ぬ歌であり、路傍に立つ古い道どう祖神そじんは子供の時分から彼らに旅人愛護の精神をささやいている。いたるところに山嶽さんかくは重なり合い、河川はあふれやすい木曾のような土地に住むものは、ことにその心が深い。当時における旅行の困難を最もよく知るものは、そういう彼ら自身なのだ。まして半蔵にして見れば、以前に師匠と頼んだ人、平田入門の紹介までしてくれた人が神奈川から百里の道を踏んで、昼でも暗いような木曾の森林の間を遠く疲れて帰つて来ようという旅だ。

半蔵は旧師を待ち受ける心で、毎日のように街道へ出て見た。彼も隣宿妻籠つまご本陣の寿平次じゅへいじと一緒に、江戸から横須賀よこすかへかけての旅を終わって帰って来てから、もう足掛け三年になる。過ぐる年の大火のあとをうけて馬籠しゅくの宿もちょうど復興の最中であつた。幸いに彼の家や隣家の伏見屋は類焼をまぬかれたが、町の向こう側はすっかり焼けて、まっ先に普請ふしんのできた問屋といやく九太夫の家も目に新しい。

旧師の横浜出稼でかせぎについては、これまでとても弟子たちの間に問題とされて来たことだ。どうかして晩節を全うするように、とは年老いた師匠のために半蔵らの願いとするとところで、最初横浜行きのうわさを耳にした時に、弟子たちの中には寄り寄りその話が出た。わざわざ断わって行く必要もなかったと師匠に言われれば、それまでで、往いきにその沙汰さたがなかったにしても、

帰りにはなんとか話があるうと語り合っていた。すくなくも半蔵の心には、あの旧師が自分の家には立ち寄ってくれてせめて弟子だけにはいろいろな打ち明け話があるものと思っていた。

四月の二十二日には、寛齋も例の馬荷一駄だに宰領の付き添いで、片側に新しい家の並んだ馬籠の坂道を峠の方から下つて来た。寛齋は伏見屋の門口に馬を停とめ、懇意な金兵衛方に亡なくなつた鶴松つるまつの悔やみを言い入れ、今度横浜を引き上げるについては二千四百両からの金を預かつて来たこと、万屋安兵衛らの帰国はたぶん六月になろうということ、生糸売り上げも多分の利得のあること、開港場での小判の相場は三両二朱ぐらいには商いのできることに、そんな話を金兵衛のところに残して置いて、せつかく待ち受けている半蔵の家へは立ち寄らずに、そこそこに中津川の方へ通り過ぎて行つた。

このことは後になつて隣家から知れて来た。それを知つた時の半蔵の手持ちぶさたもなかつた。旧師を信ずる心の深いだけ、彼の失望も深かつた。

二

「どうも小判買いの入り込んで来るには驚きますね。今もわたしは馬籠へ来る途中で、おちあい落合でもそのうわさを聞いて来ましたよ。」

こんな話をもつて、中津川の香蔵が馬籠本陣をたず訪ねるために、じつきよくとうげ落合から十曲峠の山道を登つて来た。

香蔵は、まだ家督相続もせずにいる半蔵と違い、すでに中津川の方の新しい問屋の主人である。十何年も前に弟子として、

義理ある兄の寛齋に就いたころから見ると、彼も今は男のさかりだ。三人の友だちの中でも、景蔵は年長としうえで、香蔵はそれに次ぎ、半蔵が一番若かった。その半蔵がもはや三十にもなる。

寛齋も今は成金なりきんだと戯れて見せるような友だちを前に置いて、半蔵は自分の居間としてゐる本陣の店座敷で話した。

銭相場引き上げに続いて急激な諸物価騰貴をひき起こした横浜貿易の取りざたほど半蔵らの心をいらいらさせるものもない。

当時、国内に流通する小判、一分判いちふばんなどの異常に良質なことは、

米國領事ハリスですら幕府に注意したくらいで、それらの古い金貨を輸出するものは法外な利を得た。幕府で新小判ちゆうぞうを鑄造し、

その品質を落としたのは、外国貨幣と鈞合つりあいを取るための応急手段であつたが、それがかえつて財界混乱の結果を招いたとも言える。そういう幕府には市場に流通する一切の古い金貨しゅうしゅうを蒐集

して、それを改鑄するだけの能力も信用もなかったからで。新
旧小判は同時に市場に行なわれるような日がやって来た。目先
の利に走る内地商人と、この機会をとらえずには置かない外国
商人とがしきりにその間に跳梁ちようりょうし始めた。純粹な小判はどしど
し海の外へ出て行つて、そのかわりに輸入せらるるものは多少
の米弗銀貨ペイドルはあるとしても、多くは悪質な洋銀であると言われ
る。

「半蔵さん、君はあの小判買いの声をどう思います。」と香蔵は
言った。「今までに君、九十万両ぐらいの小判は外国へ流れ出し
たと言いますよ。そうですね、軽く見積もつても九十万両ですと
さ。驚くじゃありませんか。まさか幕府の役人だつて、異人の
言うなりになつてゐるわけでもありませんまいがね、したくも何も
なしに、いきなり港を開かせられてしまつて、その結果はと言

うと非常な物価騰貴です。そりや一部の人たちは横浜開港でもうけたかもしれませんが、一般の人民はこんなに生活に苦しむようになつて来ましたぜ。」

近づいて来る六月二日、その横浜開港一周年の記念日をむしろ屈辱の記念日として考えるものもあるような、さかんな排外熱は全国に巻き起こつて来た。眼まのあたりまに多くのものの苦しみを見る半蔵らは、一概にそれを偏狭頑固がんこなものまの声とは考えられなかつた。

「宮川先生のごことは、もう何も言いますまい。」と半蔵が言い出した。「わたしたちの衷情としては、今までどおりの簡素清貧に甘んじていていただきたかつたけれど。」

「国学者には君、国学者の立場もあろうじやありませんか。それを捨てて、ただもうけさえすればよいというものでもないでしょう。」と言うのは香蔵だ。

「いつたい、先生が横浜なぞへ出かけられる前に、相談してくださるとよかつた。こんなになたしたちを避けなくてもよきそうですね。」

「出稼でかせぎの問題には触れてくれるなと言うんでしよう。」

にわかな雨で、二人ふたりの話は途切れた。半蔵は店座敷の雨戸を繰って、それを一枚ほど閉しめずに置き、しばらく友だちと二人で表庭にふりそそぐ強い雨をながめていた。そのうちに雨は座敷へ吹き込んで来る。しまいには雨戸もあけて置かれないうようになった。

「お民。」

と半蔵は妻を呼んだ。燈火あかりなしには話も見えないほど座敷の内は暗かった。お民ももはや二十四で、二人子持ちの若い母だ。奥から行燈あんどんを運んで来る彼女の後ろには、座敷の入り口までついて来て客の方をのぞく幼いものもある。

時ならぬ行燈のかけで、半蔵と香蔵の二人は風雨の音をききながら旧師のことを語り合つた。話せば話すほど二人はいろいろな心持ちを引き出されて行つた。半蔵にしても香蔵にしても、はじめて古学というものに目をあけてもらつた寛齋の温情を忘れずにいる。旧師も老いたとは考えても、その態度を責めるよくな心は二人とも持たなかつた。飯田いいたの在への隠退が旧師の晩年のためとあるなら、その人の幸福を乱したくないと言うのが半蔵だ。親戚しんせきとしての関係はとにかく、旧師から離れて行こうと言ひ出すのが香蔵だ。

国学者としての大きな先輩、本居宣長のもとおりのりながのこした仕事はこの半蔵らに一層光って見えるようになって来た。なんと言つても言葉の鍵かぎを握つたことはあの大人うしの強味で、それが三十五年にわたる古事記の研究ともなり、健全な国民性を古代に発見する端緒ともなつた。儒教という形であらわれて来ている北方シナの道徳、禅宗や道教の形であらわれて来ている南方シナの宗教——それらの異国の借り物をかなぐり捨て、一切の「漢からごころ」をかなぐり捨てて、言挙ことあげということもさらになかつた神ながらのいにしえの代に帰れと教えたのが大人うしだ。大人から見ると、何の道かの道ということは異国の沙汰さたで、いわゆる仁義礼讓孝悌てい忠信などというやかましい名をくさぐさ作り設けて、きびしく人間を縛りつけてしまった人たちのことを、もろこし方では聖人と呼んでいる。それを笑うために出て来た人があの大人だ。

大人が古代の探求から見つけて来たものは、「直毘の靈」の精神で、その言うところを約めて見ると、「自然に帰れ」と教えたこととなる。より明るい世界への啓示も、古代復帰の夢想も、世の否定も、人間の解放も、または大人のあの恋愛観も、物のあわれの説も、すべてそこから出発している。伊勢の国、飯高郡の民として、天明寛政の年代にこんな人が生きていたということすら、半蔵らの心には一つの驚きである。早く夜明けを告げるもの生まれて来たような大人は、暗いこの世をあとから歩いて来るものを探るに任せて置いて、新しい世紀のやがてめぐつて来る享和元年の秋ごろにはすでに過去の人であった。半蔵らに言わせると、あの鈴の屋の翁こそ、「近つ代」の人の父とも呼べるべき人であった。

半蔵は半蔵に言った。

「今になつて、想おもい当たる。宮川先生も君、あれで中津川あたりじゃ国学者の牛耳ぎゅうじを執ると言われて来た人ですがね、年をとればとるほど漢学の方へ戻もどつて行かれるような気がする。先生には、まだまだ『漢からごころ』のぬけ切らないところがあるんですね。」

「香蔵さん、そう君に言われると、わたしなぞはなんと云つていいかわからない。四書五経から習かひ初めたものに、なかなか儒教の殻からはとれませんよ。」

強雨はやまないばかりか、しきりに雲が騒いで、夕方まで休みなしに吹き通すような強風も出て来た。名古屋から福島行きの客でやむを得ず半蔵の家に一宿させてくれと言つて来た人さ

えもある。

香蔵もその晩は中津川の方へは帰れなかつた。翌朝になつて見ると、風は静まつたが、天気は容易に回復しなかつた。思いのほかの大荒れで、奥筋おくすじの道や橋は損じ、福島けづの毛付けけづ（馬市）も日延べになつたとの通知があるくらいだ。

ちようど半蔵の父、吉左衛門きちざえもんは尾張藩おわりはんから御勝手おかつて仕法立ての件を頼まれて、名古屋出張中の留守の時であつた。半蔵は家の囲炉裏いろりばたに香蔵を残して置いて、ちよつと会所の見回りに行つて来たが、街道には旅人の通行もなかつた。そこへ下男の佐吉も蓑みのと笠かさとで田圃たんぼの見回りから帰つて来て、中津川の大橋が流れ失うせたとのうわさを伝えた。

「香蔵さん、大橋が落ちたと言いますぜ。もうすこし見合わせていたらどうです。」

「この雨にどうなりましょう。」と半蔵が継母のおまんも囲炉裏いろりばたへ来て言った。「いずれ中津川からお迎えの人も見えましように、それまで見合わせていらつしやるがいい。まあ、そうなさい。」

雨のために、やむなく逗留とまりゆうする友だちを慰めようとして、やがて半蔵は囲炉裏いろりばたから奥の部屋へやの方へ香蔵を誘った。北の坪庭に向いたところまで行つて、雨戸をすこし繰つて見せると、そこに本陣の上段の間がある。白地に黒く雲形を織り出した高麗縁こうらいべりの畳の上には、雨の日の薄暗い光線がさし入っている。木曾路を通る諸大名が客間にあててあるのもそこだ。半蔵が横須賀の旅以来、過ぐる三年間の意味ある通行を数えて見ると、ひこね彦根よりする井伊掃部頭いいかもんのかみ、江戸より老中間部下総守まなべしもうさのかみ、林大学頭はやしだいがくのかみ、監察岩瀬肥後守いわせひごのかみ、等、等——それらのすでに横死したりまたは

現存する幕府の人物で、あるいは大老就職のため江戸の任地へ赴おもむこうとし、あるいは神奈川条約上奏のため京都へ急おむこうとして、その客間に足をとどめて行つたことが、ありありとそこにたどられる。半蔵はそんな隠れたところにある部屋へやを友だちにのぞかせて、目まぐるしい「時」の歩みをちよつと振り返つて見る気になつた。

その時、半蔵は唐紙からかみのそばに立つていた。わざと友だちが上段の間の床に注意するのを待つていた。相州三浦そうしゅうみづら、横須賀在、公郷村くこうむらの方に住む山上七郎左衛門やまがみしちろうざえもんから旅の記念にと贈られた光琳こうりんの軸がその暗い壁のところこゝろに隠れていたので。

「香蔵さん、これがわたしの横須賀土産みやげですよ。」

「そう言えば、君の話にはよく横須賀が出る。これを贈つたかたがその御本家なんですね。」

「妻籠つまごの本陣じや無銘の刀をもらう、わたしの家へはこの掛け物をもらつて来ました。まったく、あの旅は忘れられない。あれから吾家うちへ帰つて来た日は、わたしはもう別の人でしたよ——まあ、自分のつもりじや、全く新規な生活を始めましたよ。」

半日でも多く友だちを引き留めたくてゐる半蔵には、その日の雨はやらずの雨と言つてよかつた。彼はその足で、継母や妻の仕事部屋となつてゐる仲の間のわきの廊下を通りぬけて、もう一度店座敷の方に友だちの席をつくり直した。

「どれ、香蔵さんに一つわたしのまずい歌をお目にかけますか。」

と言つて半蔵が友だちの前に取り出したのは、時事を詠じた歌の草稿だ。まだ若々しい筆で書いて、人にも見せずじまつて置いてあるものだ。

あめりかのどるを御国みくにのしろかねにひとしき品とさだめし

や誰たれ

しろかねにかけておよばぬどるらるるをひとしと思ひし人は
誰たれども

国つ物たかくうるともそのしろのいとやすかるを思ひはか
らで

百八十ももやその物のことごとたかくうりてわれを富ますとおもひ
けるかな

土のごと山と掘りくるどるらるるに御国みくにのたからかへまく惜
しも

どるらるにかふるも悲しかみぐに神国かみぐにの人のいとなみ造れるものを
どるらるの品のさだめはおおよしまくぬち大八島国中あまねく問ふべかりし
を

しろかねにいたくおとれるどるらるるを知りてきておく世こ

そつたなき

国つ物足らずなりなばどるらるは山とつむとも何にかはせむ

これらの歌に「どる」とか、「どるらる」とかあるのは、外国商人の手によりて輸入せらるる悪質なメキシコドル、香港ホンコンドルなどの洋銀をさす。それは民間に流通するよりも多く徳川幕府の手に入って、一分銀に改鑄せらるるというものである。

「わたしがこんな歌をつくつたのはめずらしいでしょう。」と半蔵が言い出した。

「しかし、宮川先生の旧ふるい弟子でし仲間では、半蔵さんは歌の詠よめる人だと思っていましたよ。」と香蔵が答える。

「それがです、自分でも物になるかと思ひ初めたのは、横須賀の旅からです。あの旅が歌を引き出したんですね。詠んで見た

ら、自分にも詠める。」

「ほら、君が横須賀の旅から贈ってくだすつたのがあるじゃありませんか。」

「でも、香蔵さん、吾家の阿爺おやじが俳諧はいかいを楽しむのと、わたしが和歌を詠んで見たいと思うのとは、だいぶその心持ちに相違があるんです。わたしはやはり、本居先生の歌にもとづいて、いくらかでも古むかしの人の素直すなおな心に帰って行くために、詩を詠むと考かんえたいんです。それほど今の時世に生まれたものは、自然なものものを失うっていると思うんですが、どうでしょう。」

半蔵らはすべてこの調子で踏み出して行こうとした。あの本居宣長ののこした教えを祖述するばかりでなく、それを極端にまで持つて行つて、実行への道をあげたところに、日ごろ半蔵はんそうらが畏敬いけいする平田篤胤ひらたあつたねの不屈きよくな気魄きぱくがある。半蔵らに言わせると、

鈴の屋の翁にはなんと云つても天明寛政年代の人の寛濶かんかつさがあ
る。そこへ行くと、気吹いぶきの舎大人やのうしは狭い人かもしれないが、し
かしその迫りに迫つて行つた追求心が彼らの時代の人の心に近
い。そこが平田派の学問の世に誤解されやすいところで、篤胤大
人の上に及んだ幕府の迫害もはなはだしかつた。『大扶桑国考』
『皇朝無窮曆』こうちようむぎゆうれきなどの書かれるころになると、絶板を命ぜられる
はおろか、著述することまで禁じられ、大人うしその人も郷里の秋
田へ隠退を余儀なくされたが、しかし大人は六十八歳の生涯しやうがいを
終わるまで決して屈してはいなかつた。同時代を見渡したとこ
ろ、平田篤胤に比ぶべきほどの必死な学者は半蔵らの目に映つ
て来なかつた。

五月も十日過ぎのことで、安政大獄当時に極刑に処せられた
もののうち、あるものの忌日がやつて来るような日を迎えて見

ると、亡^なき梅田雲浜、吉田松陰、頼^{らい}鴨崖^{おうがい}なぞの記憶がまた眼前の青葉と共に世人の胸に活^いき返つて来る。半蔵や香蔵は平田篤胤没後の門人として、あの先輩から学び得た心を抱いて、互いに革新潮流の渦^{うず}の中へ行こうとこころざしていた。

降りつづける五月の雨は友だちの足をとどめさせたばかりでなく、親しみを増させるなかだちともなつた。半蔵には新たにひとり一人の弟子ができて、今は住み込みでここ本陣に來ていることも香蔵をよろこばせた。隣宿落合の稲葉屋^{いなばや}の子息^{むすこ}、林勝重^{かつしげ}というのがその少年の名だ。学問する機運に促されてか、馬籠本陣へ通^{かよ}つて来る少年も多くある中で、勝重ほど末頼もしいものを見ない、と友だちに言つて見せるのも半蔵だ。時には、勝重は

勉強部屋の方から通つて来て、半蔵と香蔵とが二人で話しつつ、
かけているところへ用をききに顔を出す。短い袴、浅黄色の襦袢
の襟、前髪をとった額越しにこちらを見る少年らしい目つきの
若々しさは、半蔵らにもありし日のことを思い出させずには置
かなかつた。

「そうかなあ。自分らもあんなだつたかなあ。わたしが弁当持
ちで、宮川先生の家へ通い初めたのは、ちょうど今の勝重さん
の年でしたよ。」

と半蔵は友だちに言つて見せた。

そろそろ香蔵は中津川の家の方のことを心配し出した。強風
強雨が来たあとの様子が追い追いかつて見ると、荒町には風
のために吹きつぶされた家もある。峠の村にも半つぶれの家が
あり、棟に打たれて即死した馬さえある。そこいらの畠の麦が

残らず倒れたなぞは、風あたりの強い馬籠峠の上にしてもめずらしいことだ。

おまんは店座敷へ来て、

「香蔵さん、お宅の方でも御心配なすっていらつしやるでしょうが、きょうお帰し申したんじゃ、わたしどもが心配です。吾家の佐吉に風呂でも焚かせますに、もう一日御逗留なすってください。年寄りの言うことをきいてください。」

と言つて勧めた。この継母がはいつて来ると、半蔵は急にすわり直した。おまんの前では、崩している膝でもすわり直すのが半蔵の癖のようになっていた。

「ごめんください。」

と子供に言つて見せる声がして、部屋の敷居をまたごうとする幼いものを助けながら、そこへはいつて来たのは半蔵の妻だ。

娘のお糸は五つになるが、下に宗太そうたという弟ができてから、にわかには姉さんらしい顔つきで、お民に連れられながら、客のところへ茶を運んで来た。一心に客の方をめぐがけて、茶をこぼすまいとしながら歩いて来るその様子も子供らしい。

「まあ、香蔵さん、見てやってください。」とおまんは言った。「お糸があなたのところへお茶を持ってまいりましたよ。」

「この子が自分で持つて行くと行って、きかないんですもの。」とお民も笑った。

半蔵の家では子供まで来て、雨に逗留する客をもてなした。

とうとう香蔵は二晩も馬籠に泊まった。東美濃みのから伊那いなの谷へかけての平田門人らとも互いに連絡を取ることに、場合によっては京都、名古屋にある同志のものを応援することを半蔵に約して置いて、三日目には香蔵は馬籠の本陣を辞した。

友だちが帰って行ったあとになって見ると、半蔵は一層わびしい雨の日を山の上に送った。四日目になっても雨は降り続き、風もすこし吹いて、橋の損所や舞台の屋根を修繕するために村じゅう一軒ひとりに一人ずつは出た。雨間あままというものがすこしもなく、雲行きは悪く、荒れ気味で安心がならなかった。村には長雨のために、壁がいたんだり、土の落ちたりした土蔵もある。五日目も雨、その日になると、崖がけになった塩沢あたりの道がぬける。香蔵が帰って行った中津川の方の大橋付近では三軒の人家が流失するという騒ぎだ。日に日に木曾川の水は増し、橋の通行もない。街道は往来止めだ。

ようやく五月の十七日ごろになって、上り下りの旅人が動き出した。尾張藩の勘定奉行かんじょうぎぎょう、普請役御目付おめつけ、錦織の奉行にしきり、いずれも江戸城本丸の建築用材を見分けんぶんのためとあって、この森林地

帯へ入り込んで来る。美濃地方が風雨のために延引となつていた長崎御目付の通行がそのあとに続く。

「黒船騒ぎも、もうたくさんだ。」

そう思っている半蔵は、また木曾人足百人、伊那の助郷すけごう二百人を用意するほどの長崎御目付の通行を見せつけられた。遠く長崎の港の方には、新たにドイツの船がはいつて来て、先着のヨーロッパ諸国と同じような通商貿易の許しを求めするために港内に碇泊ていはくしているとこのうわさもある。

三

七月を迎えるころには、寛齋は中津川の家を養子に譲り、住み慣れた美濃の盆地も見捨て、かねて老後の隠棲いんせいの地と定めて

置いた信州伊那の谷の方へ移つて行つた。馬籠にはさびしく旧師を見送る半蔵が残つた。

「いよいよ先生ともお別れか。」

と半蔵は考へて、本陣の店座敷の戸に倚りながら、寛齋が引き移つて行つた谷の方へ思いを馳せた。隣宿妻籠から伊那への通路にあたる清内路には、平田門人として半蔵から見れば先輩の原信好がある。御坂峠、風越峠なぞの恵那山脈一帯の地勢を隔てた伊那の谷の方には、飯田にも、大川原にも、山吹にも、座光寺にも平田同門の熱心な先輩を数えることができる。その中には、篤胤大人畢生の名著でまだ世に出なかつた『古史伝』三十一巻の上木を思い立つ座光寺の北原稻雄のような人がある。古学研究の筵を開いて、先師遺著の輪講を思い立つ山吹の片桐春一のような人がある。年々寒露の節に入る日を会日と定め、金二

分とか、金半分とかの会費を持ち寄つて、地方にいて書籍を購読するための書籍講というものを思い立つものもある。

半蔵の周囲には、驚くばかり急激な勢いで、平田派の学問が伊那地方の人たちの間に伝播でんぱし初めた。飯田の在とものの伴野という村には、五十歳を迎えてから先師没後の門人に加わり、婦人ながらに勤王の運動に身を投じようとする松尾多勢まつおたせこ子のような人も出て来た。おまけに、江戸には篤胤大人の祖述者をもつて任ずる平田鉄胤かねたねのようなよい相続者があつて、地方にある門人らを指導することを忘れていなかった。一切の入門者がみな篤胤没後の門人として取り扱われた。決して鉄胤の門人とは見なされなかった。半蔵にして見ると、彼はこの伊那地方の人たちを東美濃の同志に結びつける中央の位置に自分を見いだしたのである。賀茂真淵かものまぶちから本居宣長、本居宣長から平田篤胤と、諸大

人の承^うけ継ぎ承^うけ継ぎして来たものを消えない学問の燈火^{ともしび}にたとえるなら、彼は木曾のような深い山の中に住みながらも、一方には伊那の谷の方を望み、一方には親しい友だちのいる中津川から、落合、附^{つけ}智、久々^{くくり}里、大井、岩村、苗木^{なえぎ}なぞの美濃の方にまで、あそこにも、ここにもと、その燈火を数えて見ることができた。

当時の民間にある庄屋^{しょうや}たちは、次第にその位置を自覚し始めた。さしあたり半蔵としては、父吉左衛門^{きちざえもん}から青山の家を譲られる日のことを考えて見て、その心じたくをする必要があつた。吉左衛門と、隣家の金兵衛^{きんべえ}とが、二人^{ふたり}ともそろって木曾福島^{まんえん}の役所あてに退役願いを申し出たのも、その年、万延元年の夏の

はじめであつたからで。

長いこと地方自治の一単位とも言うべき村方の世話から、交通輸送の要路にあたる街道一切の面倒まで見て、本陣問屋庄屋の三役を兼ねた吉左衛門と、年寄役の金兵衛とが二人ともようやく隠退を思うころは、吉左衛門はすでに六十二歳、金兵衛は六十四歳に達していた。もつとも、父の退役願いがすぐにきき届けられるか、どうかは、半蔵にもわからなかつたが。

時には、半蔵は村の見回りに行つて、そこいらを出歩く父や金兵衛にあう。吉左衛門ももう杖つえなぞを手にして、新たに養子を迎えたお喜佐きさ（半蔵の異母妹）の新宅を見回りに行くような人だ。金兵衛は、と見ると、この隣人は袂たもとに珠数じゆずを入れ、かつては半蔵の教え子でもあつた亡なき鶴松つるまつのことを忘れかねるといふふうで、位牌所いはいじよを建立こんりゆうするとか、木魚もくぎよを寄付するとかに、何

かにつけて村の寺道の方へ足を運ぼうとするような人だ。問屋の九太夫にもあう。

「九太夫さんも年を取ったなあ。」

そう想おもつて見ると、金兵衛の家には美濃の大井から迎えた伊いのすけ之助という養子ができ、九太夫の家にはすでに九郎兵衛くろべえという後継あとつぎがある。

半蔵は家もとに戻もどつてからも、よく周囲あたりを見回した。妻をも見て言いつた。

「お民、ことしか来年のうちには、お前も本陣あねの姉あねさまだけ。」

「わかつていますよ。」

「お前にこの家がやれるかい。」

「そりゃ、わたしだって、やれないことはないと思いますよ。」

先代の隠居半六から四十二歳で家督を譲られた父吉左衛門に

比べると、半蔵の方はまだ十二年も若い。それでももう彼のそばには、お民のふところへ子供らしい手をさし入れて、乳房ちちゆきを探ろうとする宗太がいる。朴ほおの葉に包んでお民の与えた熱い塩結飯しおむすびをうまさうに頬張ほおばるような年ごろのお衆くめがいる。

半蔵は思い出したように、

「ごらん、吾家うちの阿爺おやじはこととして勤続二十一年だ、見習いとして働いた年を入れると、実際は三十七、八年にもなるだろう。あれで祖父おじいさんもなかなか頑張がんばっていて、本陣庄屋の仕事おやじを阿爺おやじに任せていいとは容易に言わなかった。それほど大事を取る必要もあるんだね。おれなぞは、お前、十七の歳としから見習いだぜ。しかし、おれはお前の兄さん（寿平次）のように事務の執れる人間じゃない。お大名を泊めた時の人数から、旅籠賃はたごちんがいくらで、燭台しよくだいが何本と事細かに書き留めて置くような、そういうこ

とに適した人間じゃない——おれは、こんなばかな男だ。」

「どうしてそんなことを言うんでしよう。」

「だからさ。今からそれをお前に断わって置く。お前の兄さんもおもしろいことを言ったよ。庄屋としては民意を代表するし、本陣問屋としては諸街道の交通事業に参加すると想おもって見たまえ、とき。しかし、おれも庄屋の子だ。平田先生の門人の一人ひとりだ。まあ、おれはおれで、やれるところまでやって見る。」

「半蔵さま、福島からお差紙さしがみ（呼び出し状）よなし。ここはど
うしても、お前さまに出でただかんけりやならん。」

村方のものがそんなことを言って、半蔵のところへやって来た。

村民同志の草山の争いだ。いたるところに森林を見る山間の地勢で、草刈る場所も少ない土地を争うところから起こつて来る境界のごたごただ。草山口論ということをつめて、「山論」という言葉で通つて来たほど、これまでとてもその紛擾ふんじょうは木曾山に絶えなかつた。

錢相場引き上げ、小判買い、横浜交易なぞの声につれて、一方には財界変動の機会に乗り全盛を謳うたわるる成金もあると同時に、細民の苦しむこともおびただしい。米も高い。両に四斗五升もした。大豆だいず一駄だ二両三分、酒一升二百三十二文、豆腐一丁四十二文もした。諸色しよしきがこのとおりで。世間一統動揺して来ている中で、村民の心がそう静かにしていられるはずもなかつた。山論までが露骨になつて来た。

しかし半蔵にとつて、大げさおおに言えば血で血を洗うような、

こうした百姓同志の争いほど彼の心に深い悲しみを覚えさせるものもなかった。福島役所への訴訟沙汰そしやうざたにまでなつた山論——訴えた方は隣村湯舟沢の村民、訴えられた方は馬籠宿内の一部落にあたる峠村の百姓仲間である。山論がけんかになつて、峠村のものが鎌十五挺かま ちようほど奪い取られたのは過ぐる年の夏のことだ、いったんは馬籠の宿役人が仲裁に入り、示談になつたはずの一年越しの事件だ。この争いは去年の二百二十日から九月の二十日ごろまで、およそ二か月にもわたつた。そのおりには隣宿妻籠脇本陣わきほんじんの扇屋得右衛門おうぎやとくえもんから、山口村の組頭くみがしらまで立ち合いに来て、草山の境界を見分するため一同弁当持参で山登りをしたほどであつた。ところが、湯舟沢村のものから不服が出て、その結果は福島の役所にまで持ち出されるほど紛れたもつのである。二人の百姓総代は峠村からも馬籠の下町からも福島に呼び出さ

れた。両人のものが役所に出頭して見ると、直ちに入牢にゆうろうを仰せ付けられて、八沢やさわ送りとなった。福島からは別さしがみに差紙が来て、年寄役付き添いの上、馬籠の庄屋に出頭せよとある。今は、半蔵ちゆうちよも躊躇すべき時でない。

「お民、おれはお父とつさんの名代みょうだいに、福島まで行つて来る。」
と妻に言つて、彼は役所に出頭する時の袴はかまの用意なぞをさせた。自分でも着物を改めて、堅く帯をしめにかかった。

「どうも人にん気が穏やかでない。」
父、吉左衛門はそれを半蔵に言つて、福島行きのしたくのできるのを待った。

この父は自分の退役も近づいたという顔つきで、本陣の囲炉

裏ばたに続いた寛くつろぎの間の方まへ行つて、その部屋へやの用筆筒ようだんすから馬籠湯舟沢両村の古い絵図なぞを取り出して来た。

「半蔵、これも一つの参考だ。」

と言つて子の前に置いた。

「双方入り合いの草刈り場所というものは、むずかしいよ。山論、山論で、そりや今までだつてもずいぶんごたごたしたが、大抵は示談で済んで来たものだ。」

とまた吉左衛門は軽く言つて、早く不幸な入牢者を救えという意味を通わせた。

湯舟沢の方の百姓は、組頭くみがしらとも、都合八人のものが福島ふくしまの役所に呼び出された。馬籠では、年寄役の儀助、同役与次衛門よじえもん、それに峠の組頭平助がすでに福島へ向けて立つて行つた。なお、

年寄役金兵衛の名代みょうだいとして、隣家の養子伊之助も半蔵のあとから出かけることになっている。草山口論も今は公おおやけの場処おやけに出て争おうとする御用の山論一条だ。

これらの年寄役は互いに代わり合つて、半蔵の付き添いとして行くことになったのだ。

「おれも退役願いを出したくらいだから、今度は顔を出すまいよ。」

と父が言葉を添えるころには、峠の組頭平助が福島から引き返して、半蔵を迎えに来た。半蔵は平助の付き添いに力を得て、脚絆きやはんに草鞋わらじばき尻端折しりはしよりのかいがいしい姿になった。

諸国には当時の嚴禁なる百姓一揆いっきも起こりつつあった。しかし半蔵は、村の長老たちが考えるようにそれを単なる農民の謀反むほんとは見なせなかつた。百姓一揆の処罰と言え、軽いものは答むち、

入墨いれずみ、追ひ払い、重いものは永牢えいろう、打ち首のような嚴刑はありながら、進んでその苦痛を受けようとするほどの要求から動く百姓の誠実と、その犠牲的な精神とは、他の社会に見られないものである。当時の急務は、下民百姓を教えることではなくて、あべこべに下民百姓から教えられることであつた。

「百姓には言挙げことあげということもさらにない。今こそ草山の争いぐらいでこんな内輪げんかをしているが、もつと百姓の目をさます時が来る。」

そう半蔵は考えて、庄屋としての父の名代みょうだいを勤めるために、福島の役所をさして出かけて行くことにした。

家を離れてから、彼はそこにいない人たちに呼びかけるように、ひとり言つて見た。

「同志打ちはやせ。今は、そんな時世じゃないぞ。」

四

十三日の後には、福島へ呼び出されたものも用済みになり、湯舟沢峠両村の百姓の間には和解が成り立った。

八沢の牢舎ろうやを出たもの、証人として福島ふくしまの城下に滞在したものの、いずれも思い思いに帰村を急ぎつつあった。十四日目には、半蔵は隣家の伊之助と連れだって、峠の組頭平助とも一緒に、暑い木曾路を西に帰って来る人であった。

福島から須原泊すはらまりで、山論和解の報告をもたらしながら、半蔵が自分の家の入り口まで引き返して来た時は、ちょうど門内の庭掃除そうじに余念もない父を見た。

「半蔵が帰りましたよ。」

おまんはだれよりも先に半蔵を見つけて、店座敷の前の牡丹ぼたんの下あたりを掃いている吉左衛門にそれを告げた。

「お父さんとつ、行つてまいりました。」

半蔵は表庭の梨なしの木の幹かきに笠を立てかけて置いて、汗をふいた。その時、簡単に、両村のものゝ和解をさせて来たあらましを父に告げた。双方入り合ひの草刈り場所を定めたこと、新たに土塚つちづかを築いて境界をはつきりさせること、最寄りの百姓もよばかりがその辺へは鎌かまを入れることにして、一同福島から引き取つて来たことを告げた。

「それはまあ、よかつた。お前の帰りがおそいから心配していたよ。」

と吉左衛門は庭の箒ほうきを手にしたままと言つた。

もはや秋も立つ。馬籠あたりに住むものがきびしい暑さを口

にするところに、そこいらの石垣いしがきのそばでは蟋蟀こおろぎが鳴いた。半蔵はその年の盆も福島の方で送つて来て、さらに村民のために奔走しなければならぬほどいそがしい思いをした。

やがて両村立ち合いの上で、かねて争いの場処である草山に土塚を築つき立てる日が来た。半蔵は馬籠ろうの惣役人そうやくにんと、百姓小前こまえのものを連れて、草いきれのする夏山の道をたどつた。湯舟沢からは、庄屋、組頭四人、百姓全部で、両村のものを合わせるとおよそ二百人あまりの人数が境界の地点と定めた深い沢に集まつた。

「そんなとろくさいことじゃ、だちかん。」

「うんと高く土を盛れ。」

半蔵の周囲には、口々に言いのしる百姓の声が起こる。

四つの土塚がその境界に築つき立てられることになつた。ある

ものは洞ほらが根先ねの大石へ見通し、あるものは向こう根の松の木へ見通しというふうなに。そこいらが掘り返されるたびに、生々なまなましい土の臭気が半蔵の鼻をつく。工事が始まったのだ。両村の百姓は、藪蚊やぶがの襲い来るのも忘れて、いずれも土塚の周囲に集合していた。

その時、背後うしろから軽く半蔵の肩をたたくものがある。隣村妻籠つまごの庄屋として立ち合いに来た寿平次が笑いながらそこに立っていた。

「寿平次さん、泊まっていったらどうです。」

「いや、きょうは連れがあるから帰ります。二里ぐらいの夜道はわけありません。」

半蔵と寿平次とがこんな言葉をかわすころは、山で日が暮れた。四番目の土塚を見分する時分には、松明をともし、たいまつようやく見通しをつけたほど暗い。境界の中心と定めた樹木から、ある大石までの間に土手を掘る工事だけは、余儀なく翌日に延ばすことになった。

雨にさまたげられた日を間に置いて、翌々日にはまた両村の百姓が同じ場所に集合した。半蔵は妻籠からやって来る寿平次と一緒にあって、境界の土手を掘る工事にまで立ち合った。一年越しにらみ合っていた両村の百姓も、いよいよ双方得心ということになり、長い山論もその時になって解決を告げた。

日暮れに近かった。半蔵は寿平次を誘いながら家路をさして帰って行った。横須賀の旅以来、二人は一層親しく往来する。義理ある兄弟きょうだいであるばかりでなく、やがて二人は新進の庄屋仲

間でもある。

「半蔵さん、」と寿平次は石ころの多い山道を歩きながら言った。「すべてのものが露骨になって来ましたね。」

「さあねえ。」と半蔵が答えた。

「でも、半蔵さん、この山論はどうです。いや、草山の争いばかりじゃありません、見るもの聞くものが、実に露骨になって来ましたね。こないだも、水戸みとの浪人ろうにんだなんていう人が吾家うちへやって来て、さんざん文句を並べたあげくに、何か書くから紙と筆を貸せと言いました。扇子せんすを二本書かせたところが、酒を五合に、銭を百文、おまけに草鞋わらじ一足ねだられましたよ。早速さつそく追い出しました。あの浪人はぐでぐでに酔って、その足で扇屋へもぐずり込んで、とうとう得右衛門とくえもんさんの家に寝込んでしまったそうですよ。見たまえ、この街道筋にもえらい事がある

りませぬ。長崎の御目付おめつけがお下りで通行の日でさ。永井様ながいとかいう人の家来が、人足がおそいと言うんで、わたしの村の間屋と口論になつて、都合五人で問屋を打ちすえました。あの時は木刀が折れて、問屋の頭には四か所も疵きずができました。やり方がすべて露骨じゃありませんか。君と二人ふたりで相州の三浦へ出かけた時分さ——あのころには、まだこんなじゃありませんでしたよ。」

「お師匠さま。」

夕闇ゆうやみの中に呼ぶ少年の声と共に、村の方からやって来る提灯ちようちんが半蔵たちに近づいた。半蔵の家のは帰りにおそくなるのを心配して、弟子でしの勝重かつしげに下男の佐吉をつけ、途中まで迎えに

よこしたのだ。

山の上の宿場らしい燈火あかりが街道の両側にかがやくところに、半蔵らは馬籠の本陣に帰り着いた。家にはお民が風呂ふろを用意して、夫や兄を待ち受けているところだった。その晩は、寿平次も山登りの汗を洗い流して、半蔵の部屋へやに来てくつろいだ。

「木曾は蠅はえの多いところだが、蚊帳かやを釣つらずに暮らせるのはいい。水の清いのと、涼しいのと、そのせいだろうかねえ。」

と寿平次が兄らしく話しかけることも、お民をよろこばせた。

「お民、お母つかさんに内証で、今夜はお酒を一本つけておくれ。」

と半蔵は言った。その年になってもまだ彼は継母の前で酒をやることを遠慮している。どこまでも継母に仕えて身を慎もうとすることは、彼が少年の日からであって、努めに努めることは第二の天性のようになっていく。彼は、経験に富む父よりも、

賢い継母のおまんを恐れている。

酒のさかなには、冷豆腐、葉味、摺り生薑に青紫蘇。それに胡瓜もみ、茄子の新漬けぐらいのところ、半蔵と寿平次とは涼しい風の来る店座敷の軒近いところに、めいめい膳を控えた。「ここへ来ると思い出すなあ。あの横須賀行き半蔵さんを誘いに来て、一晚泊めていただいたのもこの部屋ですよ。」

「あの時分と見ると、江戸も変わったらしい。」

「大変わり。こないだも江戸土産を吾家へ届けてくれた飛脚がありましたね、その人の話には攘夷論が大変な勢いだそうですね。浪人は諸方に乱暴する、外国人は殺される、洋学者という洋学者は脅迫される。江戸市中の唐物店では店を壊される、実に物すごい世の中になりましたなんて、そんな話をして行きましたつけ。」

「表面だけ見れば、そういうこともあるかもしれませぬ。」

「しかし、半蔵さん、こんなに攘夷なんてことを言い出すようになったて来て——それこそ、猫も、杓子もですよ——これで君、いいでしょうかね。」

疲労を忘れる程度に盃を重ねたあとで、半蔵はちよつと座をたつて、廂ひさしから外の方に夜の街道の空をながめた。田の草取りの季節らしい稲妻のひらめきが彼の目に映った。

「半蔵さん、攘夷なんていうことは、君の話によく出る『漢からごころ』ですよ。外国を夷狄いてきの国と考えてむやみに排斥するのは、やっぱり唐土もろこしから教わったことじゃありませんか。」

「寿平次さんはなかなかえらいことを言う。」

「そりゃ君、今日の外国は昔の夷狄いてきの国とは違ちがう。貿易も、交通も、世界の大勢で、やむを得ませんさ。わたしたちはもつと

よく考えて、国を開いて行きたい。」

その時、半蔵はもとの座にかえつて、寿平次の前にすわり直した。

「あゝあゝ、変な流行だなあ。」と寿平次は言葉を継いで、やがて笑い出した。「なんぞというかと、すぐに攘夷をかつぎ出す。半蔵さん。君のお仲間は今日流行の攘夷をどう思いますかさ。」

「流行なんて、そんな寿平次さんのように軽くは考えませんよ。君だつてもこの社会の変動には悩んでいるんでしよう。良い小判はさらつて行かれる、物価は高くなる、みんなの生活は苦しくなる——これが開港の結果だとすると、こんな排外熱の起こつて来るのは無理もないじゃありませんか。」

二人が時を忘れて話し込んでいるうちに、いつのまにか夜はふけて行つた。酒はとつくにつめたくなり、井どんぶりの中の水に冷や

した豆腐も崩れた。

五

平田篤胤あつたね没後の門人らは、しきりに実行を思うころであつた。伊那いなの谷の方のだれ彼は白河家を足だまりにして、京都の公卿くげたちの間に遊説ゆうぜいを思い立つものがある。すでに出発したものである。江戸在住の平田鉄胤かねたねその人すら動きはじめたとの消息すらある。

当時は井伊大老横死のあとをうけて、老中安藤対馬守あんどうつしまのかみを幕府の中心とする時代である。だれが言い出したとも知れないような流言が伝わって来る。和学講談所（主として有職故実ゆうそくこじつを調査する所）の塙次郎はなわという学者はひそかに安藤対馬の命を奉じて

北条氏^{ほうじょう}廢帝の旧例を調査しているが、幕府方には尊王攘夷説の根源を断つために京都の主上を幽^{ゆう}し奉ろうとする大きな野心がある。こんな信じがたいほどの流言が伝わって来るころだ。当時の外国奉行堀織部^{ほりおりべ}の自殺も多くの人を驚かした。そのうわさもまた一つの流言を生んだ。安藤対馬はひそかに外国人と結託している。英国公使アールコックに自分の愛妾^{あいしやう}まで与え許している、堀織部はそれを苦諫^{くかん}しても用いられないので、刃^{やいば}に伏してその意を致^{いた}したというのだ。流言は一編の偽作の諫書にまでなつて、漢文で世に行なわれた。堀織部の自殺を憐^{あわれ}むものが続々と出て来て、手向^{たむ}けの花や線香がその墓に絶えないというほどの時だ。

だれもがこんな流言を疑い、また信じた。幕府の威信はすでに地を掃^{はら}い、人心はすでに徳川を離れて、皇室再興の時期が到

来したというような声は、血氣さか壯んな若者たちの胸を打たずには置かなかつた。

その年の八月には、半蔵は名高い水戸みとの御隠居（烈公）の薨去こうきよをも知つた。吉左衛門親子には間接な主人ながらに縁故の深い尾張藩主（徳川慶勝よしかつ）をはじめ、一橋慶喜、松平春嶽、山内容堂、その他安政大獄当時に幽屏ゆうへいせられた諸大名も追ひ追いと謹慎を解かれる日を迎えたが、そういう中であつて、あの水戸の御隠居ばかりは永蟄居えいちつきよを免ぜられたことも知らずじまいに、江戸駒込こまごめの別邸はらんで波瀾の多い生涯しょうがいを終わつた。享年六十一歳。あだかも生前の政敵井伊大老のあとを追つて、時代から沈んで行く夕日のように。

半蔵が年上の友人、中津川本陣の景蔵は、伊那にある平田同門北原稲雄の親戚しんせきで、また同門松尾多勢子たせことも縁つづきの間柄

である。この人もしばらく京都の方に出て、平田門人としての立場から多少なりとも国事に奔走したいと言つて、半蔵のところへもその相談があつた。日ごろ謙讓な性質で、名聞みやうもんを好まない景蔵のような友人ですらそうだ。こうなると半蔵もじつとしていられなかつた。

父は古い、街道も日に多事だ。本陣問屋庄屋の仕事は否いやでも応おうでも半蔵の肩にかかつて来た。その年の十月十九日の夜にはまた、馬籠の宿は十六軒ほど焼けて、半蔵の生まれた古い家も一晩のうちに灰になつた。隣家の伏見屋、本陣の新宅、皆焼け落ちた。風あたりの強い位置にある馬籠峠とは言いながら、三年のうちに二度の大火は、村としても深い打撃であつた。

翌文久元年の二月には、半蔵とお民は本陣の裏に焼け残った土蔵のなかに暮らしていた。土蔵の前にさしかけを造り、板がこいをして、急ごしらえの下竈したへつゝいを置いたところには、下女が炊事をしていた。土蔵に近く残った味噌納屋みそなやの二階の方には、吉左衛門夫妻が孫たちを連れて仮住居かりずまいしていた。二間ほど座敷があつて、かつて祖父半六が隠居所にあててあつたのもその二階だ。その辺の石段を井戸の方へ降りたところから、木小屋、米倉なぞのあるあたりへかけては、火災をまぬかれた。そこには佐吉が働いていた。

旧暦二月のことで、雪はまだ地にある。半蔵は仮の雪隠せっちんを出てから、焼け跡の方を歩いて、周囲を見回した。上段の間、奥の間、仲の間、次の間、寛くわろぎの間、店座敷、それから玄関先の広い板の間など、古い本陣の母屋もやの部屋へや部屋は影も形もない。灰

寄せの人夫が集まつて、釘や金物の類を拾つた焼け跡には、わずかに街道へ接した堀の一部だけが残つた。

さしあたりこの宿場になくてかなわないものは、会所（宿役人寄合所）だ。幸い九太夫の家は火災をまぬかれたので、仮に会所はそちらの方へ移してある。問屋場の事務も従来吉左衛門の家と九太夫の家とで半月交替に扱つて来たが、これも一時九太夫方へ移してある。すべてが仮で、わびしく、落ち着かなかつた。吉左衛門は半蔵に力を添えて、大工を呼べ、新しい母屋の絵図面を引けなどと言つて、普請工事の下相談もすでに始まりかけているところであつた。

京都にある帝の妹君、和宮内親王が時の將軍（徳川家茂）へ御降嫁とあつて、東山道御通行の触れ書が到来したのは、村ではこの大火後の取り込みの最中であつた。

宿役人一同、組頭くみがしらまでが福島はなの役所から来た触れ書を前に置いて、談し合はなわねばならないような時がやって来た。この相談には、持病せきの咳せきでこもりがちな金兵衛までが引っぱり出された。吉左衛門は味噌納屋の二階から、金兵衛は上の伏見屋かりずまいの仮住居から、いずれも仮の会所の方に集まった。その時、吉左衛門は旧ふるい友だちを見て、

「金兵衛さん、馬籠の宿でも御通行筋の絵図面を差し出せとありますよ。」

と言つて、互ひたひいに額ひたいを集めた。

本陣問屋庄屋としての仕事はこんなふうに、あとからあとからと半蔵の肩に重くかかつて来た。彼は何をさし置いても、年取つた父を助けて、西よりする和宮様の御一行をこの木曾路に迎えねばならなかつた。

第六章

一

かずのみやさま
和宮様御降嫁のことがひとたび知れ渡ると、沿道の人民の間には非常な感動をよび起こした。従来、皇室と將軍家との間に結婚の沙汰さたのあつたのは、前例のないことでもないが、種々な事情から成り立たなかつた。その実現されるようになったのは全く和宮様を初めとするという。おそらくこれは盛典としても未曾有みぞう、京都から江戸への御通行としても未曾有のことであろうと言わるる。今度の御道筋にあたる宿々村々のものがこの御通行を拝しうるといふは非常な光榮に相違なかつた。

木曾谷きそだに、下四宿しもの宿役人としては、しかしただそれだけでは済まされなかつた。彼らは一度は恐縮し、一度は当惑した。多年の経験が教えるように、この街道の輸送に役立つ御伝馬おてんまには限りがある。木曾谷中の人足を寄せ集めたところで、その数はおおよそ知れたものである。それにはどうしても伊那いな地方の村民を動かして、多数な人馬を用意し、この未曾有の大通行に備えなければならぬ。

木曾街道六十九次の宿場はもはや嘉永かえい年度の宿場ではなかつた。年老いた吉左衛門や金兵衛がいつまでも忘れかねているような天保てんぽう年度のそれではもとよりなかつた。いつまで伊那の百姓が道中奉行の言うなりになって、これほど大がかりな人馬の徴集に応ずるかどうかはすこぶる疑問であつた。

馬は四分より一疋びき出す。人足は五分より一人ひとり出す。人馬共に随分丈夫なものを出す。老年、若輩、それから弱馬などは決して出すまい。

これは伊那地方の村民総代と木曾谷にある下四宿の宿役人との間に取りかわされた文化ぶんか年度以来の契約である。馬の四分とか、人足の五分とかは、石高こくだかに応じての歩合ぶあいをさして言うことであつて、村々の人馬はその歩合によつて割り当てを命じられて来た。もつともこの歩合は天保年度になつて多少改められたが、人馬徴集の大体の方針には変わりがなかつた。

宿駅のことを知るには、このきびしい制度のあつたことを知らねばならない。これは宿駅常置の御伝馬以外に、人馬を補充し、つぎた継立てを応援するために設けられたものであつた。この制

度がいわゆる助郷すけごうだ。徳川政府の方針としては、宿駅付近の郷村にある百姓はみなこれに応ずる義務があるとしてあつた。助郷は天下の公役こうえきで、進んでそのお触れ当てに応ずべきお定めのものときかれていた。この課役を命ずるために、奉行は時に伊那地方を見分した。そして、助郷を勤めうる村々の石高を合計一万三百十一石六斗ほどに見積もり、それを各村に割り当てた。たとえば最も大きな村は千六十四石、最も小さな村は二十四石というふうに。天龍川てんりゅうがわのほとりに住む百姓三十一か村、後には六十五か村のものは、こんなふうにして彼らの鋤くわを捨て、彼らの田園を離れ、伊那から木曾への通路にあたる風越山かざこしやまの山道を越して、お触れ当てあるごとにこの労役に参加して来た。

旅行も困難な時代であるとは言いながら、参観交代さんきんこうたいの諸大名、公用を帯びた御番衆おぼんしゅうかた方なその当時の通行が、いかに大げさのもの

であつたかを忘れてはならない。徴集の命令のあるごとに、助郷を勤める村民は上下二組に分かれ、上組は木曾の野尻のじりと三留野みどのの両宿へ、下組は妻籠つまごと馬籠まごめの両宿へと出、交代に朝勤め夕勤めの義務に服して来た。もし天龍川の出水なぞで川西の村々にさしつかえの生じた時は、総助郷で出勤するという堅い取りきめであつた。徳川政府がこの伝馬制度を重くみた証拠には、直接にそれを道中奉行所の管理の下に置いたのでもわかる。奉行は各助郷に証人を兼ねるものを出勤させ、また、人馬の公用を保証するためには権威のある印鑑を造つて、それを道中宿々にも助郷加宿にも送り、紛らわしいものもあらば押え置いて早速注進さつそくせよというほどに苦心した。いかんせん、百姓としては、御通行の多い季節がちやうど農業のいそがしいころにあたる。彼らは従順で、よく忍耐した。中にはそれでも困窮のあまり、山

抜け、谷崩れ、出水なぞの口実にかこつけて、助郷不参の手段を執るような村々をさえ生じて来た。

そこへ和宮様の御通行があるという。本来なら、これは東海道經由であるべきところだが、それが模様替えになって、木曾街道の方を選ぶことになった。東海道筋はすこぶる物騒で、志士浪人が途みちに御東下を阻止するというような計画があると伝えられるからで。この際、奉行としては道中宿々と助郷加宿とに厳達し、どんな無理をしても人馬を調達させ、供奉ぐぶの面々が西から続々殺到する日に備えねばならない。徳川政府の威信の實際たに試ためさるるような日が、とうとうやって来た。

寿平次は妻籠の本陣にいた。彼はその自宅の方で、伊那の助

郷六十五か村の意向を探りに行つた扇屋得右衛門の帰りを待ち受けていた。ちようど、半蔵が妻のお民も、半年ぶりで実家のおばあさんを見るために、馬籠から着いた時だ。彼女はたまの里帰りという顔つきで、母屋の台所口から広い裏庭づたいに兄のいるところへもちよつと挨拶に来た。

「来たね。」

寿平次の挨拶は簡単だ。

そこは裏山につづいた田舎風な庭の一隅だ。寿平次は十間ばかりの矢場をそこに設け、粗末ながらに小屋を造りつけて、多忙な中に閑を見つけては弓術に余念もない。庄屋らしい袴をつけ、片肌ぬぎになって、右の手に鞆の革の紐を巻きつけた兄をそんなところに見つけるのも、お民としてはめずらしいことだった。

お民は持ち前の快活さで、

「兄さんも、のんきですね。弓なぞを始めたんですか。」

「いくらいそがしいたつて、お前、弓ぐらいひかずにいられるかい。」

寿平次は妹のしている前で、一本の矢を弦つるに当てがった。おりから雨があがつたあとの日をうけて、八寸ばかりの的まとは安土あづちの方に白く光つて見える。

「半蔵さんも元気かい。」

と妹に話しかけながら、彼は的に向かつてねらいを定めた。その時、弦を離れた矢は的をはずれたので、彼はもう一本の方を試みたが、二本とも安土あづちの砂の中へ行つてめり込んだ。

この寿平次は安土の方へ一手の矢を抜きに行つて、また妹のいるところまで引き返して来る時に言った。

「お民、馬籠のお父とつさん（吉左衛門）や、伏見屋の金兵衛さん

の退役願いはどうなつた。」

「あの話は兄さん、おきき届けになりませんよ。」

「ほう。退役きき届けがたしか。いや、そういうこともあるう。」

多事な街道のことも思い合わされて、寿平次はうなずいた。

「お民、お前も骨休めだ。まあ二、三日、妻籠で寝て行くさ。」

「兄さんの言うこと。」

兄妹きょうだいがこんな話をしているところへ、つかつかと庭を回つて

伊那から帰つたばかりの顔を見せたのは、日ごろ勝手を知つた得

右衛門である。伊那でも有力な助郷総代を島田村や山村たずに訪ね

るのに、得右衛門はその適任者であるばかりでなく、妻籠脇本陣わきほんじん

の主人として、また、年寄役の一人ひとりとして、寿平次の父が早く

亡なくなつてからは何かにつけて彼の後見役こうけんやくとなつて来たのもこ

の得右衛門である。得右衛門の家で造り酒屋をしているのも、

馬籠の伏見屋によく似ていた。

寿平次はお民に目くばせして、そこを避けさせ、母屋もやの方へ庭を回って行く妹を見送った。小屋の荒い壁には弓をたてかけるところもある。彼は鞆ゆがけの紐ひもを解いて、その隠れた静かな場所に気の置けない得右衛門を迎えた。

得右衛門の報告は、寿平次が心配して待っていたとおりでつた。伊那助郷が木曾にある下四宿の宿役人を通し、あるいは直接に奉行所にあてて愁訴を企てたのは、その日に始まったことでもない。三十一か村の助郷を六十五か村で分担するようになってたのも、実は愁訴の結果であった。ずっと以前の例によると、助郷を勤める村々は五か年を平均して、人足だけでも一か年の石高こくだか百石につき、十七人二分三厘三毛ほどに当たる。しかしこれは天保年度のこと、助郷の負担は次第に重くなって来てい

る。ことに、黒船の渡つて来た嘉永年代からは、諸大名公役らが通行もしげく、そのたびに徴集されて嶮岨けんそな木曾路を往復することであるから、自然と人馬も疲れ、病人や死亡者を生じ、つぎた継立てにもさしつかえるような村々が出て来た。いつたい、助郷人足が宿場の勤めは一日であつても、山を越して行くには前の日に村方を出て、その晩に宿場に着き、翌日勤め、継ぎ場の遠いところへ継ぎ送つて宿場へ帰ると、どうしてもその晩は村方へ帰りがたい。一日の勤めに前後三日、どうかすると四日を費やし、あまつさえ泊まりの食物の入費も多く、折り返し使わるる途中で小遣銭こづかいせんもかかり、その日に取つた人馬賃銭はいくらも残らない。ことさら遠い村方ではこの労役に堪たえがたく、問屋とも相談の上でお触れ当ての人馬を代銭で差し出すとなると、この夫銭おふせんがまたおびただしい高に上る。村々の痛みは一通りで

はない。なかなか宿駅常備の御伝馬ぐらいではおびただしい入用に不足するところから、助郷村々では人馬を多く差し出し、その勤めも続かなくなつて来た。おまけに、諸色しよしきは高く、農業にはおくれ、女や老人任せで田畠たはたも荒れるばかり。こんなことで、どうして百姓の立つ瀬があろう。なんとかして村民の立ち行くように、宿方の役人たちにもよく考えて見てもらわないことには、助郷総代としても一同の不平をなだめる言葉がない。今度という今度は、容易うけじように請状も出しかねるといふのが助郷側の言い分である。

「いや、大おおやかまし。」と得右衛門は言葉をついだ。「そこをわたしがよく説き聞かせて、なんとかして皆の顔を立てる、お前たちばかりに働かしちや置かない。奉行所に願つて、助郷を勤める村数を増すことにする。それに尾州藩だつてこんな場合に

黙つて見ちやいまい。その方からお手当ても出よう。こんな御通行は二度とはあるまいから、と言いましたところが、それじゃ村々のものを集めてよく相談して見ようと先方でも折れて出ましてね、そんな約束でわたしも別れて来ましたよ。」

「そいつはお骨折りでした。早速、奉行所あての願書を作ろうじゃありませんか。野尻のじり、三留野みどの、妻籠つまご、馬籠まごめ、これだけの庄屋連名で出すことにしましょう。たぶん、半蔵さんもこれに賛成だろうと思います。」

「そうなさるがいい。今度わたしも伊那へ行つて、つくづくそう思いました。徳川様の御威光というだけでは、百姓も言うことをきかなくなつて来ましたよ。」

「そりや得右衛門さん、おそい。いったい、諸大名の行列はもつと省いてもいいものでしょう。そうすれば、助郷も助かる。参

觀交代などはもう時世おくれだなんて言う人もありますよ。」

「こういう庄屋が出て来るんですからねえ。」

その時、寿平次は「今一手」と言いたげに、小屋の壁にたてかけた弓を取りあげて、弦つるに松脂まつやにを塗っていた。それを見ると、

得右衛門も思い出したように、

「伊那の方でもこれが大流行おおはやり。武士が刀を質に入れて、庄屋の

衆が弓をはじめめるか。世の中も変わりましたね。」

「得右衛門さんはそう言うけれど、わたしはもつとからだを鍛えることを思いつきましたよ。ごらんなさい、こう乱脈な世の中になつて来ては、蛮勇をふるい起こす必要がありますね。」

寿平次は胸を張り、両手を高くさし延べながら、的に向かつて深く息を吸い入れた。左手ゆんでの弓を押す力と、右手めての弦をひき絞る力とで、見る見る血潮は彼の頬ほおに上り、腕の筋肉までが隆

起して震えた。背こそ低いが、彼ももはや三十歳のさかりだ。馬籠の半蔵と競い合つて、木曾の「山猿」やまざるを發揮しようという年ごろだ。そのそばに立っていて、混ぜ返すような声をかけるのは、寿平次から見れば小父おじさんのような得右衛門である。

「ポツン。」

「そうはいかない。」

とりあえず寿平次らは願書の草稿を作りにかかった。第一、伊那方面は当分たりとも増助郷ましすけごうにして、この急場を救い、あわせて百姓の負担を軽くしたい。次ぎに、御伝馬宿々つぎたについては今回の御下向ごげこうのため人馬の継立つぎたて方も嵩かさむから、その手当てとして一宿へ金百両ずつを貸し渡されるよう。ただし十か年賦に

して返納する。当時米穀も払底で、御伝馬を勤めるものは皆難渋の際であるから、右百両の金子きんすで、米、稗ひえ、大豆だいずを買い入れ、人馬役のものへ割り渡したい。一か宿、米五十駄だ、稗ひえ五十駄だずつの御救助を仰ぎたい。願書の主意はこれらのことに尽きていた。

下書きはできた。やがて、下四宿の宿役人は妻籠本陣に寄り合うことになった。馬籠からは年寄役金兵衛の名代として、養子伊之助が来た。寿平次、得右衛門、得右衛門が養子じつぞうの実蔵もそれに列席した。

「当分の増助郷ましすけごうは至極しじくもつともだとは思いますが、これが前例になつたらどんなものでしょう。」

「さあ、こんな御通行はもう二度とはありますまいからね。」
宿役人の間にはいろいろな意見が出た。その時、得右衛門は

伊那の助郷総代の意向を伝え、こんな願書を差し出すのもやむを得ないと述べ、前途のことまで心配している場合でないと力説した。

「どうです、願書はこれでいいとしようじゃありませんか。」

と伊之助が言い出して、各庄屋の調印を求めようということになった。

二

例のように寿平次は弓を手にして、裏庭の矢場に隠れていた。彼の胸には木曾福島かづのみやさまの役所から来た回状のことが繰り返されてきた。それは和宮様かづのみやさまの御通行みとおぎに関係はないが、当時諸国にやかましくなつた神葬祭しんそうさいの一条で、役所からその賛否の問い合わせ

が来たからで。

しかし、「うん、神葬祭か」では、寿平次も済まされなかつた。早い話が、義理ある兄弟きょうだいの半蔵は平田門人の一人ひとりであり、この神葬祭の一条は平田派の国学者が起こした復古運動の一つであるらしいのだから。

「おれは、てつきり国学者の運動とにらんだ。ほんとに、あのお仲間は何をやり出すかわからん。」

砂を盛り上げる的を置いた安土あづちのところと、十間けんばかりの距離にある小屋との間を往復しながら、寿平次はひとり考えた。

同時代に満足しないということにかけては、寿平次とても半蔵に劣らなかつた。しかし人間の信仰と風俗習慣とに密接な関係のある葬祭のことを寺院から取り戻もどして、それを白紙に改めよとなると、寿平次は腕を組んでしまう。これは水戸の廃仏はいぶつ毀釈きしやく

に一步を進めたもので、言わば一種の宗教改革である。古代復
帰を夢みる国学者仲間がこれほどの熱情を抱いて来たことすら、
彼には実に不思議でならなかった。彼はひとり言つて見た。

「まあ、神葬祭などは疑問だ。復古というようなことが、はた
して今の時世に行なわれるものかどうかも疑問だ。どうも平田
派のお仲間のする事には、何か矛盾がある。」

まだ妹のお民が家に逗留とまりゆしていたので、寿平次は弓の道具を
取りかたづけ、的もはずし、やがてそれをさげながら、自分の
妻のお里さとや妹のいる方へ行つて一緒にならうとした。裏庭から
母屋もやの方へ引き返して行くと、店座敷のわきの板の間から、機はた
を織る箴おさの音が聞こえて来ている。

寿平次の家も妻籠の御城山おしろやまのように古い。土地の言い伝えにも毎月三八の日には村市むらいちが立ったという昔の時代から続いて来ている青山の家だ。この家にふさわしいものの一つは、今のおばあさん（寿平次兄妹きょうだいの祖母）が嫁に来る前からあったというほど古めかしく錆び黒さびずんだ機はたの道具だ。深い窓に住むほど女らしいとされていたころのことで、お里やお民はその機はたの置いてあるところに集まって、近づいて来る御通行のおうわさをしたり、十四代將軍（徳川家茂いえもち）の御台所みだいどころとして降嫁せらるるといふ和宮様はどんな美しいかただらうなぞと語り合ったりしているところだった。

いくらからでも街道の閑ひまな時を見て、手仕事を楽しもうとするこの女たちの世界は、寿平次の目にも楽しかった。織り手のお里は機に腰掛けている。お民はそのそばおなにいて同年齡としの嫂あによめが

することをしている。周囲には、小娘のお糸くめも母親のお民に連れられて馬籠の方から来ていて、手鞠てまりの遊びなぞに余念もない。おばあさんはおばあさんで、すこしもじつとしていられないというふうで、あれもこしらえてお民に食わせたい、これも食わせたいと言いながら、何かにつけて孫が里帰りの日を楽しく送らせようとしている。

その時、お民は兄の方を見て言った。

「兄さんは弓にばかり凝ってるッて、おばあさんがコボしていただきますよ。」

「おばあさんじゃないんだらう。お前たちがそんなことを言っているんだらう。おれもどうかしていると思えて、きょうの矢は一本も当たらない。そう言えば、半蔵さんは弓でも始めないかなあ。」

「吾夫^{うち}じゃ暇^{ひま}さえあれば本^{ほん}を読^よんだり、お弟子^{でし}を教^{おし}えたりしですよ、男^{おとこ}のかたもいろいろですなえ。兄^{あに}さんは私^{わたし}たちの帯^{おビ}の世話^{せわ}までお焼^やきなさる方^{かた}でしょう。吾夫^{うち}と来^きたら、わたしが何^{なに}を着^きていたつて、知^しりやしません。」

「半蔵^{はんざう}さんはそういう人^{ひと}らしい。」

割^{わり}合^あいに無^な口^{くち}なお里^りは織^おりか^かけた田舎^{いなか}縞^{かじま}の糸^{いと}をしらべながら、

この兄^{あに}妹^{いもうと}の話^{わたり}に耳^{みみ}を傾^{かたむ}けていた。お民^{たみ}は思^{おも}い出^でしたように、

「どれ、姉^{あね}さん、わたしにもすこし織^おらせて。この機^{はた}を見^みると、わたしは娘^{むすめ}の時^{とき}分^{ぶん}が恋^こしくてなりませんよ。」

「でも、お民^{たみ}さんはそんなこと^{こと}をしていいんですか。」

とお里^りに言^いわれて、お民^{たみ}は思^{おも}わず顔^{かほ}を紅^{あか}らめた。とかく多^{おほ}病^{びょう}で子^こ供^{ども}のないのをさみし^{しみ}しそうにしているお里^りに比^ひべると、お民^{たみ}の方は肥^{ふと}つて、若^{わか}い母^{はは}親^{おや}らしい肉^{にく}づきを見^みせている。

「兄さんには、おわかりでしょう。」とお民はまた顔を染めながら言った。「わたしもからだの都合で、またしばらく妻籠へは来られないかもしれせん。」

「お前たちはいいよ。結婚生活が順調に行つてゐる証拠だよ。おれのところをごらん、おれが悪いのか、お里が悪いのか、そこはわからないがね、六年にもなつてまだ子供がない。おれはお前たちがうらやましい。」

そこへおばあさんが来た。おばあさんは木曾の山の中にめずらしい横浜土産みやげを置いて行つた人があると言つて、それをお民のいるところへ取り出して来て見せた。

「これだよ。これはお洗濯せんたくする時に使うものだそうだが、使い方はこれをくれた人にもよくわからない。あんまり美しいものだから横浜の異人屋敷から買って来たと言つて、飯田いいたの商人が

土産に置いて行つたよ。」

石鹼せっけんという言葉もまだなかつたほどの時だ。くれる飯田の商人も、もらう妻籠のおばあさんも、シャボンという名さえ知らなかつた。おばあさんが紙の包みをあけて見せたものは、異国の花の形にできていて、薄桃色と白とある。

「御覧、よい香気においだこと。」

とおばあさんに言われて、お民は目を細くしたが、第一その香気においに驚かされた。

「お糸くめ、お前もかいでござらん。」

お民がその白い方を女の子の鼻の先へ持つて行くと、お糸はそれを奪い取るようにして、いきなり自分の口のところへ持つて行こうとした。

「これは食べるものじゃないよ。」とお民はあわてて、娘の手を

放させた。「まあ、この子は、お菓子と間違えてさ。」

新しい異国の香気においは、そこにいるだれよりも寿平次の心を誘つた。めずらしい花の形、横に浮き出している精巧なローマ文字——それはよく江戸土産みやげにもらう錦絵にしきえや雪駄せつたなどの純日本のものにない美しさだ。実に偶然なことから、寿平次は西洋ぎらいでもなくなつた。古銭しゅうしゅうを蒐集あひがんすることの好きな彼は、異国の銀貨を手に入れて、人知れずそれを愛翫するうちに、そんな古銭にまじる銀貨から西洋というものを想像するようになった。しかし彼はその事をだれにも隠している。

「これはどうして使うものだろうねえ。」とおばあさんはまたお民に言つて見せた。「なんでも水に溶かすという話を聞いたから、わたしは一つ煮て見ましたよ。これが、お前、ぐるぐる鍋なべの中で回つて、そのうちに溶けてしまったよ。棒でかき回して

見たら、すっかり泡あわになつてさ。なんだかわたしは気味が悪くなつて、鍋ぐるみ土の中へ埋めさせましたよ。ひよつとすると、これはお洗濯せんたくするものじゃないかもしれないね。」

「でも、わたしは初めてこんなものを見ました。おばあさんに一つ分けていただいて、馬籠の方へも持つて行つて見せましよう。」

とお民が言う。

「そいつは、よした方がいい。」

寿平次は兄らしい調子で妹を押しとどめた。

文久元年の六月を迎えるころで、さかんな排外熱は全国の人あおの心を煽り立てるばかりであつた。その年の五月には水戸藩浪士らによつて、江戸高輪東禅寺たかなわとうぜんじにあるイギリス公使館の襲撃さえ行なわれたとの報知しらせもある。その時、水戸側で三人は鬪死し、

ひとり一人は縛に就き、三人は品川で自刃したという。東禅寺の衛兵で死傷するものが十四人もあり、一人の書記と長崎領事とは傷ついたともいう。これほど攘夷じやういの声も険しくなつて来ている。どうして飯田の商人がくれた横浜土産の一つでも、うっかり家の外へは持ち出せなかつた。

お民が馬籠をさして帰つて行く日には、寿平次も半蔵の父に用事があると言つて、妹を送りながら一緒に行くことになつた。彼には伊那助郷いなすけごうの願書の件で、吉左衛門の調印を求める必要があつた。野尻のじり、三留野みどのはすでに調印を終わり、残るところは馬籠の庄屋のみとなつたからで。

ちようど馬籠の本陣からは、下男の佐吉がお民を迎えに来た。

佐吉はお糸くめを背中へのせ、後ろ手に幼いものを守るようにして、足の弱い女の子は自分が引き受けたという顔つきだ。お民もしたくができた。そこで出かけた。

「寿平次さま、横須賀行きを思い出すなし。」

足掛け四年前の旅は、佐吉にも忘れられなかつたのだ。

寿平次が村のあるところは、大河の流れに近く、静母しずも、蘭あたらぎの森林地帯に倚より、木曾の山中でも最も美しい谷の一つである。

馬籠の方へ行くにはこの谷の入り口を後ろに見て、街道に沿いながら二里ばかりの峠を上る。めつたに家を離れることのないお民が、兄と共に踏んで行くことを楽しみにするも、この山道だ。街道の両側は夏の日の林で、その奥は山また山だ。木曾山一帯を支配する尾張藩おわりはんの役人が森林保護の目的で、禁止林の盗伐を監視する白木しらぎの番所も、妻籠と馬籠の間に隠れている。

午後の涼しい片影ができるころに、寿平次らは復興最中の馬籠にはいった。どつちを向いても火災後の宿場らしく、新築の工事は行く先に始まりかけている。そこに積み重ねた材木がある。ここに木を挽く音が聞こえる。寿平次らは本陣の焼け跡まで行つて、そこに働いている吉左衛門と半蔵とを見つけた。小屋掛けをした普請場の木の香の中に。

半蔵は寿平次に伴われて来た妻子をよろこび迎えた。会所の新築ができ上がったことをも寿平次に告げて、本陣の焼け跡のいちぐう一隅に、以前と同じ街道に添うた位置に建てられた瓦葺かわらぶきの家をさして見せた。会所となえる宿役人の詰め所、それに問屋場といやばなどの新しい建物は、何よりもまずこの宿場になくてならないものだった。

寿平次は半蔵の前に立つて、あたりを見回しながら言った。

「よくそれでもこれだけに工事のしたくができたと思う。」

「みんな一生懸命になりましたからね。ここまでこぎつけたのも、そのおかげだと思いますね。」

吉左衛門はこの二人ふたりの話を引き取って、「三年のうちに二度

も大火が来てごらん、たいていの村はまいってしまふ。まあ、

吾家うちでも先月の三日に建前たてまえの手斧始めちゆうなはじをしたが、これで石場搗いしばづ

きのできるのは二百十日あたりになろう。和宮かずのみやさまの御通行ま

では間に合いそうもない。」

その時、寿平次が助郷願書の件で調印を求めに来たことを告げると、半蔵は「まあ、そこへ腰掛けるさ。」と言って、自分でも普請場の材木に腰掛ける。お民はそのそばを通り過ぎて、裏の立ち退き場所のにいる姑しゆうとめ（おまん）の方へと急いだ。

「寿平次さん、君はよいことをしてくれた。助郷のことは隣の

伊之助さんからも聞きましたよ。阿爺おやじはもとより賛成です。」と半蔵が言う。

「さあ、これから先、助郷もどうなろう。」と吉左衛門も案じ顔に、「これが大問題だぞ。先月の二十二日、大坂のお目付めつけがお下りという時には、伊那の助郷が二百人出た。例幣使（日光への定例の勅使）の時のことを考えてごらん。あれは四月の六日だ。四百人も人足を出せと言われるのに、伊那からはだれも出て来ない。」

「結局、助郷というものは今のままじゃ無理でしょう。」と半蔵は言う。「宿場はんじょうさえ繁昌すればいいなんて、そんなはずのものじゃないでしょう。なんとかして街道付近の百姓が成り立つようにも考えてやらなければりやうそですね。」

「そりや馬籠じゃできるだけその方針でやって来たがね。結局、

東海道あたりと同じように、定助郷じょうすけじょうにでもするんだが、こいつがまた容易じゃあるまいて。」と吉左衛門が言つて見せる。

「いつたい、」と寿平次もその話を引き取つて、「二百人の、四百人のツて、そう多勢の人足を通行のたびに出せと言うのが無理ですよ。」

「ですから、諸大名や公役の通行をもつと簡略にするんですね。」と半蔵が言葉をはさんだ。

「だんだんこういう時世になつて来た。」と吉左衛門は感じ深そうに言つた。「おれの思うには、参観交代さんきんこうたいといふことも今にどうかなるだろうよ。こう御通行が頻繁ひんぱんにあるようになって、第一それは諸藩の財政が許すまい。」

しかし、その結果は。六十三年の年功を積んだ庄屋吉左衛門にも、それから先のことはなんとも言えなかつた。その時、吉

左衛門は普請場の仕事にすこし疲れが出たというふうで、「まあ、寿平次さん、調印もしましようし、お話も聞きましたように、裏の二階へ来てください。おまんにもあつてやつてください。」と言つて誘つた。

隠れたところに働く家族のさまが、この普請場の奥にひらけていた。味噌納屋の前には襷たすきがけ手ぬぐいかぶりで、下女たちを相手に、見た目もすずししような新茄子しんなすを漬けるおまんがいる。そのそばには二番目の宗太を抱いてやるお民がいる。おまんが漬け物桶おけの板の上で、茄子の帯へたを切つて与えろと、孫のお糸は早速さつそくそれを両足の親指のところにはきんで、茄子の帯へたを馬にして歩き戯れる。裏の木小屋の方からは、梅の実の色づいたのもいで来て、それをお糸や宗太に分けてくれる佐吉もいる。

「お父さんとつ、あなたの退役願いはまだおきき届けにならないそうですね。」

「そうさ。退役き届けがたしき。」

寿平次は吉左衛門のことを「お父さんとつ」と呼んでいる。その日の夕飯後のことで、一緒に食事した半蔵はちよつと会所の方へ行つて来ると言つて、父のそばにいなかった時だ。

「寿平次さん、」と吉左衛門は笑いながら言つた。「吾家うちへはそ

の事でわざわざ公役が見えましてね、金兵衛さんと私を前に置いて、いろいろお話がありました。二人ふたりとも、せめてもう二、三年は勤めて、役を精出せいだせ、そう言われて、願書をお下げになりました。金兵衛さんなどは、ありがたく畏れ奉おそつて、引き下がつて来たなんて、あとでその話が出ましたつけ。」

そこは味噌納屋の二階だ。大火以来、吉左衛門夫婦が孫を連れかりずまいて仮住居しているところだ。寿平次はその遠慮から、夕飯のちそう馳走になった礼を述べ、同じ焼け出された仲間でも上の伏見屋というもののある金兵衛の仮宅の方へ行つて泊めてもらおうとした。

「どうもまだわたしも、お年貢ねんぐの納め時どきが来ないと見えますよ。」
と言いながら、吉左衛門は梯子段はしごだんの下まで寿平次を送りに降りました。夕方の空に光を放つ星のすがたを見つけて、それを何かの暗示に結びつけるように、寿平次にさして見せた。

ほうきぼし「箒星ですよ。うまどし午年に北の方へ出たのも、あのとおりでしたよ。どうも年回りがよくないと見える。」

この吉左衛門の言葉を聞き捨てて、寿平次は味噌納屋の前から同じ屋敷つづきの暗い石段を上った。月はまだ出なかつたが、

星があつて涼しい。例の新築された会所のそばを通り過ぎようとする、表には板庇いたびきがあつて、入り口の障子しょうじも明いている。寿平次は足をとめて、思わずハツとした。

「どうも半蔵さんばかりじゃなく、伊之助さんまでが賛成だとは意外だ。」

「でも結果から見て悪いと知ったことは、改めるのが至当ですよ。」

こんな声が手に取るように聞こえる。宿役人の詰め所には人が集まると見えて、灯ひがもれている。何かがそこで言い争われている。

「そんなことで、先祖以来の祭り事を改めるといふ理由にはありませんよ。」

「しかし、人の心を改めるには、どうしてもその源みなもとから改めて

かからんことにはだめだと思えますね。」

「それは理屈だ。」

「そんなら、六十九人も破戒僧が珠数じゆずつなぎにされて、江戸の吉原よしわらや、深川ふかがわや、品川しんじゆく新宿のようなどころへ出入りではいするとうかどで、あの日本橋で面かおを晒さらされた上に、一か寺の住職は島流しになるし、所化しよけの坊主は寺法によつて罰せられたというの
は。」

神葬祭の一条に関する賛否の意見がそこに戦わされているのだ。賛成者は半蔵や伊之助のような若手で、不賛成を唱えるのは馬籠の問屋九太夫らしい。

「お寺とさえ言えば、むやみとありがたいところのように思つて、昔からたくさんな土地を寄付したり、先祖の位牌いはいを任せたり、宗門帳まで預けたりして、その結果はすこしも措おいて問わ

ないんです。」とは半蔵の声だ。

「これは聞きものだ。」九太夫の声で。

半蔵の意見にも相応の理由はある。彼に言わせると、あの聖徳太子が仏教をさかんに弘ひろめたもうてからは、代々の帝みかどがみな法師を尊信し、大寺だいじ大伽藍だいがらんを建てさせ、天下の財用を尽くして御信心あつが篤あつかつたが、しかし法師の方でその本分を尽くしてこれほどの国家の厚意に報いたとは見えない。あまつさえ、後には山法師などという手合ひえいが日吉七社の神輿みこしをかつぎ出して京都の市中を騒がし、あるいは大寺と大寺とが戦争して人を殺したり火を放つたりしたことは数え切れないほどある。平安期以来の皇族公卿くげたちは多く仏門に帰依きえせられ、出世間しゅつせけんの道を願わね、ただただこの世を悲しまれるばかりであつたから、救いのない人の心は次第に皇室を離れて、ことごとく武士の威力の前

に屈服するようになった。今はこの国に仏寺も多く、御朱印ごしゅいんと
いい諸大名の寄付と云つて、寺領となつてゐる土地も広大なも
のだ。そこに住む出家、比丘尼びくに、だいこく、所化しよけ、男色の美少
年、その他青侍あおざむらいにいたるまで、田畑を耕すこともなくて上白じょうはくの
飯を食い、糸を採り機はたを織ることもなくてよい衣裳いしやうを着る。諸
国の百姓ひやくしやうがどんなに困窮しても、寺納を減らして貧民を救おう
と思う和尚おしやうはない。凶年などには別して多く米錢を集めて寺を
富まそうとする。百姓に餓死するものはあつても、餓死した僧
のあつたと聞いたためしはない。長い習慣はおそろしいもので、
全国を通じたら何百万からのそれらの人たちが寺院に遊食して
いても、あたりまえのことのように思われて来た。これはあま
りに多くを許し過ぎた結果である。そこで、祭葬のことを寺院
から取り戻もどして、古式に復したら、もつとみんなの目もさめよ

うと言うのである。

「今日こんにちほど宗教の濁にごつてしまった時代もめずらしい。」とまた半蔵の声で、「まあ、諸国の神宮寺じんぐうじなぞをのぞいてごらんさない。本地垂跡ほんじすいじやくなぞということが唱えられてから、この国の神は大日如来だいにちにやらいや阿弥陀如来あみだにやらいの化身けしんだとされていきますよ。神仏はこんなに混淆こんこうされてしまった。」

「あなたがたはまだ若いな。」と九太夫の言う。「そりや権現ごんげんさまもあり、妙見みょうけんさまもあり、金毘羅こんびらさまもある。神さまだか、仏さまだかわからないようなところは、いくらだつてある。あらたかでありさえすれば、それでいいじゃありませんか。」

「ところが、わたしどもはそうは思わないんです。これが末世まつせの証拠だと思ふんです。金胎こんたい両部りやうぶなぞの教えになると、實際じつじひどい。仏の力にすぎることによつて、はじめてこの国の神も救

われると説くじゃありませんか。あれは実に神の冒流ぼうりゅうというものです。どうしてみんなは、こう平気でいられるのか。話はすこし違いますが、嘉永六年に異国の船が初めて押し寄せて来た時は、わたしの二十三とじの歳でした。しかしあれを初めての黒船と思つたのは間違いでした。考えて見ると遠い昔から何艘なんそうの黒船がこの国に着いたかしのれない。まあ、わたしどもに言わせるでんぎょうと、伝教でも、空海くわいかいでも——みんな、黒船ですよ。」

「どうも本陣の跡継ぎともあろうものが、こつこつ議論ぎろんをする。そんなら、わたしは上の伏見屋へ行つて聞いて見る。金兵衛さんはわたしの味方だ。お寺の世話をよくして来たのも、あのんだ。よろしいか、これだけのことは忘れないでくださいよ——馬籠の万福寺は、あなたの家の御先祖の青山道齋が建立したものですよ。」

この九太夫は、平素自分から、「馬籠の九太夫、贄川にえがわの権太夫ごんだゆう」
と言つて、太夫を名のるものは木曾十一宿に二人しかないとい
うほどの太夫自慢だ。それに本来なら、吉左衛門の家が今度の
和宮様のお小休み所にあてられるところだが、それが普請中と
あつて、問屋分担の九太夫の家に振り向けられたというだけで
も鼻息が荒い。

思わず寿平次は半蔵の声を聞いて、神葬祭の一条が平田篤胤あつたね
没後の諸門人から出た改革意見であることを知つた。彼は会所
の周囲を往いつたり来たりして、そこを立ち去りかねていた。

その晩、お民は裏の土蔵の方で、夫の帰りを待っていた。山
家にはめずらしく蒸し暑い晩で、両親が寝泊まりする味噌納屋

の二階の方でもまだ雨戸が明いていた。

「あなた、大変おそかったじゃありませんか。」

と言いながら、お民は会所の方からぶらりと戻もどつて来た夫を

土蔵の入り口のところに迎えた。火災後の仮住居かりずまいで、二人ある

子供のうち姉のお糸は納屋の二階の方へ寝に行き、弟の宗太だ

けがそこによく眠っている。子供の枕まくらもとは昔風な行燈あんどんなぞ

も置いてある。お民は用意して待っていた山家風なネブ茶に湯

をついだ。それを夫にすすめた。

その時、半蔵は子供の寝顔をちよつとのぞきに行つたあとで、

熱いネブ茶に咽喉のどをうるおしながら言った。「なに、神葬祭のこ

とで、すこしばかり九太夫さんとやり合つた。壁をたたくもの

は手が痛いぐらいはおれも承知してるが、あんまり九太夫さん

がわからないから。あの人は大変な立腹で、福島へ出張して申

し開きをするなんて、そう言つて、金兵衛さんのところへ出かけて行つたよ。でも、伊之助さんがそばにいて、おれの加勢をしてくれたのは、ありがたかつた。あの人は頼もしいぞ。」

一年のうちの最も短い夜はふけやすいころだつた。お民の懐妊はまだ目だつほどでもなかつたが、それでもからだをだるそうにして、夫より先に宗太のそばへ横になりに行つた。妻にも知らせまいとするその晩の半蔵が興奮は容易に去らない。彼は土蔵の入り口に近くいて、石段の前の柿かきの木から通つて来る夜風を楽しみながらひとり起きていた。そのうちに、お民も眠りがたいかして、寝衣ねまきのままでもた夫のそばへ来た。

「お民、お前はもつとからだをだいじにしなくてもいいのかい。」

「妻籠つまごでもそんなことを言われて来ましたつけ。」

「そう言えば、妻籠ではどんな話が出たね。」

「馬籠のお父とつさんと半蔵さんとは、よい親子ですつて。」

「そうかなあ。」

「兄さんも、わたしも、親には早く別れましたからね。」

「何かい。神葬祭の話は出なかつたかい。」

「わたしは何も聞きません。兄さんがこんなことは言っていますよ——半蔵さんも夢の多い人ですつて。」

「へえ、おれは自分じゃ、夢がすくなき過ぎると思うんだが——夢のない人の生涯しやうがいほど味気あじきないものはない、とおれは思うんだが。」

「ねえ、あなたが中津川の香蔵さんと話すのをそばで聞いていますと、吾家うちの兄さんと話すのとは違いますねえ。」

「そりゃ、お前、香蔵さんとおれとは同じだもの。そこへ行くと寿平次さんの方は、おれの内部なにいろいなものを見つけて

くれる。おれはお前の兄さんの顔を見ていると、何か言つて見たくなるよ。」

「あなたは兄さんがきらいですか。」

「どうしてお前はそんなことを言うんだい。寿平次さんとおれとは、同じように古い青山の家に生まれて来た人間さ。立場は違うかもしれないが、やつぱり兄弟きょうだいは兄弟だよ。」

半蔵はお民のからだを心配して床につかせ、自分でも休もうとして、いったんは妻子のそばに横になつて見た。眠りがたいままに、また起き出して入り口の戸をあけて見ると、東南の方角にあたる暗い空は下の方から黄ばんだ色にすこしずつ明るくなつて来て、深夜の感じを与える。

遠い先祖代々の位牌いはい、青山家の古い墓地、それらのものを預けしやううんおしやうてある馬籠の寺のことから、そこに黙つて働いている松雲和尚

のことがしきりに半蔵には問題の人になつて来た。彼はあの万福寺の新住職として松雲を村はずれの新茶屋に迎えた日のことを思い出した。あれは雨のふる日で、六年の長い月日を行脚の旅に送つて来た松雲が笠も草鞋もぬれながら、西からあの峠に着いた時であつたことを思い出した。あのころは彼もまだ若かつたが、すでに平田派の国学にころざしていて、中世以来学問・道徳の権威としてこの国に臨んで来た漢学び風の因習からも、仏の道で教えるような物の見方からも離れよということを深く心に銘ずるころであつたから、新たに迎える住職のことを想像し、その住職の尊信する宗教のことを想像し、その人にも、その人の信仰にも、行く行くは反対を見いだすかもしれないような、ある予感に打たれずにはいられなかつたことを思い出した。とうとう、その日がやつて来たのだ。もつとも、廃仏を意味す

る神葬祭の一条は福島の役所からの諮問案で、各村の意見を求める程度にまでしか進んでいなかったが。

いつのまにか暗い空が夏の夜の感じに澄んで来た。青白い静かな光は土蔵の前の冷たい石段の上にまでさし入つて来た。ひとり起きている彼の膝ひざの上まで照らすようになった。次第に、月も上つた。

八百千年やおちとせありこしことも諸人もろびとの悪あしとし知らば改めてまし

まがごととみそなはせなば事ことに直毘なおびの御神直みかみしたびて

な

眼めのまへに始はじむることもよくしあらば六惑まどふこともなくなすべ

かりけり

正道まさみちに入り立たつ徒ともよおほかたのほまれそしりはものならな

くに

半蔵の述懐だ。

三

旧暦九月も末になつて、馬籠峠へは小鳥の来るころになつた。もはや和宮様お迎えの同勢が関東から京都の方へ向けて、毎日のようにこの街道を通る。そうになると、定例の人足だけではつぎたでも行き届かない。道中奉行所の小笠原美濃守は公役としてすでに宿々の見分に來た。

十月にはいつてからは、御通行準備のために奔走する人たちが一層半蔵の目につくようになった。尾州方びしゅうかたの役人は美濃路から急いで來る。上松あげまつの庄屋は中津川へ行く。早駕籠はやかごで、夜中に馬籠へ着くものすらある。尾州の領分からは、千人もの人足が隣

宿美濃落合おちあいのお継つぎ所しよ（継立ての場所）へ詰めることになつて、ひどい吹き降りぶりの中を人馬共にあの峠の下へ着いたとの報知しらもある。

「半蔵、どうも人足や馬が足りそうもない。おれはこれから中津川へ打ち合わせに行つて、それから京都まで出かけて行つて来るよ。」

「お父とつさん、大丈夫ですかね。」

親子はこんな言葉をかわした。道中奉行所から渡された御印書によつて、越後えちご越中えつちゆうの方面からも六十六万石の高に相当する人足がこの御通行筋へ加勢に来ることになつたが、よく調べて見ると、それでも足りそうもないと言う父の話は半蔵を驚かした。

「美濃の方じゃ、お前、伊勢路いせじからも人足を許されて、もう触

れ当てに出かけたものもあるというよ。美濃の鵜沼宿うぬましゆくから信州本山もとやままで、どうしても人足は通しにするよりほかに方法がない。

おれは京都まで御奉行様のあとを追って行つて、それをお願いして来る。おれも今度は最後の御奉公のつもりだよ。」

この年老いた父の奮発が、半蔵にはひどく案じられてならなかつた。そうかと言つて、彼が父に代わられる場合でもない。街道には街道で、彼を待つてゐる仕事も多かつた。その時、継母のおまんも父のそばに来て、

「あなたも御苦労さまです。ほんとに、万事大騒動になりましたよ。」

と案じ顔に言つていた。

吉左衛門はなかなかの元気だつた。六十三歳の老体とは言いながら、いざと言えばそばにいるものがびつくりするような大

きな声で、

「オイ、駕籠だ。」

と人と呼ぶほどの気力を見せた。

宮様お迎え御同勢の通行で、にぎわしい街道の混雑はもはや九日あまりも続いた。伊那いなの百姓は自分らの要求がいれられたという顔つきで、二十五人ほどずつ一組になって、すでに馬籠へも働きに入り込んで来た。やかましい増助郷ましすけごうの問題のあとだけに朝勤め夕勤めの人たちを街道に迎えることは半蔵にも感じの深いものがあつた。どうして、この多数の応援があつてさえ、続々関東からやつて来る御同勢の継立てに充分だとは言えなかつたくらいだ。馬籠峠から先は落合に詰めている尾州の人足が出て、お荷物の持ち運びその他に働くというほどの騒ぎだ。時には、半蔵はこの混雑の中に立つて、怪我人けがにんを載せた四挺ちようとうの駕籠

が三留野みどのの方から動いて来るのを目撃した。宮様のお泊まりにあてられるという三留野の普請所では、小屋がつぶれて、けがをした尾張の大工たちが帰国するところであるという。その時になると、神葬祭の一条も、何もかも、この街道の空気の中に埋め去うずられたようになった。和宮様御下向ごげこうのうわさがあるのみだった。

宮様は親子内親王ちかこという。京都にある帝とは異腹はらちがいの御兄妹ごきょうだいである。先帝第八の皇女であらせらるるくらいだから、御姉妹も多かつた。それがだんだん亡なくなられて、御妹としては宮様ばかりになったから、帝の御いつくしみも深かつたわけである。宮様は幼いころから有栖川家ありすがわと御婚約の間柄であつたが、それ

が徳川將軍に降嫁せらるるようになったのも、まったく幕府の懇望にもとづく。

もともと公武合体の意見は、当時の老中安藤対馬なぞのはじめで唱え出したことでもない。天璋院てんしやういんといえば、当時すでに未亡人みぼうじんであるが、その人を先の將軍の御台所みだいどころとして徳川家に送った薩摩さつまの島津氏などもつとに公武合体の意見を抱いだいていて、幕府有司の中にも、諸藩の大名の中にもこの説に共鳴するものが多かった。言わば、国事の多端で艱難かんなんな時にあらわれて来た協調の精神である。幕府の老中らは宮様の御降嫁をもつて協調の実じつを挙あぐるに最も適当な方法であるとし、京都所司代の手を經へ、関白かんぱくを通して、それを叡聞えいぶんに達したところ、帝にはすでに有栖川家ありすがわと御婚約のある宮様のことを思い、かつはとかく騒さわがしい江戸の空へ年若な女子を遣つかわすのは気づかわれると仰せられて、お許

しがなかつた。この御結婚には宮様も御不承知であつた。ところが京都方にも、公武合体の意見を抱いた岩倉具視、久我建通、千種有文、富小路敬直なぞの有力な人たちがあつて、この人たちが堀河の典侍を動かした。堀河の典侍は帝の寵妃であるから、この人の奏聞には帝も御耳を傾けられた。宮様には固く辞して応ずる気色もなかつたが、だんだん御乳の人絵島の言葉を聞いて、ようやく納得せらるるようになった。年若な宮様は健気にも思い直し、自ら進んで激しい婦人の運命に当たろうとせられたのである。

この宮様は婿君（十四代將軍、徳川家茂）への引き出物として、容易ならぬ土産を持参せらるることになった。「蛮夷を防ぐことを堅く約束せよ」との聖旨がそれだ。幕府としては、今日は兵力を動かすべき時機ではないが、今後七、八年ないし十年

の後を期し、武備の充実する日を待つて、条約を引き戻すか、征伐するか、いずれかを選んで叡慮を安んずるであろうという意味のことが、あらかじめ奉答してあつた。

しかし、このまねな御結婚には多くの反対者を生じた。それらの人たちによると、幕府に攘夷の意志のあらうとは思われぬ。その意志がなくて蛮夷の防禦を誓い、国内人心の一致を説くのは、これ人を欺き自らをも欺くものだといふのである。宮様の御降嫁は、公武の結婚というよりも、むしろ幕府が政略のためにする結婚だといふのである。幕府が公武合体の態度を示すために、帝に供御の資を献じ、親王や公卿に贈金したことも、かえつて反対者の心を刺激した。

「欺瞞だ。欺瞞だ。」

この声は、どんな形になつて、どんなところに飛び出すかもし

れなかつた。西はおおつ大津から東は板橋まで、宮様の前後を警衛するもの十二藩、道中筋の道固めをするもの二十九藩——こんな大げさな警衛の網が張られることになつた。美濃のうがい鶉飼から信州もとやま本山までの間は尾州藩、本山から下諏訪しもすわまでの間は松平丹波守、まつだいらたんばのかみ下諏訪から和田までの間は諏訪因幡守いなばのかみの道固めというふうに。

十月の十日ごろには、尾州の竹腰山城守たけごしやましろのかみが江戸表から出発して来て、本山宿の方面から順に木曾路の道橋を見分し、御旅館やお小休み所にあてらるべき各本陣を見分した。ちようど馬籠では、吉左衛門も京都の方へ出かけた留守の時で、半蔵が父に代わつてこの一行を迎えた。半蔵は年寄役金兵衛の付き添いで、問屋九太夫の家に一行を案内した。峠へはもう十月らしい小雨が来る。私事ながら半蔵は九太夫と言ひ争つた会所の晩のことを思い出し、父が名代の勤めもつらいことを知つた。

「伊之助さん、お継立ての御用米が尾州から四十八俵届きました。これは君のお父さん（金兵衛）に預かっていたいただきたい。」

半蔵が隣家の伊之助と共に街道に出て奔走するころには、かねて待ち受けていた御用の送り荷が順に到着するようになった。この送り荷は尾州藩の扱いで、奥筋のお泊まり宿へ送りつけるもの、その他諸色しよしきがたくさんな数に上った。日によつては三留野みどの泊まりの人足九百人、ほかに妻籠泊まりつまごの人足八百人が、これらの荷物について西からやつて来た。

「寿平次さんも、妻籠の方で目を回しているだろうなあ。」

それを思う半蔵は、一方に美濃中津川の方で働いている友人の香蔵を思い、この際京都から帰つて来ている景蔵を思い、そ

の話をよく伊之助にした。馬籠では峠村の女馬まで狩り出して、毎日のようにやって来る送り荷の継立てをした。峠村の利三郎は牛行司うしぎょうじではあるが、こういう時の周旋にはなくてならない人だった。世話好きな金兵衛はもとより、問屋の九太夫、年寄役の儀助、同役の新七、同じく与次衛門よじえもん、それらの長老たちから、百姓総代の組頭庄兵衛くみがしらしようべえまで、ほとんど村じゅう総がかりで事に当たった。その時になって見ると、金兵衛の養子伊之助といい、九太夫の子息九郎兵衛むすこといい、庄兵衛の子息庄助といい、実際に働けるものはや若手の方に多かった。

十月の二十日は宮様が御東下の途に就つかれるという日である。まだ吉左衛門は村へ帰って来ない。半蔵は家のものと一緒に父のことを案じ暮らした。もはや御一行が江州草津ごうしゅうくさつまで動いたという二十二日の明け方になって、吉左衛門は夜通し早駕籠はやかごを急

がせて来た。

京都から名古屋へ回つて来たという父が途中の見聞を語るだけでも、半蔵には多くの人の動きを想像するに充分だった。宮様御出発の日には、帝にもお忍びで桂かつらの御所を出て、宮様の御旅装を御覧になつたという。

「時に、送り荷はどうなつた。」

という父の無事な顔をながめて、半蔵は尾州から来る荷物の莫大ぼくだいなことを告げた。それがすでに十一日もこの街道に続いてゐることを告げた。木曾の王滝おうたき、西野、末川の辺鄙へんぴな村々、向むかい郡ぐんの附知村つけちむらあたりからも人足を繰り上げて、継立ての困難をしのいでいることを告げた。

道路の改築もその翌日から始まつた。半蔵が家の表も二尺通いしがきり石垣いしがきを引つ込め、石垣を取り直せとの見分役けんぶんやくからの達しがあつ

た。道路は二間にして、道幅はすべて二間見通しということに改められた。石垣は家ごとに取り崩された。この混雑のあとには、御通行当日の大釜おおがまの用意とか、膳飯ぜんばんの準備とかが続いた。半蔵の家でも普請中で取り込んでいるが、それでも相応なしたくを引き受け、上の伏見屋なぞでは百人前の膳飯を引き受けた。やがて道中奉行が中津川泊まりで、美濃の方面から下つて来た。一切の準備は整ったかと尋ね顔な奉行の視察は、次第に御一行の近づいたことを思わせる。順路の日割によると、二十七日、鵜沼うぬましゆく宿御昼食、太田宿お泊まりとある。馬籠へは行列拝見の客が山口村からも飯田いいた方面からも入り込んで来て、いずれも宮様の御一行を待ち受けた。

そこへ先駆だ。二十日に京都を出発して来た先駆の人々は、八日目にはもう落合宿から美濃境じつきよくとうげの十曲峠を越して、馬籠峠の

上に着いた。随行する人々の中には、万福寺に足を休めて行くものが百二十人もある。先駆の通行は五つ半時であった。奥筋へ行く千人あまりの尾州の人足がそのあとに続いて、群衆の中を通つた。それを見ると、伊那から来ている助郷すけごうの中には腕をさすつて、ぜひともお輿こしをかつぎたいというものが出て来る。大変な御人氣だ。半蔵は父と同じように、麻のネ袴かみしもをつけ、袴はかまの股立ももだちを取つて、親子してその間を奔走した。

「姫君さまのお輿こしなら、おれも一肩ひとかた入れさせてもらいたいな。」
これも篤志家の一人ひとりの声だった。

翌日は中津川お泊まりの日取りである。その日は雨になって、夜中からひどく降り出した。しかしその大雨の中でも、もはや道固めの尾州の家が續々馬籠へ繰り込んで来るようになったので、吉左衛門も半蔵も全く一晩じゅう眠らなかつた。

いよいよ馬籠御通行という日が来た。本陣の仮住居かりずまいの方では、おまんが孫のそばに目をさますと、半蔵も父も徹夜でいそがしがって、ほとんど家へは寄りつかない。嫁のお民は、と見ると、この人は肩で息をして、若い母らしい前垂まえだれなぞにもはや重そうなからだを隠そうとしている。

おまんは佐吉を呼んで、孫のお糸くめをおぶわせ、村はずれに宮様をお迎えさせることにした。そこへ来た新宅のお喜佐（おまんの実の娘、半蔵の異母妹）には宗太をつけて、これも家の下女たちと一緒にやることにした。

「糸さま、おいで。」と佐吉はお糸を背中にのせて、その顔をおまんに見せながら、「これで糸さまも、きょうあつたことを——ずっと大きくなるまで——覚えていさつせるずらかか。」
「なにしろ、六つじゃねえ。」

「覚えてはいきつせまいか。」

「そうばかりでもないよ。」とお喜佐は二人の話を引き取って言った。「この子もこれで、夢のようには覚えているだろうよ。わたしだつて、五つの歳としのことをかすかに覚えているもの。」

「ほんとに、きょうはあいにくな雨なこと。」とおまんは言った。「わたしもお迎えしたいは山々だが、お民がこんなじゃ、どうしようもない。わたしたち二人はお留守居しますよ。」

佐吉はお糸を、お喜佐は宗太をまもりながら、御行列拝見の人々が集まる村はずれの石屋の坂あたりまで行つた。なにしろ多勢の御通行で、佐吉らは吉左衛門や半蔵の働いている姿をどこにも見いだすことができなかつた。それに、御通行筋は公私の領分の差別なく、旅館の前後里程三日路の旅人の通行を禁止するほどの警戒ぶりだ。

九つ半時に、姫君を乗せたお輿こしは軍旅のごときいでたちの面々に前後を護まもられながら、雨中の街道を通つた。いかめしい鉄砲まとい、馬簾ばれんの陣立ては、ほとんど戦時に異ならなかつた。供奉ぐぶの御同勢はいずれも陣笠じんがさ、腰弁当こしで、供男一人ずつ連れながら、そのあとに随したがつた。中山大納言だいなごん、菊亭中納言きくいてい、千種少将ちぐさのしょうしょう（有文）、岩倉少将いもみ（具視）、その他宰相の典侍てんじ、命婦能登みょうぶのとなどが供奉の人々の中にあつた。京都の町奉行関出雲守せきいずものかみがお輿こしの先を警護し、お迎えとして江戸から上京した若年寄わかどしよりかのおとうみのかみ加納遠江守、それに老女らもお供をした。これらの御行列が動いて行つた時は、馬籠の宿場も暗くなるほどで、その日の夜に入るまで駅路に人の動きの絶えることもなかつた。

「いや、御苦勞、御苦勞。」

御通行の翌日、吉左衛門は三留野みどののお継ぎ所の方へ行く尾州の竹腰山城守を見送ったあとで、いろいろあと始末をするため会所のなかにある宿役人の詰め所にいた。吉左衛門はそこにいる人たちをねぎらうばかりでなく、自分で自分に言うように、「御苦勞、御苦勞。」を繰り返した。

連日の過勞に加えて、その日も朝から雨だ。一同は疲れて、一人として行儀よくしているものもない。そこには金兵衛もいて、長い街道の世話を思い出したように、

「吉左衛門さんは御存じだが、わたしたちが覚えてから大きな御通行というものは、この街道に三度ありましたよ。一度は水戸みとの姫君さまのお輿入れこしいの時。一度は尾州の先の殿様が江戸でお亡なくなりになって、その御遺骸ごいがいがこの街道を通った時。今一度

は例の黒船騒ぎで、交易を許すか許さないかの^{だいひようじよう}大評定で、尾州の殿様（徳川慶勝^{よしかつ}）の御出府の時。あの先の殿様の時は、木曾谷中から寄せた七百三十人の人足でも手が足りなくて、伊那の^{すけごう}助郷が千人あまりも出ました。諸方から集めた馬の数が二百二十匹さ。」

「金兵衛さんはなかなか覚えがいい。」と畳の上に^{ほおづえ}頬杖つきながら言うものがある。

「まあ、お聞きなさい。今の殿様が江戸へ御出府の時は、木曾寄せの人足が七百三十人、伊那の助郷が千七百七十人、この人数を合わせると二千五百人からの人足が出ましたぜ。あの時、馬籠の宿場に集まった馬の数が百八十四匹だったと思う。あれほどの御通行でも和宮さまの場合とはとうてい比べものにならない。今度のような大きな御通行は、わたしは古老の話にも聞い

たことがない。」

「どうです。金兵衛さん、これこそ前代未聞でしょう。」

と混ぜ返すものがある。金兵衛は首を振って、

「いや、前代未聞どころか、この世初まって以来の大御通行だ。」

聞いているものは皆笑った。

いつのまにか吉左衛門は高いびきだ。彼はその部屋へやの片すみに横になって、まるで死んだようになってしまった。

その時になって見ると、美濃路から木曾へかけてのお継ぎ所でほとんど満足なところはなかつた。会所という会所は、あるいは損じ、あるいは破れた。これは道中奉行所の役人も、尾州方の役人も、ひとしく目撃したところである。中津川、三留野の両宿にたくさんな死傷者もできた。街道には、途中で行き倒れになった人足の死体も多く発見された。

御通行後の二日目は、和宮様の御一行も福島、藪原やぶはらを過ぎ、
鳥居峠とりいとうげを越え、奈良井宿ならいお小休み、贄川宿にえがわじゆく御昼食の日取りであ
る。半蔵と伊之助の二人は連れだつて、その日三留野お継ぎ所
の方から馬籠へ引き取つて来た。伊之助は伊那助郷の担当役、
半蔵も父の名代として、いろいろとあと始末をして来た。ちよ
うど吉左衛門は上の伏見屋に老友金兵衛を訪ねたずに行つていて、
二人茶漬ちやづけを食いながら、話し込んでいるところだった。そこ
へ半蔵と伊之助とが帰つて来た。

その時だ。伊之助は声を潜めながら、木曾の下四宿から京都
方の役人への祝儀として、先方の求めにより二百二十両の金を
差し出したことを語つた。祝儀金とは名ばかり、これはいかに
も無念千万のことであると言つて、お継ぎ所に来ていた福島方
の役人衆までが口唇くちびるをかんだことを語つた。伊那助郷の交渉を

はじめ、越後えちご、越中えつちゅうの人足の世話から、御一行を迎えるまでの各宿の人々の心労と尽力とを見る目があったら、いかに強欲ごうよくな京都方の役人でもこんな暗い手は出せなかつたはずであると語つた。

「御通行のどさくさに紛れて、祝儀金を巻き揚げて行くとは——
実に、言語ごんごに絶したやり方だ。」

と言つて、金兵衛は吉左衛門と顔を見合わせた。

若者への関心にかけては、金兵衛とても吉左衛門に劣らなかつた。黒船来訪以来はおろか、それ以前からたといいかに封建社会の墮落と不正とを痛感するような時でも、それを若者の目や耳からは隠そう隠そうとして来たのも、この二人の村の長老だ。庄屋風情ふせい、もしくは年寄役風情として、この親たちが日ごろの

願いとして来たことは、徳川世襲の伝統を重んじ、どこまでも権威を権威とし、それを子の前にも神聖なものとして、この世をあるがままに譲つて行きたかつたのである。伊之助が語つて見せたところによると、こうした役人の腐敗沙汰ざたにかけては、京都方も江戸方もすこしも異なるところのないことを示していた。二人の親たちはもはや隠そうとして隠し切れなかつた。

六日目になると、宮様御一行は和田宿の近くまで行つたところで、お道固めとして本山までお見送りをした尾州の家中衆も、思い思いに引き返して来るようになった。奥筋までお供をした人足たちの中にも、ぼつぼつ帰路につくものがある。七日目には、もはやこの街道に初雪を見た。

人一人動いたあとには不思議なもので、御年も若く繊弱い宮様かよわのような女性でありながらも、ことに宮中の奥深く育てられた金枝玉葉きんしぎよくようの御身で、上方かみがたとは全く風俗を異にし習慣を異にする関東の武家へ御降嫁されたあとには、多くの人心を動かすものが残った。遠く江戸城の方には、御母として仕うべき天璋院てんしょういんも待っていた。十一月十五日には宮様はすでに江戸に到着されたはずである。あの薩摩さつま生まれの剛気で男まさりな天璋院にもすでに御対面せられたはずである。これはまれに見る御運命の激しさだとして、憐みあわれまいらせるものがある。その犠牲的な御心の女らしさを感じるものもある。二十五日の木曾街道の御長旅は、徳川家のために計る老中安藤あんどう対馬つしまらの政略を助けたというよりも、むしろ皇室をあらわす方に役立った。

長いこと武家に圧せられて来た皇室が衰微のうちにも絶える

ことなく、また回復の機運に向かつて来た。この島国の位置が位置で、たとい内には戦乱争闘の憂いの多い時代があつたにもせよ、外に向かつて事を構える場合の割合に少なかつた東洋の端に存在したことは、その日まで皇室の平静を保ち得た原因の一つであらうと言うものもある。過去の皇室の衰え方と云えば、諸国に荒廃した山陵を歴訪して勤王の志を起こしたという蒲生君平がもうくんべいや、京都のさびしい御所を拝して哭ないたという高山彦九郎たかやまひくくろうのよ
うな人物のあらわれて来たのでもわかる。応仁乱後の京都は乱前よりも一層さびれ、公家の生活は苦しくなり、すこし大げさかもしれないが三条の大橋から御所の燈火あかりが見えた時代もあつたと言わるるほどである。これほどの皇室が、また回復の機運に向かつて来たことは、半蔵にとつて、実に意味深きことであつた。

時代は混沌こんとんとして来た。彦根ひこねと水戸とが互いに傷ついてからは、薩州のような雄藩ゆうはんの擡頭たいとうとなった。関ヶ原の敗戦以来、隠忍に隠忍を続けて来た長州藩がこの形勢を黙ってみてみているはずもない。しかしそれらの雄藩でも、京都にある帝みかどを中心みかどに仰ぎ奉ることなしに、人の心を収めることはできない。天朝の威をも畏れおそず、各藩の意見のためにも動かされず、断然として外国に通商を許したというあの井伊大老ですら、幕府の一存たてを楯たてにして単独な行動に出ることはできなかつた。後には上奏の手続きを執つた。井伊大老ですらそのとおりで。薩長二藩の有志らはいずれも争つて京都に入り、あるいは藩主の密書ひたを致したり、あるいは御剣ぎよけんを奉獻したりした。

一庄屋の子としての半蔵から見ると、これは理由のないことでもない。水戸の『大日本史』に、尾張の『類聚日本紀るいじゆうにほんぎ』に、あ

るいは頼ら氏の『日本外史』に、大義名分を正そうとした人たちのまいた種が深くもこの国の人々の心にきざして来たのだ。南朝の回想、芳野よしのの懐古、楠くすのき氏の崇拜——いずれも人の心の向かうところを語っていないものはなかった。そういう中であつて、本居宣長のような先覚者をはじめ、平田一門の国学者が中世の否定から出発して、だんだん帝を求め奉るようになって行つたのは、臣子の情として強い綜合そうごうの結果であつたが……

年も文久二年と改まるころには、半蔵はすでに新築のできた本陣の家の方に引き移つていた。吉左衛門やおまんは味噌納屋みそなやの二階から、お民はわびしい土蔵の仮住居かりずまいから、いずれも新しい木の香のする建物の方に移つて来た。馬籠の火災後しばらく落合の家の方に帰つていた半蔵が弟子でしの勝重かつしげなども、またやつて来る。新築の家は、本陣らしい門構えから、部屋へや部屋の間取

りまで、火災以前の建て方によつたもので、会所を家の一部に取り込んだところまで似ている。表庭のすみに焼け残つた一株の老松もとうとう枯れてしまつたが、その跡に向いて建てられた店座敷が東南の日を受けるところまで似ている。

美濃境にある恵那山えなさんを最高の峰として御坂越みさかじえの方に続く幾つかの山嶽さんかくは、この新築した家の南側の廊下から望まれる。半蔵が子供の時分から好きなのも、この山々だ。さかんな雪崩なだれの音はその廊下の位置からきかれないまでも、高い山壁から谷まで白く降り埋める山々の雪を望むことはできる。ある日も、半蔵は恵那山の上の空に、美しい冬の朝の雲を見つけて、夜ごとの没落からまた朝紅の輝きにと変わつて行くようなあの太陽に比較すべきものを想像した。ただ御一人の帝、その上を措おいて時代を貫く朝日の御勢にたとうべきものは他に見当たらなかつた。

正月早々から半蔵は父の名代として福島の役所へ呼ばれ、木曾十一宿にある他の庄屋問屋と同じように金百両の分配を受け来た。このお下げさき金きんは各宿救助の意味のものだ。

ちようど家では二十日正月はつかしょうがつを兼ねて、暮れに生まれた男の子のために小豆粥あずきがゆなどを祝っていた。お糸くめ、宗太、それから今度生まれまたた子には正己まさみという名がついて、吉左衛門夫婦もはや三人の孫のおじいさん、おばあさんである。お民はまだ産後の床についていたが、そこへ半蔵が福島から引き取つて来た。和宮様かずのみやさまの御通行前に、伊那助郷総代へ約束した手当ての金子きんすも、追つて尾州藩から下付せらるるはずであることなどを父に告げた。

「助郷のことは、これからが問題だぞ。今までのような御奉公

じや百姓が承知しまい。」

と吉左衛門は炬燵こたつの上に手を置きながら、半蔵に言つて見せた。

その日半蔵はお下げ金のことで金兵衛の知恵を借りて、御通行の日から残つた諸払いをした。やがてそのあと始末もできたころに、人の口から口へと伝わつて来る江戸の方のうわさが坂下門の変事を伝えた。

決死の壮士六人、あの江戸城の外のお濠ほりばたの柳の樹きのかけに隠れていたのは正月十五日とあるから、山家のことでは左義長の濟むころであるが、それらの壮士が老中安藤対馬の登城さげちようを待ち受けて、まず銃で乗り物を狙撃そげきした。それが当たらなかつたので、一人の壮士が馳はせ寄つて、刀を抜いて駕籠かごを横から突き刺した。安藤対馬は運強く、重傷を被りながらも坂下門

内に駆け入つて、わずかに身をもつて難をまぬかれた。この要撃の光景をまるで見て来たように言い伝えるものがある。

「またか。」

という吉左衛門にも、思わず父と顔を見合わせる半蔵の胸にも、桜田事変当時のことが来た。

刺客はいずれも斬奸ざんかん趣意書なるものを懐ふところにしていたという。

これは幕府の手で秘密に葬られようとしたが、六人のほかに長州屋敷へ飛び込んで自刃じじんした壮士の懐から出て来たもので明らか

かにされ、それからそれへと伝えられるようになった。それに

は申年さるどしの三月に赤心報国の輩ともがらが井伊大老を殺害に及んだことは

毛頭もうとうも幕府に対し異心をはさんだのではないということから書

き初めて、彼らの態度を明らかにしてあつたという。彼らから

見れば、井伊大老は夷狄いできを恐怖する心から慷慨忠直こうがいの義士を憎

み、おのれの威力を示そうがために奸謀かんぼうをめぐらし、天朝をも侮る神州の罪人である、そういう奸臣を倒したなら自然と幕府においても悔いる心ができて、これからは天朝を尊び夷狄を憎み、国家の安危と人心の向背こうはいにも注意せらるるであろうとの一念から、井伊大老を目がけたものはいずれも身命を投げ捨てて殺害に及んだのである、ところがその後になつても幕府には一向に悔心の模様は見えない、ますます暴政のつるようになつて行つたのは、幕府役人一同の罪ではあるが、つまりは老中安藤対馬こそその第一の罪魁ざいかいであるという意味のことが書いてあつたという。その趣意書には、老中の罪状をもあげて、皇妹和宮様が御結婚のことも、おもてむきは天朝より下し置かれたように取り繕い、公武合体の姿を示しながら、実は奸謀と威力とをもつて強奪し奉つたも同様である、これは畢竟皇妹ひつぎきょうを人質にし

て外国交易の勅諭ちよくじょうを強請する手段であり、もしそれもかなわなかつたら帝の御讓位をすら謀はかろうとする心底であつて、実に徳川將軍を不義に引き入れ、万世の後までも悪逆の名を流させようとする行為である、北条足利ほうじょうあしかがにもまさる逆謀というのほかはない、これには切齒痛憤せつし、言うべき言葉もないという意味のことが書いてあつたという。その中にはまた、外夷がい取り扱いのことをあげて、安藤老中は何事も彼らの言うところに従い、日本沿海の測量を許し、この国の形勢を彼らへ教え、江戸第一の要地ともいふべき品川御殿山を残らず彼らに貸し渡し、あまつさえ外夷の応接には骨肉も同様な親切を見せながら、自国にある忠義憂憤の者はかえつて仇敵きゆうてきのように忌みきらい、国賊というにも余りあるというような意味のことが書いてあつたという。

しかし決死の壮士が書きのこしたものは、ただそれだけの意

味にとどまらなかつた。その中には「明日」への不安が、いろいろと書きこめてあつたともいう。もし今日のままで弊政を改革することもなかつたら、天下の大小名はおのおの幕府を見放して、自己の国のみを固めるようになって行くであろう、外夷の取り扱いにさえ手に余るおりから、これはどう処置するつもりであろうという意味のことも書いてあり、万一攘夷じょういを名として旗を挙あげるような大名が出て来たら、それこそ実に危急の時である、幕府では皇国の風俗というものを忘れてはならぬ、君臣上下の大義をわきまえねばならぬ、かりそめにも天朝てんてうの叡意えいにそむくようなところが見えたら、忠臣義士の輩ともがらは一人も幕府のために身命をなげうつものはあるまいという意味のことも書きのこしてあつたという。

これらの刺客の多くが水戸人であることもわかつて来た。い

ずれも三十歳前後の男ざかりで、中には十九歳の青年がこの要撃に加わっていたこともわかつて来た。安藤対馬の災難は不思議にもその傷が軽くて済んだが、多くの人の同情は生命拾いいのちびろをした老中よりも、現場に斃たおれた青年たちの上に集まる。しかし、その人の傷ついたあとになって見ると、一方には世間の誤解や無根の流言がこの悲劇を生むもと因もとであったと言つて、こんなに思い詰めた壮士らの暴拳を惜しむと言ひ出したものもあつた。安藤対馬その人を失つたら、あれほど外交の事に当たりうるものは他に見いだせない、アメリカのハリスにせよ、イギリスのアーロコックにせよ、彼らに接して滞ることなく、屈することもなく、外国公使らの専横を挫くじいて、凜然りんぜんとした態度を持ち続けたことにかけては、老中の右に出るものはなかつたと言ひ出したものもあつた。

幕府はすでに憚るべき人と、憚るべき実とがない。井伊大老は斃れ、岩瀬肥後は喀血して死し、安藤老中までも傷ついた。四方の侮りが競うように起こって来て、儒者は經典の立場から、武士劍客は士道の立場から、その他医者、神職、和学者、僧侶なぞの思い思いに勝手な説を立てるものがあつても、幕府ではそれを制することもできないようになって来た。この中で、露国の船将が対馬尾崎浦に上陸し駐屯していると、の報知すら伝わつた。港は鎖せ、ヨーロッパ人は打ち攘え、その排外の風がいたるところを吹きまくるばかりであつた。

四

一人の旅人が京都の方面から美濃の中津川まで急いで来た。

この旅人は、近くまで江戸桜田邸にある長州の学塾有備館ゆうびかんの用掛ようがりをしていた男ざかりの侍である。かねて長州と水戸との提携を実現したいと思ひ立ち、幕府の嫌疑けんぎを避くるため品川沖合いの位置を選び、長州の軍艦丙辰丸へいしんまるの艦長と共に水戸の有志と会見した閱歴を持つ人である。坂下門外の事変にも多少の關係があつて、水戸の有志から安藤老中要撃の相談を持ちかけられたこともあつたが、後にはその暴挙に対して危惧きぐの念を抱きいだき、次第に手を引いたという閱歴をも持つ人である。

中津川の本陣では、半蔵が年上の友人景蔵も留守のころであつた。景蔵は平田門人の一人として、京都に出て国事に奔走してゐるころであつたからで。この旅人は恵那山えなさんを東に望むことのできるような中津川の町をよろこび、人の注意を避くるにいい位置にある景蔵の留守宅を選んで、江戸麻布あさぶの長州屋敷から木

曾街道經由で上京の途にある藩主（毛利慶親^{もうりよしか}）をそこに待ち受けていた。その目的は、京都の屋敷にある長藩世子^{せいし}（定広）の内命を受けて、京都の形勢の激変したことを藩主に報じ、かねての藩論なる公武合体、航海遠略の到底実行せらるべくもないことを進言するためであつた。それよりは従来の方針を一変し、大いに破約攘夷を唱うべきことを藩主に説き勧めるためであつた。雄藩擡頭^{たいとう}の時機が到つたことは、長いことその機会を待っていた長州人士を雀躍^{こおどり}させたからで。

旅にある藩主はそれほど京都の形勢が激変したとは知らない。まして、そんな旅人が世子^{せいし}の内命を帯びて、中津川に自分を待つとは知らない。さきに幕府への建白の結果として、公武間周旋の依頼を幕府から受け、いよいよ正式にその周旋を試みようとして江戸を出発して来たのであつた。この大名は、日ごろの競争者

で薩摩さつまに名高い中将齋彬なりあきらの弟にあたる島津久光しまづひさみつがすでにその勢力を京都の方に扶植し始めたことを知り、さらに勅使左衛門督さえもんのかみ大原重徳しげのりを奉じて東下して来たほどの薩摩人の活躍を想像しながら、その年の六月中旬には諏訪すわにはいった。あだかも麻疹はしか流行のころである。一行は諏訪すわに三日逗留とまりゆし、同勢四百人ほどをあとに残して置いて、三留野みどの泊まりで木曾路を上つて来た。馬籠本陣の前まで来ると、その門前には諸大名通行のおりの定例のように、すでに用意した札の掲げてあるのを見た。

松平大膳太夫様まつだいらだいでんどう 御休所

松平大膳太夫とあるは、この大名のことで、長門国ながとのかくに三十六万九千石の領主を意味する。

その時、半蔵は出て、一行の中の用人あいさつに挨拶した。

「わたしは吉左衛門の倅せがれでございます。父はこの四月ちゅうふがうから中風

にかかりまして、今だに床の上に臥ねたり起きたりしております。お昼は申し付けてございますが、何か他に御用もありましたら、わたしが承りましょう。」

「御主人は御病気か。それはおだいじに。ここから中津川まで何里ほどありましょう。」

「三里と申しております。こここの峠からは下りでございますから、そうお骨は折れませんか。」

この半蔵の言葉を聞くと、用人は本陣の門の内外を警衛する人たちに向かつて、

「諸君、中津川まではもう三里だそうですよ。ここで昼食をやつてください。」

と呼んだ。

馬籠の宿ではその日より十日ほど前に、彦根藩の幼主が江戸

出府を送ったばかりの時であつた。十六歳の殿様、家老、用人、その時の同勢はおびただしい人数で、行列も立派ではあつたが、もはや先代井伊掃部頭かもんのかみが彦根の城主としてよくこの木曾路を往来したところのような氣勢は揚がらない。そこへ行くと、千段巻せんだんまきの柄えのついた黒鳥毛くろとりげの鎗やりから、永楽通宝えいらくつうほうの紋じるしまで、はげしい意気込みでやつて来た長州人は彦根の人たちといちじるしい対照を見せる。

その日、半蔵は父の名代として、隣家の伊之助や問屋の九郎兵衛と共に、一行を宿はずれの石屋の坂あたりまで見送り、そこから家に引き返して来て、父の部屋へやをのぞきに行つた。病床から半ば身を起こしかけている吉左衛門は山の中へ来る六月の暑さにも疲れがちであつた。半蔵は一度倒れたこの父が回復期に向かいつつあるというだけにもやや胸をなでおろして、なるべ

く頭を悩ませるようなことは父の耳に入れまいとした。京都の方にある景蔵からは、容易ならぬ彼地かのちの形勢を半蔵のところへ報じて来た。伏見寺田屋の変をも知らせて来た。王政復古と幕府討伐の策を立てた八人の壮士があゝの伏見の旅館で斃たおれたことをも知らせて来た。公武間の周旋をもつて任ずる千余人の薩摩の精兵が藩主に引率されて来た時は、京都の町々はあだかも戒嚴令の下にあつたことをも知らせて来た。しかし半蔵は何事も父の耳に入れなかつた。夕方に、彼は雪隠せっちんへ用を達たしに行つて、南側の廊下を通つた。長州藩主がその日の泊まりと聞く中津川の町の方は早く暮れて、遠い夕日の反射が西の空から恵那山の大きな傾斜に映るのを見た。

病後の吉左衛門には、まだ裏の二階へ行つて静養するほどの力がない。あの先代半六が隠居所となつていた味噌納屋の二階への梯子段はしごだんを昇のぼつたり降りたりするには、足もとがおぼつかなくなつた。

この父は四月の発病以来、ずっと寛くわんぎの間に臥ねたり起きたりしている。その部屋は風呂場ふろばに近い。家のものが入浴を勧めるには都合がよい。一方は本陣の囲炉裏いろりばたや勝手に続いている。みんなで見護するにも都合がよい。そのかわり朝に晩に用談なぞを持ち込む人たちが出たりはいつたりして、半蔵としてはいつまでも父の寢床をその部屋に敷いて置くことを好まなかつた。どうかすると頭を冷やせの、足を温あためろのという父を見るたびに、半蔵は悲しがつた。さびしい病後のつれづれから、父は半蔵に向かつていろいろ耳にしたことの説明を求める。六十四歳

の晩年になつてこんな思いがけない中風にかかつたというふう
に。まだ退役願ひもきき届けられない馬籠の駅長の身で、そう
そう半蔵任せにして置かれないうふうにも。半蔵は京都や
江戸にある平田同門の人たちからいろいろな報告を受けて、そ
のたびに山の中に辛抱してはいられぬような心持ちにもなるが、
また思い返しては本陣問屋庄屋の父の代わりを勤めた。

中津川の会議が開かれて、長藩の主従が従来の方針を一変し、
吉田松陰以来の航海遠略から破約攘夷へと大きく方向の転換を
試み始めたのも、それから藩主の上京となつて、公卿くげをおと訪といな朝廷
の御機嫌ごぎげんを伺い、すでに勅使を関東に遣つかわされてゐるから、薩
藩と共に叡慮えいりょの貫徹に尽力せよとの御沙汰ごさたを賜たまつたのも、六
月の二十日から七月へかけてのことであつた。薩藩と共に輦下れんか
警衛の任に当たることにかけては、京都の屋敷にある世子せいし定広

がすでにその朝命を拝していた。薩長二藩のこれらの一大飛躍は他藩の注意をひかすには置かない。ようやく危惧きぐの念を抱き始めたものもある。強い刺激を受けたものもある。こういう中であつて、薩長二藩の京都手入れから最も強い刺激を受けたものは、言うまでもなく幕府側にある人たちであらねばならない。従来幕府は事あるごとに京都に向かつて干渉するのを常とした。今度勅使の下向げこうを江戸に迎えて見ると、かねて和宮様御降嫁のおりに堅く約束した蛮夷防禦ばんいぼうぎよのことが勅旨の第一にあり、あわせて將軍の上洛じょうらく、政治の改革にも及んでいて、幕府としては全く転倒した位置に立たせられた。干渉は実に京都から来た。しかも数百名の薩摩隼人さつまはやとを引率する島津久光を背景にして迫つて来た。この干渉は幕府にある上のものにも下のものにも強い衝動を与えた。その衝動は、多年の情実と弊害とを払いのけるこ

とを教えた。もつと政治は明るくしなければだめだということ
を教えた。

時代はおそろしい勢いで急転しかけて来た。かつて岩瀬肥後
が井伊大老と争つて、政治生涯しやうがいを賭してまで擁立しようとした
ひとつばしひとつばしよしのおの
一橋慶喜は將軍の後見に、越前藩主松平春嶽えちぜんは政事總裁の職に
就くようになつた。これまで幕府にあつてとかくの評判のあつ
た安藤対馬あんどうつしま、およびその同伴者なる久世大和くぜやまとの二人は退却を余
儀なくされた。天朝に対する過去の非礼を陳謝し、協調の誠意
を示すという意味で、安藤久世の二人は隠居急度きつとつし慎みの罰の薄
暗いところへ追いやられたばかりでなく、あれほどの大獄を起
こして一代を圧倒した井伊大老ですら追罰を免れなかつた。お
よそ安政、万延のころに井伊大老を手本とし、その人の家の子
郎党として出世した諸有司の多くは政治の舞台から退却し始め

た。あるものは封^{ほう}一万石を削られ、あるものは禄^{ろく}二千石を削られた。あるものはまた、隠居、蟄居^{ちつきよ}、永蟄居^{えいちつきよ}、差扣え^{さしひか}というふうに。

この周囲の空気の中で、半蔵は諸街道宿駅の上にまであらわれて来るなんらかの改変を待ち受けながら、父が健康の回復を祈っていた。発病後は父も日ごろ好きな酒をぱったりやめ、煙草^{たばこ}もへらし、わずかに俳諧^{はいかい}や将棋の本などをあけて朝夕の心やりとしている。何かこの父を慰めるものはないか、と半蔵は思っているところへ、ちようど人足四人持ちで、大きな籠^{かご}を本陣の門内へかつぎ入れた宰領があつた。

宰領は半蔵の前に立つて言った。

「旦那^{だんな}、これは今度、公儀から越前様へ御拝領になつた綿羊^{めんよう}というものです。めずらしい獣です。わたしたちはこれを送り届

けにまいる途中ですが、しばらくお宅の庭で休ませていただきたい。」

江戸の方からそこへかつがれて来たのは、三疋びきの綿羊だ。こんな木曾山の中へは初めて来たものだ。早速さつそく半蔵はお民を呼んで、表玄関の広い板の間に座蒲団ざぶとんを敷かせ、そこに父の席をつくつた。

「みんな、おいで。」

とおまんも孫たちを呼んだ。

「越前様の御拝領かい。」と言いながら、吉左衛門は奥の方から来てそこへ静かにすわつた。「越前様といえば、五月の十一日にこの街道をお通りになつたじゃないか。おれは寝ていてお目にもかからなかつたが、今度政事総裁職になつたのもあのお大名だね。」

ちよつとしたことにも吉左衛門はそれをこの街道に結びつけて、諸大名の動きを読もうとする。

「あなたはそれだから、いけない。」とおまんは言った。「病気になる時には病気になるがいいなんて自分で言っていながら、そう気をつかうからいけない。まあ、このやさしい羊の目を御覧なさい。」

街道では麻疹はしかの神を送ったあとで、あちこちに病人や死亡者を出した流行病わづらの煩わづらいから、みんなようやく一息ついたところだ。その年の渋柿しぶがきの出来のうわさは出ても、京都と江戸の激しい争いなどはどこにあるかというほど穏やかな日もさして来ている。宰領の連れて来た三疋の綿羊が籠かごの中で顔を寄せ、もぐもぐ鼻の先を動かしているのを見ると、動物の好きなお糸くめや宗太は大騒ぎだ。持病せきの咳せきで引きこもりがちな金兵衛まで上の伏

見屋からわざわざ見に出かけて来て、いつのまにか本陣の門前には多勢の人だかりがした。

「金兵衛さん、こういうめずらしい羊が日本に渡って来るようになったかと思うと、世の中も変わるはずですね。わたしは生まれて初めてこんな獣を見ます。」

と吉左衛門は言つて、なんとなく秋めいた街道の空を心深げにながめていた。

「半蔵、まあ見てくれよ。おれの足はこういうものだよ。」

と言つて、病み衰えた右の足を半蔵の前に出して見せるころは、吉左衛門もめつきり元気づいた。早く食事を済ました夕方のことだ。付近の村々へは秋の祭礼の季節も来ていた。

「お父さんとつが病氣とつしてから、もう百四十日の余になりますものね。」

半蔵は試みに、自分の前にさし出された父の足をなでて見た。健脚でこの街道を奔走したころの父の筋肉はどこへ行ったかというようになつた。発病の当時、どつと床についたぎり、五日あまりも安静にしていたあげくの人だ。堅く隆起していたよな足の「ふくらつぱぎ」も今は子供のそれのように柔らかい。「ひどいものじゃないか。」と吉左衛門は自分の足をしまいながら言つた。「人が中氣ちゆうきすると、右か左か、どつちかをやられると聞いているが、おれは右の方をやられた。そう言えば、おれは耳まで右の方が遠くなつたようだぞ。」と笑つて、氣を変えて、「しかし、きようはめずらしくよい気持ちだ。おれは金兵衛さんのところへお風呂ふろでももらいに行つて来る。」

これほど父の元気づいたことは、ひどく半蔵をよろこばせた。「お父さん、わたしも一緒に行きましょう。」と彼もたち上がった。

この親子の胸には、江戸の道中奉行所の方から来た達しのことが往來ゆききしていた。かねてうわさには上っていたが、いよいよ諸大名が参観交代制度さんかんこうたいの改革も事実となつて来た。これには幕府の諸有司の中にも反対するものが多かつたというが、聰明そうめいで物に執着することの少ない一橋慶喜と、その相談相手なる松平春嶽とが、惜しげもなくこの英断に出た。言うまでもなく、参観交代の制度は幕府が諸藩を統御するための重大な政策である。これが変革されるということは、深い時代の要求がなくては叶かなわない。この一大改革はもう長いこと上にある識者の間に考えられて来たことであろうが、しかし吉左衛門親子のように下か

ら見上げるものにとつても、この改変を余儀なくされるほどの幕府の衰えが目についた。諸大名が実際の通行に役立つ沿道の人民の声にきいて課役を軽くしないかぎり、ただ徳川政府の威光というだけでは、多くの百姓もはや動かなくなつて来た。

本陣の門を出る時、吉左衛門はそのことを半蔵にきいた。

「お前は今度のお達しをよく読んで見たかい。参観交代が全廃というわけではないんだね。」

「お父さん、全廃とつじゃありません。諸大名は二年目づごとに一度、御三家や溜詰たまりづめは一月ひとつきずつ江戸におれとありますがね、奥方や若様は帰国してもいいと言うんですから、まあほとんど骨抜きに近いようなものでしょう。」

夕方になるとかく疲れが出て引きこもりがちな吉左衛門が、その晩のように上の伏見屋まで歩こうと言い出したことは、病

後初めての事と言つてもよかつた。この父は久しぶりで家を出て見るといふふうで、しばらく門前にたたずんで、まだ暮れ切らない街道の空をながめた。

「半蔵、この街道はどうなるう。」

「参観交代がなくなつたあとにですか。」

「そりゃ、お前、参観交代はなくなつても、まるきり街道がなくなりもしまいがね。まあ、金兵衛さんにもあつて、話して見るわい。」

心配してついでに行く半蔵に助けられながら、吉左衛門は坂になつた馬籠の町を非常に静かに歩いた。右に問屋、蓬菜屋ほうらいや、左に伏見屋、梶田屋ますだやなどの前後して新築のできた家々が両側に続いている。その間の宿場らしい道を登つて行くと、親子二人ふたりのものはある石垣いしがきのそばで向こうからやつて来る小前こまえの百姓にあつ

た。

百姓は吉左衛門の姿を見ると、いきなり自分の頬ほおかぶりしている手ぬぐいを取って、走り寄った。

「大旦那おおだんな、どちらへ、半蔵さまも御一緒かなし。お前さまがこんなに村を出歩かせるのも、御病気になつてから初めてだらずに。」

「あい。おかげで、日に日にいい方へ向いて来たよ。」

「まあ、おれもどのくらい心配したか知れすかなし。御病気が御病気だから、井戸の水で頭を冷やすぐらいは知れたものだと思つて、おれはお前さまのために恵那山えなさんまでよく雪を取りに行つて来たこともある。」

吉左衛門から見れば、これらの小前のはみんな自分の子供だった。

そこまで行くと、上の伏見屋も近い。ちようど金兵衛は山口村の祭礼狂言を見に二日泊まりで出かけて行って、その日の午後に帰つて来たというところだった。

「おゝ、吉左衛門さんか。これはおめずらしい。」

と言つて、金兵衛は後添のちぞいのお玉と共によろこび迎えた。

金兵衛も吉左衛門と同じように、もはや退役の日の近いことを知つていた。新築した伏見屋は養子伊之助に譲り、火災後ずつと上の伏見屋の方に残つていて、晩年のしたくに余念もない。六十六歳の声を聞いてから、中新田なかしんでんへ杉苗すぎなえ四百本、青野へ杉苗百本の植え付けなどを思い立つ人だ。

「お玉、お風呂ふろを見てあげな。」

という金兵衛の声を聞いて、半蔵は薄暗い湯どの方へ父を誘つた。病後の吉左衛門にとつて長湯は大の禁物だった。半蔵

は自分でも丸はだかになつて、手ばしこく父の背中を流した。その不自由な手を洗い、衰えた足をも洗つた。

「お父さん、湯ざめがするといけませんよ、またこないだのようなことがあると、大変ですよ。」

病後の父をいたわる半蔵の心づかいも一通りではなかつた。

間もなく上の伏見屋の店座敷では、山家風な行燈あんどんを置いたところに主客のものが集まつて、夜咄よばなしにくつろいだ。

「金兵衛さん、わたしも命拾いをしましたよ。」と吉左衛門は言つた。「ひところは、これで明日あしたもあるかと思ひましてね、枕まくらについたことがよくありましたよ。」

「そう言えば、あの和宮かずのみやさまの御通行の時分から弱つていらした。」と金兵衛も茶などを勧めながら答える。「吉左衛門さんはあんなに無理をなすつて、あとでお弱りにならなければいいがっ

て、お玉ともよくあの時分におうわさしましたよ。」

「もう大丈夫です。ただ筆を持たないのと、箒ほうきを持たないのは——これにはほとんど閉口です。」

「吉左衛門さんの庭掃除そうじは有名だから。」

金兵衛は笑った。そこへ伊之助も新築した家の方からやって来る。一同の話は宿場の前途に關係の深い今度の參觀交代制度改革のことに落ちて行つた。

「助郷すけごうにも弱りました。」と言い出すのは金兵衛だ。「宮様御通

行の時は特別の場合だ、あれは当分の臨機の処置だなんて言つたつて、そうは時勢が許さない。一度増助郷ましすけごうの例を開いたら、もう今までどおりでは助郷が承知しなくなつたそうですよ。」

「そういうことが当然起こつて来ます。」と吉左衛門が言う。

「現に、」伊之助は二人の話を引き取つて、「あの公家衆くげしゅうの御通行

は四月の八日でしたから、まだこんな改革のお達しの出ない前です。あの時は大湫泊まりで、助郷人足六百人の備えをしろうと言うんでしよう。みんな雇い銭でなけりや出て来やしません。」

「いくら公家衆でも、六百人の人足を出せばかばかしい。」と半蔵は言った。

「それもそうだ。」と金兵衛は言葉をつづける。「あの公家衆の御通行には、差し引き、四両二分三朱、村方の損になったというじゃありませんか。」

「とにかく、御通行はもつと簡略にしたい。」とまた半蔵は言った。「いずれこんな改革は道中奉行へ相談のあつたことでしょう。街道がどういふことになって行くか、そこまではわたしにも言えませんがね。しかし上から見ても下から見ても、参観交代のような儀式ばつた御通行がそういつまで保存のできるもの

でもないでしょう。繁文縟礼はんぶんじよくれいを省しんこう、その費用をもつと有益な事に充あてよう、なるべく人民の負担をも軽くしよう——それがこの改革の御趣意じゃありませんかね。」

「金兵衛さん、君はこの改革をどう思います。今まで江戸の方に人質のようになっていた諸大名の奥方や若様が、お国もとへお帰りになると言いますぜ。」

と吉左衛門が言うふると、旧い友だちも首をひねって、

「さあ、わたしにはわかりません。——ただ、驚きます。」

その時になって見ると、江戸から報じて来る文久年度の改革には、ある悲壮な意志の歴然と動きはじめたものがあつた。参覲交代のような幕府にとって最も重大な政策が惜しげもなく投

げ出されたばかりでなく、大赦は行なわれる、山陵は修復される、京都の方へ返していいような旧い慣例ふるはどしどし廃された。幕府から任命していた皇居九門の警衛までも撤去された。おおよそ幕府の力にできるようなことは、松平春嶽を中心の人物にし山内容堂を相談役とする新内閣の手で行なわれるようになった。

封建時代にあるものの近代化は、後世を待つまでもなく、すでにその時に始まって来た。松平春嶽、山内容堂、この二人ふたりはそれぞれすうせいの立場にあり、領地の事情をも異にしていたが、時代の趨勢すうせいに着眼して早くから幕政改革の意見を抱いだいたことは似ていた。その就職以前から幕府に対して同情と理解とを持つことにかけても似ていた。水戸の御隠居、肥前ひぜんの鍋島閑叟なべしまかんそう、薩摩さつまの島津久光の諸公と共に、生前の岩瀬肥後から啓発せらるるところの多かつたということも似ていた。あの四十に手が届くか届か

ないかの若さで早くこの世を去つた岩瀬肥後ののこした開国の思想が、その人の死後になつてまた働き初めたということにも不思議はない。蕃書調所ばんしよは洋書調所（開成所、後の帝国大学の前身）と改称される。江戸の講武所こうぶしよにおける弓術や犬追物いぬおものなぞのけいこは廃されて、歩兵、騎兵、砲兵の三兵が設けられる。井伊大老在職の当時に退けられた人材はまたそれぞれの閑却された位置から身を起こしつつある。門閥と兵力とにすぐれた会津藩主松平容保かたもりは、京都守護職の重大な任務を帯びて、新たにその任地へと向かいつつある。

時には、オランダ留学生派遣のうわさが夢のように半蔵の耳にはいる。二度も火災をこうむつた江戸城建築のころは、まだ井伊大老在職の日で、老中水野越前守が造り残した数百万両の金銀ふんどうの分銅はその時に費やされたといわれ、公儀の御金庫おかねぐらはあ

れから全く底を払ったと言われる。それほど苦しい身代のやり繰りの中で、今度の新内閣がオランダまで新知識を求めさせにやるといふその思い切った方針が、半蔵を驚かした。

ちようど、父吉左衛門は家にいて、例の寛くわんぎぎの間まにこもつて、もはや退役の日のしたくなぞを始めていた。祖父半六は六十六歳まで宿役人を勤め、それから家督を譲つて隠居したが、父は六十四歳でそれをするといふふうに。半蔵はこの父の様子をちよつとのぞいたあとで、南側の長い廊下を歩いて見た。オランダ留学生のうわさを思いながら、ひとり言つて見た。

「黒船はふえるばかりじゃないかしらん。」

とうとう、半蔵は父の前に呼ばれて、青山の家に伝わった古

い書類などを引き渡されるような日を迎えた。父の退役はもはや時の問題であつたからで。

本陣問屋庄屋の三役を勤めるに必要な公用の記録から、田畑家屋敷に関する反別、年貢、掟年貢などを記しつけた帳面の類までが否応なしに半蔵の前に取り出された。吉左衛門は半蔵に言いつけて、古い箱につけてある革の紐を解かせた。人馬の公用を保証するために、京都の大舎人寮、江戸の道中奉行所をはじめ、その他全国諸藩から送つてよこしてある大小種々の印鑑がその中から出て来た。宿駅の合印だ。吉左衛門はまた半蔵に言いつけて、別の箱の紐を解かせた。その中には、遠く慶長享保年代からの御年貢皆済目録があり、代々持ち伝えても破損と散乱との憂いがあるから、後の子孫のために一卷の軸とすると書き添えた先祖の遺筆も出て来た。

「これはお前の方へ渡す。」

父は半蔵の方で言おうとすることを聞き入れようとしなかつた。親の譲るものは、子の受け取るべきもの。そうひとりできめて、いろいろな事務用の帳面や数十通の書付などをそこへ取り出した。村方の関係としては、当時の戸籍とも言ふべき宗門人別にんべつから、検地、年貢、送籍、縁組、離縁、訴訟の手続きまでを記しつけたもの。

「これも大切な古帳だ。」

と吉左衛門は言つて、左の手でそれを半蔵の方へ押しやった。木曾山中の御免荷物として、木材通用の跡を記しつけたものだった。森林保護の目的から伐採を禁じられている五木の中でも、毎年二百駄だずつの檜ひのき、榎さわらの類たぐいの馬籠村にも許されて来たことが、その中に明記してあつた。

「なんだかおれも遠く来たような気がする。」と吉左衛門は言つた。「おれの長い道づれはあの金兵衛さんだが、どうやらけんかもせずにごここまで来た。まあ、何十年の間、おれはほとんどあの人と言ひ合つたことがない。ただ二度——そうさ、ただ二度あるナ。一度はお喜佐と仙十郎せんじゅうろう（上の伏見屋の以前の養子）の間に来た子供のことで。今一度は古い地所のこと。半蔵は覚えがあらう、あの地所のことでは金兵衛さんが大變な立腹で、いったい青山の欲心からこんなことが起こる、末長く御懇意に願いたいと思つているのに今からこんな問題が起こるようでは孫子の代が案じられるなんて、そう言つておれを攻撃したそうだ。おれはあとになつて人からその話を聞いた。何にしろあの時は金兵衛さんが顔色を変えて、おれの家へ古い書付などを見せに持ち込んで来た。あれはおれの覚えちがいだつたかも

しれんが、あんなに金兵衛さんも言わなくても済むことさ。いくらよい友だちでも、やつぱりあの人と、おれとは違う。今になつて見ると、よく二人はここまで一緒に歩いて来られたものだという気もするね。おれはお前、このとおりな人間だし、金兵衛さんと来たら、あの人とはなかなか細かいからね。土蔵の前の梨なしの木に紙袋かんぷくろをかぶせて置いて、大風に落ちた三つの梨のうちで、一番大きい梨の目方が百三匁、ほかの二つは目方が六十匁、五匁あつたと、そう言うような人なんだからね。」

過ぐる年の大火に、馬籠本陣の古い書類も多く焼失した。かろうじて持ち出したもの、土蔵の方へ運んであつたものは残つた。例の相州三浦にある本家から贈られた光琳こうりんの軸、それに火災前から表玄関の壁の上に掛けてあつた古い二本の鎗やりだけは遠い先祖を記念するものとして残つた。その時、吉左衛門は『青

山氏系図』としてあるものまで取り出して半蔵の前に置いた。

「半蔵、お前も知ってるように、吾家には出入りをする十三人の百姓がある。中には美濃の方から吾家へ嫁に來た人に随いて馬籠に移住した関係のものもある。正月と言えは吾家へ餅をつきに來たり、松を立てたりしに來るのも、先祖以來の関係からさ。あの百姓たちには目をかけてやれよ。それから、お前に断わつて置くが、いよいよおれも隠居する日が來たら、何事もお前の量見一つでやつてくれ——おれは一切、口を出すまいから。」

父はこの調子だ。半蔵の方でもう村方のことから街道の一切の世話まで引き受けてしまつたような口ぶりだ。

その日、半蔵は父のいる部屋から店座敷の方へ引きさがつて來た。こういう日の來ることは彼も予期していた。長い歴史のある青山の家を引き継ぎ、それを営むということが、もとより

彼の心をよろこばせないではない。しかし、実際に彼がこの家を背負つて立とうとなると、これがはたして自分の行くべき道かと考える。国学者としての多くの同志——ことに友人の景蔵などが寢食を忘れて国事に奔走している中で、父は病み、実の兄弟はなし、ただ一人お喜佐のような異腹はらちがいの妹に婿養子の祝次郎はあつても、この人は新宅の方について彼とはあまり話も合わなかつた。

秋らしい日が来ていた。店座敷の障子には、裏の竹林の方からでも飛んで来たかと思われるようなきりぎりすがいて、細長い肢あしを伸ばしながら静かに障子の骨の上をはっている。半蔵の目はそのすすしそうな青い羽をながめるともなくながめて、しばらく虫の動きを追っていた。

お民は店座敷へ来て言った。

「あなた、顔色が青いじゃありませんか。」

「そりゃ、お前、生きてる人間だもの。」

これにはお民も二の句が継げなかつた。そこへ継母のおまんが一人の男を連れてはいつて来た。

「半蔵、清助さんがこれから吾家へ手伝いに通つて来てくれま
すよ。」

和田屋の清助という人だ。半蔵の家のものとは遠縁にあたる。本陣問屋庄屋の雑務を何くれとなく手伝つてもらうには、持つて来いという人だ。清助は吉左衛門が見立てた人物だけあつて、青々と剃り立てた髻の跡の濃い腮をなでて、また福島役所の方から代替り本役だいがわの沙汰さたもないうちから、新主人半蔵のために祝がるまいい振舞の時のしたくなぞを始めた。客は宿役人の仲間の衆。それに組頭くみがしら一同。当日はわざと粗酒一献こん。そんな相談をおまん

にするのも、この清助だ。

青山、小竹両家で待たれる福島きりがみの役所からの剪紙きりがみ（召喚状）が届いたのは、それから間もなかった。それには青山吉左衛門せがれ、悴せがれ、年寄役小竹金兵衛せがれ、両人にて役所へまかりいでよとある。付添役二人、宿方惣代そうだい二人同道の上ともある。かねて願つて置いた吉左衛門らの退役と隠居がきき届けられ、跡役は二人の悴せがれたちに命ずると書いてないまでも、その剪紙きりがみの意味はだれにでも読めた。

半蔵も心を決した。彼は隣家の伊之助を誘つて、福島をさして出かけた。木曾路に多い栗くりの林にばらばら時雨しぐれの音の来るころには、やがて馬籠から行つた惣代そうだいの一人、梶田屋ますだやの相続人小左衛門、それに下男の佐吉なぞと共に、一同連れだつて福島からの帰路につく人たちであつた。彼が奥筋から妻籠まで引き返

して来ると、その本陣に寿平次が待ち受けていて、一緒に馬籠まで行こうという。

「寿平次さん、とうとうわたしも君たちのお仲間入りをしちまいましたよ。」

「みんなで寄つてたかつて、半蔵さんを庄屋にしないじゃ置かないんです。お父とつさんも、さぞお喜びでしょう。」

寿平次も笑つたり、祝つたりした。

宮様御降嫁の当時、公武一和の説を抱いて供奉ぐぶの列の中にあつた岩倉、千種ちぐさ、富小路とみのこうじの三人の公卿くげが近く差し控えを命ぜられ、つづいて蟄居ちつきよを命ぜられ、すでに落飾らくしやくの境涯きようがいにあるというほど一変した京都の方の様子も深く心にかかりながら、半蔵は妻籠本陣に一晩泊まったあとで、また連れと一緒に街道を踏んで行つた。妻籠からは、彼は自分を待ち受けてくれる人たちにと思つ

て、念のために帰宅を報じて置いた。

寿平次を加えてからの帰路は、一層半蔵に別な心持ちを起こさせた。大橋を渡り、橋場というところを過ぎて、下り谷くだだににかかった。歩けば歩くほど新生活のかどであるような、ある意識が彼の内部なかにさめて行つた。

「寿平次さん、君の方へは何か最近に來た便りたよがありますか——江戸からでも。」

「さあ、最近に驚かされたと言へば、生麦事件なまむぎぐらいのものです。」

「あの報知しらせはわたしの方へも早く來ました。ほら、横須賀よこすかの旅に、あの辺は君と二人で歩いて通つたところなんですがね。」

武州の生麦と言へば、勅使に隨行した島津久光の一行、その帰国を急ぐ途中での八月二十一日あたりの出來事は江戸の方か

ら知れて来ていた。あの英人の殺傷事件を想像しながら、木曾の尾垂おたるの沢深い山間やまあいを歩いて行くのは薄気味悪くもあるほど、まだそのうわさは半蔵らの記憶になまなましい。

「寿平次さん、わたしはそれよりも、あの薩摩さつまの同勢の急いで帰ったというのが気になりますよ。あれほどの事件が途中で起こったというのに、それをうつつちやらかして置いて行くくらいですからね。京都の方はどうでしょう。それほど雲行きが変わって来たんじゃないやありませんかね。」

「さあねえ。」

「寿平次さんは岩倉様の蟄居ちつきよを命ぜられたことはお聞きでしたかい。」

「そいつは初耳です。」

「どうもいろいろなことをまとめて考えて見ると、何か京都の

方には起こっている——」

「半蔵さんのお仲間からは何か言つて来ますか。今じゃ平田先生の御門人で、京都に集まつてる人もずいぶんあるでしょう。」

「しばらく景蔵さんからも便りたよがありません。」

「なにしろ世の中は多事だ。これからの庄屋の三年は、お父とつさん時代の人たちの二十年に当たるかもしれませぬね。」

二人は話し話し歩いた。

いちこくとち

一石柧いちこくとちまで帰つて行くと、そこは妻籠と馬籠の宿境にも近い。歩き遅れた半蔵らは連れの伊之助や小左衛門なぞに追いついて、峠の峰まで帰つて行つた。

「へえ、旦那だんな、おめでとうございます。」

半蔵はその峰の上で、そこに自分を待ち受けている峠村の組頭、その他二、三の村のものものの声を聞いた。

清水というところまで帰って行つた。馬籠の町内にある五人組の重立つたものが半蔵を出迎えた。陣場まで帰って行つた。問屋の九郎兵衛、馬籠の組頭で百姓総代の庄助、本陣新宅の祝次郎、その他半蔵が内弟子うちでしの勝重かつしげから手習い子供まで、それに荒町あらまちからのものなぞを入れると、十六、七人ばかりの人たちが彼を出迎えた。上町かみまちまで帰って行くと、問屋九太夫をはじめ、柿田屋ますだや、蓬菜屋ほうらいや、梅屋、いずれももう髪かみの白いそれらの村の長老たちが改まつた顔つきで、馬籠の新しい駅長をそこに待ち受けていた。

五

「あなたは勤王家ですか。」

「勤王家かとはなんだい。」

「その方のお味方ですか、きいてるんですよ。」

「お民、どうしてお前はそんなことをおれにきくんのだい。」

半蔵は本陣の奥の上段の間にいた。そこは諸大名が宿泊する部屋へやにあててあるところで、平素はめつたに家のもものはいらぬ。お民は仲の間の方から、そこに片づけものをしておつといる夫を見に来た時だ。

「どうしてということもありませんけれど、」とお民は言った。

「お母つかさんがそんなことを言っていましたから。」

半蔵は妻の顔をながめながら、「おれは勤王なんてことをめつたに口にしたこともない。今日、自分で勤王家だなんて言う人の顔を見ると、おれはふき出したくなる。そういう人は勤王を売る人だよ。ごらん——ほんとうに勤王に志してるものなら、

かるがるしくそんなことの言えるはずもない。」

「わたしはちよつときいて見たんですよ——お母つかさんがそんなことを言っていましたからね。」

「だからさ、お前もそんなことを口にするんじゃないよ。」

お民は周囲を見回した。そこは北向きで、広い床の間から白地に雲形を織り出した高麗縁こうらいべりの畳の上まで、茶室のような静かさ厳肅さがある。厚い壁を隔てて、街道の方の騒がしい物音もしない。部屋から見える坪庭には、山一つ隔てた妻籠つまごより温暖あたたかな冬が来ている。

「そう言えば、これは別の話ですけど、こないだ兄さん（寿平次）が来た時に、わたしにそう言っていましたよ——平田先生の御門人は、幕府方から目をつけられているようだから、気をおつけッて。」

「へえ、寿平次さんはそんなことを言っていたかい。」

將軍上洛じょうろうくの前触れと共に、京都の方へ先行してその準備をしようとする一橋慶喜ひとつばしよしのぶの通行筋はやはりこの木曾街道で、旧暦十月八日に江戸発駕はつがという日取りの通知まで来ているころだった。道橋の見分に、宿割しゆくわりに、その方の役人はすでに何回となく馬籠へも入り込んで来た。半蔵はこの山家に一橋公を迎える日のあるかと想おもって見て、上段の間を歩き回っていた。

「どれ、お大根でも干して。」

お民は出て行つた。山家では沢庵漬たくあんづけの用意などにいそがしかった。いずれももう冬じたくだ。野菜たくわを貯えたり、赤蕪あかかぶを漬つけたりすることは、半蔵の家でも年中行事の一つのようになつていた。その時、半蔵は妻を見送つたあとで、彼女のそこに残して置いて行つた言葉を考へて見た。深い窓にのみこもり暮ら

しているような継母のおまんが、しかも「わたしはもうお婆さばあんだ」を口癖くちべにしている五十四歳の婦人で、いつのまに彼の志みやぶを看破みやぶつたろうとも考えて見た。その心持ちから、彼は一層あの賢い継母を畏おそれた。

数日の後、半蔵は江戸の道中奉行所どちゆうぶぎようしよから来た通知を受け取つて見て、一橋慶喜の上京がにわかにわかに東海道經由となつたことを知つた。道普請まで命ぜられた木曾路の通行は何かの都合で模様替えになつた。その冬の布告によると、將軍上洛の導従が東海道を通行するものが多いから、十二月九日以後は旅人は皆東山道さんだうを通行せよとある。

「半蔵さま、来年は街道もごたごたしますぞ。」

「さあ、おれもその覚悟だ。」

清助と半蔵とはこんな言葉をかわした。

年も暮れて行つた。明ければ文久三年だ。その時になつて見ると、東へ、東へと向かつていた多くの人の足は、全く反対な方角に向かうようになった。時局の中心はもはや江戸を去つて、京都に移りつつあるやに見えて来た。それを半蔵は自分が奔走する街道の上に読んだ。彼も責任のあるからだとなつてから、一層注意深い目を旅人の動きに向けるようになった。

ほんま 本馬六十三文、からじり 軽尻四十文、人足四十二文、これは馬籠から

み 隣宿美濃のおちあい 落合までのだちん 駄賃として、半蔵が毎日のように問屋場

の前で聞く声である。將軍上洛のじしょうらく 日も近いと聞く新しい年の二

月には、彼は京都市行きの新撰組のしんせんぐみ 一隊をこの街道に迎えた。一

番隊から七番隊までの列をつくつた人たちが雪の道を踏んで馬

籠に着いた。いずれも江戸の方で浪士のろうし 募集に応じ、尽忠報国

をまつこうに振りかざし、京都の市中を騒がす攘夷党のじょうい 志士浪

人に対抗して、幕府のために粉骨砕身しようという劍客ぞろいだ。一道の達人、諸国の脱藩者、それから無頼ぶらいな放浪者なぞから成る二百四十人からの群れの腕が馬籠の問屋場の前で鳴った。

二月も末になつて、半蔵のところへは一人ひとりの訪問者があつた。宵よいの口を過ぎたところで、道に迷つた旅人なぞの泊めてくれという時刻でもなかつた。街道もひっそりしていた。

「旦那だんな、大草仙蔵おおぐさせんぞうというかたが見えています。」

囲炉裏いろりばたで※造りわらづくろをしていた下男の佐吉がそれを半蔵のところへ知らせに來た。

「大草仙蔵？」

「旦那にお目にかかれればわかると言つて、囲炉裏ばたの入り口の方においでたぞなし。」

不思議に思つて半蔵は出て見た。京都方面で奔走していると聞いた平田同門の一人が、着流しに雪駄せったばきで、入り口の土間のところに立っていた。大草仙蔵とは変名で、実は先輩の暮田正香くれたまさかであつた。

「青山君、君にお願いがあつて来ました。」

と客は言つたが、周囲に気を兼ねてすぐに切り出そうともしない。この先輩は歩き疲れたというふうで、上がり端はなのところはなに腰をおろした。ちょうど囲炉裏の方には人もいないのを見すまし、土間の壁の上に高く造りつけてある鶏の鳥屋とやまで見上げて、それから切り出した。

「実は、今、中津川から歩いて来たところですよ。君のお友だち

の浅見（景蔵）君はお留守ですが、ゆうべはあそこの家に泊めてもらいました。青山君、こんなにおそく上がって御迷惑かもしれませんが、今夜一晚御厄介ごやつかいになれますまいか。青山君はただわたしたちのことを何もお聞きになりますまい。」

「しばらく景蔵さんからも便りたよがありませんから。」

「わたしはこれから伊那いなの方へ行って身を隠すつもりです。」

客の言葉は短い。事情もよく半蔵にはわからない。しかし変名で夜おそく訪ねたずて来るくらいだ。それに様子もただではない。「この先輩は幕府方の探偵たんていにでもつけられているんだ。」その考えがひらめくように半蔵の頭へ来た。

「暮田くれたさん、まあこつちへおいでください。しばらく待っていてください。くわしいことはあとで伺いましょう。」

半蔵は土間にある草履ぞうりを突ツかけながら、勝手口から裏の方

へ通う木戸をあけた。その戸の外に正香まさかを隠した。

とにかく、厄介な人が舞い込んで来た。村には目証めあかしも滞在している。狭い土地で人の口もうるさい。どうしたら半蔵はこの夜道に疲れて来た先輩を救って、同志も多く安全な伊那の谷の方へ落としてやることができようと考えた。家には、と見ると、父は正月以来裏の二階へ泊まりに行っている。お民は奥で子供らを寝かしつけている。通いで来る清助はもう自宅の方へ帰って行っている。弟子でしの勝重はまだ若し、佐吉や下女たちでは用が足りない。

「これはお母つかさんに相談するにかぎる。」

その考えから、半蔵はありのままな事情を打ち明けて、客をかくまってもらうために継母のおまんさかを探した。

「平田先生の御門人か。一晚ぐらいのことなら、土蔵の中でも

よろしかろう。」

おまんは引き受け顔に答えた。

暮田正香は半蔵と同国の人であるが、かつて江戸に出て水戸藩士藤田東湖ふじたとうこの塾じゅくに学んだことがあり、東湖没後に水戸の学問から離れて平田派の古学に目を見開いたという閱歴くわいれきを持つている。信州北伊那郡小野村の倉沢義髓くらさわよしゆきを平田鉄胤かねたねの講筵こうえんに導いたのも、この正香である。後に義髓は北伊那における平田派の先駆をなしたという関係から、南信地方に多い平田門人で正香の名を知らないものはない。

この人を裏の土蔵の方へ導こうとして、おまんは提灯ちようちんを手にしながら先に立って行った。半蔵も座ざや座蒲団ざぶたんなどを用意してそのあとについた。

「足もとにお気をつけくださいよ。石段を降りるところなぞが

「ごぞいますよ。」

とおまんは客に言つて、やがて土蔵の中に用でもあるように、大きな鍵かぎで錠前をねじあけ、それを静かに抜き取つた。金網の張つてある重い戸があくと、そこは半蔵夫婦が火災後しばらくかりずまい仮住居にもあてたところだ。塵ごみでも敷けば、客のいるところぐらい設けられないこともなかつた。

「お客さんはお腹なかがおすきでしたらうね。」

それとなくおまんが半蔵にきくと、正香はやや安心したといふふうで、

「いや、したくは途中でして来ました。なにしろ、京都を出る時は、二昼夜歩き通しに歩いて、まるで足が棒のようでした。それから昼は隠れ、夜は歩くというようにして、ようやくここまでたどり着きました。」

おまんは提灯の灯を片すみの壁に掛け、その土蔵の中に二人のものを置いて立ち去った。

「半蔵、お客さんの夜具はあとから運ばせますよ。」
との言葉をも残した。

「青山君、やりましたよ。」

二人ぎりになった時、正香はそんなことを言い出した。その調子が半蔵には、実に無造作にも、短気にも、とつぴにも、また思い詰めたようにも聞こえた。

同志九人、その多くは平田門人あるいは準門人であるが、等持院に安置してある足利尊氏あしかがたかうじ以下、二將軍の木像の首を抜き取つて、二十三日の夜にそれを三条河原さんじようがわらに晒さらしものにしたという。

それには、今の世になつてこの足利らが罪状の右に出るものがある、もし旧悪を悔いて忠節を抽ぬきんでることがないなら、天下の有志はこぞつてその罪を糺ただすであらうとの意味を記しるし添えたという。ところがこの事を企てた仲間のうちから、会津方（京都守護の任にある）の一人の探偵があらわれて、同志の中には縛つに就いたものもある。正香は二昼夜兼行でその難をのがれて来たことを半蔵の前に白状したのであつた。

正香に言わせると、將軍上洛じょうらくの日も近い。二条河原の光景は、それに対する一つの示威である、尊王の意志の表示である、死んだ武将の木像の首を晒さらしものにするようなことは子供らしい戯れとも聞こえるが、しかしその道徳的な効果は大きい、自分らはそれをねらつたのであると。

この先輩の大胆さには、半蔵も驚かされた。「物学びするとも

「がら」の実行を思う心は、そこまで突き詰めて行つたかと考えさせられた。同時に、平田大人うし没後の門人と一口には言つても、この先輩に水戸風な学者の影響の多分に残っていることは争えないとも考えさせられた。

「だれか君を呼ぶ声がする。」

正香は戸に近づくと人のけはいを聞きとがめるようにして、耳のところへ手をあてがった。半蔵も耳を澄ました。お民だ。彼女は佐吉に手伝わせて客の寝道具をそこへ持ち運んで来た。

「暮田さん、非常にお疲れのようですから、これでわたしも失礼します。お話はあす伺います。お休みください。」

そのまま半蔵は正香のそばを離れて、母屋もやの方へ帰つて行つた。どれほどの人の動き始めたとも知れないような京都の方のことを考え、そこにある友人の景蔵のことなぞを考えて、その

晩は彼もよく眠られなかった。

翌日の昼過ぎに、半蔵はこつそり正香を見に行つた。御膳何人前、皿何人前と箱書きのしてある器物の並んだ土蔵の棚を背後にして、座を敷いた座蒲団の上に正香がさびしそうにすわつていた。前の晩に見た先輩の近づきがたい様子とも違つて、多感で正直な感じのする一人の国学者をそこに見つけた。

その時、半蔵は腰につけて持つて行つた瓢箪を取り出した。木盃もくはいを正香の前に置いた。くたぶれて来た旅人をもてなすようにして、酒を勧めた。

「ほ。」と正香は目をまるくして、「君はめずらしいものをごちそうしてくれませぬね。」

「これは馬籠の酒です。伏見屋と梺田屋ますだやと、二軒で今造つています。一つ山家の酒を味わつて見てください。」

「どうも瓢箪のように口の小さいものから出る酒は、音からして違いますね。コツ、コツ、コツ、コツ——か。長道中でもして来た時には、これが何よりですよ。」

まるで子供のようなよろこび方だ。この先輩が瓢箪から出る酒の音を口まねまでしてよろこぶところは、前の晩に拳こぶしを握り固め、五本の指を屈かがめ、後ろから髻たぶきでもつかむようにして、木像の首を引き抜く手まねをして見せながら等持院での現場の話を半蔵に聞かせたその同じ豪傑とも見えなかった。

そればかりではない。京都麩屋町ふやまちの染め物屋で伊勢久いせきゆうと言えれば理解のある義気に富んだ商人として中津川や伊那地方の国学者で知らないもののない人の名が、この正香の口から出る。平田門人、三輪田綱一郎みわたつないちろう、師岡正胤もろおかまさたねなぞのやかましい連中が集まっていたという二条衣ころもの棚たな——それから、同門の野代広助のしろひろすけ、梅村

真一郎、それに正香その人をも従えながら、秋田藩物頭役として入京していた平田鉄胤が寓居ぐうきよのあるところだという錦小路——それらの町々の名も、この人の口から出る。伊那から出て、公卿と志士の間の連絡を取ったり、宮廷に近づいたり、鉄胤門下としてあらゆる方法で国学者の運動を助けている松尾多勢子たせこのよな婦人とも正香は懇意にして、その人が帯の間にはさんでいる短刀、地味な着物に黒縹くろじゆす子の帯、長い笄こうがい、櫛くし巻まきにした髪かみの姿までを話のなかに彷彿ほうふつさせて見せる。日ごろ半蔵が知りたく思っている師鉄胤や同門の人たちの消息ばかりでなく、京都の方の町の空気まで一緒に持って来たようなのも、この正香だ。

「そう言えば、青山君。」と正香は手にした木盃もくはいを下に置いて、膝ひざをかき合わせながら言った。「君は和宮さまかづのみやの御降嫁あたりからの京都をどう思いますか。薩摩さつまが来る、長州が来る、土佐

が来る、今度は会津が来る。諸大名が動いたから、機運が動いて来たと思うのは大違いさ。機運が動いたからこそ、薩州公などは鎮撫ちんぶに向かつて来たし、長州公はまた長州公で、藩論を一変して乗り込んで来た。そりや、君、和宮さまの御降嫁だつても、この機運の動いてることを関東に教えたのさ。ところが関東じゃ目がさめない。勅使下向げこうとなつて、慶喜公は將軍の後見に、越前公えちぜんは政事総裁にと、手を取るように言つて教えられて、ようやくいくらか目がさめましたろうさ。しかし、君、世の中は妙なものじゃありませんか。あの薩州公や、越前公や、それから土州公なぞがいくらやきもきしても、名君と言われる諸大名の力だけでこの機運をどうすることもできませんね。まあ薩州公が勅使を奉じて江戸の方へ行つてゐる間にですよ、もう京都の形勢は一変してましたよ。この正月の二十一日には、大坂

にいる幕府方の名高い医者をして、その片耳を中山大納言の邸やしきに投げ込むものがある。二十八日には千種家の臣ちぐさを殺して、その右の腕を千種家の邸に、左の腕を岩倉家の邸に投げ込むものがある。攘夷の血祭りだなんて言つて、そりや乱脈なものさ。岩倉様などが恐れて隠れるはずじゃありませんか。まあ京都へ行つて見たまえ、みんな勝手な気焰きえんを揚げていますから。中にはもう関東なんか眼中にないものもいますから。こないだもある人が、江戸のようなところから来て見ると、京都はまるで野蛮人の巢だと言つて、驚いていましたよ。そのかわり活気はあります。参政寄人よりうどというような新しいお公家くげ様の政事団体もできました、どんな草深いところから出て来た野人でも、学習院へ行きさえすれば時事を建白することができる。見たまえ——今の京都には、なんでもある。公武合体から破約攘夷までである。

そんなものが渦うずを巻まいてる。ところでこの公武合体ですが、こいつがまた眉唾物まゆつばものです。そこですよ、わたしたちは尊王の旗を高く揚げたい。ほんとうに機運の向かうところを示したい。足利尊氏のような武将の首を晒さらしものにして見せたのも、実を言えばそんなところから来ていますよ。」

「暮田くれたさん。」と半蔵は相手の長い話をさえぎった。「鉄胤先生は、いったいどういう意見でしょう。」

「わたしたちの今度やった事件にですか。そりゃ君、鉄胤先生にそんな相談をすれば、笑われるにきまつてる。だからわたしたちは黙って実行したんです。三輪田元綱がこの事件の首唱者なんですけれど、あの晩は三輪田は同行しませんでした。」

沈黙が続いた。

半蔵はそう長くこの珍客を土蔵の中に隠して置くわけに行かなかった。暮れないうちに早く馬籠を立たせ、すくなくもその晩のうちに清内路せいないじまでは行くことを教えねばならなかった。清内路まで行けば、そこは伊那道にあたり、原信好のぶよしのような同門の先輩が住む家もあつたからで。

半蔵は正香にきいた。

「暮田さんは、木曾路きそじは初めてですか。」

「権兵衛街道ごんべえから伊那へはいつたことはありますが、こつちちの方は初めてです。」

「そんなら、こうなさるといい。これから妻籠つまごの方へ向かつて行きますと、橋場はしばというところがありますよ。あの大橋を渡ると、道が二つに分かれていまして、右が伊那道です。実は母と

も相談しまして、橋場まで吾家うちの下男に送らせてあげることになりました。」

「そうしていただければ、ありがたい。」

「あれから先はかなり深い山の中ですが、ところどころに村もありますし、馬も通います。中津川から飯田いいたへ行く荷物はあの道を通るんです。あらさがわ蘭川について東南へ東南へと取っておいでなさればいい。」

おまんは着流しでやって来た客のために、脚絆ぎゃはんなどを母屋もやの方から用意して来た。粗末ではあるが、と言って合羽かつばまで持つて来て客に勧めた。佐吉も心得ていると見えて、土蔵の前には新しい草鞋わらじがそろえてあった。

正香は性急な人で、おまんや半蔵の見ている前で無造作に合羽かほへ手を通した。礼を述べるとすぐ草鞋をはいて、その足で土

蔵の前の柿かきの木の下の歩道を歩き回った。

「暮田さん、わたしもそこまで御一緒にまいります。」

と言つて、半蔵は表門から出ずに、裏の木小屋の方へ客を導いた。木戸を押すと、外に本陣の稲荷いなりがある。竹藪たけやぶがある。石垣いしがきがある。小径こみちがある。その小径について街道を横ぎつて行つた。樋といをつたう水の奔りはし流れて来ているところへ出ると、静かな村の裏道がそこに続いている。

その時、正香はホツと息をついた。半蔵や佐吉に送られて歩あきながら、

「青山君、篤胤あつたね先生の古史伝を伊那の有志が上木じようぼくしているように聞いていますが、君もあれには御関係ですかね。」

「そうですね。去年の八月に、ようやく第一帙ちゆうを出しましたよ。」
「地方の出版としては、あれは大事業ですね。秋田（篤胤の生

地)でさえ企てないようなことを伊那の衆が発起してくれたと言つて、鉄胤先生などもあれには身を入れておいででしたつけ。なにしろ、伊那の方はさかんですね。先生のお話じゃ、毎年門人がふえるというじゃありませんか。」

「ある村などは、全村平田の信奉者だと言つてもいいくらいでしょう。そのくせ、まつざわよしあき松沢義章という人が行商して歩いて、こまもの小間物類をあきないながら道を伝えた時分には、まだあの谷には古学というものはなかつたそうですが。」

「機運やむべからずさ。もとおり本居、平田の学説というものは、それを正しいとするか、あるいは排斥するか、すくなくも今の時代に生きるもので無関心ではいられないものですからねえ。」

あわただしい中にも、送られる正香と、送る半蔵との間には、こんな話が尽きなかつた。

半蔵は峠の上まで客と一緒に歩いた。別れぎわに、

「暮田さんは、宮川寛斎という医者をお存じでしょうか。」

「美濃の国学者でしょう。名前はよく聞いていますが、ついあつたことはありません。」

「中津川の景蔵さん、香蔵さん、それにわたしなどは、三人とも旧い弟子ですよ。鉄胤先生に紹介してくださいましたのも宮川先生です。あの先生も今じゃ伊那の方ですが、どうしておいででしょうか——」

「そう言えば、青山君は鉄胤先生に一度あつたきりだそうですね。一度あつたお弟子でも、十年そばにいるお弟子でも、あの鉄胤先生には同じようだ。君の話もよく出ますよ。」

この人の残して置いて行つた言葉も、半蔵には忘れられなかつた。

もはや、暖かい雨がやって来る。二月の末に京都を発^たつて来たという正香は尾張^{おわり}や仙台^{せんだい}のような大藩の主人公らまで勅命に
応じて上京したことは知るまいが、ちようどあの正香が夜道を
急いで来るころに、この木曾路には二藩主の通行もあつた。三
千五百人からの尾張の^{つぎ}人足が来て馬籠の宿に詰めた。あの時、
二百四十匹の^{つぎ}継立ての馬を残らず雇い上げなければならなかつ
たほどだ。木曾街道筋の通行は初めてと聞く仙台藩主の場合に
も、時節柄同勢やお供は減少という触れ込みでも、千六百人の
一大旅行団が京都へ向けてこの宿場を通過した。しかも応接に
困難な東北弁で。

「半蔵、お前のところへ来たお客さんも、無事に伊那の小野村

まで落ち延びていらしたろうか。」

こんなうわさをおまんがするころは、そこいらは桃の春だった。一橋慶喜の英断に出た参観交代制度の変革の結果は、驚かれるほどの勢いでこの街道にあらわれて来るようになった。旧暦三月のよい季節を迎えて見ると、あの江戸の方で上巳じょうみの御祝儀を申し上げるとか、御能拜見おのうみを許されるとか、または両山の御霊屋おたまやへ参詣さんけいするとかのほかには、人質も同様に、堅固で嚴重な武家屋敷のなかにこもり暮らしていたどこの簾中れんちゆうとかどこの若殿とかいうような人たちが、まるで手足の鎖を解き放たれたようにして、続々帰国の旅に上つて来るようになった。

越前の女中方、尾張の若殿に簾中、紀州の奥方ならびに女中方、それらの婦人や子供の一行が江戸の方から上つて来て、いずれも本陣や問屋の前に駕籠かごを休めて行った。尾州の家中成瀬隼人正なるせはやとのしろう

の女中方、肥前島原の女中方、因州いんしゅうの女中方なぞの通行が続きに続いた。これが馬籠峠うまろうどというところかの顔つきの婦人もある。ようやく山の上の空気を自由に吸うことができたと言いたげな顔つきのものもある。半蔵の家に一泊ときめて、五、六人で比丘尼寺びくにでらの蓮池はすいけの方まで遊び回り、谷川やがわに下帯洗濯せんたくなぞをして来る女中方もある。

上の伏見屋の金兵衛は、半蔵の父と同じようにすでに隠居の身であるが、持って生まれた性分しやうぶんからじつとしていられなかつた。きのうは因州の分家にあたる松平まつへい隠岐守おきのかみの女中方が通り、きようは岩村の簾中方が子供衆まで連れての通行があると聞くと、そのたびに旧ふるい友だちを誘いに来た。

「吉左衛門さん、いくら御静養中だつて、そう引つ込んでばかりいなくてもいいでしょう。まあすこし出てごらんさい。お

きれいと言つていいか、おみごとと言つていいか、わたしは拝見しているうちに涙がこぼれて来ますよ。」

毎日のような女中方の通行だ。半蔵や伊之助は見物どころではなかつた。この帰国する人たちの通行にかぎり、木曾下四宿へ五百人の新助郷しんすけぢゆうが許され、特にお定めより割のよい相対雇あいたいやといの賃銭まで許され、百人ばかりの伊那の百姓は馬籠へも来て詰めていた。町人四分、武家六分と言われる江戸もあとに見捨てて来た屋敷方の人々は、住み慣れた町々の方の財界の混乱を顧みるいとまもないようであつた。

「国もとへ、国もとへ。」

その声は——解放された諸大名の家族が揚げるその歓呼は——過去三世紀間の威力を誇る東照宮の覇業はぎようも、内部から崩れくずかけて行く時がやつて来たかと思わせる。中には、一団の女中方が

馬籠の町のなかだけを全部徒歩おひろいで、街道の両側に群がる普通の旅行者や村の人たちの間を通り過ぎるのもある。桃から山桜へと急ぐ木曾の季節のなかで、薩州の御隠居、それから女中の通行のあとには、また薩州の簾中れんちゆうの通行も続いた。

第七章

一

文久三年は当時の排外熱の絶頂に達した年である。かねてうわさのあつた將軍家茂いえもちの上洛じょうらくは、その声のさわがしいまづ最中に行なわれた。

二月十三日に將軍は江戸を出発した。時節柄、万事質素に、という触れ込みであつたが、それでもその通行筋にあたる東海道では一時旅人の通行を禁止するほどの嚴重な警戒ぶりいみづで、三月四日にはすでに京都に到着し、三千あまりの兵に護まもられながら二条城にはいった。この京都訪問は、三代將軍家光いえみつの時代ま

で怠らなかつたという入朝の儀式を復活したものであり、当時の常識とも言うべき大義名分の声に聴きいて幕府方においてもいささか鑑かんみるところのあつた証拠であり、王室に対する過去の非礼を陳謝する意味のものであつて、同時に公武合体の意をいたし、一切の政務は従前どおり関東に委任するよしの御沙汰ごさたを拜するためであつた。宮様御降嫁以来、帝みかどと將軍とはすでに義理ある御兄弟ごきょうだいの間柄である。もしこれが一層王室と將軍家とを結びつけるなかだちとなり、政令二途に出るような危機を防ぎ止め、動揺する諸藩の人心をしずめることに役立つなら、上洛に要する莫大ぼくだいな費用も惜しむところではないと言つて、関東方がこの旅に多くの望みをかけて行つたというに不思議はない。遠く寛永時代かんえいにおける徳川將軍の上洛と言へば、さかんな関東の勢いは一代を圧したもので、時の主上ですらわざわざ二条城

へ行幸せられたという。いよいよ將軍家参内さんだいのおりには、多くの公卿衆くげはお供の格で、いずれも装束着用しょうぞくで、先に立つて案内役を勤めたものであつたという。二百十余年の時はこの武將の位置を変えたばかりでなく、その周囲をも変えた。三条河原に残る示威のうわさに、志士浪人の徘徊はいかいに、決死の覚悟をもつてする種々な建白たてまげに、王室回復の志を抱く公卿たちの策動に、洛中の風物がそれほど薄暗い空氣に包まれていたことは、實際に京都の土を踏んで見た關東方の想像以上であつたと言わるる。ちようど水戸藩主も前後して入洛じゅらくしたが、將軍家の入洛はそれと比べものにならないほどのひそやかさで、道路に拝觀するものもまれであつた。そればかりではない。近臣のものは家茂いえもちの身を案じて、なんとかして將軍を護まもらねばならないと考えるほどの恐怖と疑心とにさえ驅られたという。將軍はまだ二十歳にも

達しない、宮中にはいつてはいかに思われても武士の随したがい行くべきところでない、それには鋭い懐剣を用意して置いて参内の時にひそかに差し上げようというのが近臣のものの計画であったという。さすがに家茂はそんなものを懐ふところにする人ではなかった。それを見るとたちまち顔色を変えて、その剣を座上に投げ捨てた。その時の家茂の言葉に、朝廷を尊崇して参内する身に危害を加えようとするもののあるべき道理がない、もしこんな懐剣を隠し持つとしたら、それこそ朝廷を疑い奉るにもひとしい、はなはだもつて無礼ではないかと。それにはかたわらに伺候していた老中板倉伊賀守も返す言葉がなくて、その懐剣をしりぞけてしまったという。その時、將軍はすでに朝服を着けていた。参内するばかりにしたくができた。麻あさがみしもネ杯あさがみしもを着けた五十人あまりの侍衆さむらいしゅうがその先を払って、いずれも恐れ入った態度を

取つて、ひそやかに二条城を出たのは三月七日の朝のことだ。台徳公の面影おもかげのあると言わるる年若な將軍は、小御所こごしよの方でも肅然と威儀正しく静座せいざせられたというが、すべてこれらのことは当時の容易ならぬ形勢を語っていた。

この將軍の上洛は、最初長州侯の建議にもとづくという。しかし京都にはこれを機会に、うんと関東方の膏あぶらを絞ろうという人たちが待っていた。もともと真木和泉まきいずみらを急先鋒きゆうせんぽうとする一派の志士が、天下変革の兆きざしもあらわれたとし、王室の回復も遠くないとして、攘夷をもつてひそかに討幕の手段とする運動を起こしたのは、すでに弘化安政こうかのころからである。あの京都寺田屋の事変などはこの運動のあらわれであった。これは次第に王室回復の志を抱くいだ公卿たちと結びつき、歴史的にも幕府と相いれない長州藩の支持を得るようになって、一層組織のあるもの

となつた。尊王攘夷は実にこの討幕運動の旗じるしだ。これは王室の衰微を嘆き幕府の専横を憤る烈はげしい反抗心から生まれたもので、その出発点においてまじりけのあつたものではない。その計画としては攘夷と討幕との一致結合を謀はかり、攘夷の名によつて幕府の破壊に突進しようとするものである。あの水戸藩士、藤田東湖ふじたとうこ、戸田蓬軒とだほうけんらの率先して唱え初めた尊王攘夷は、幾多の屈折を経て、とうとうこの実行運動にまで来た。

排外の声も高い。もとより開港の方針で進んで来た幕府当局でも、海岸の防備をおろそかにしていいとは考えなかつたのである。参観交代さんかんこうたいのような幕府にとつて最も重大な政策が惜しげもなく投げ出されたというのも、その一面は諸大名の江戸出府

に要する無益な費用を省いて、兵力を充実し、武備を完全にす
るためであつた。いかんせん、徳川幕府としては諸藩を統一し
てヨーロッパよりする勢力に対抗しうるだけの信用をも実力を
も持たなかつた。それでも京都方を安心させるため、宮様御降
嫁の当時から外夷がいにの防禦ぼうぎよを誓い、諸外国と取り結んだ条約を引
き戻もとすか、無法な侵入者を征伐するか、いずれかを選んで叡慮えいりよ
を安んずるであろうとの言質げんちが与えてある。この一時の気休め
が京都方を満足させるはずもない。周囲の事情はもはやあいま
いな態度を許さなかつた。將軍の上洛に先だつてその準備のた
めに京都に滞在していた一橋慶喜ひとつばしよしのおですら、三条実美さんじようさねとみ、阿野公誠あのきんみ
を正使とし、滋野井実在しげのいさねあり、正親町公董おおぎまちなきんただ、姉小路公知あねのこうじきんともを副使とす
る公卿たちから、將軍入洛じゆらく以前にすでに攘夷期限を迫られてい
たほどの時である。今度の京都訪問を機会に、家茂いえもちの名によつ

てこの容易ならぬ問題に確答を与えないかぎり、たとい帝御自身の年若な將軍に寄せらるる御同情があり、百方その間を周旋する慶喜の尽力があるにしても、將軍家としてはわずか十日ばかりの滞在の予定で京都を辞し去ることはできない状態にあつた。

しかし、その年の二月から、遠く横浜の港の方には、十一隻から成るイギリス艦隊の碇泊ていはくしていたことを見のがしてはならない。それらの艦隊がややもすれば自由行動をも執りかねまじき態度を示していたことを見のがしてはならない。それにはいわゆる生麦事件なまむぎなるものを知る必要がある。

横浜開港以来、足掛け五年にもなる。排外を意味する横浜襲

撃が諸浪士によつて企てられておるとのうわさは幾回となく伝
わつたばかりでなく、江戸高輪東禅寺たかなわとうぜんじにある英国公使館は襲わ
れ、外人に対する迫害沙汰ざたも頻々ひんびんとして起こつた。下田しもだ以来の
最初の書記として米国公使館に在勤していたヒュウスケンなぞ
もその犠牲者の一人だ。ひとり彼は日米外交のそもそもからハリスと
共にその局に当たつた人で、日本の国情に対する理解も同情も
深かつたと言われるが、江戸三田古川橋みたふるかわばしのほとりで殺害された。
これらの外人を保護するため幕府方で外国御用の出役しゅつやくを設置し、
三百余人の番衆の子弟をしてそれに当たらせるなぞのことがあ
ればあるほど、多くの人の反感はますます高まるばかりであつ
た。そこへ生麦事件だ。

生麦事件とは何か。これは意外に大きな外国関係のつまずき
を引き起こした東海道筋での出来事である。時は前年八月二十

一日、ところは川崎駅に近い生麦村、ホンコン香港在留の英国商人リチャードソン、同じ香港ホンコンより来た商人の妻ボロオデル、横浜在留の英国商人マアシヤル、およびクラアク、この四人のものが横浜から川崎方面に馬を駆つて、おりから江戸より帰西の途にあるさつましまづひさみつ薩摩の島津久光が一行に行きあつた。勅使大原左衛門督おおはらさえもんのかみに随行して来た島津氏の供衆も数多くあつて帰りの途中も混雑するであらうから、ことに外国の事情に慣れないものが多くて自然行き違いを生ずべき懸念けねんもあるから、当日は神奈川辺かながわの街道筋を出歩くなとは、かねて神奈川奉行から各国領事を通じて横浜居留の外国人へ通達してあつたというが、その意味がよく徹底しなかつたのであろう。馬上の英国人らは行列の中へ乗り入れようとしたのでもなかつた。言語の不通よりか、習慣の相違よりか、薩摩のお手先衆から声がかかつたのをよく解しなかつたら

しい。歩行の自由を有する道路を通るにさしつかえはあるまいというふうで、なおも下りの方へ行き過ぎようとしたから、たまらない。五、六百人の同勢まもに護られながら久光の駕籠かごも次第に近づいて来る時で、二人の武士ふたりの抜いた白刃がたちまち英国人らの腰の辺にひらめいた。それに驚いて、上りの方へ走るものがあり、馬を止めてまた走り去るものがあり、残り一人のリチャードソンは松原というところで落馬して、その馬だけが走り去った。薩摩方の武士は落馬した異人の深手ふかでに苦しむのを見て、六人ほどでその異人の手を取り、畑中へ引き込んだという。傷つきのがれた三人のうち、あるものは左の肩を斬きられ、あるものは頭部へ斬りつけられ、一番無事な婦人も帽子と髪の毛の一部を斬られながら居留地までたどり着いた。この変報と共に、イギリス、フランスの兵士、その他の外国人は現場に急行して、

神奈川奉行支配取締りなどと立ち会いの上、リチャードソンの死体を担架に載せて引き取った。翌日は横浜在留の外人はすべて業を休んだ。荘厳な行列によつて葬儀が営まれた。そればかりでなく、外人は集会して強い態度を執ることを申し合わせた。神奈川奉行を通じて、凶行者の逮捕せられるまでは島津氏の西上を差し止められたいとの抗議を持ち出したが、薩摩の一行はそれを顧みないで西に帰つてしまった。

この事件の起こつた前月には仏国公使館付きの二人の士官が横浜港崎町（しやうかいちやう）の辺で重傷を負わせられ、同じ年の十二月の夜には品川御殿山（しながわごてんやま）の方に幕府で建造中であつた外国公使館の一区域も長州人士のために焼かれた。排外の勢いはほとんど停止するところを知らない。当時の英国代理公使ニイルは、この日本人の態度を改めさせなければならぬとでも考えたものか、横浜在

留外人の意見を代表し、断然たる決心をもつて生麦事件の責任を問うために幕府に迫つて来た。海軍少将クロパアの率いる一隻からの艦隊が本国政府の指令のもとに横浜に到着したのは、その結果だ。

このことが將軍家茂滞在中の京都の方に聞こえた。イギリス側の抗議は強硬をきわめたもので、英国臣民が罪なしに殺害せられるような惨酷ざんこくな所業に対し、日本政府がその当然の義務を怠るのみか、薩州侯をして下手人げしゅにんを出させることもできないのは、英国政府を侮辱するものであるとし、第一明らかにその罪を陳謝すべき事、償金十萬ポンドを支払うべき事、もし満足な答えが得られないなら、英国水師提督は艦隊の威力によつて目的を達するに必要な行動を執るであろうと言ひ、のみならず日本政府の力で薩摩の領分に下手人を捕えることもできないなら、

英国は直接に薩州侯と交渉するであろう、それには艦隊を薩摩の港に差し向け、下手人を捕え、英国海軍士官の面前において斬首すべき事、被害者の親戚および負傷者の慰藉料として二万五千ポンドを支払うべき事をも付け添えて来た。この通牒の影響は大きかった。のみならず、諸藩の有志が評定のために参集していた学習院へ達した時は、イギリス側の申し出はいくらかゆがめられた形のものとなつて諸有志の間に伝えられた。それは左の三か条について返答を承りたい、とあつたという。

- 一、島津久光をイギリスに相渡し申さるべきや。
- 二、償銀として十万ポンド差し出さるべきや。
- 三、薩摩の国を征伐いたすべきや。

「関東の事情切迫につき、英艦防禦のため大樹たいじゆ（家茂のこと）帰府の儀、もつともわけの訳がらに候えども、京都ならびに近海の守備警衛は大樹において自ら指揮これあるべく候そうろう。かつ、攘夷決戦じやういのおりから、君臣一和にこれなく候ては相叶あひかなわざるのところ、大樹関東へ帰府せられ、東西相離れ候ては、君臣の情意相通ぜず、自然隔離の姿に相成るべく、天下の形勢救うべからざるの場合にたちいたり申すべく候。当節、大樹帰城の儀、叡慮えいりよにおいても安んぜられず候間、滞京ありて、守衛の計略厚く相運あひめぐらされ、宸襟しんきんを安んじ奉り候よう思し召され候。英艦応接の儀は浪華港なにわみなとへ相回し、拒絶談判これあるべく、万一兵端を開き候節は大樹自身出張、万事指揮これあり候わば、皇国の志気挽回ばんかいの機会にこれあるべく思し召され候。関東防禦の儀は、しかるべき人体相選にんていみ申し付けられ候よう、御沙汰ごさたに候事。」これは小御所こごしよ

において関白から一橋慶喜に渡されたというものである。学習院に参集する有志はいずれもこれを写し伝えることができた。とりあえず幕府方は海岸の防備を嚴重にすべきことを諸藩に通達し、イギリス側に向かつては返答の延期を求めた。打てば響くような京都の空気の中で、人々はいずれも伝奏てんそうからの触れ書を読み、所司代がお届けの結果を待った。あるものはイギリスの三か条がすでに拒絶せられたといい、あるものは仏国公使が調停に起たつたといい、あるものは必ず先方より兵端を開くであろうと言った。諸説は紛々ふんぶんとして、前途のほども測りがたかつた。

四人の外人の死傷に端緒を発する生麦事件は、これほどの外交の危機に推し移った。多年の排外熱はついにこの結果を招いた。けれどもこのことは攘夷派の顧みるところとはならなかつ

た。討幕へと急ぐ多くの志士は、むしろこの機会を見のがすま
いとしたのである。当時、京都にあつた松平春嶽は、公武合体
の成功もおぼつかないと断念してか、事多く志と違ふといふ
うで、政事総裁の職を辞して帰国したといい、急を聞いて上京
した島津久光もかなり苦しい立場にあつて、これも国もとの海
岸防禦を名目に、わずか数日の滞在で帰つてしまつたといふ。
このえただひろ
近衛忠熙は潜み、中川宮（青蓮院）も隠れた。

二

香蔵は美濃中津川の間屋に、半蔵は木曾馬籠の本陣に、二人
は同じ木曾街道筋にいて、京都の様子を案じ暮らした。二人の
友人で、平田篤胤没後の門人仲間なる景蔵は、当時京都の方に

あつて国事のために奔走していたが、その景蔵からは二人あてにした報告がよく届いた。いろいろなことがその中に報じてある。帝みかどには御祈願のため、すでに加茂かもへ行幸せられ、そのおりは家茂および一橋慶喜以下の諸有司、それに在京の諸藩士が鳳輦ほうれんに供奉ぐぶしたことが報じてあり、さらに石清水いwashimizuへも行幸の思おぼし召めしがあつて、攘夷の首途かどでとして男山八幡おとしこやまはちまんの神前で將軍に節刀を賜たまはるであろうとのおうわさも報じてある。これらのことは、いずれも攘夷派の志士が建白にもとづくという。のみならず、場合によつては帝の御親征だよをすら望んでいる人たちのあることが報じてある。この京都便だよりを手にするたびに、香蔵にしても、半蔵にしても、いずれも容易ならぬ時に直面したことを感じた。

四月のはじめには、とうとう香蔵も景蔵のあとを追つて、京都の方へ出かけて行つた。三人の友だちの中で、半蔵一人だけ

が馬籠の本陣に残った。

「どうも心が騒いでしかたがない。」

半蔵はひとり言つて見た。

その時になると、彼は中津川の間屋の仕事を家のものに任せ置いて京都の方へ出かけて行くことのできる香蔵きようがいの境涯きやうがいをうらやましく思った。友だちが京都を見うるの日は、師と頼む平田鉄胤かねたねと行動を共にしうる日であろうかと思ひやつた。あの師の企図し、また企図しつつあるものこそ、まことの古代への復帰であろうと思ひやつた。おそらく国学者としての師は先師平田篤胤の遺志をついで、紛々としたほまれそしりのためにも惑わされず、諸藩の利害のためにも左右されず、よく大局を見て進まれるであろうと思ひやつた。

父吉左衛門は、と見ると、病後の身をいたわりながら裏二階

の梯子段はしごだんを昇のぼつたり降りたりする姿が半蔵の目に映る。馬籠の本陣庄屋問屋の三役を半蔵に譲つてからは、全く街道のことに口を出さないといいものも、その人らしい。父が発病の当時には、口も言うことができない、足も起たつことができない、手も動かすことができない。治療に手を尽くして、ようやく半身だけなおるにはなおつた。父は日ごろ清潔好きで、自分で本陣の庭や宅地をよく掃除そうじしたが、病が起こつてからは手が萎しおれて箒ほうきを執るにも不便であつた。父は能筆で、お家流をよく書き、字体も婉麗えんれいなものであつたが、病後は小さな字を書くこともできなかつた。まるで七つか八つの子供の書くような字を書いた。この父の言葉に、おかげで自分も治療の効によつて半身の自由を得た、幸いに食事も便事も人手をわずらわさないで済む、しかし箒と筆とこの二つを執ることの不自由なのは実に悲しいと。この嘆

息を聞きたびに、半蔵は胸を刺される思いをして、あの友の香蔵のような思い切った行動は執れなかつた。

八畳と三畳の二部屋へやから成る味噌納屋みそなやの二階が吉左衛門の隠居所にあててある。そこに父は好きな美濃派の俳書ひながわりゅうや蝮川流の将棋の本なぞをひろげ、それを朝夕の友として、わずかに病後をなぐさめている。中風患者の常として、とかくはかばかしい治療の方法がない。他目よそめにももどかしいほど回復もおそかつた。「お民、おれは王滝おうたきまで出かけて行って来るぜ。あとのことは、清助さんにもよく頼んで置いて行く。」

と半蔵は妻に言つて、父の病を禱いのるために御嶽神社おんたけへの参籠さんろうを思い立つた。王滝村とは御嶽山のすそにあたるところだ。木曾の総社の所在地だ。ちやうど街道も参観交代制度変革のあとをうけ、江戸よりする諸大名が家族の通行も一段落を告げた。

半蔵はそれを機会に、往復数日のわずかな閑ひまを見つけて、医薬の神として知られた御嶽の神の前に自分を持って行こうとした。同時に、香蔵の京都行きから深く刺激された心を抱いて、激しい動揺かちゆうの渦中へ飛び込んで行ったあの友だちとは反対に、しばらく寂しい奥山の方へ行こうとした。

王滝の方へ持つて行つて神前にささげるための長歌もできた。半蔵は三十一字の短い形の歌ばかりでなく、時おりは長歌をも作つたので、それを陳情きとう祈祷の歌と題したものに試みたのである。

「いよいよ半蔵もお出かけかい。」

と言つてそばへ来るのは継母のおまんだ。おまんは裏の隠居

所と母屋もやの間を往復して、吉左衛門の身のまわりのことから家事の世話まで、馬籠の本陣にはなくてならない人になっている。高遠藩たかとおの方に聞こえた坂本家から来た人だけに、相応な教養もあつて、取つて八つになる孫娘のお糸くめに古今集こきんしゅうの中の歌などを諳誦あんしやうさせているのも、このおまんた。

「お母さんつか、留守をお願いしますよ。」と半蔵は言つた。「わたしもそんなに長くかからないつもりです。三日も参籠さんろうすればすぐに引き返して来ます。」

「まあ、思い立つた時に出かけて行つて来るがいい。お父さんとうさんも大層よろこんでおいでのようなだよ。」

家にはこの継母があり、妻があり、吉左衛門の退役以来手伝かたいに通つて来る清助がある。半蔵は往復七日ばかりの留守を家のものに頼んで置いて、王滝の方へ向かおうとした。下男の佐

吉は今度も供をしたと言い出したが、半蔵は佐吉も家に残して置いて、弟子の勝重だけを連れて行くことにした。勝重も少年期から青年期に移りかける年ごろになつて来て、しきりに同行を求めるところで。

神前への供米、『静の岩屋』二冊、それに参籠用の清潔で白い衣裳なぞを用意するくらいにとどめて、半蔵は身軽にしたい。勝重は、これも半蔵と一緒に往くことを楽しみにして、「さあ、これから山登りだ」という顔つきだ。

本陣の囲炉裏ぼたでは、半蔵はじめ一同集まつてこういう時の習慣のような茶を飲んだ。そこへ思いがけない客があつた。

「半蔵さん、君はお出かけになるところですかい。」

と言つて、勝手を知つた囲炉裏ばたの入り口の方からはいつて来た客は、他の人ほかでもない、三年前に中津川を引き揚げて伊那の方へ移つて行つた旧ふるい師匠だ。宮川寛齋みやがわかんさいだ。

寛齋はせつかく楽しみにして行つた伊那の谷もおもしろくない、そこにある平田門人仲間とも折り合はず、飯田いいたの在に見つけた最後の「隠れ家」がまであとに見捨てて、もう一度中津川をさして帰つて行こうとする人である。かつては横浜貿易を共にした中津川の商人万屋安兵衛よろずややすべえの依頼をうけ、二千四百両からの小判を預かり、馬荷一駄だに宰領の付き添いで帰国したその同じ街道の一部を、多くの感慨をもつて踏んで来た人である。以前の伊那行きには細君も同道であつたが、その人の死をも見送り、今度はひとり馬籠まで帰つて来て見ると、旧ふるいなじみの伏見屋金兵衛ふしみやきんべえはすでに隠居し、半蔵の父も病後の身でいるありさまだ。そう

いう寛齋もめつきり年を取つて来た。

「先生、そこはあまり端近はしぢかです。まあお上がりください。」

と半蔵は言つて、上がり端はなのところはなに腰掛けて話そうとする旧師を囲炉裏ばたに迎えた。寛齋は半蔵から王滝行きを思い立つたことを聞いて、あまり邪魔すまいと言つたが、さすがに長い無沙汰ぶさたのあとで、いろいろ話が出る。

「いや、伊那の三年は大失敗。」と寛齋は頭をかきかき言つた。「今だから白状しますが、横浜貿易のことが祟たつたと見えて、どこへ行つても評判が悪い。これにはわたしも弱りましたよ。あの当時、君らに相談しなかつたのは、わたしが悪かつた。横浜の話はもう何もしてくださるな。」

「そう先生に言つていただくとありがたい。実は、わたしはこういう日の来るのを待つていました。」

「半蔵さん、君の前ですが、伊那へ行つてわたしは自分の持つて
るものまで失つちまいましたよ。おまけに、医者にはやらさず、手
習い子供は来ずサ。まあ三年間の土産みやげと云えば、古史伝の上木じようぼく
を手伝つて来たくらいのものです。前島正弼まさすけ、岩崎長世、北原稻
雄かたぎり、片桐春一、伊那にある平田先生の門人仲間はみんなあの仕事
を熱心にやっていますよ。あの出版しゅつばんは大変な評判で、津和野藩
あたりからも手紙が来るなんて、伊那の衆はえらい意気込みさ。
そう云えば、暮田正香くれたまさかが京都から逃げて来る時に、君の家にも
お世話になつたそうですな。」

「そうでした。着流しに雪駄せったばきで、吾家うちへお見えになつた時
は、わたしもびつくりしました。」

「あの先生も思い切つたことをやつたもんさ。足利將軍の木像あしかが
の首を引き抜くなんて。あの事件には師岡正胤もろおかまさたねなども関係して

いますから、同志を救い出せと言うんで、伊那からもわざわざ運動に京都まで出かけたものもありましたつけ。暮田正香も今じゃ日陰の身でさ。でも、あの先生のことだから、京都の同志と呼応して伊那で一旗あげるなんて、なかなか黙ってはられない人なんです。とにかく、わたしが出かけて行つた時分と、今とじゃ、伊那も大違い。あの谷も騒がしい。」

寛齋は尻しりを持ち上げたかと思うとまた落ちつけ、煙草たばこ入れを腰に差したかと思うとまた取り出した。そこへお民も茶を勧めに来て、夫の方を見て、

「あなた、店座敷の方へ先生を御案内したら。お母つかさんもお目にかかりたいと言っていますに。」

「いや、そうしちゃいられません。」と寛齋は言った。「半蔵さんもお出かけになるところだ。わたしはこんなにお邪魔するつ

もりじゃなかつた。きょうお寄りしたのはほかでもありませんが、実は無^{むじん}尽を思い立ちまして、上の伏見屋へも今寄つて来ました。あの金兵衛さんにもお話して来ました。半蔵さん、君にもぜひお骨折りを願いたい。」

「それはよろこんでいたしますよ。いずれ王滝から帰りました上で。」

「そうどころじゃない。あいにく香蔵も京都の方で、君にでもお骨折りを願うよりほかに相談相手がな^い。どうも男の年寄りというやつは具合の悪いもので、わたしも養子の厄^{やっかい}介にはなりたくないと思うんです。これから中津川に落ちつくか、どうか、自分でも未定です。そうです、今ひと奮発です。ひよつとすると伊勢^{いせ}の国の方へ出かけることになるかもしれません。」

無^{むじん}尽加入のことを頼んで置いて、やがて寛齋は馬籠の本陣を辞

して行つた。あとには半蔵が上がり端はなのところはなに立つて、客を見送りに出たお民や彼女が抱いて来た三番目の男の子の顔をながめたまま、しばらくそこに立ち尽くした。「氣の毒な先生だ。すうき しょうがい 数奇な生涯だ。」と半蔵は妻に言つた。「国学というものに初めておれの目をあけてくれたのも、あの先生だ。あの年になつて、奥さんに死に別れたことを考えてごらんな。」

「中津川の香蔵さんの姉さんが、お亡なくなりになつた奥さんなんですか。よほど年の違きう姉弟きょうだいと見えませぬ。」

「先生には娘さんがたつた一人ひとりある。この人がまた伶俐りこうな人で、中津川でも才女と言われた評判な娘さんさ。そこへ養子に來たのが、今医者をしている宮川さんだ。」

「わたしはちつとも知らなかつた。」

「でも、お民、世の中は妙なものじゃないか。あの宮川先生が

おれたちを捨てて行つてしまふとは思われなかつたよ。いづれは旧い弟子ふるでしのところへもう一度帰つて来てくださる日のあるだろうと思つていたよ。その日が来た。」

三

京都の方のことも心にかかりながら、半蔵は勝重かつしげを連れて、
王滝おうたきをさして出かけた。その日は須原泊まりすはらといふことにして、
ちようどその通り路みちにあたる隣宿妻籠本陣つまごの寿平次が家へちよつと顔を出した。お民の兄であるからと云うばかりでなく、同じ街道筋の庄屋仲間として互いに心配を分けあうのも寿平次だ。

「半蔵さん、わたしも一緒にそこまで行こう。」

と言いながら、寿平次は草履ぞうりをつツかけたまま半蔵らの歩い

て行くあとを追つて来た。

旧暦四月はじめの旅するによい季節を迎えて、上り下りの諸講中こうじゅうが通行も多い。伊勢いせへ、金毘羅こんびらへ、または善光寺へとこころざす参詣者さんけいしやの団体だ。奥筋へと入り込んで来る中津川の商人も見える。荷物をつけて行く馬の新しい腹掛け、赤革あかがわの馬具から、首振るたびに動く麻の蠅はえはらいまでが、なんとなくこの街道に活気を添える時だ。

寿平次は半蔵らと一緒に歩きながら言った。

「御嶽おんたけ行きとは、それでも御苦労さまだ。山はまだ雪で、登れますまいに。」

「え、三合目までもむずかしい。王滝まで行つて、あそこの里で二、三日参籠さんろうして来ますよ。」

「馬籠のお父とつさんはまだそんなですかい。君も心配ですね。そ

う言えば、半蔵さん、江戸の方の様子は君もお聞きでしたらう。」
「こんなことになるんじゃないかと思つて、わたしは心配して
いました。」

「それさ。イギリスの軍艦が来て江戸は大騒ぎだそうですね。
来月の八日とかが返答の期限だと言うじゃありませんか。これ
は結局、償金を払わせられることになりましようね。むやみと
攘夷じやういなんてことを煽あおり立てるものがあるから、こんな目にあう。
そりや攘夷党だつて、国を憂えるところから動いているには相
違ないでしょうが、しかしわたしにはあのお仲間の気が知れな
い。いつたい、外交の問題と国内の政事をこんなに混同してし
まつてもいいものでしょうかね。」

「さあねえ。」

「半蔵さん、これでわたしが庄屋の家に生まれなかつたら、今

ごろは京都の方へでも飛んで行つて、鎖港攘夷だなんて押し歩いていられるかもしれないよ。街道がどうなろうと、みんながどう難儀をしようとして、そんなことにおかまいなしでいられるくらいなら、もともと何も心配することはなかつたんです。」

妻籠の宿はずれのところまでついて来た寿平次とも別れて、さらに半蔵らは奥筋へと街道を進んだ。翌日は早く須原をたち、道を急いで、昼ごろには棧かけはしまで行つた。雪解ゆきげの水をあつめた木曾川は、渦うずを巻いて、無数の岩石の間に流れて来ている。休むにいい茶屋もある。鶯うぐいすも鳴く。王滝口への山道はその対岸にあつた。御嶽登山をこころざすものはその道を取つても、越立こしだち、下条しもじょう、黒田などの山村を経て、常磐とぎわの渡しわしの付近に達することができた。

間もなく半蔵らは街道を離れて、山間に深い林をつくる谷に分け入った。檜、樺にまじる雑木も芽吹きの時で、さわやかな緑が行く先によみがえっていた。王滝川はこの谷間を流れる木曾川の支流である。登り一里という沢渡峠まで行くと、遙拝所がその上にあつて、麻利支天から奥の院までの御嶽全山が遠く高く容をあらわしていた。

「勝重さん、御嶽だよ。山はまだ雪だね。」

と半蔵は連れの少年に言つて見せた。層々相重なる幾つかの三角形から成り立つような山々は、それぞれの角度をもつて、剣ヶ峰を絶頂とする一大巖頭にまで盛り上がっている。隠れたところにあるその孤立。その静寂。人はそこに、常なく定めなき流転の力に対抗する偉大な山嶽の相貌を仰ぎ見ることができず。覚明行者のような早い登山者が自ら骨を埋めたと言ひ伝え

らるるのもその頂上にある谿谷けいこくのほとりだ。

「お師匠さま、早く行きましよう。」

と言い出すのは勝重ばかりでなかった。そう言われる半蔵も、自然のおごそかさに打たれて、長くはそこに立っていられなかった。早く王滝の方へ急ぎたかった。

御嶽山のふもとにあたる傾斜の地勢に倚より、王滝川に臨み、里宮の神職と行者の宿とを兼ねたような禰宜ねぎの古い家が、この半蔵らを待っていた。川には橋もない。山から伐きつて来た材木を並べ、筏いかだに組いんで、村の人たちや登山者の通行に備えてある。半蔵は三沢みさわというところでのその渡しを渡つて、日の暮れるころに禰宜ねぎの宮下の家に着いた。

「皆さんは馬籠の方から。それはよくお出かけくださいました。馬籠の御本陣ということはわたしもよく聞いております。」

と言つて半蔵を迎えるのは宮下の主人だ。この彌宜ねぎは言葉を
ついで、

「いかがです。お宅の方じゃもう花もおそいでしょうか。」

「さあ、山桜が三分ぐらいは残つていましたよ。」と半蔵が答える。

「それですもの。同じ木曾でも陽気は違いますね。南の方の花たよの便りを聞きましたから、この王滝辺のものが花を見るまでには、一月もかかりますよ。」

「ね、お師匠さま。わたしたちの来る途中には、紫色の山つづじがたくさん咲いていましたつけね。」

と勝重も言葉を添えて、若々しい目つきをしながら周囲を見

回した。

半蔵らは夕日の満ちた深い谷を望むことのできるような部屋へやに来ていた。障子の外へは川鶴かわせぎれいも来る。部屋の床の間には御嶽山蔵王大権現ざおうだいこんげんと筆太に書いた軸が掛けてあり、壁の上には注連繩しめなわなども飾つてある。

「勝重さん、来てごらん、これが両部神道というものだよ。」

と半蔵は言つて、二人してその掛け物の前に立つた。全く神仏こんぶつを混淆こんこうしてしまつたような床の間の飾り付けが、まず半蔵をまごつかせた。

しかし、気の置けない宿だ。ここにはくたぶれて来た旅人や参詣者さんけいしやなどを親切にもてなす家族が住む。当主の禰宜ねぎで十七、八代にもなるような古い家族の住むところでもある。髯ひげの白いお爺さんじい、そのまたお婆さんばあ、幾人いくたりの古い人たちがこの屋根の下

に生きながらえているとも知れない。主人の宮下はちよいちよい半蔵を見に来て、風呂ふろも山家での馳走ちそうの一つと言つて勧めてくれる。七月下旬の山開きの日を待たなければ講中も入り込んで来ない、今は谷もさびしい、それでも正月十五日より二月十五日に至る大寒の季節をしのいでかんもうの寒詣でかんもうに続いて、ぽつぽつ祈願をこめに来る参詣者が絶えない、と言つて見せるのも主人だ。行者や中座なかざに引率されて来る諸国の講中が、吹き立てる法螺ほらの貝の音と共に、この谷間に活気をそそぎ入れる夏季の光景は見せたいようだ、と言つて見せるのもまた主人だ。

夕飯後に、主人はまた半蔵を見に来て言った。

「それじゃ、御参籠ごさんろうはあすからとなさいますか。ここに來ている間、塩断しおだちをなさるかたがあり、五穀をお断ちになるかたがあり、精進しょうじんけつじん潔斎けつさいもいろいろです。火の氣を一切おつかいになら

ないで、水でといた蕎麦粉そばこに、果実くだものぐらいで済ませ、木食もくじきの行ぎようをなさるかたもあります。まあ、三度の食は一度ぐらいになすつて、なるべく六根ろっこんを清浄にして、雑念を防ぎさえすれば、それでいいわけですね。」

ようやく。そうだ、ようやく半蔵は騒ぎやすい心をおちつけるにいいような山里の中の山里とも言うべきところに身を置くことができた。王滝はことに夜の感じが深い。暗い谷底もやの方に燈火あかりのもれる民家、川の流れを中心にわき立つ夜の靄もや、すべてがひっそりとしていた。旧暦四月のおぼろ月のあるころに、この静かな森林地帯へやって来たことも、半蔵をよろこばせた。

半蔵が連れて来た勝重は、美濃落合の稲葉屋から内弟子うちでしとし

て預かつてからもはや三年になる。短い袴はかまに、前髪をとつて、せつせと本を読んでいた勝重も、いつのまにか浅黄色の襦袢じゆばんの襟えりのよく似合うような若衆姿になつて来た。彼は綿密な性質で、なりふり服装なぞにあまりかまわない方の勉強家であるが、持つて生まれた美しきは宿の人の目をひいた。かわるがわるこの少年をのぞきに來る若い娘たちのけはいはしても、そればかりは半蔵もどうすることもできなかつた。

「勝重さん、君は、くたぶれたら横にでもなるさ。」

「お師匠さま、勝手にやりますよ。どうもお師匠さまの足の速いには、わたしも驚きましたよ。須原すはらから王滝まで、きょうの山道はかなり歩きがありました。」

間もなく勝重は高いびきだ。半蔵はひとり行燈あんどんの灯ひを見つめて、長いこと机の前にすわつていた。大判の薄藍色うすあいいろの表紙から、

古代紫の糸で綴じてある装幀そうていまで、彼が好ましく思う意匠の本がその机の上にひろげてある。それは門人らの筆記になる平田篤胤の講本だ。王滝の宿であけて見たいと思つて、馬籠を出る時に風呂敷包みの中に入れて来た上下二冊の『静の岩屋』だ。

さびしく聞こえて来る夜の河かわの音は、この半蔵の心を日ごろ精神の支柱と頼む先師平田大人うしの方へと誘つた。もしあの先師が、この潮流の急な文久三年度に生きるとしたら、どう時代の暗礁あんしやうを乗り切つて行かれるだろうかと思ひやつた。

攘夷——戦争をもあえて辞しないようなあの殺気を帯びた声はどうだ。半蔵はこのひっそりとした深山幽谷の間へ来て、敬慕する故人の前にひとりの自分を持つて行つた時に、馬籠の街道であくせくと奔走する時にもまして、一層はつきりとその声を耳の底に聞いた。景蔵、香蔵の親しい友人を二人までも京都

の方に見送つた彼は、じつとしてはいられなかつた。熱する頭をしずめ、逸はやる心を抑おさえて、平田門人としての立場に思いを潜めねばならなかつた。その時になると、同じ勤王に志すとは言つても、その中には二つの大きな潮流のあることが彼に見えて来た。水戸の志士藤田東湖らから流れて来たものと、本居平田諸大人に源を発するものと。この二つは元来同じものではない。名高い弘道館の碑文にもあるように、神州の道を敬い同時に儒者の教えをも崇あがめるのが水戸の傾向であつて、国学者から見れば多分に漢意からうしやうのまじつたものである。その傾向を押し進め、国家無窮の恩に報いることを念とし、楠公父子なんこうですら果たそうとして果たし得なかつた武将の夢を實現しようとしているものが、今の攘夷を旗じるしにする討幕運動である。もとより攘夷は非常手段である。そんな非常手段に訴えても、真木和泉まきいずみらの志士

が起こした一派の運動は行くところまで行かずに置かないような勢いを示して来た。

この国ははたしてどうなるだろう。明日は。明後日は。そこまで考え続けて行くと、半蔵は本居大人がのこした教えを一層尊いものと思った。同時代に満足しなかつたところから、過去に探求の目を向けた先人はもとより多い。その中でも、最も遠い古代に着眼した宣長のような国学者が、最も新しい道を発見して、その方向をあとから歩いて出て行くものにさし示してくれたことをありがたく思った。

「勝重さん、風引くといけないよ。床にはいつて、ほんとうにお休み。」

半蔵は行燈あんどんのかげにうたた寝している少年を起こして、床につかせ、それからさらに『静の岩屋』を繰つて見た。この先師ののこした著述は、だれにでもわかるように、また、ひろく読まれるように、その用意からごく平易な言葉で門人に話しかけた講本の一つである。その中に、半蔵は異国について語る平田大人を見た。先師は天保十四年に没した故人のことで、もとより嘉永六年の夏に相州浦賀に着いたアメリカ船の騒ぎを知らず、まして十一隻からのイギリス艦隊が横浜に入港するまでの社会の動揺を知りようもない。しかし平田大人のような人の目に映るヨーロッパから、その見方、その考え方を教えられることは半蔵にとって実にうれしくめずらしかった。

『静の岩屋』にいわく、

「さて又、近ごろ西の極はてなるオランダといふ国よりして、一種

の学風おこりて、今の世に蘭学と称するもの、則ちそれでござる。元来その国柄と見えて、物の理を考へ究むること甚だ賢く、仍ては発明の説も少なからず。天文地理の学は言ふに及ばず、器械の巧みなること人の目を驚かし、医薬製煉の道殊にくはしく、その書どももつぎつぎと渡り来りて世に弘まりそめたるは、即ち神の御心であらうでござる。然るに、その渡り来る薬品どもの中には効能の勝れたるもあり、又は製煉を尽して至つて猛烈なる類もありて、良医これを用ひて病症に應ずればいちじるき効験をあらはすもあれど、もとその薬性を知らず、又はその薬性を知りてもその用ふべきところを知らず、もしその病症に應ぜざれば大害を生じて、忽ち人命をうしなふに至る。これは、譬へば、猿に利刀を持たせ、馬鹿に鉄砲を放たしむるやうなもので、まことに危いことの甚しいでござる。さて、その究理の

くはしきは、悪しきことにはあらざれども、彼の紅夷ら、世には真の神あるを知らず。人の智は限りあるを、限りなき万づの物の理を考へ究めんとするにつけては、強ひたる説多く、元よりさかしらなる国風なる故に、現在の小理にかかはつて、かへつて幽神の大義を悟らず。それゆへにその説至つて究屈にして、我が古道の妨げとなることも多いでござる。さりながら、世間の有様を考ふるに、今は物ごと新奇を好む風俗なれば、この学風も儒仏の道の栄えたるごとく、だんだんと弘まり行くことであらうと思はれる。しからんには、世のため、人のためとも成るべきことも多からうなれども、又、害となることも少なかるまいと思はれるでござる。是こそは彼の吉事に是の凶事のいつぐべき世の中の道なるをもつて、さやうには推し量り知られることとでござる。そもそもかく外国々より万づの事物の我が大御国

に参り来ることは、皇神すめらみかみたちの大御心にて、その御神徳の広大なる故ゆえに、善よき悪あしきの選えらみなく、森羅万象しんらばんしやうことごとく皇国すめらみくにに御引寄せあそばさるる趣おもきを能よく考わへ弁わかへて、外国とつくにより来る事物はよく選えらみ採とりて用もちふべきことこれで、申ますも畏かしこまざることなれども、是これすなはち大神等おおかみかみたちの御心掟みこころおきてと思おもひ奉ためらるるでござる。」

半蔵は深こいたため息をついた。それは、自分の浅学こころうと固陋ころうとばかり正直とを嘆息する声だ。先師と言いえば、外国よりはいつて来るものを異端邪説だかつとして蛇蝎だかつのように憎にくみきらつた人のように普通に思おもわれているが、『静の岩屋』なぞをあけて見ると、近くは朝鮮、シナ、インド、遠くはオランダまで、外国の事物が日本に集あまつて来るのは、すなわち神の心であるというような、こんな広い見方がしてある。先師は異国の借り物をかなぐり捨てて本然ほんねんの日本に帰れと教える人ではあつても、むやみにそれを

排斥せよとは教えてない。

この『静の岩屋』の中には、「夷^{えいびす}」という古言まで引き合いに出して、その言葉の意味が平常目に慣れ耳に触れるとは異なつた事物をさしていうに過ぎないことも教えてある。たとえば、ありやこりやに人の前にすえた膳^{ぜん}は「えびす膳」、四角であるべきところを四角でなく裁ち合わせた紙は「えびす紙」、元来外用の薬種とされた芍薬^{しやくやく}が内服しても病のなおるといふところから「えびす薬」（芍薬の和名）というふう^{ひとみ}に。黒くてあるべき髪^{あか}の毛が黒く、黒くてあるべき瞳が青ければこそ、その人は「えびす」である、とも教えてある。

半蔵はひとり言つて見た。

「師匠はやつぱり大きい。」

半蔵の心に描く平田篤胤とは、あの本居宣長を想い^{おも}見るたび

に想像せらるるような美丈夫という側の人ではなかつた。彼はある人の所蔵にかかる先師の画像というものを見たことがある。広い角額かくびたい、大きな耳、遠いところを見ているような目、彼がその画像から受けた感じは割合に面長おもながで、やせぎすな、どこか角張かくばつたところのある容貌ようぼうの人だ。四十台か、せいぜい五十に手の届く年ごろの面影おもかげと見えて、まだ黒々とした髪も男のさかりらしく、それを天保時代てんぽうの風俗のような髻たぶきに束ねてあつた。それは見台をわきにした座像ざざうで、三蓋菱さんがいびしの羽織はおりの紋や、簡素な線があらわした着物の襷ひだにも特色があつたが、ことに、その左の手を寛くつろいだ形に置き、右の手で白扇をついた膝ひざこそは先師のものだ、と思つて、心をとめて見た覚えがある。見台の上に、先師畢生ひつせいの大きな著述とも言うべき『古史伝』稿本の一つが描いてあつたことも、半蔵には忘れられなかつた。あだかも、先師は

あの画像から膝ひざを乗り出して、彼の前にいて、「一切は神の心であらうでござる」とでも言っているように彼には思われて来た。

四

いよいよ参籠さんろうの朝も近いと思うと、半蔵はよく眠られなかつた。夜の明け方には、勝重のそばで目をさました。山の端はに月のあるのを幸いに、水垢離みずごりを執つて来て、からだを浄め終わると、温あたたかくすがすがしい。着物も白、袴はかまも白の行衣ぎょういに着かえただけでも、なんとなく彼は厳肅な心を起こした。

まだあたりは薄暗い。早く山を発たつ二、三の人もある。遠い国からでも祈願をこめに来た参詣者さんけいしやかと思えて、月を踏んで帰途につこうとしている人たちらしい。旅の笠かさ、金剛杖こんごうづえ、白い着

物に白い風呂敷包みが、その薄暗い空気の中で半蔵の目の前に動いた。

「どうも、お粗末さままでございました。」

と言つて見送る宿の人の声もする。

その明け方、半蔵は朝勤めする禰宜ねぎについて、里宮のあるところまで数町ほどの山道を歩いた。社殿にはすでに数日もこもり暮らしたような二、三の参籠者が夜の明けるのを待っていて、禰宜の打つ大太鼓が付近の山林に響き渡るのをきいていた。その時、半蔵は払暁ふつあきょうの参拜だけを済まして置いて、参籠のしたくやら勝重を見ることやらにいったん宿の方へ引き返した。

「お師匠さま。」

そう言つて声をかける勝重は、着物も白に改めて、半蔵が山から降りて来るのを待っていた。

「勝重さん、君に相談がある。馬籠まじめを出る時にわたしは清助さんに止められた。君のような若い人を一緒に参籠さんろうに連れて行かれますか。それでも君は来たいと言うんだから。見たまえ、ここの襦ねぎ宜ぎさまだつて、すこし無理でしょう。そう言つていますぜ。」

「どうしてですか。」

「どうしてつて、君、お宮の方へ行けば祈きと祷とうだけしかないよ。そのほかは一切沈黙だよ。寒さ饑ひもじさに耐える行者の行くところだよ。それでも、君、わたしにはここへ来て果たしたいと思うことがある。君とわたしとは違ちがうサ。」

「そんなら、お師匠さま、あなたはお父ちちさんのためにおいの祈いのりなさるがいいし、わたしはお師匠さまのために祈いのりましょう。」

「弱よつた。そういうことなら、君の自由に任せる。まあ、眠り

たいと思う時はこの禰宜さまの家へ帰つて寝てくれたまえ。ここにはお山の法則があつて、なかなか里の方で思ったようなものじゃない。いいかい、君、無理をしななくてくれたまえよ。」

勝重はうなずいた。

神前へのお初穂、供米、その他、着がえの清潔な行衣などを
持つて、半蔵は勝重と一緒に里宮の方へ歩いた。

梅の咲く禰宜の家から社殿までの間は坂になつた細道で、王滝口よりする御嶽参道に続いている。その細道を踏んで行くだけでも、ひとりでに参詣者の心の澄むようなところだ。山中の朝は、空に浮かぶ雲の色までだんだん白く光つて来て、すがすがしい。坂道を登るにつれて、霞み渡つた大きな谷間が二人の

目の下にあるようになった。

「お師匠さま、雉きじ子が鳴いていますよ。」

「あの覚明かくみょう行者や普寛ふかん行者などが登ったころには、どんなだつたらうね。わたしはあの行者たちが最初の登山をした人たちかとばかり思っていた。ここの禰宜しゅうじゅうさまの話で見ると、そうじゃないんだね。講中こうちゅうというものを組織して、この山へ導いて来たのがあの人たちなんだね。」

二人は話し話し登った。新しい石の大鳥居で、その前年（文久二年）に尾州公びしゅうこうから寄進になったというものの前まで行くと、半蔵らは向こうの山道から降りて来る一人の修行者にもあった。珠数じゆずを首にかけ、手に杖つえをつき見るからに荒々しい姿だ。肉体を苦しめられるだけ苦しめているような人の相貌そうぼうだ。どこの岩窟がんくつの間から出て来たか、雪のある山腹の方からでも降りて来たか

というふうで、山にはこんな人が生きているのかということ、半蔵を驚かした。

間もなく半蔵らは、十六階もしくは二十階ずつから成る二町ほどの長い石段にかかった。見上げるように高い岩壁を背後うしろにして、里宮の社殿がその上に建てられてある。黒々とした残雪の見られる谷間の傾斜と、小暗おぐらい杉すぎや檜ひのきの木立こだちとにとりまかれたその一区域こそ、半蔵が父の病をいの禱るためにやって来たところだ。先師の遺著の題目そのままともいうべきところだ。文字どおりの「静しずの岩屋いわや」だ。

とうとう、半蔵は本殿の奥の靈廟れいびやうの前にひざまずき、かねて用意して来た自作の陳情きんじやう祈祷の歌をささげることができた。他

の無言な参籠者さんろうしやの間に身を置いて、社殿の片すみに、そこに置いてある円まるく簡素な※蒲団わらふとんの上にすわることもできた。

あたりは静かだ。社殿の外にある高い岩の間から落ちる清水しみずの音よりほかに耳に入るものもない。ちようど半蔵がすわったところからよく見える壁の上には、二つの大きな天狗てんぐの面が額にして掛けてある。その周囲には、嘉永かえい年代から、あるいはもつとずっと古くからの講社や信徒の名を連ねた種々さまざまな額が奉納してあつて、中にはこの社殿を今見る形に改めた造営者であり木曾福島の名君としても知られた山村蘇門そもんの寄進にかかる記念の額なぞの宗教的な気分を濃厚ならしめるものもあるが、ことにその二つの天狗の面が半蔵の注意をひいた。耳のあたりまで裂けて牙齒きばのある口は獣のものに近く、隆たかい鼻は鳥のものに近く、

黄金の色に光った目は神のものに近い。高山の間に住む剛健な獣の野性と、翼を持つ鳥の自由と、深秘しんぴを体得した神人の靈性とを兼ねそなえたようなのがその天狗だ。製作者はまたその面に男女両性を与え、山嶽さんかく的な風貌ふうぼうをも付け添えてある。たとえば、杉すぎの葉の長くたれ下がったような粗あらい髪、延び放題に延びた草のような髯ひげ。あだかも暗い中世はそんなところにも残つて、半蔵の目の前に光っているかのように見える。

いつのまにか彼の心はその額の方へ行つた。ここは全く金胎こんたい両部の靈場である。山嶽を道場とする「行ぎょうの世界」である。神と仏とのまじり合つた深秘な異教の支配するところである。中世以来の人の心をとらえたものは、こんな両部を教えとして発達して来ている。父の病を禱いのりに来た彼は、現世に超越した異教の神よりも、もつと人格のある大己貴おおなむち、少彦名すくなびの二神の方へ

自分を持つて行きたかつた。

白膠木ぬるでの皮の燃える香氣と共に、護摩ごまの儀式が、やがてこの靈場を莊嚴にした。本殿の奥の厨子ずしの中には、大日如来だいにちによらいの仏像でも安置してあると見えて、参籠者はかわるがわる行つてその前にひざまずいたり、珠数をつまぐる音をさせたりした。御簾みすのかげでは心経しんぎょうも読まれた。

「これが神の住居すまいか。」

と半蔵は考えた。

彼が目に触れ耳にきくものの多くは、父のために禱いのることを妨げさせた。彼の心は和宮様御降嫁のころに福島の役所から問い合わせのあつた神葬祭の一条の方へ行つたり、国学者仲間にやかましい敬神の問題の方へ行つたりした。もつとも、多くの門弟を引きつれて来て峻嶮しゅんけんを平らげ、山道ひらを拓き、各国に信徒

を募つたり、講中を組織したりして、この山のために心血をささげた覚明、普寛、一心、一山なその行者らの気魄きはくと努力とは、彼とても頭が下がったが。

終日静座せいざ。

いつのまにか半蔵の心は、しばらく離れるつもりで来た馬籠の宿場の方へも行った。高札場がある。二軒の間屋場がある。

伏見屋の伊之助、問屋の九郎兵衛、その他の宿役人の顔も見えらる。街道の継立つぎたても困難になつて来た。現に彼が馬籠を離れて来る前に、仙台侯せんだいこうが京都の方面から下つて来た通行の場合がそれだ。あの時の仙台の同勢は中津川泊まりで、中通しの人足二百八十人、馬百八十疋びきという触れ込みだった。継立ての混雑、

請け負いのものの心配なぞは言葉にも尽くせなかつた。八つ時過ぎまで四、五十駄だの継立てもなく、人足や牛でようやくそれを付け送ったことがある。

こんなことを思い浮かべると、街道における輸送の困難も、仙台侯の帰東も、なんとなく切迫して来た関東や京都の事情と関係のないものはない。時ならぬ鐘の音が馬籠の万福寺からあの街道へがながん聞こえて来ている。この際、人心を善導し、天下の泰平をいの禱り、あわせて上洛中じょうらくの將軍のためにもその無事を祈れとの意味で、公儀から沙汰さたのあつた大般若だいほんにゃの莊嚴おごそかな儀式があつた万福寺で催されているのだ。手兼村てがのむらの松源寺、妻籠つまごの光徳寺、湯舟沢の天徳寺、三留野みどのの等覚寺、そのほか山口村や田立村の寺々まで、都合六か寺の住職が大般若に集まって来ているのだ。

物々しいこの空気を思い出しているうちに、半蔵の胸には一つの悲劇が浮かんで来た。峠村の牛行司うしぎょうじで利三郎と言えば、彼には忘れられない男の名だ。かつて牛方事件の張本人として、中津川の旧問屋角屋かどや十兵衛を相手に血戦を開いたことのある男だ。それほど腰骨こしぼねの強い、黙って下の方に働いているような男が、街道に横行する雲助仲間くもすけと衝突したのは、彼として決して偶然な出来事とも思われなかった。ちようど利三郎は、尾州の用材を牛につけて、清水谷下しみずだにというところにかかった時であったという。三人の雲助がそこへ現われて、竹の杖つえで利三郎を打擲ちようちやくした。二、三か所も打たれた天窓あたまの大疵おおきずからは血が流れ出て、さすがの牛行司も半死半生の目にあわされた。村のものは急を聞いて現場へ駆けつけた。この事が宿方へも注進のあつた時は、ふたり二人の宿役人めあかしが目証やへえの弥平やへえを連れて見届けに出かけたが、不幸

な利三郎はもはや起たてない人であろうという。一事が万事だ。すべてこれらのことは、参観交代制度の变革以来に起こつて来た現象だ。

「憐あわれむべき街道の犠牲。」

と半蔵は考えつづけた。上は浪人から、下は雲助まで、世襲過重の時代が生んだ特殊な風俗と形態とが目につくだけでも、なんとなく彼は社会变革の思いを誘われた。庄屋しやうやとしての彼は、いろいろの意味から、下層にあるものを護まもらねばならなかつた……

ふとわれに返ると、静かな読経じききやうの音が半蔵の耳にはいった。にわかにもるい日の光は、屋外そとにある杉すぎの木立ちを通して、社殿に満ちて来た。彼は、単純な信仰に一切を忘れているような他の参籠者を目の前にながめながら、雑念の多い自己おのれの身を恥じた。その夕方には、禰宜ねぎが彼のそばへ来て、塩握飯しおむすびを一つ置

いて行つた。

四日目には半蔵はどうやら心願を果たし、神前に終わりの禱りをささげる人であつた。たとい自己おのれの寿命を一年縮めてもそれを父の健康に代えたい、一年で足りなくば二年三年たりともいとわないうふうに。

社殿を出るころは、雨が山へ来ていた。勝重は傘かさを持って、禰宜ねぎの家の方から半蔵を迎えに来た。乾燥した草木をうるおす雨は、参籠後の半蔵を活いき返るようにならせた。

「勝重さん、君はどうしました。」

社殿の外にある高い岩壁の下で、半蔵がそれを言い出した。彼も三日続いた沈黙をその時に破る思いだ。

「お師匠さま、お疲れですか。わたしは一日だけお籠りして、あとはちよいちよいお師匠さまを見に来ました。きのうはこのお宮のまわりをひとり歩き回りました。いろいろなめずらしい草を集めましたよ——じじばば（春蘭）だの、しょうじょうばかまだの、姫龍胆だの。」

「やつぱり君と一緒に来てよかつた。ひとりでいる時でも、君が来ていると思うと、安心してすわつていられた。」

二人が帰つて行く道は、その路傍に石燈籠や石造の高麗犬なぞの見いださるるところだ。三面六臂を有し猪の上に踊る三宝荒神のように、まぎれもなく異国伝来の系統を示す神の祠もある。十二権現とか、神山靈神とか、あるいは金剛道神とかの石碑は、不動尊の銅像や三十三度供養塔なぞにまじつて、両部の信仰のいかなるものであるかを語っている。あるものは飛驒、

あるものは武州、あるものは上州、越後の講中の名がそれらの石碑や祠ほくらに記しるしつけてある。ここは名のみの本曾の総社であつて、その実、御嶽大権現である。これが二柱の神の住居すまいかと考えながら歩いて行く半蔵は、行く先でまごついた。

禰宜ねぎの家の近くまで山道を降りたところで、半蔵は山家風なかるさん姿の男にあつた。傘からかさをさして、そこまで迎えに来た禰宜の子息むすこだ。その辺には蓑笠みのかさで雨をいとわず往来ゆきぎする村の人たちもある。重い物を背負しょい慣れて、山坂の多いところに平気で働くのは、木曾山中いたるところに見る図だ。

「オヤ、お帰りでございますか。さぞお疲れでございませう。」
禰宜の細君は半蔵を見て声をかけた。山登りの多くの人を扱扱い慣れていて、いろいろ彼をいたわつてくれるのもこの細君だ。
「御参籠のあとでは、皆さまが食べ物に気をつけますよ。こん

な山家で何もございませんけれど、芹粥せりがゆを造つて置きました。落おちとし味噌みそにして焚たいて見ました。これが一番さつぱりしてよいかと思ひますが、召し上がつて見てください。」

こんなことを言つて、芹せりの香のする粥かゆなぞを勧めてくれるのもこの細君だ。

温暖あたたかい雨はしとしと降り続いていた。その一日はせめて王滝とつりゆうに逗留とつりゆうせよ、風呂ふろにでもはいつてからだを休めて行けという禰宜の言葉も、半蔵にはうれしかった。

「へい。床屋でございます。御用はこちらでございませるか。」

宿の人に呼んでもらつた村の髪結いが油じみた台箱をさげながら半蔵の部屋へやにはいつて来た。ぐつすり半日ほど眠つたあとで、半蔵は参籠さんろうに乱れた髪を結い直してもらつた。元結もとゆいに締められた頭には力が出た。気もはつきりして来た。そばにいる勝

重を相手に、いろいろ将来の身の上の話なぞまで出るのも、こうした静かな禰宜の家なればこそだ。

「勝重さん、君もそう長くわたしのそばにはいられまいね。来年あたりは落合おちあいの方へ帰らにやなるまいね。きつと家の方では、君の縁談が待っていますよ。」

「わたしはもつと勉強したいと思います。そんな話がありましたけれど、まだ早いからと言って断りました。」

勝重はそれを言うにも顔を紅あからめる年ごろだ。そこへ禰宜が半蔵を見に来た。禰宜は半蔵のことを「青山さん」と呼ぶほどの親しみを見せるようになった。里宮参籠記念のお札、それに神饌しんせんの白米なぞを用意して来て、それを部屋の床の間に置いた。

「これは馬籠へお持ち帰りを願います。」と禰宜は言った。「それから一つお願いがあります。あの御神前へおあげになった歌

は、結構に拝見しました。こんな辺鄙へんびなところで、ろくな短冊たんざくもありませんが、何かわたしの家へも記念に残して置いていた
だきたい。」

彌宜はその時、手をたたいて家のものを呼んだ。自分の子息むすこをその部屋に連れて来させた。

「青山さん、これは八つになります。おそ生まれの八つですが、手習いなぞの好きな子です。ごらんのとおりな山の中で、よいお師匠さまも見当たらないでいます。どうかこれを御縁故に、ちよくちよく王滝へもお出かけを願いたい。この子にも、本でも教えてやっていただきたい。」

彌宜はこの調子だ。さらに言葉をついで、

「福島からここまでは五里と申しておりますが、正味四里半しかありません。青山さんは福島へはよく御出張でしょう。あの

ぎょうにんばし
行人橋から御嶽山道について常磐とぎわの渡しまでお歩きになれば、
今度お越しになつたと同じ道に落ち合います。この次ぎはぜひ、
福島の方からお回りください。」

「えゝ。王滝は気に入りました。こんな仙郷せんきやうが木曾にあるかと思ふようです。またおりを見てお邪魔にあがりますよ。わたしもこれでいそがしいからだですし、御承知の世の中ですから、この次ぎやつて来られるのはいつのことですか。まあ、王滝川の音をよく聞いて行くんですね。」

半蔵はそばにいる勝重に墨を磨すらせた。禰宜から求めらるるままに、自作の歌の一つを短冊に書きつけた。

梅の花匂におはざりせば降る雨にぬるる旅路たびじは行きが

てましを半蔵

そろそろ半蔵には馬籠の家の方のことが氣にかかつて来た。
ひとつき
一月からして陽氣の遅れた王滝とも違い、彼が御嶽の話を持つて父吉左衛門をよろこばしうる日は、あの木曾路の西の端はもはや若葉の世界であろうかと思いやつた。將軍上落中の京都へと飛び込んで行つた友人香蔵からの便りは、どんな報告をもたらし、そこに自分を待つだろうかとも思いやつた。万事不安のうち、むなしく春の行くことも惜しまれた。

「そうだ、われわれはどこまでも下から行こう。庄屋には庄屋の道がある。」

と彼は思い直した。水垢離と、極度の節食と、時には滝にまで打たれに行つた山籠りの新しい経験をもつて、もう一度彼は馬籠の駅長としての勤めに当たろうとした。

御嶽のすそを下ろうとして、半蔵が周囲を見回した時は、黒船のもたらす影響はこの辺鄙へんびな木曾谷の中にまで深刻に入り込んで来ていた。ヨーロッパの新しい刺激を受けるたびに、今まで眠っていたものは目をさまし、一切がその価値を転倒し始めていた。急激ついでに時世遅れになつて行く古い武器がある。眼前に潰つぶえて行く旧ふるくからの制度がある。下民百姓は言うに及ばず、上御かみご一人ですら、この驚くべき分解の作用をよそに、平静に暮らさるるとは思われないようになって来た。中世以来の異国の殻からもまだ脱ぎ切らないうちに、今また新しい黒船と戦わねばならない。半蔵は『静の岩屋』の中にのこつた先師の言葉おそを繰り返して、測りがたい神の心を畏れた。

後註

- 一 「ほとんど」は底本では「ほんど」
- 二 「大坂」は底本では「大阪」
- 三 「生かして」は底本では「生かし」
- 四 「木曾川」は底本では「木曾川」
- 五 「おもちゃ」は底本では「おもちゃ」
- 六 「よくしあらば」は底本では「よくあらば」
- 七 「こつち」は底本では「こつち」

底本：「夜明け前 第一部（上）」岩波文庫、岩波書店

1969（昭和 44）年 1 月 16 日第 1 刷発行

底本の親本：「改版本『夜明け前』」新潮社

1936（昭和 11）年 7 月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

※「ポルトガル」は、第二部ではすべて「ホルトガル」と表記されています。

入力：菅野朋子、小林繁雄

校正：高橋真也

2001 年 5 月 24 日公開

2010 年 11 月 2 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。